
魔法先生ネギま！～時をとめる少女～

アッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜時をとめる少女〜

【Nコード】

N6843P

【作者名】

アツシュ

【あらすじ】

この小説はテンプレ通りの転生物となっております。突然死んでしまった主人公は真つ白な部屋で神に出会い、スタンド能力と純白の羽を授かってリア充主人公のフラグをベツキベキに折る事を夢見て『ネギま！』の世界に転生する事になったのだが、生まれたのは近衛家で木乃香の双子の姉になっていた！？

そんな駄文小説となっております。

この作品はアンチ&若干チート&TSを含みます。お気をつけ下さい。

プロローグ（前書き）

初投稿&処女作品になります。

オリ主がほぼ最強で原作ならありえない行動をしたりしますが、生暖かい目で見守ってあげて下さい。

TSものですのでTSが苦手な方、作者の駄文見ていただけない方は作者に石を投げて、お戻り下さい。

拙い文章ばかりだと思いますが、よろしくお願いします。

プロローグ

「……ん」

白い光が目を打った。ゆつくりと瞼を開くと真っ白い天井……ここは何処だ？

目が醒めると同時に、自分が床に横たわっている事に気づく。

とりあえずゆつくりと立ち上がり、周りを見渡すと辺り一面が真っ白な四角の形をした部屋に自分一人だけがポツンと立っているみただ。

「何処だ……ココ？」

ええ、嫌な予感にはバンバンしてますよ？これは俗に言う“アレ”なんだろ？

「……はあ」

一度大きく息を吸い込み、そして吐き出す。

俺は今の状況がどういう状況か、そしてこれからどういう展開になるかを本能的に察知していた。

だが、その考えを頭では否定していた。

ありえない………よりによって俺が？

え〜と、確か家に帰ろうとして……歩いてたら目の前で子供がトラ
ックに轢かれそうになって……で、そいつを突き飛ばして助けた
俺は綺麗に車に撥ねられて……死んだんだっけか。

死ぬなよ俺。……いや死ぬか。

さあてと、どうすっかな……。

これからどうするかを考察していると、いきなり目の前に真っ白な
服を着た少女が現れた。

そして開口一番に、

「ありがとう、世界は救われたわ」

だとよ。はいはいテンプレテンプレ……やっぱりな。

この状況は知る人ぞ知る『転生』ってやつか。

今まで“転生物”の二次創作小説は何度か読んだことはある……が、
まさか自分が転生者になるとは思ってもいなかった。

「自己紹介が遅れたわね。私は……簡単に説明すると『神』と呼ば
れる存在よ」

神……ね。ここまでは全てテンプレ通り、そしてこれからも多分テ
ンプレ通りだろう

「……」

このまま自分が黙っていても話が進展しないと思ったので、とりあえず質問してみることにした。

「というか、自分も自己紹介しようと思ったのだが、名前が思い出せなかったのだ。」

「さっきの礼はどういう意味だ？」

「テンプレ通りなら、『死ぬはずじゃなかった』とか『子供を助けてくれて〜』とかになるはずだが……？」

「……貴方が救ってくれた少年が、地球を救う救世主だったの。」

少女は言いにくそうに切り出した。

「テンプレ通りでした。それにしてもベタだなオイ。」

「本当は地球を救う前に死んでしまう運命だったのだけど……その運命を打ち破ったのが貴方。だから礼を言わせてもらったわ。」

「一言一言を噛み締めるように目の前の少女が言うのを俺は黙って聞いていた。しばらく、沈黙が続いた。」

「……で、俺は死んだ。……だろ？」

俺はこの展開は何回も読んできた為、ぶっきらぼうな返事になっていた。

「ええ……そうよ。……ごめんなさい、貴方は本当は死ぬ運命じゃなかったの。」

って言われてもなあ。死んじまったものは仕方ないよな。

「いや別に気にしてないさ」

と、俺は申し訳なさそうに俯いている少女に言ってやった。

微かな安堵の笑みが少女の顔を走った。

「まあ、未練が無かったと言えば嘘になるけどな」

すぐ少女は真顔になって俺を見つめている。

「本当にごめんなさい。でも、安心して。貴方は特例で他の世界に『転生』することになったわ」

出ましたよ。『転生』というワードが。ついに俺も“転生者”か…。

嬉しいような悲しいような、よく分からんな。

「一応、聞いておくけど。元の世界には戻れないよな」

俺がそう言つと、少女は小さく頷いた。

まあ“答えが最初から解ってる質問”だけどな。

少女はちゃんと『他の世界』と言っていたし、ここでもし元の世界に戻るならこの小説が終わっちまうしな。

ん……今、変な事言っ たな俺。

「ええ、元の世界には戻れないわ。絶対にね……」

「……そうか」

こうしてバシツと言われると少し辛いな。

……別に元の世界が良かった訳じゃない。

両親も幼い内に死んだし、その後、親戚に盥回しにもされたりもした。

……だけど、唯一の心残りがある。

それは幼い妹の存在だ。幼いと言っても高校生なんだけどな。

俺は高校を卒業して就職し、すぐに妹を連れて親戚の家を出た。

何故なら、親戚が俺達をゴミのように扱ったからだ。

酷い事を沢山されてきた。思い出したくもない。

家を出た最初の頃は大変だった。二人分の生活費を稼ぐのに必死だった。丸一日働いた事もある。

でも、家に帰って妹の『おかえり』の一言で仕事の疲れなんて吹っ飛んだし、明日もまた頑張ろうと思えた。

貧乏でまともに服や物も買ってやれなかったけど、妹はいつも俺の心配をしてくれていた。

『お兄ちゃんさえいてくれれば、他に何もいらない』

そう言われた時は号泣したなあ……。

……昨日の話なんだけどな。

そして今日、仕事が終わっていつも通りに家に帰ってる途中に子供を助けて車に撥ねられて死んだって訳か。

ハハツ……笑えねえ冗談だ。

「……大丈夫ですか？」

ふと気づくと、少女が俺の様子を上目遣いで窺っていた。さらに、何故か俺を見つめる彼女の目は濡れていた。

「ああ、大丈夫だ。どうかしたのか？」

「いえ、貴方の記憶を少しだけ見せてもらいました……すみません」

少女は申し訳なさそうにペコリと頭を下げた。

「いや、気にするな。それで……俺はこれからどうなるんだ？」

このままでは話が進展しないと思い、俺は話題を変えることにした。

少女は慌てて涙を拭って、俺の目を真っ直ぐ見つめた。

「今から貴方には3つだけ何でも願い事を叶えてあげる。それから

転生してもらおうわ」

3つか……『何でも』とか『無理難題でなければ』とかになるはずなんだが……。

……少なくね？我が儘は言えないけどな。

「一つ質問があるんだが、元の世界に関係する事は叶えてくれるか？」

「……質問を聞いてから考慮するわ。で、何かしら？」

「元の世界にいる妹を幸せに……俺は死んでしまったけど、妹が不幸無く幸せに暮らしていけるようにしてくれないか？」

俺がそう言った時、少女の目が真ん丸になった。そして、黙って考え込んでいるようだった。

やっぱりダメか……？

「正気なの？3つしか叶えられないのに？」

少女が怪訝そうに聞いてきた。

「俺は正気だ。で、可能なのか？」

「可能よ。でも本当にいいのね？一度決めたらやり直しなんて出来ないわよ？」

警告するように少女が言った。

「ああ、構わないさ」

俺は大して気に留める様子もなく返事をした。

「分かったわ。じゃあ、あと残り二つね。……もう次からは自分の事を願いなさいよ?」

自分の事ねえ……てか、大事な質問を忘れていた。まだ俺どこに行くか分かってねえし。忘れてるのか?

「あのさ……残りの願いを決める前に、俺が何処に転生するか教えて欲しいんだが……」

「あ……すみませんすみません。伝えるのを忘れていました。貴方が転生するのは『魔法先生ネギま!』の世界になります」

ペコペコと頭を下げた少女は矢継ぎ早に俺の質問に答えてくれた。

『ネギま!』かあ……うーん、主人公が何と云うかイラッとする時があるからなあ……原作ブレイクしていくか。

主人公のフラグをベツキベキに折ってやんよ。

「了解、じゃあ二つめは……そうだな、翼を背中に付けてくれないか? 勿論、いつもは隠せるようにな」

いつも思っけど背中に生えた翼を出す時って、何で服が破れないんだろな。……感動的な場面で服の背中がビリビリビリって破れたら感動が台無しになるからか? それともご都合主義ってやつかな?

ふと少女を見ると、また大きく目を見開いて硬直している。おい、大丈夫かー？

俺、変な事言ったか？前から空を飛んでみたかったから言ったんだが……。

「あの……普通はね？『魔力と気をチートで』とか『無限の剣製』とか、何かしらの『魔眼』だったりするんだけど……翼が欲しいの？」

そうなのか？別に俺は戦闘するつもりは無い。麻帆良でノンビリと過ごしたいし……主人公のフラグを折りながらだけだな。

「妹が空を自由に飛んでみたいって、よく言ってたからさ。俺も飛んでみたかったし……もう叶えてやれないけど」

ああ駄目だ駄目だ。また空気が重くなっちゃう。

「……桜咲刹那のような翼でいいのね？」

「ああ……さてと、最後は何にするかな」

「最後何だから、ちゃんとしたのを願いなさいよ？」

そう言いながら少女は肩を竦めた。

「じゃあ、ジヨジヨのDIO様の能力で『ザ・ワールド』のスタンドを頼む」

「じゃ、また後でね」

そうして俺は気を失った。

プロローグ（後書き）

やっと投稿できた……。

時系列や細かい設定を調べていたら、考え始めてからいつの間にか一ヶ月経ってました（笑）

しかもまで7割程度しか調べられてないとかもうね……orz

だいたいこんな感じの二次創作小説になります。よろしければこんな駄目作者の小説をまた次も読んでやって下さい。

次がいつになるか分かりませんが（苦笑）

第一話（前書き）

新年初の投稿になります。かなり遅れてしまいましたが、あけましておめでとございます。

年内に更新するつもりが、いつの間にか時がこんなに進んで……ハッ！まさか誰かからスタンド攻撃を受けりゃ

今回も駄文ですが……では、どうぞ。

第一話

「ん……あれ……？」

失っていた意識を取り戻した俺は、重たい瞼を開いてぼんやりと周囲を見渡すが、真っ暗で何も見えなかった。

それにしても、どれぐらい意識を失っていたのだろうか。

転生が成功しているはずなら、こんな場所にいないはずだが……。

以前、神様と話した時は真っ白な部屋だったが今度は真っ暗な部屋……いや、何も見えないのだから部屋かどうか分からないな。

さらに前は自分の生前の身体を見ることが出来たのだが、今回は見ることが出来なかった。

暗いから見えないだけなのか、身体が存在しないから見えないのか……。

真っ暗闇の中に眼だけが存在してぶかぶかと浮いている感覚がする。

真っ暗闇に眼だけ……怖すぎる。

さて……どうする。このまま神様が来るのを待ってもいいんだが、とりあえず呼んでみる事にするか。

「おーい、自称神様ー。いるんだろー」

言葉は喋れるみたいだな。

ん……？けど何か違和感があるんだが。

胸の奥でつつかえている違和感が何なのか考えていると、自称神様が魔法のように突然、目の前に現れた。

「自称ではありません！れっきとした神様よ！」

神様は目を三角にして俺を睨みつけながら言った。

「悪い悪い、冗談だ」

慌てて俺は謝罪の言葉を述べる。

どうやら神様の身体は見る事が出来るようで、以前と同じ白いローブを着ている神様は、まだ眉間に皺を寄せて俺を睨んでいる。

しかし、すぐ神様は真顔になり安堵の表情を見せて溜め息をついた。

「でも良かった……ちゃんと転生は出来たのね」

「……おいおい神様。“ちゃんと”ってどっいう意味だよ」

「あの……その、転生する際に不具合が発生しちゃって……女の子として生まれる事になってしまったの。てへっ……ごめんね？」

ケーキが美味しい某飲食店の有名キャラクターのように舌を出した神様は、悪びれる様子もなく謝った。

「え……………えっ？」

それを聞いた瞬間、俺の思考回路は完全に停止した。

何秒かの間、放心状態になっていた俺の思考回路がゆっくりと再起動し始める。

女？……………女ってあの“女”？

……………って事は何だ？俺の『時を止めてウハウハ計画』はどうなるの？

それに女だったらあのリア充主人公のフラグ折れないだろうか。

「冗談、だよな……………？」

俺は顔を引き攣らせながら神様に聞いた。

……………頼むから冗談だと言ってくれ。

リア充主人公にフラグ立てられる側になるなんて冗談でも笑えない。

「本当よ。……………ごめんッ！」

今度は本当に申し訳なさそうな顔で何度も頭を下げ謝っている神様。

「……………はは」

それを聞いて、俺は顔を引き攣らせて苦笑いを浮かべる事しか出来なかった。

やっこの思いで再起動させた思考回路がガラガラと音を立てて壊れていく。

……どうしてこうなった。

頭を下げ続けていた神様は何かを思い出したかのように急に顔を上げた。

「そのお詫びと言っては何だけど……スタンド能力を二つ追加しておいたわ」

“スタンド能力”という単語を聞いて、俺の思考回路が少しずつ修復されていく。

「スタンド能力……か」

だが、スタンド能力の内容にもよるので俺は素直に喜ぶ事が出来なかった。

何故なら、使うのを躊躇うぐらい恐ろしいスタンド能力もあれば、単純に役に立たない能力もある。

例えば、『ウイルスを使い、そのウイルスに感染すれば30秒程度で全身が溶け崩れて死に至る』なんて能力もあったりする。

……使える訳ねえよ。

絶対に指名手配されるだろ。

「……まず『ザ・ワールド』の件だけど、完璧に再現出来たわよ」

神様は、傲然と胸を反らして言った。

「……マジか」

さすが神様！おれたちにはできない事を平然とやってのけるッ！そこにシビれる！あこがれるウ！

夢にまで見た時間停止能力を使えるなんて……感無量だ。

「だけど『スタンド』自体は再現出来なかったわ。この“魔法先生ネギま！”の世界には『スタンド』という概念が存在しないから再現出来なかったのよ。スタンド能力は酷似した例が存在したり、魔法が存在したりするから再現できたけどね」

「……成る程な」

『ザ・ワールド』に酷似した例……超のカシオペアか。

色々制限はあったけどな……しかし改めて考えてみると俺、チートすぎないか？

固有能力で時を止めれるとか、魔法協会や呪術協会にバレたりしたらホルマリン漬けにされるか、解剖されるかどっちかだろう。

「時を止めたいと思うだけで発動するからね。……口に出して『ザ・ワールド！』って言っても止まるけど」

いや、『ザ・ワールド！』って叫んで時を止めたいだろ。

「けど問題点があつてね、時を止める為にかなりの魔力を消費することになるわ」

神様は俺から視線を外し、顔を俯かせて言った。

「は……？」

それを聞いた途端、俺の身体がピシリと音を立てて凍りついた。

何故なら、魔力の事に関しては“注文”して無かったからだ。

「ザ・ワールドのスタンド能力がチートすぎるのよ。だから膨大な魔力が必要になるわ」

ま、まあ……その通りだけども。

「……ちなみに、俺ならどれくらい止めれるんだ？」

嫌な汗が全身から吹き出しているのが分かる。

……自分の身体は見えないけどな。

「貴方の場合は分からないけど、一般人なら……」

神様は言葉を詰まらせた。

「……一般人なら？」

俺は神様に早く結論を言うように促す。

冷たい汗が背筋を流れ落ちた。

せめて5秒ぐらい……いや3秒でもいいから。

「1秒ぐらい止めれる……かもしれない、かしら……？」

「……オワタ」

……終わった。マジで終わった。

意味ねえよ……魔力が無ければ宝の持ち腐れじゃねえか。

「ま、まあ……大丈夫、問題ないわよ」

神様はグツと親指を立てて笑っている。

いや、大丈夫じゃねーよ。

「……はあ」

俺は深い溜息を吐き、頭を抱える。

ギネス記録を出せるぐらい速い車は有るけど、その車を動かすガソリンは無いみたいなものか。

……畜生。

「だ、大丈夫よ。ほら、あと二つスタンド能力を追加したって言ったでしょ！」

神様は頭を抱えて落ち込んでいる俺に励ましの言葉を掛けてきた。

「ん、ああ。そんな事も言ってたな……」

「ね？だからそんなに落ち込んだじゃ駄目よ」

必死に神様が俺を元気づけようとしているが、俺は『心ここにあらず』状態だった。

「でも、その能力も魔力不足で使えませんって“オチ”だったらキレるからな」

「追加したスタンド能力は魔力をあまり使わないわ。一般人でも普通に使えるぐらいにね」

それは良かった。……追加した能力も使おうとしたら『MPがたりない！』なんて冗談でも笑えねえよ。

「じゃあ、説明していくわね。まず追加した能力の一つ目は、『クレイジーダイヤモンド』の能力よ。すごいでしょ？」

そう言っつて神様は胸を誇らしげに張った。

「マジで？」

これは素直に嬉しいな……えっと確か、『壊れた物、怪我やエネルギーを直す（治す）能力』だったよな。

「マジよ。勿論、原作を忠実に再現して部品の足りない物・死者・

病気・自分の傷は直せないようにしておいたからね」

なぜ再現したし。まあ……これは仕方ないか。死者や自分の傷まで直す（治す）事まで出来たらチートすぎるからな。

世の中、都合のいい事だらけじゃあねえってことか。

「対象に触れて『直し（治し）たい』と思えば能力を使えるわ」

この時、クレイジーダイヤモンドの能力を追加してもらった俺は、このスタンド能力がチートすぎる事に気づいていなかった。

「二つ目はキラークイーンの第一の能力、『触れた物を爆弾に変える力』よ」

それを聞いて、俺は思わず絶句してしまった。

「……嘘じゃないよな？」

と俺が恐る恐る聞くと、神様は淡々と答えてくれた。

「本当よ。証拠が残らないから便利でしょ？」

神様は可愛らしい笑みを浮かべて言っているが、その内容はかなり恐ろしい物である。

……何の証拠だよ。

時を止めれて、物や怪我を直せて、物を爆弾に変えられるって……チートすぎないか？

だが、時は止められないだろうなと思ひ直し、心の中で苦笑した。

「対象に触れて『爆弾にしたい』と思えば能力を使えるわ」

俺の両手……怪我を治したり爆弾に出来たり、恐ろしいな。

「この能力も原作を忠実に再現したわ。勿論、一度に一つの物までしか爆弾に変えることができないわよ。でも追加した点があって、爆弾にした物を解除できるようにしたわ」

「解除……？何に使うんだよ」

「脅迫する時とか便利じゃない。『私はすでにお前に触れている。死にたくなければ言うことを聞け。そうすれば解除してやる』って出来るわよ？んで、好きなだけ操って最後に証拠隠滅」

神様は無垢な笑顔を浮かべて言った。

「はは……」

さっきから言ってる事が恐ろしいぞ……この神様。

「次は翼の件だけど、翼は桜咲刹那と同じで真っ白な翼よ」

刹那と同じか……空を飛びたいだけだから何でもいいけどな。

そして俺は神様から翼に関する説明を受けた。

最初は上手に飛べないと思うから、飛行練習が必要だという事。

翼は自身が成長していくにつれて、大きくなっていく事。

致命傷を受けない限り、多少の傷なら翼は自然治癒していく事。

あと、説明を受けていて一番驚いたのが『翼を広げると、白髪赤目になる事』だった。

翼を背中に仕舞えば、毛先からゆっくりと元の髪色に戻るらしい。

瞳の色も同じく、時間が経つと元の色になるそうだ。

俺は何故そんな事をしたのかと神様に聞くと、どうやら俺は白髪赤目で生まれる予定だったらしい。

そして、それでは色々と問題が起きるだろうと思った神様は、気を利かして翼を広げれば白髪赤目になるように手を加えてくれたそう
だ。

そういえば原作では桜咲刹那が髪の毛を黒に染め、カラーコンタクトで瞳の色を変えていた事を俺は思い出した。

定期的に髪の毛を染めたりカラーコンタクトを付けたりするのは面倒だろうなと思った俺は、神様に感謝の言葉を述べた。

「どう致しまして。……さてと、そろそろ時間ね。何か質問ある？」

「質問かぁ……うーん」

俺は何か質問がないか頭を捻って考えた。

「あ、そういえば俺はどここの家に生まれるんだ？」

まさかネギの双子の妹とか無いよな……？

……無いよな？

「それは私にも分からないわ。管轄外よ。オリキャラの家かもしれないし、既存のキャラの家かもしれないわ」

「そうか……てか管轄外ってお前」

「他に質問はある？」

質問……質問……あ、ちょっと待てよ。

一つ大事な事を忘れていた俺は、神様に質問した。

「あ、そういやさ。俺が生まれるのは原作のいつ頃なんだ？」

これは聞いておかないとな。

のんびり過ごしたいから、赤き翼が活躍してた時代には生まれたくないなあ……。

……気づいたら巻き込まれてそうだしな。

……まさか原作赤ちゃんスタートは無いよな？

赤ちゃんスタートなんて聞いたことねえよ。

「……あ」

神様は口を開けたまま硬直し、みるみるうちに顔色が青ざめていった。

「待つて、今調べるから」

神様は慌てて目を閉じ、何かぶつぶつと呟いていたと思ったら、大きな溜息をついた。

なんだその不吉な溜息。まさかホントに赤ちゃんスタート……？

「安心して……原作スタート時点、ネギが先生として麻帆良学園中等部に就任する時点で中学二年生になつてみたいね」

つて事は、俺は“あのクラス”の生徒になるって可能性があるって事か？

……いや、生徒になるのは確定的に明らかだな。

原作スタート時点で14歳なのに生徒じゃないなんて有り得ないだろうし。

……うーん、騒がしいのは好きじゃないんだけどな。

ぶつぶつと独り言を言いながら、自分の世界に入り込んでいると

「じゃ、もう時間ないから……いつてらっしゃーい」

唐突に神様はそう言って、満面の笑みで手を振っている。

「え！？ちよっ、待てよ！」

まだ質問があるにもかかわらず、目の前の少女が足元から光の粒子となつて消えていく。

「待たないわ。それに時間を掛けると怒られるのよ」

「……………だから誰にだよ！」

もう神様の下半身は完全に消えていた。

周囲を見渡すと、真っ暗だった周辺がどんどんと白く輝き始めている。

「……………頑張つてね」

依然として俺に手を振り続ける神様の瞳は何故か、悲しみを帯びていた。

「諦めちゃ駄目よ。……………必ず、良い事があるからね」

え……………どういう意味

辺り一面を覆いつくしていく光と神様の身体が完全に同化した時、俺の意識は暗転した。

第一話（後書き）

次回はスタンド能力の詳しい説明をしたいと思いますので、かなり短くなります。

ああ、……文才が欲しい。

スタンド能力説明（前書き）

かなり更新が遅くなってしまいました…。

今回はスタンド能力の説明なので、かなり短いです。

それでは、どうぞ。

スタンド能力説明

『ザ・ワールド（世界）』

“ 時を止めて、静止した時の世界の中を動く事が出来る能力”

能力の発動中は、他の生物の意識や基本的な物理法則（重力など）も無効になっている。

『静止した時の世界』では、通常の世界とは違って時間的な因果も停止している。

その為『静止した時の世界』の中でも動く事が出来る者が、何かしらの行動しても『過程』は行われるが、再び時が動き出すまでは『結果』は保留される。

例えば、『静止した時の世界』で部屋の電気を点けようとスイッチをオンにしても、時が動き出すまで『電気が点く事』は無い。

止まった世界の中を『動ける者』が刃物を持っていたとする。

刃物を手にしたままなら普通に物を刺したり切ったりする事が出来るが、投げる事などで『動ける者』の手から離れてしまうと対象に刺さる前に一度停止し、時が動き出すと再び対象に向かって動き始める事になる。

要約すると、チート能力。

しかし、この能力にも弱点が存在する。

この能力を使用する際には膨大な魔力を必要とし、発動してからも同等の魔力を消費し続ける事。

神様曰く、『一般人の魔力量では、一秒ぐらい止めれる……かもしれない』らしい。

『クレイジー・ダイヤモンド』

“手で触れることで負傷した生物や、壊れた物体、エネルギーを元通りに直す・治す能力”

物質を加工前の原料にまで戻す事もできる。

例えば、調理された料理に触れて、材料にまで戻すなど。

しかし、『壊れた物などを元の形に戻す』能力であるため、病気の治療や破損した部位が完全に消滅してしまった物体は復元する事が出来ない。

また自分自身の治療は出来ない。

さらに死者を蘇生させることも不可能である。

壊れた物体を修復する場合、一欠けらでも手元に残っていれば、残りの他の部分は自動的に引き寄せられる。

また、残りの他の部分に対して自分自身を引っ張る事も可能である。

この引き寄せる力は強力で、人間の身体など重たい物も簡単に引っ張ることも出来るため、攻撃や移動など様々な手段に応用できる。

『キラー・クイーン』

“手で触れた物質や生物を爆弾に変化させる能力”

この能力で一度に爆弾にできる物体は一つだけであり、また酸素がない場所では爆発させることができない。

爆弾には、『任意で爆発させることができる起爆型』と『地雷や機雷のように何かに触れることで爆発する接触起爆型』の二種類がある。

触れた箇所のみを爆弾にしたり、一部に触れるだけで大きな物体を丸ごと爆弾にするなど、爆弾化させる範囲はある程度選択可能である。

ただし、一度爆弾化させたものの種類を切り替えることはできない。

爆破のタイプも二種類ある。

通常の爆弾と同じように爆弾自身が爆発し、爆圧や炎が大きく放出されるもの。

もう一つは、爆弾化された物が爆発するのではなく、『爆弾に触れていた物』が爆発し、爆弾化されていた物はそのまま残るものがある。

なお、二種類とも爆発した物は内部から爆破されるため、髪の毛一つ残らないほど跡形もなく破壊できる。

(ただし、爆発の規模は調節できるので、体の一部だけを爆破したり、体の一部分だけが残る程度に爆破する事も出来る)

スタンド能力説明（後書き）

いや、スタンド能力の説明が難しすぎる…（汗）

話の骨組みは出来てるんですが…。

更新速度を上げる為にサクサク執筆すべきか…それとも、しっかり時間を掛けてやるべきか迷っております（笑）

第二話（前書き）

どうにか更新できました……。

では、拙い文章ですが……どうぞ。

第二話

全て思い出した。

そして唐突で済まないが、これだけは言わせてくれ。

「……………どうしてこうなった」

もそもそと布団から上半身を起こし、そう呟いた。

四歳の誕生日……………というか今日、転生者として覚醒した俺は、転生前の記憶も完全に思い出し、原作知識も覚えていて万々歳、と言いたい所だが……………少し問題があった。

「頭が痛い……………」

額に手を当てて、首を軽く振る。

目が覚めた時から頭痛が酷い。

頭痛の原因は覚醒前の記憶も頭の中に残っているからだと思う。

軽い二重人格になりそうだな……………。

それに……………もう一つ大きな問題がある。

「女になってるんだよな……………俺」

転生前と比べて小さくなった自分の両手をまじまじと見つめる。

……人形のような可愛らしい小さな手。

「俺の手……だよな」

未だに自分が転生したという実感が湧かないので、夢を見ているのではないかと思ってしまう。

「……はあ」

俺は深々と溜め息をついた。

自分が女になっているのを確認するのが恐ろしくて堪らない。

しかし、今更ジタバタしても仕方がないので、布団の中から這い出して部屋の中にあつた姿見の前に立ち、自分の姿を確認したのだが……。

「……うわ」

“ソレ”を見て、思わず身体が硬直した。

鏡に映る小さな少女。

少女は目を丸くし、口を真ん丸に開けながら俺を凝視している。

「痛い……夢じゃない」

思わず自分の頬を引っ張り、夢ではないかと確認してしまう。

瞬きを数回し、もう一度しっかりと自分の姿を確認する。

幼いながらも整った顔立ち、……将来有望株ってやつか？

自分で言っておいてアレだが、馬鹿らしく感じたのは秘密である。

肩甲骨の辺りまで届く、サラサラとした艶やかな黒い髪と抜けるような白い肌。

覚醒前の記憶によると、どうやら身体が弱いらしく、さらに喘息気味なので外に出て遊んだりする事が少なかったらしい。

おままごとをしたり、折り紙をしたり……いつもは室内で遊んでいたみたいだ。

心は男……身体は女……。

「マジで女の子に……畜生」

覚えてやがれ……神様。

心の中で怨嗟の言葉を吐いていた俺は、神様に叶えてもらった願い事を思い出し、確認する事にした。

一つ目の願い事は確認できない……よな。

妹の幸せを願ったんだが……大丈夫だろうか……？

神様を信用するしかない……か。

「次の願い事は……翼だったよな」

とりあえず翼を出してみようと思ったが、如何せん翼の出し方が分からない。

「うーん、とりあえずイメージしてみるか……」

瞳を閉じ、頭の中で自分の背中から生える翼をイメージする。

そして、ゆっくりと瞼を開くと。

「うお……」

ぱちぱちと瞬きをして、鏡に映る少女を凝視する。

絹糸のような白い髪、真紅の双眸。

そして、背に生えた純白の翼。

髪が白色になった為、肌の色が際立って白く見える。

「……すげえな」

開いた口が塞がらないとはこの事が、と俺は一人で納得していた。

恐る恐る手を伸ばし、自らの背中から生えている翼に触れてみる。

「ん……っ」

初めての感覚で、変な声を上げてしまった。

何と言えばいいの……誰かに脇腹を触られてる感覚とでも言うのだろうか。

かなり“もふもふ”していたので、もう一度触ってみたい自分と、こそばゆいのが嫌いな自分が頭の中で戦っている。

「……また今度にしよう」

結局、触られたくない派が勝利を収め、一通り背中に生えた翼を確認した俺は、長年の夢だった大空を飛ぶ夢を叶える事にする。

……室内じゃねえーか、というツッコミはご遠慮下さい。

とりあえず、翼を上下左右、思うがままに動かしてみる。

「へえ……」

思いのほか自在に動かすことが出来て、俺はかなり驚いた。

“第二の手”……とまではいかないが、それでも練習すれば翼で筆を挟んで習字が出来るくらいになるかも、などとくだらない事を考えながら翼を動かし続ける。

「よし、そろそろ大丈夫かな」

翼を動かす事に慣れてきた俺は、ゆっくりと純白の翼を大きく羽ばたかせた……するところ。

「おお〜！……と、飛んでる」

俺の身体は一メートルほど、宙にふわふわと浮かんでいた。

やべえ……嬉し泣きしそう。

「よし、飛びまわ……ガシャン？」

だいたいコツも掴めてきたので、部屋の中を縦横無尽に飛び回ろうとしたその時。

背後で何かが落ちた音がしたので、慌てて振り向いた。

「……？」

振り向くと壁に掛けてあった時計が床に落ちている。

どうやら先程の音の犯人はコイツみたいだった。

「は？何で……ってヤバッ！」

ふと部屋の中を見渡すと、机の上に置いてあった折り紙が大量に宙を舞い、床に落ちていた小さな絵本も空へ舞い上がるうとしていくかのように、音を立ててページをはためかせている。

俺は慌てて翼を羽ばたかせるのを止め、地面に着地した。

すると舞い上がっていた大量の折り紙が、まるで色とりどりの落ち葉のように、ってそんな事を考えている場合じゃない。

「……あちゃー」

部屋の中を改めて見渡すと、特筆はしないが……恐るべき惨状になっている。

「室内……いや、密閉された空間で飛ぶところなるんだな……」

一つ勉強になった俺は、翼を自分の中に仕舞い込み、部屋の掃除を開始した。

床に落ちてしまった時計を苦勞して壁に掛け、今度は四つん這いになって部屋の中に散らばった折り紙を拾い集めていたのだが……。

「ふう……ようやく片付い あ」

最後の一枚の折り紙を拾おうとする自分の姿が映った鏡が視界に入り、俺は動きを止めた。

「いつの間……」

拾い集めた大量の折り紙を床に置き、立ち上がって姿見に近寄る。

そこには、黒髪黒目の少女が映し出されていた。

部屋の片付けを開始して5分は経っているのに、その間に元に戻ったのだろうか？

「神様が髪の色は徐々に元の黒色に戻るって言ってたな……」

変装とかに役立つ……のか？

時間が経てば元に戻るから……人前で、まさか翼を堂々と広げる訳にもいかないだろうし……。

まあいいや、詳しい事は次の機会に確認しよう。

「次は……」

俺は床に散らばっていた最後の一枚の折り紙を拾い上げた。

「クレイジー・ダイヤモンドの能力を確認するか」

そうやって俺は、拾った一枚の折り紙を真つ二つに引き裂いた。

そして、半分に引き裂かれた折り紙を。

「よし……《元に戻す》」

元に戻したいと心の中で念じると、二つに引き裂かれた折り紙が見る見るうちに修復され、元の正方形の折り紙に戻った。

漫画では見たことはあったが、目の前で見ると感動ものだな。

「物やエネルギーを直す力、か……素晴らしいな」

俺は、原作で“この世のどんな事よりも優しい能力”と評価されて

いた事を思い出した。

しかし、この『ネギま』の世界では霞んで見えるだろうと思い、俺は苦笑いを浮かべる。

なぜなら、この世界には治癒魔法が存在するからだ。

しかし、治癒魔法が生物に効果があるのは当たり前だが、無生物に対してはどうかと、ふと疑問に思った。

もし、無生物に対して治癒魔法が効かないなら素晴らしい能力だな。

エネルギーも元に戻したり出来るし。

「ん、待てよ……?」

そこで、俺はある事に気がついた。

エネルギーを元に戻す、この能力。

もしかすると……

『魔法も元に戻せるのでは?』

……魔法もエネルギーのはずだ。

魔法は魔力から出来ているから……触れる事が出来れば元に……元の魔力の状態に戻せるかもしれない。

もしかして、これって“魔法無効化能力”じゃないのか？

……手の平だけだが。

「何か……あれだな」

とあるラノベの不幸少年みたいな能力だな。

殲滅魔法や効果範囲が広い魔法は無理だと思うが、魔法障壁や魔法の射手……もしかしたら手で触れる事が可能なら、どんな魔法も元に戻す事が出来るかもしれない。

……問題は触れる事が出来ればの話だが。

普通の人間なら防ぐ事は出来ないだろう。

とあるラノベの不幸少年は色々と防いでいたような気がするが、魔法の射手を手で防ぐなんて、早過ぎて防げる訳がない。

それに、魔法障壁も触れる以前の問題で近寄る事が難しいだろう。

だが、俺には『ザ・ワールド』……時を止める能力がある。

時を止める事が出来れば、触れる事など容易い。

魔法の射手も魔法障壁も簡単に触れる事が出来るだろう。

「うわぁ……チートすぎだろ」

まあ……魔法の射手とかは、時が止まっている間に回避すれば済む話なんだが……。

男なら相手が撃ってきた魔法の射手を避けるんじゃないかと、打ち消したいだろ？

時が動き出して相手の驚く顔が見てみたいよな？

よくよく考えると……俺、とんでもない化け物だな。

翼があつて、物や人間を修復したり爆弾に変えたり出来て、更に時まで止めれて、あまつさえ簡易魔法無力化能力まで持つてるかもしれないって……。

治してやるって言いなながら爆弾に変えたり出来るんだよな……俺。

「まあいいか、さて次はキラークイーンか……」

手に持っている直ったばかりの折り紙を見つめる。

「確か……爆弾の種類と威力を決めて、爆弾に変えたいと思えばいいんだよな」

種類は任意起爆型と接触起爆型があるが……安全性を考えて任意起爆型だな。

威力は……木っ端みじんでいいだろう。

たかが折り紙だし……それにどれくらいの威力なのか確かめてみたいしな。

「……《第一の爆弾》、折り紙を爆弾に変える……っと」

そして俺は、折り紙を爆弾に変えた。

勿論、折り紙には何の変化もない。

正直に言つと、本当に爆弾になっているのか半信半疑だった。

「スイッチ、押してみるか……」

しかし、問題が一つだけあって……何処で爆発させるかが問題なのだ。

手に持ったまま爆発させるほど馬鹿ではないし、床に置いて爆発させれば、床まで木っ端みじんになる可能性がある。

「なら……空中か」

空中なら何処にも被害は出ないだろ……多分な。

左手で折り紙の端をつまみ、右手でグーサインを作り、スイッチを押す準備をする。

「……………うわ、緊張するな」

左腕を出来るだけ前に伸ばし、自分と折り紙が出来るだけ離れるようにする。

一度、大きく息を吸い込み、そして吐き出して深呼吸をした。

心の準備が出来たので、ゆっくりと折り紙をつまんでいる指を離す。

ひらひらと折り紙は重力に従い、床に向かって落ち始める。

「……………ポチツとな」

少しだけ上体を後ろに反らし、タイミングを見計らって右手のスイッチを押した……………する。

落下していた折り紙は爆音と爆風を撒き散らしながら、跡形もなく爆散した。

ついでに、爆風に巻き込まれた俺も後ろに吹き飛んだ。

「うおっ……痛ッ！」

爆風で吹き飛ばされた俺は、背中を強く部屋の壁に打ち付け、そのまま床に尻餅をついた。

「けほっ、けほっ、……マジかよ」

どうやら爆風だけで二、三メートルは吹き飛ばされたようであり、どこも怪我はしていない、が……威力おかしいだろ。

「注意しないと自分自身も巻き込む……コレ」

てか、今の音はヤバいな……人が集まってくる可能性がある。

「いてて……さっさと終わらして、この部屋から逃げないと」

最後は『ザ・ワールド』か……どれだけ止めれるんだろうな……。

ゆっくりと立ち上がり、壁に掛かっている時計を見上げた。

時計の針は静かに、そして正確に時を刻み続けている。

時が止まっているのを確認するのは、これが一番手っ取り早いだろう。

「……せーの、《ザ・ワールド》ッ！時よ止まれ！」

その瞬間、世界の時は停止した。

「おお……すっげえ」

絶えず動き続けていた時計の秒針が止まっている。

「よし、いち、にーい、さーん、しーい、ごーお、ろーく、しーち、はーち、きゅーう、じゅ……あれ？」

どれぐらい時を止めれるのかを計っていたのだが、九秒ほど経過した頃に再び時が動き出し、秒針が思い出したかのように動き始めた。

「……何で勝手に解除されたんだ？」

原作では時が動き出すタイミングが分かっていたみたいだけど、俺は分からなかったぞ……？

だが……こんな子供の状態で九秒も止めれたんだ。今は喜んでおくべきだろう。

時が止まっているのに九秒と考えるのはおかしいが、とにかく九秒ほど止めていられるのが分かった。

色々と疑問は残っているが……原作が始まるまで時間はあるから、大丈夫だろう。

それにしても……一時はどうなる事かと思ったけど、神様が言っていた通り……何とかなったな。

「さてと……逃げるか」

誰かが先程の爆音を聞き付けて人が集まってくるのを恐れた俺は、この部屋から脱出しようと歩き出したのだが、猛烈な虚脱感に襲われた。

「え……なに……？」

立っている事が出来ず、糸が切れた操り人形のように身体が前のめに倒れ、床に激突した。

「痛ッ……どうなって……」

片膝を立て、どうにかして立ち上がるうとするが、足に力が入らず膝が痙攣し続けている。

「……ッ」

あまりの気分の悪さに、思わず苦悶の声を上げてしまう。

……もしかして『魔力切れ』……か？

さっき、いきなり時が動き出しのは魔力が切れたからなのかもしれない。

「くそ……まさか、ここまで消耗するとは……」

俺は苦痛に顔を歪めながら、何度も頭を横に振った。

「ダメだ……立てない」

膝を立てている事も出来なくなり、床に突っ伏した。

「はは、参ったな……ん？」

廊下からバタバタと慌ただしい足音が聞こえた。

どうやらこの部屋に向かっているようで、足音がどんどん近づいてくる。

「やべえ……詰んだ」

そして、荒々しく部屋の戸が開かれ、躍り込むように見覚えのある少女が現れた。

第二話（後書き）

ようやく新しい登場人物が……未だに主人公の名前も分からないし
……（笑）

どういふ事なの、この小説……。

第三話（前書き）

いつの間にか、お気に入り登録数が100件に……本当に恐悦至極です。

では短いですが、どうぞ。

第三話

「ねえさま〜いまのおと　どないしたんねえさま!？」

少女は悲鳴に近い声を上げながら、俺に駆け寄って来た。

まるで鏡を見ているのではないかと錯覚してしまうぐらい、俺に酷似している少女の心配そうな顔が目の前にある。

先程の音を聞き付けて部屋に駆け込んで来たのは、関西呪術協会長の娘……俺の双子の妹でもある『近衛木乃香』だった。

そして俺の名前は……『このは近衛木乃羽』……近衛木乃香の双子の姉、らしい。

一卵性双生児というやつで、妹の木乃香とは容貌や声が瓜二つである……性格は違うと思うが。

俺の名前は、どうせ神様が面白半分命名したんだろう。

……あの神様ならやりかねない。

“翼”があるから“木乃羽”って……安直過ぎるだろ。

そつえば、ザ・ワールドの魔力の件で神様が『大丈夫、問題ない』と豪語していたのはこういう事が。

自分がどれぐらい魔力を持っているのか、さっぱり見当がつかないが……双子だから少なくとも木乃香と同じくらいだろう。

四歳児の状態で『9秒』時を止めれる、か……。

コレを多いと捉えるべきか、少ないと捉えるべきか……。

まあ成長していくにつれて、魔力量もある程度は増えていくと思うが……能力を使うときは“省エネ”していかないと身体が持たないだろうな。

一秒区切りで使えば近接戦闘にも……いや、俺は別に戦闘なんてしたくない。

魔法はある程度、覚えるかもしれんが……認識阻害や転移魔法が使えたら便利だろうし……。

それにしても、また面倒な家に生まれてしまったな、と俺は心の中で嘆息した。

赤き翼のメンバー、そして関西呪術協会長でもある近衛詠春の娘。

さらに、極東（……今は極西か？）最強の魔力の持ち主である可能性。

おまけに関東魔法協会理事長の孫娘など……面倒臭い事この上なしである。

何かに巻き込まれるフラグしか立ってないだろ……コレ。

修学旅行編たるいなあ……。

難癖つけて麻帆良に留まっておくべきか……。

まあ……魔力の件だったり翼持ちの刹那と接点があるのは良いとしても、あまりにもメリットとデメリットが釣り合わなさ過ぎる。

俺は“第二の人生”をのんびりと謳歌したいんだが……。

あの薬味坊主だけはキラークイーン的能力で爆殺するかもしれんがな……木っ端みじんなら証拠も残らないから。

「ねえさま、きこえとる!?!」

木乃香の甲高い声に俺は我に返った。

「ん? ああ……大丈夫、モーマンタイ」

未だに立ち上がる事は出来なさそうだったが、俺は木乃香を心配させない為に敢えて軽い口調で返答し、笑ってみせた。

「ほんまに?」

木乃香は心配そうな表情で、じつと俺の目を見ながら言った。

さすが我が妹、俺の痩せ我慢を見抜いている……のか?

「大丈夫だつて」

俺は安心させる為に木乃香の顔から目を逸らさず、ニッコリと笑って答えた。

無理をするのは慣れてるし、これ以上……心配かけたくない。

一応、大事な双子の妹だからな。

「ほんまにだいじょうぶなん？」

俺に顔を寄せて木乃香は念を押すような調子で言った。

それに対し俺は、大きく頷く事で応える。

木乃香はまだ何か言いたそうな表情だったが、一度小さく頷いてから俺に手を差し出してくれた。

「ありがとう、木乃香」

俺は木乃香の助けを借りて、身体をよるめかせながら、どうにか立ち上がった。

「……ッ」

身体の節々が鈍く痛む。

まさか、ここまで消耗するとは思ってなかった。

この身体が元から虚弱体質って事も関係しているんだと思うが……。

強大すぎる力には、代償は付き物……か。

反復練習あるのみ、だな。

待てよ……何で俺、ザ・ワールドの能力が欲しかったんだっけ……？

「ほんまにだいじょうぶ？」

木乃香は俺の顔を覗き込みながら、不安げに言った。

「心配し過ぎだっつて」

俺は木乃香を心配させない為、咄嗟に答える。

顔が引き攣っていないか心配だったが、少し無理をしてニコツと笑うと、木乃香もやっと少しだけ微笑んだ

「……わかったえ」

木乃香は、あまり納得いった様子ではなかったが、首を縦に振ってくれた。

首を巡らし、改めて俺達の子供部屋を見渡す。

壁際には仲良く並んで学習机が二台あり、片方の机の上には折り紙や絵本が、もう片方には可愛い人形やクレヨンが置いてある。

四歳の子供にしては、キッチンと整頓されている……と思う。

壁には先ほど掛け直した時計があり、床には桃色の布団が一組だけ敷かれていて……一組？

何か嫌な予感がするが……うん、さっきまで俺が寝てたからだよな。

まさか、一緒に寝てるなんてない……よな？

後は着替えが収納されてある箆笥や、その他もろもろの生活用品が。

「ねえさま？」

木乃香は、じっとこちらを観察するように私を見つめている。

すぐに考え事する癖があるな……この身体は。

さつきから無意識の内に自分の世界に入り込んでばかりだな。

『精神は肉体に影響を受ける』って原作でエヴァが言ってたし……
気をつけないと。

「いや、ちょっと考え事を……」

さて、これからどうするか……。

え〜と今は四歳で、原作が始まるのが中一だから……あと九年？

原作始まるまで、あと……九年。

……原作の内容、覚えてられないから。

今度、ノートが何かに覚えてる限りの事を書き写しとこう。

誰かに見つかったら病院に連れていかれそうだな……。

幸いな事に、鍵付きの学習机だから隠す場所には困らないけど。

「なあ、ねえさま。おねがいがあるんやけど……」

木乃香は私の様子を窺うように、上目遣いで訊ねてくる。

さっきから思ってたけど、姉様って呼ばれるの恥ずかしいな……。

調きよ　じゃなくて、呼び方を変えてもらうか。

「どした？」

前の記憶によると……あんまり仲良かった訳じゃないんだよな、この姉妹。

と言うより、一方的に前の俺が木乃香の事を嫌っていたって感じがする。

私は病弱で外に出て遊べないのに、何で木乃香は　ってところだろう。

仲良くしたかったみたいだけど……どうも素直になれなかったみたいだな。

……よし、決めた。

前の世界では最期まで護れなかったけど、この世界では　。

「あのなあ、あの……いっしょにあそばへん？」

「何して遊ぶんだ？」

俺が二つ返事で答えると、木乃香は目を大きく見開いてきょとんとしている。

……やっぱり、遊んでくれると思ってなかったんだな。

いつもは『調子が悪い』とか『気分がすぐれない』とか言っていて曖昧に断ってみたいだし……。

「……ほんまにええの？」

木乃香は恐る恐る、俺に訊ねてくる。

「ああ、いいよ」

……妹の願いを叶えてやるのが兄の仕事だからな。

「ほんまに？」

木乃香はくどいばかりに念を押して訊ねてきた。

……これが『母性本能をくすぐられる』ってやつか。

木乃香かわいいよ木乃香。

「ホンマだ。で、何して遊ぶんだ？」

「あ、あのな！いっしょに、そとやねんけど……てまりであそば入ん？」

木乃香は、いささか興奮気味なようでも早口になっている。

よっぽど俺と遊べるのが嬉しいみたいだな……今まで一緒に外で遊んだ事は無かったみたいだからか。

「ああ、いいよ」

俺がニツコリ笑って言うと、木乃香もすぐに満面の笑みを浮かべた。

「ありがとうな、ねえさま。ほな、はよいこ！」

そう言っただけで木乃香は、俺の手首を掴んでグイグイと引っ張って歩いていく。

それがあまりにも強引だったので注意しようかと思ったが、木乃香の嬉しそうな横顔を見たら何も言えなくなった。

木乃香は俺の手を掴んだまま、早足で板張りの廊下を突き進んでいく。

俺の大事な妹……か。

この世界では絶対に護り抜こう……特にアノ薬味坊主からは絶対にな。

もしもの事があつたら……その時は。

「どないしたん、ねえさま？」

ピタリと足を止めて、木乃香が振り返る。

「な、何でもない」

……ビビった。

双子のシンパシーってやつだろうか？

「……？」

木乃香は怪訝そうな表情で小首を傾げている。

何かあれば……その時は消すだけだ。

第三話（後書き）

この小説……いつになったら原作始まるんだらうか（笑）

第四話（前書き）

まさかの更新。

では、またまた短いですが……どうぞ。

第四話

「……疲れた」

あの後、屋敷の庭で木乃香が満足するまで手鞠で遊び、今は子供部屋に戻って床に寝そべり、一息入れているところである。

……活動限界です。

「……つかれたなあーねえさま」

木乃香は先程から俺と同じように床に寝そべって、ゴロゴロと床を転がっている。

そんな事してたら疲れているようには見えないぞ……。

「ゴロゴロゴロゴロ」

木乃香の床を転がる速度が異様に速いんだが……。

よく酔わないな……俺だったら気持ち悪くなって吐いてると思うぞ。

というか、まさか遊び足りないんじゃないだろうな……？

確かに日が暮れてきたから部屋に戻ろう的な事を俺が言って終わりになったんだが……。

とつくに俺のライフはゼロです、勘弁して下さい。

「……はあ」

俺は転がって遊んでいる木乃香に聞こえないように、小さく溜め息をついて瞼を閉じた。

さっきまで、大はしゃぎで遊ぶ木乃香を見て自分も癒されながら遊んでいたのだが、途中から一緒になって無邪気に遊んでいた自分を思い出して、少し恥ずかしくなった。

もしかしたら精神年齢も若干だが落ちているのかもしれない。

精神は肉体に影響を受ける……か。

俺の精神も女性に近づいているのかも……恐ろしい。

それから如何せん、身体が思うように動かないのが辛かった。

少し走れば息切れするわ何やらで大変だったし、若干だけど筋肉痛になってるような気がするし……。

走る事も出来ないって重症だな……どれだけ運動してなかったんだよ。

……運動する事ができなかったの間違いか。

多少、無理をすれば妹と楽しく遊べるという事を覚醒前の俺に伝えてやりたい。

いや……無理はダメか。

まあ、一番の問題は着物を着ている事で『重い、苦しい、動きづら

い』の三重苦である。

この家には多分だが、私服って物が無くて、着物が寝巻きしかないんだと思う。

……詠春に言っても買ってくれる訳が無いしな。

……ああ、ジーパン履きたい……Tシャツが着たい。

今の俺の切実な願い事は、着物からの脱却です。

「ねえーさま〜」

身体の側面に軽い衝撃、そして全身にズシリと重みを感じる。

床を転がっていた木乃香が俺に衝突し、そのまま俺の上に乗り上がったんだと思う。

「……重い」

俺は、ぼつりと独り言のように呟いた。

少し重たかったが、動く事さえ面倒だったので木乃香の好きにさせておいた。

……今まで仲良くできなかつたから、嬉しいんだろうな。

「なあなあ、ねえさま〜」

頭頂部にもズツシリと重みを感じる。

木乃香め、顎を乗せやがったな……。

もしこの場に刹那がいれば鼻血を出して悶え苦しんでいるのでは、
という変な妄想が頭の中に沸いてきたが……すぐに頭の中から追い
出した。

アイツはそこまで変態じゃない……はず。

「……なんだよ、てか重い」

俺は、早く俺の上から移動しろという意味も込めて無愛想に答える。

「ゆーたいりだつ」

木乃香は無邪気な声で言った。

俺の上で何をやってんだよ……てか、そんな事どこで覚えた。

「木乃香、俯せだから『脱皮』になると思うぞ」

「……ちがうん？」

木乃香の顔は頭上にあって見えないが、どうせぼけくっとした顔で
首を傾げているんだろう。

……この娘の将来が心配です。

「違う。てか早くどきんしゃい」

「……わかつたえ〜」

木乃香は渋々そう言つと、ようやく俺の上から転がって移動した。

「なあ、ねえさま。そろそろいかへん？」

木乃香は、ゆっくりと立ち上がつて俺を見下ろしている。

「行かつて……どこに？」

俺は、そう答えて俯せから仰向けになり、上半身だけ起こして木乃香の顔を見上げた。

「どいつて……いつものとこやん」

木乃香は、キョトンとした表情を浮かべて俺を見返している。

む……マズイな。

どれだけ自分が覚醒する前の記憶が残っているとはいえ、大まかにしか覚えていないからな……。

中途半端に覚えてるぐらいなら忘れてたほづがマシだったような気がするんだが。

原作前では原作知識はほとんど役に立たないし……適当に話を合わせておくか。

「あ、ああ……あそこか」

俺は木乃香にバレないように落ち着いた口調で返答した。

「じゃあ、ねえさまーいこ〜」

そう言っつて木乃香は腰を屈めて俺に手を差し出した。

今回は魔力切れじゃないから自力で立ち上がれるんだけど……まあいいか。

差し出された手を掴み、木乃香に引つ張り上げてもらったのだが。

「…………ふふ」

木乃香はニヤニヤと不気味な笑みを浮かべて、俺の顔をまじまじと見つめている。

「…………なんだよ」

近衛木乃香っつて…………こんなキャラだっけ？

「なんでもないえ〜」

木乃香は俺の手を優しく握り直し、ゆっくりと歩き始めた。

俺もニヤニヤしている木乃香の横に並んで歩く。

不思議なもので、手を握って歩く事に恥ずかしさは少しも感じなかった。

これも覚醒前の記憶やら何やらが関係している……………のか？

木乃香がニヤニヤ笑っているのは……よく分かん。

まあ、喜んでいるのは分かるけど……何かしたかな……俺。

上機嫌そうに鼻歌を歌いながら俺の真横を歩いている木乃香の横顔を見つめる。

「ま、楽しそうだから……いつか」

俺は木乃香に聞こえないように小声で呟いた。

こんな広い屋敷の中で、俺と木乃香しか子供がいないんだもんな……。

「ねえさま？」

そういえば、この屋敷の中には詠春以外は全員女性だと思っていたのだが……。

理由は分からないが、覚醒前の記憶によると……どうやら男性も少数だが屋敷内にいるらしい。

「ねえさま〜！」

厨房で料理を作っていたり、屋敷の警備などを担当しているみたいだ。

存在しないはずの俺がいるから……原作と変わってきているのか？

女性だけだったような気がするんだが……。

「ねえさま、聞いてとる?」

木乃香の不満そうな声で我に返る。

「ゴメン……聞いてなかった」

俺は木乃香に小さく頭を下げた。

これじゃあ、どっちが姉か妹か分からないな……。

「……もういいえ」

木乃香は、ぷいと顔を横に向けてしまった。

「木乃……」

怒ってしまったと思い、すぐに謝ろうとしたのだが……木乃香の横顔が何やら嬉しそうな表情だったので何も言えなくなった。

……わけ分かん。

深く考えないようにしよう……。

……あれから五分ほど木乃香と手を繋いで歩いているが、未だに目的地へ到着していない。

通り過ぎた部屋の数は、とっくの昔に両手両足の指を使っても数え切れなくなっている。

本当はどこに何があるのか記憶しないといけないと思うのだが……。

どこを見ても同じ部屋にしか見えないので、目的地へ向かう途中から辺りを見渡すのも面倒になり、さつきから俺は俯いて考え事にふけている。

……広すぎるんだよなあ、この屋敷。

まあ、その内に覚えるか。

それより木乃香は俺をどこに連れていくつもりなんだろうか？

原作の内容を覚えている間に要所要所を纏めておきたいんだけどな……。

「ついたえ〜」

木乃香の目的地へ到着した事を知らせる声を聞いて俺は、ふと顔を上げた。

そして、その戸の前で全身が石のように硬直してしまった。

「どないしたん、ねえさま？」

木乃香は俺の硬直を気にしたのか、心配そうな表情で自分を見つめている。

「あ、いや……」

俺は思わず口ごもってしまった。

ついてくるんじゃないかと後悔したが、もう『時すでに遅し』である。

なぜ硬直したか理由を説明すると、その戸の横の壁に大きく『大浴場』と墨で書かれた木の板が打ち付けられていたからであった。

盲点だった……まさか『風呂』に連れてこられるとは思いもしなかった。

……風呂は夜御飯を食べてからだろ常識的に考えて。

「しんどいん？」

木乃香は不安そうに俺を見つめている。

「あ、いや……そういう訳じゃないんだが」

俺は慌てて小刻みに首を横に振った。

ぶつちやけた話、木乃香と風呂に入るのは少し恥ずかしいが何とかなるだろう。

転生前は妹と普通に入ってたし……昔の話だけだな。

だが、自分の身体が『女』になっているのを確認するのは、ちと心の準備がいるんだが……。

「あせかいたかなあとおもたんやけど……」

木乃香は視線を床に落とし、悲しそうな口調で言った。

「あ、いや入る……入ります、入らせて下さい」

それを聞いた木乃香は視線を俺に戻し、ニツコリと笑う。

はあ、と心の中で大きな溜め息をつく。

……もつとつにでもなれ。

この時、俺は自分の事だけが問題だと思っていた。

だが、更なる困難が待ち受けているのであった……。

『T O B e C o n t i n u e d ……』

第四話（後書き）

小説内容はノンビリ、マッタリでいきたい所存なのですが……。

原作が始まったら……（笑）

第五話（前書き）

インフルエンザ、初出勤、そして地震…。

数々の苦難を乗り越え、ようやく更新することが出来ました。

では、どうぞ。

第五話

「はぁ……分かった、入ろう」

俺は大きな溜め息をついて、肩をガツクリと落とした。

そして、一度だけ深呼吸をして風呂に入る覚悟を決める。

大丈夫……俺は男だ。

身体が女になっただけで。

「じゃあ、はいるえ」

「あ、やっぱ、ちょっと待っ」

木乃香が大浴場の戸を開けると、俺達を待っていましたと言わんばかりに女中さんが二人、脱衣所の中に立っていた。

美人だな……詠春め、妬ましい。

じゃなくて、この人達は風呂に入っていたのだろうか？

それとも掃除か？

「お嬢さま、もうお入りになられますか？」

一人の女中さんが微笑を浮かべながら言った。

木乃香は元気よく首を縦に振ってそれに応える。

女中さん達に案内されるように木乃香と俺は脱衣所の中へと進んでいく。

それにしても、広い脱衣所だ……。

俺はキョロキョロと辺りを見渡した。

脱衣所には木製の棚が大量に設置されていて、棚の中には真っ白なバスタオルが丁寧に畳まれて置いてある。

隅には小さな冷蔵庫まで置いてあり、中にはギツチリと牛乳瓶のような物が詰め込まれている。

分かってるなあ……詠春、やっぱり風呂上がりには牛乳だよな。

「ねえさま、はよはいろ〜」

いつの間にか目の前で立ち止まっていた木乃香が、待ちきれないとばかりに催促してきた。

「分かった分かった、入るから」

とは言ったものの、女中さん達が一向に脱衣所から出ていく気配がないから風呂に入れないだが。

視線に気づいた女中さん達はニツコリと笑ってその場に立っている。

いや、早く出ていってくれないかな。

「じゃあ、頼んだえ〜」

木乃香は一人の女中さんの前まで歩いていき、両手を真上に上げ、万歳の姿勢をとる。

そして女中さんは、それに応じるかのように一度だけ小さく礼をしてその場に正座し、木乃香の腰の辺りに腕を回し帯を緩め始め。

「ちよつと待ったあああ！」

それを見た俺は、思わず大声を上げてしまう。

俺が大声を上げた事に驚いたようで、自分以外の三人の視線が俺に集まった。

「何をしてるんだよ!？」

俺は肩で息をしながら、早口でまくし立てた。

「……?」

木乃香は質問の意味を計りかねているようで両手を真上に上げたまま、しきりに首を斜めに傾けていた。

女中さん達の方も首を傾げている。

「いや…だから、何で脱がしてもらってるんだ？」

首を傾げている三人に若干の苛立ちを感じながら、俺は木乃香が分かり易いように質問した。

「いつも脱がしてもらってるえ？」

木乃香は、そう言って不思議そうな顔で俺を見つめている。

なん……だと……？

木乃香の答えは、俺の想像をはるかに越えていた。

いつも脱がしてもらってる……だと……？

「冗談……だよな？」

俺は顔を引き攣らせながら言った。

「ほんまやけど……？」

冗談かと思って聞き返したが、真顔で返す木乃香にさらに驚いた。

木乃香は何がいけないのか分からない様子で、きよんとしている。

「じゃあ何だ、木乃香はいつもこの人達に脱がしてもらってるのか？」

「ウチだけやなくて、ねえさまもやん」

さも当然とばかりに木乃香が言った。

俺はその答えを聞いて、あんどりと口を開いたまま硬直してしまっ
た。

マジですか……？

二人の女中さんは顔を見合わせて、首を斜めに傾けている。

そして俺が脱がしてもらうなんて恥ずかしいから無理と言つと、三人は同じ女性ではないかと言わんばかりに怪訝な表情で俺を見る。

「ねえさま、はよはいろ〜や〜」

木乃香は、じつと俺の目を見つめながら言った。

だが首を縦に振るわけにはいかなかった。

どうせ女中さんに脱がしてもらっている理由は、着物にシワがつかない為とか自分達が風呂に入っている間にキチンと畳んでおきたいとか、そんな些細な事なんだと思う。

確かに、俺は着物の脱ぎ方は分からないし……畳み方も分からない。

でもな、外見は女だけどな……俺は、中身は男なんだよ。

こんな綺麗な女中さん達の目の前で服を、それも脱がしてもらつてお前……無理に決まっつてんだろ。

ならば、この状況を打破する方法は。

「……………ごほん、逃げるが勝ちだあああああああああ！」

これが我が『逃走経路』だ！

俺は落ち着きを払った風を装い、一度だけ咳ばらいをしてから踵を返して脱衣所から遁走しようとした　　が。

「ねえさま、ドコいくん？」

しかし、まわりこまれてしまった！

ば、バカな……あの位置から回り込んだと……？

木乃香とは3メートル以上離れていたはずなのに……。

「ちよつと用事を思い出しまして……」

「ねえさま、ウチの事……嫌いなん？」

木乃香は落胆したような表情になり、一度俯いてから上目遣いで絶るような瞳で俺を見た。

ぐぬぬ……こやつ、やりおる。

「このはお嬢さま、お風呂に入られないのですか？……せつかく私達が抽せ、ゴホンゴホン、このかお嬢さまが悲しみますよ？」

俺の傍らに立っていた女中さんが言った。

おい、今コイツ“抽選”って言おうとしなかったか？

「ねえさま、入る？」

懇願するような眼差しで木乃香が見つめてくる。

「……ぐぬぬ」

とどのつまり、俺が折れてしびしび首を縦に振ると、木乃香は満足そうな笑みを浮かべて喜んでいる。

「はぁ……」

俺は俯いて肩を落とし、溜め息をついた。

今日溜め息をつくのは、これで何回目だろうか……。

「ねえさま、さきいつとくな」

「ああ、分かった分かった」

ん……先に？

ふと顔を上げると、いつの間にか木乃果は着物を脱がされて素っ裸になっていた。

「おまつ……」

俺は慌てて目線を逸らして顔を横に向けた。

「さきいつてまつてるえ〜！」

「分かったから早く行けって！」

大浴場への入口の戸が閉まる音が聞こえる。

どうやら風呂に入ってくれたみたいだな……“恥じらい”ってものは無いのか。

……四歳児にはそんなもの無いか。

「……あ」

そして今、脱衣所に残されたのは自分と女中さんが二人。

この状況で脱がされるほうが恥ずかしいような気がしてきたのだが。

「……やっぱり帰っちゃ駄目？」

俺がそう言うと、二人の女中さんが顔を見合わせ、そして俺に視線を戻し。

「「駄目です」

「分かったよ……もう」

俺は覚悟を決め、両手を真上に上げて女中さんの顔を見上げた。

畜生……煮るなり焼くなり好きにしろってんだ。

「では、これはお嬢様……失礼します。」

そう言っただけの女中さんがニッコリ笑うと、おもむろに跪いて俺の着物を脱がし始めた。

うう……恥ずかしい。

壊れ物でも扱つかのように、俺の着物を丁寧に脱がしていく。

「……………ハア……………ハア」

……………女中さんの息が荒いような気がするんだが。

「ビューティフォー……………」

「眼福、眼福……………」

何なんだコイツら……………。

そして。

「……………いってらっしゃいませ」

そう言って、女中さん達はペコリと頭を下げている。

結局、俺は素っ裸にされ、脱兎の如く早足で大浴場に逃げ込んだ。

うう、もう……………お婿に行けない。

「うお、やっぱり広いな……………」

原作を知っているので最初から分かっていたが……………大浴場はとてつ

もなく広がった。

既に風呂と言うより“プール”と言ってもおかしくない広さである。

「ねえさま〜！こっちやえ〜」

木乃果は仰向けになって水面に浮かび、背泳ぎで浴槽の中を縦横無尽に泳いでいる。

何やってんだアイツは……。

とりあえず浴槽の近くに置いてあった桶を使って数回、身体を流す。

そして、足先からゆっくりと湯船に浸かり、浴槽の縁に腰を下ろした。

「おお……これは」

……気持ちいい。

今日の疲れが癒されていく……ような気がする。

うん……眠たくなってきた。

この身体、すぐに疲労が溜まるからなあ……ちよつと木乃香と外で遊んだぐらいで……ねむい。

「ねえさま〜！」

俺が浴槽の縁でウトウトしていると、木乃香が一糸纏わぬ姿で大き

く両手を広げ、俺に抱き着いてきた。

「ちょ！何やってんだ!？」

慌てて木乃香の両肩に手を当て、押し戻した。

「いやん、ねえさま。なでなでして〜やー」

「ハア?.....なでなで?」

記憶の底から情報を引っ張り出す。

どうやら覚醒前は、俺は木乃香を撫でるのが癖に。

木乃香は俺に撫でられるのが癖になっていたらしい。

.....前の俺は好意的に木乃香の頭を撫でていた訳ではないらしいが。

いや、別に頭を撫でるのは構わないんだけどな.....。

「あの〜、木乃香さん?」

「どないしたん?」

木乃香は俺の顔の目の前で小首を傾げている。

「.....何で俺の膝の上に座ってるんですか?」

撫でるの構わない、が.....今の状況が非常に芳しくない。

浴槽の縁に座っている俺の膝の上に跨がって、木乃香が向かい合う

ように座っている。

木乃香と俺の顔の距離は30cmもないだろう。

マズイ、マズイだろコレ……。

当の本人は俺の質問の意味を理解していないようで、きょとんとした顔で首を傾けている。

「あの〜、聞いてますか？」

「はやくなでて〜な〜」

木乃香は餌を目の前で待たされている犬のように瞳を輝かせながら、俺に撫でるように催促してきた。

「はあ……はいはい、撫でますよ」

俺は諦観の溜め息を吐いて、木乃香の頭を撫でてやった。

「〜」

木乃香は最高のご褒美を与えられたかのように満面の笑みを浮かべている。

「もういいか？」

「ま〜だ。ん〜、きもちえ〜わ〜」

猫のように喉をゴロゴロと鳴らして、木乃香は目を瞑っている。

「撫でてやるからさ……とりあえず、膝の上から下りてくんない？」

「ん〜？」

どうやら至福の一時を過ごしている木乃香の耳には、俺の切実な願いは届いていないようだった。

「はぁ……」

俺は木乃香の頭を撫でながら、溜め息をついた。

木乃香には一生、頭が上がらないかもな……。

「ん……？」

何やら視線を感じたので首を巡らせて背後を見る。

背後には誰もいない、が……振り返った瞬間に大浴場の入口の戸が閉まったような気がしたんだが、気のせいか……？

「なあなあ、ねえさま〜」

俺は木乃香に肩を揺すられ、頭を撫でながら振り向いた。

「何？」

……早く膝の上からどいてくれ。

「からだ、あらいつこしよ〜や〜」

木乃香の爆弾発言によって、俺は愕然として頭を撫でていた手が硬直したが、当人はニッコリ笑って俺の目を見つめている。

「…………自分で洗ってこい」

「ウチのこと…………やっぱりきらいなんやな…………ねえさま」

そう言って木乃香は両手で顔を覆い、嘘泣きを始めた。

俺はガツクリと肩を落とし、両手を上げて“降参”のポーズを取った。

「分かった…………やります、やらせて下さい」

木乃香は俺の言葉に満足したようで、顔を覆い隠していた両手をどけて口許を綻ばせた。

「…………先に行つててくれ」

俺がそう言うと、木乃果は頷いて浴槽の縁に足を掛け、勢いよく外へ飛び出して行った。

ゆっくりと立ち上がり、俺は大浴場の壁に設置されている鏡の前まで歩いていった。

幼い丸みを帯びた無垢な身体が、曇り止めの効いている鏡に映し出されている。

…………マジで女になつてるし。

幸か不幸か分からないが、自分の身体を見ても違和感は無かった。

……こんな時、どんな顔をすればいいのか分からない。

「どないしたん、ねえさま？」

木乃香は大浴場に置いてあった小さな椅子に腰掛けて、俺の顔を見上げている。

「いや……何でもない」

「ねえさまーはやくあらって〜」

「はいはい、分かりましたよ」

木乃香の横の小さな椅子に腰掛け、シャンプーで木乃香の柔らかかな髪を優しく洗う。

木乃香曰く「姉様に髪の毛を洗ってもらってる時が一番幸せ」らしい。

「ねえさま〜つぎはからだやで〜」

「……………」

『キングクリムゾンッ!』

あの後、木乃香の身体を洗い……俺も木乃香に頭や身体を揉みくちやに洗われ、途中で視線を感じたり、脱衣所に逃げ込んだら女中さん達に寝巻きに着替えさせられ、ようやく部屋に戻って布団に入っ
て横になっている。

勿論、横には木乃香がいる訳だが……

「ねえさまーいいにおい〜」

先程から木乃香は、俺の平らな胸に頬を擦り寄せている。

何やってんだよコイツは……。

「撫でて〜やー」

「……はいはい」

優しく丁寧に木乃香の頭を撫でてやる。

「〜」

木乃香は満足したようで、静かに微笑んでいる。

「なあ、俺に何でそんなに撫でてほしいんだ？」

俺は前から頭の中に浮かんでいた疑問を口にした。

「ん〜？あのなあ、ねえさまになでられると、からだかポカポカすんねん」

木乃香は恍惚の表情を浮かべて、まどろんでいる。

「へえ、ポカポカ……ねえ」

もしかしたら無意識にクレイジーダイヤモンドの能力が発動しているのかもしれない。

髪の毛を洗われるのも好きって言ってたしな……。

クレイジーダイヤモンドの能力なら構わないのだが、もしキラークイーン的能力だったら取り返しがつかないよな……。

「ポカポカって痛かったりしないんだよな……って木乃香？」

木乃果は疲れ切っていたようで、俺の胸の中で静かな寝息を立てている。

俺を抱き枕のように抱きしめているから、身動きが取れないんだが。

「寝たのか……？」

木乃香の柔らかい頬つぺたを軽く人差し指で突いてみる。

「ん……ねえさま……だいすきやえ」

木乃香は幸せそうな笑みを浮かべて寝言を呟いた。

そんな寝言を聞いた俺は苦笑しながら、木乃香が風邪を引かないように布団をかけ直してやる。

「まったく、手間のかかる妹だ……」

転生前の妹と……大違いだな。

でも……こんな妹も悪くない。

これから……この娘は、色々な事に巻き込まれると思う。

でも心配しなくていい……俺が護ってやるからな。

俺はもう一度、木乃香の頭を優しく撫でてやり、瞼を閉じて眠りについた。

汚れ役は……全部、俺が　。

第五話（後書き）

リアルがバタバタしているので、更新が遅くなるかもしれません。

こんな駄目小説ですが、これからもよろしくお願いします。

さて、頑張っていきましょうか。

第六話（前書き）

皆様のコメントが作者の原動力になっております。

そのくせ、お返事が遅いんですけどね……本当に申し訳ないです。

それでは、短いですが……どうぞ。

第六話

Side 詠春

「いくえく、うーちゃん！」

「……はいはい」

思わず仕事疲れで強張っていた顔が綻んでしまう。

柱の陰から中庭で楽しそうに遊んでいる木乃羽たちを見て、自分の表情が緩んでいる事に気づく。

……最近は何乃羽たちと会話さえままならないほど仕事が忙しく、あの娘たちには寂しい思いをさせてしまっていると思います。

今も書斎から会議室へ移動している途中で、偶然に中庭で遊んでいる木乃羽たちを見掛けただけである。

「私は……父親失格ですかね」

自嘲気味に呟き、溜め息をつく。

私が柱の陰から見ている事を木乃香はともかく、木乃羽は気づいているかもしれません。

木乃羽は……親バカかもしれませんが、かなり賢いと思います。

それに……最近になってですが、木乃香と中庭を散歩したり手鞠で遊んだり行動を共にするようになりました。

体力的な面で少し無理をしていないかと心配になりますが……走り回ったり無茶な事をしている訳ではないので大丈夫でしょう。

木乃羽と木乃香が仲良くなったのは、本当に喜ばしい事です。

……以前の木乃羽は、木乃香の事を疎ましがっていたと思います。

木乃香が話し掛けても無視してしまうか、何か理由を付けて木乃香の誘いを断ったりしていましたから……。

木乃羽は身体が弱く、外で元気に遊んでいる木乃香を恨めしそうに見ていたのを私は知っています。

木乃香は木乃香で、そういった木乃羽の態度に気づいていなかったよ。……喧嘩になったり、ぎくしゃくはしていませんが……。

父親の私が言うのもアレですが……まるで、人が変わってしまったと感じるぐらいに木乃羽の木乃香への対応が一変しました。

そして、木乃羽は。

私に甘えてくる事が少なく……いえ、無くなったと言っていていいと思
うんです！

木乃香が私に抱き着いて「父様〜！」と甘えてきても、木乃羽は遠
巻きに……まるで木乃羽の保護者ですと言わんばかりに、優しいな
表情で私たちを見ているだけなんです！

拗ねているのかと思って名前を呼んでもニコツと微笑んで、その場
から動こうともしないんですよ！？

以前は少し恥ずかしがりながらも、小さな手でギュッと袴を握って
甘えてくる娘だったのに……

私……知らない内に何かしてしまったんでしょ……木乃羽に避
けられているような気がするんです。

それも私の呼び方が「父さん」になっただんです！

昔はちゃんと「父様」と呼んでくれていたんです……なのに、何故
……。

それに、私の前では畏まった口調になりましたし……。

これが噂に聞く“成長期”というモノなのでしょうか……？

もしかして……そのうちに、お父さんの入った後の風呂に入りたく
ないなんて言い出すのでは！？

父親としては、娘の成長を喜ぶ気持ちと娘が自分から離れていってしまう……そんな寂しい気持ちが入り混じった複雑な心境です。

「……………」

ふと何かの気配を感じて横を見ると、遠くの柱の陰に木乃羽たちを見守っている女中が二人いる事に気づいた。

「何をやっているんですか……あの人は」

二人は遊んでいる木乃羽たちを手に持っているカメラで写真を撮っているようで、どうやら私の視線にも気づいていないようである。

あれではただのストーカーです。

……………私も人の事は言えませんが。

あの二人を護衛に抜擢したのは人選ミスかもしれませんが。

あの娘たちを守る為に、何か良い案があればいいのですが……………。

本山には木乃羽たち以外に子供が一人もいませんし……………。

可能であれば木乃羽たちと同年ぐらいの子供が護衛してくれれば……………。

「そんなつまい話があるわけないですよね……………」

その前に自らの地盤を固めるのが先だろうと、そんな甘い考えを頭の中から振り払うかのように首を横に振る。

関西呪術協会を一つに纏める事が出来ない私の力不足もあるのですが、ここ最近の本山では不穏な空気が流れています。

謀反を企てる者、関東魔法協会と戦争を起こそうとしている者。

そして、腸が煮え繰り返りそうになるのですが……木乃羽たちを利用しようとしている者までいるらしいのです。

厳密に言えば、木乃羽たちの膨大な魔力を利用しようとしているのだと思います。

利用方法にもよりますが、木乃羽たちの魔力を合わせれば関東魔法協会……いえ、国を一つ簡単に滅ぼす事が出来るでしょう。

……そんな事、絶対にさせませんが。

もし本当に木乃羽たちを利用しようとする輩がいたら、夕凧の錆にしてやります……確実に。

しかし反対に、そんな輩を生み出しておきながら見つけ出す事も出来ない自分の不甲斐無さにも腹が立つ。

とにかく……今は地盤を固める事が先決ですね。

「必ず……守ってみせます」

もう少しだけ、もう少しだけ時間を下さい……木乃羽、木乃香。

私は木乃羽たちの楽しげに遊ぶ声を耳にしながら、後ろ髪を引かれ

る思いでその場を後にした。

Side End

「どないしたん、うーちゃん？」

手鞠を持ったまま木乃香が心配げに訊いてきた。

「ケホツ……何でもないえ」

父さんは行ったか……最近の仕事が忙しそうだしなあ。

“父さん”……か。

……父さんとはあまり良い関係を築けてるとは思えないんだよな……。

転生前の事もあるんだが……“甘える”って行為は苦手だ……。

言い方は悪いが、父さんは二人目の親になる訳だが……転生前の両親は幼い内に亡くなってるから記憶なんて無い。

だから……俺は本当の父親みたいに思ってる。

だけど、どう接したら良いのかが分からない。

甘え方も分からないし、優しくされるのにも慣れてない。

まあ……原作が始まるまで時間はあるんだから、おいおい解決しよう。

それにしてもあの“二人”は何をやってるんだか……。

馬鹿みたいに写真を撮りやがって……。

……あれじゃ完全にストーカーだろ。

あれが俺たちの護衛だって言うんだから……泣けるぜ。

「うーちゃくんー、聞こえとる？」

覚醒してから数ヶ月間、木乃香と一緒に暮らして分かった事や変化した事が多々ある。

まず、ある一定の条件を満たすときに限り、俺の口調が変わった……

……細かく言えば変えられた。

……誰に変えられたかは言うまでもない。

話せば長くなるが、“俺”という人格が生まれてから、何も気にする事なく転生前と同じように自らの事を『俺』と言ったり、男口調で話していたのだが……。

転生して数日後、急に木乃香が「女の子がそんな喋り方じゃ駄目だ」と激怒したのである。

……あの時の木乃香は怖かった。

そして、激怒した木乃香は俺に無理難題を叩きつけてきた。

『ちゃんと京都弁で喋れ』……と。

勿論、俺は断固反対した。

今まで男として生きてきて、それに京都に住んだ事も行った事も無かったのに京都弁なんて話せる訳がない。

だが、京都弁を話せないと言い切ってしまうと以前の自分と齟齬が生じてしまう。

そして俺は苦し紛れの言い訳で「京都弁を忘れてしまった」と木乃香に口走ってしまった。

今まで京都弁で話していた癖に『忘れてしまった』と言い張ったのだから、普通ならここで何かがあったのだらうと諦めてくれるか、呆れを通り越して笑ってくれるかのどちらかだと思っていたのだが……木乃香はどれにも当て嵌まらなかった。

「ウチが一から教え込んだら」と言ってきたのだ。

このとき既に本能が自らの旗色が悪いことを告げていたのだが、俺はここでも断固反対した。

そして、あーだこーだの喧嘩になり結局、俺が白旗を掲げる事にな

った。

俺が京都弁を話す条件として『木乃香と二人きりの場合に限る事』と『第三者いる場合は通常の口調で話す事』という条件を提示すると木乃香もその条件を渋々呑んでくれた。

そうして俺は、妹に京都弁を教えてもらおうというおかしな状況に陥ってしまったのである。

そして京都弁を完璧にマスターしてしまった現在に至る。

……もうどうにでもなってしまう。

それと、木乃香が俺の事を『うーちゃん』と呼ぶようになった。

以前から木乃香に姉様と呼ばれるのが嫌で、木乃香に呼称を変えてくれと懇願したら。

「決まったえ、『うーちゃん』や!」

「はあ?」

「ウチは知ってるえ!……姉様の名前の『羽』って漢字は『う』とも読むんやろ?」

「いやまあ……そうやけど」

「だからうーちゃん!」

「…………はあ」

とまあ、こんな感じになってしまった訳である。

俺は変わらず今まで通りに『木乃香』と呼んでいるが、本人は『このちゃん』と呼んでもらいたいらしい。

…………誰が呼ぶか。

何で双子の姉妹で『ちゃん付け』で呼び合わないといけないんだよ。

それに、そのうち刹那がやって来るだろうし…………

おかしな姉妹だと思われるのは嫌だ。

後は…………木乃香は病弱な俺の事が不安でならないようで、いつも手助けをしてくれるのだが…………。

優しい性格だという事は理解している…………が、少し俺を心配し過ぎている面もあるので考えすぎかもしれないが兄…………じゃない、姉（仮）としては逆に俺に依存してしまうのではないかと不安だった。

食事の時は親鳥が小鳥に餌をあげるように、ご飯を俺の口に運ぼうとするし…………。

夜は頭を撫でられながら俺を抱き枕にしないと寝れないらしいし…………。

あまつさえトイレにまで心配だから、とか言っただけで一緒に入ろうとするし……。

我が妹の将来が少し不安である……。

この前は髪が伸びてきたので、散髪しようとしたのだが……

「散髪しては駄目」と木乃香に言われたので何故、と問い掛けると。

「うーちゃんとウチは一緒じゃないとあかん」

と、よく分からない理由で言いくるめられてしまった。

……俺に自由は無いらしい。

刹那……助けてくれ。

……刹那で思い出したが、俺は木乃香にまだ翼の事は伝えていない。

勿論、能力の事も。

最初は全て伝えるつもりだったのだが、ここ本山は何処に人の目があるのか分かったものじゃない。

アノ“二人”は俺達の事を24時間監視（護衛）しているかもしれないし……疑いだしたらキリがない。

……もし翼やスタンド能力を持っている事がバレてしまったら、今

の本山の様子だと何が起きるか想像がつかないしな。

関西呪術協会長の娘に翼が生えている、何て広まってしまったら……非常にマズイ事になる。

原作介入……薬味坊主のフラグをへし折るとか言ってられなくなる事態になるだろうな。

最低でも監禁、最悪だと記録が残らないように“処分”……か。

それに、俺の双子の妹なんだから……被害が木乃香にも及ぶ可能性がある。

……それだけは避けなくてはならない。

木乃香にスタンド能力はともかく……翼の事を伝えるのは刹那と同時でいいだろう、というのが現時点の見解である。

……別に、恐れている訳ではない。たとえ翼が生えていようが、拒否される事は無いと分かっている。

だが……俺は刹那とは違う。

翼があるという意味では同じだが、俺は別に烏族と人間の間から生まれたハーフじゃないしな。

言わば、“突然変異”ってやつか。

もし、拒否されてしまったら……いや、こんな事を考えるのは止めよう。

余談だが、俺は最近ミルクを大量に飲むようになった。

身体を丈夫にする為……というのが表面上の理由で、本当の理由は別にある。

若干……本当に若干なのだが、俺より木乃香のほうが大きいのだ。

……身長が。

姉より（身長の）優れた妹など存在しない……はず。

確かに、あまり運動もしなければ食事もこれっぽっちしか食べれないけど……。

妹に身長で負けてたまるかッ！

「……ってアレ？」

ふと辺りを見渡すと、いつの間にか子供部屋に移動していた。

中庭で遊んでいたはずなんだが……？

「うーちゃん、どないしたん？」

木乃香が怪訝そうな表情で俺を観察するように見ている。

「いや、中庭で遊んでたやろ……?」

嫌な汗が背筋を伝っていく。

「何言ってるの、うちちゃんがしんどい言ってる戻ってきたんやん」

木乃香は怪訝な表情のまま、俺の目をじっと見つめている。

「マジ……?」

全く記憶に無い……最近こつこついう事が多いから自分の身体が心配になる。

某有名カードゲームの主人公みたいに『もう一人の俺』が存在しているのか……?

まだ覚醒して数ヶ月しか経ってないから、身体が不安定な状態なのかもしれない。

……神様、ちゃんとしてくれよ。

「なあ、うちちゃん。おままごとせえへん?」

そう言っつて木乃香は、俺に玩具の小さな包丁を差し出して来る。

「ええけど……で、今日はどつちなん?」

木乃香が差し出した包丁を受け取りながら、俺は気怠そうに答えた。

……本心は少し楽しかったりする。

「ウチが父様役で、うーちゃんが母様役！」

木乃香は満面の笑顔を浮かべ、急ぎ足で部屋から出ていった。

「はいはい、分かったえ」

俺は怠そうに答えながら、足元に散らばっている簡単に真つ二つに割れてしまう玩具の人参やらじゃがいもやらを拾い集め、その場に座り込んだ。

玩具の野菜をキッチンとまな板の上に乗せて、後は木乃香を待つだけである。

「……はあ」

俺は小さく溜め息をついた。

……男なのに『おままごと』が好きだなんて、俺も変な性格になってしまった。

『精神は肉体に引っ張られる』か……。

……よくよく考えると恐ろしいな。

「帰ったえ〜！」

子供部屋の障子が大きな音を立てて開き、鼻の下にチヨビヒゲを付けた木乃香が部屋の中に入ってきた。

いやだから、そのチヨビヒゲやめろって言ってるだろ……。

着物を着た女の子がチヨビヒゲ付けてるって……

ホント誰だよ買い与えた奴……どうせアノ“二人”だと思っけどさ。

俺は、もう一度小さく溜め息をついた。

でも、まあ……。

「…………お帰りなさい」

楽しいから……………いいか。

第六話（後書き）

おまけ

羽「木乃香は今まで食べたパンの枚数を覚えているのか？」

香「ウチはご飯派やからパン食べたことないえ？」

羽「なん……だと……？」

第七話（前書き）

……激流に身を任せ同化する。

では、さうぞう。

第七話

燦々と輝く太陽の光が降り注ぐ中、木乃香と二人で無邪気に手鞠で遊ぶ。

覚醒してから一年が経ったが『光陰矢のごとし』という諺は本当だな、と改めて実感する。

磁石のようにピッタリとくっついて木乃香と一年間を過ごしてきたが……筆舌に尽くし難いほど大変だった。

一番の大事事件は木乃香の要望で裏山に入って落ち葉拾いをしていたら、迷子になってしまった事だろうか。

後日、あの“二人”に教えてもらったのだが、本山にいる人間を総動員して捜索隊が組まれたそうだ。

俺達がいなくなった事を関東魔法協会の仕業だと思っ人もいたらしい。俺達が見つかるのが遅れていれば戦争になっていたらしい。

救助された時に、こっぴどく父さんに怒られたのは言うまでもない。最後に泣きながら無事で良かったと呟いて、俺達二人を抱きしめてくれた時には流石にウルツときてしまった。

……自分的に一番辛かったのは、木乃香に毎晩抱きまくらされる事だろうか。

トイレに行こうとしても、ガッチリとホールドされているので漏ら

しそうになった事が多々あった。

……思い出すとキリがない。

それと相変わらず貧弱貧弱ウ！な俺の身体は、未だに肺炎気味で少し走れば息切れするが、昔と比べれば相当丈夫になったと思う。

木乃香に引っ張り回された賜物だろう。

……身長は未だに若干、負けているが。

がぶ飲みしてるんだけどなあ……ミルク。

そういえば、反復練習したお陰かどうかは分からないが……『ザ・ワールド』の停止時間が伸びた。

停止時間が伸びたと言うより、“停止する事が出来る回数”が増えたと言っべきか。

覚醒した当時は九秒しか止める事が出来なかったが、今では十秒を三回ほど停止出来るようになった。

……停止時間はその時の体調や精神状態により、かなり“ムラ”があったりする。

五秒しか止めれなかったり、十五秒も止めれたりなど……大体の目安として“十秒を三回ほど”である。

ここで重要なのが、“三十秒”時を止めれる訳ではないという事。

現時点では停止時間が十秒を越えると勝手に時が動き出し、数秒のインターバルがあつて、再び時を止める事が出来る。

言わばその数秒が『ザ・ワールド』の弱点、スキになるんだが……
関係ないか。

……十秒もあれば何だつて出来るからな。

それに……『停止時間を切り刻む』事も可能になった。

前に言っていた“省エネ”つてやつか。

十秒を五秒・五秒など、細かく分ける事が出来るようになった。

この際は、十秒を使い切るまでインターバルは必要ないし、例えば五秒間『ザ・ワールド』を使ったとしても、ある程度時間が経てば最大値まで回復する。

まあ、纏めて簡単に言つと……最高に『ハイ!』つてやつだアアア
アア!アハハハハハハハハハーツ!!

それに承太郎のように止まった時の世界に入門してくる奴なんてい
な　あ。

…… 1人いるな。

いや、アイツも入れると二人か。

もしもの話だが、戦闘になったら本物と贋作の力の差を見せ付けてやるだけだな。

もしかして死亡フラグ立てたか？……俺。

『時間停止VS時間跳躍+擬似時間停止』か……。

あつちは数秒しか時を止められないだろうが、時間跳躍が厄介だな……。

それに俺も限界があるし……。

それまでに魔力を温存できればいいが……微妙だな。

それでも『ザ・ワールド』がチートだという事には変わりはないがな。

チートって言っても反復練習した際に、あれだけ皆に心配かけたんだからこれぐらいの見返りはないとな……。

周りから見たら急に気絶したり倒れ込んだりするんだからなあ……。

……今でも心配かけてるけどな。

『キラークイーン』は最初のアレ以来、一度も使用していない。

危険すぎるからな……『ザ・ワールド』は誰にも迷惑をかけない……とは言えないけど、『キラークイーン』の能力だけは洒落にならない。

まあ焦らなくても、そのうち使う時がくるだろう……薬味坊主とか薬味坊主とか薬味坊主とかにな。

それにしても……木乃香と毎日のように手鞠で遊んでいるが、よく飽きないと思う。

……お、俺は木乃香が喜んでいるのを見るのが楽しいだけで、別に手鞠で遊ぶのが楽しい訳ではない。

「いくえー！」

木乃香の元気な声の中庭に響き渡る。

「はいな〜！」

もう一度言うが……た、楽しい訳ではないからな。

「「まるたけえびすに、おしおいけ。あねさんろっかく、たこにしき」「」

「神鳴流師範の方が来はったえ」

いつものように手鞠歌を歌いながら遊んでいると、門の方角から凜としたよく通る女性の声が響いてきた。

手鞠をつく手を止めて、木乃香とほぼ同時に首を巡らして門を見ると、そこには三人の大人と巫女服を着た女性の後ろに隠れているサイドポニーの少女が、ゆっくりと俺達に向かって歩いて来ていた。

ようやくか、と木乃香に聞こえないように小さな声で俺は独りごちた。

木乃香は奇異な眼差しで三人の大人と一人の少女を見据えていたが、直ぐにサイドポニーの少女が自分と同じ年ぐらいである事を理解すると、文字通り瞳を輝かせて少女だけを凝視していた。

一行が俺達の目の前で立ち止まる。

未だ少女は怯えるように、頭だけを出して巫女服の女性の背後に隠れている。

木乃香が先程から穴が開いてしまうのでは、と思えるほど凝視しているので怯えてしまうのも無理はない。

俺は少女の緊張を解す為、少しだけ微笑んで軽く頭を下げた。

その少女もまた、巫女服を着た女性の背後に隠れながら、それに怖ず怖ずと会釈で答える。

木乃香は少女を真剣な表情のまま、じっと見詰めている。

その熱烈な視線に気付いた少女は、女性の背後に隠れる表面積を多くしてしまった。

今はもう、顔が半分だけしか出ていない。

どうすればいいのかわからない様子で、怯える瞳で交互に視線を動かして俺達を見ている。

「……ほら、隠れてないで挨拶しなさい」

痺れを切らした巫女服の女性に促され、少女は押し出されるように俺達の前に立った。

「あ、あの……桜咲刹那と申します！よろしくお願いします！」

そう言っつて刹那は俺達に深々と頭を下げた。

それにしても原作に登場する新しい人物を見るのは久しいな。

今まで木乃香と父さんだけだったからなあ。

「やん、そんな頭下げんといて〜な〜」

「頭を上げてくれ、刹那」

木乃香と俺がそう告げると、刹那は恐る恐る頭を上げて、上目遣いで俺達の様子を窺っている。

ああ……頭を撫でたい。

木乃香が小猫なら、刹那は小犬……そんな感じがする。

「じゃあ刹那、お嬢様たちを任せましたよ」

巫女服の女性はそう言って、俺達に背を向けて他の人と並んで歩き始めた。

恐らくだが、父さんの所へ向かったのだろう。

「は、はいっ！私がお守りします！」

お守りって……言っているのか？

木乃香は良くも悪くも“天然”だから気づいてないみたいだが。

「せつちゃん、一緒に遊ぼうや」

木乃香は持っていた手鞠を刹那に差し出した。

「せつ……は、はい……？」

いきなり木乃香にそう言われて、刹那は戸惑いの表情を見せている。

「おい、木乃香……自己紹介が先だろうが、それにいきなり“せつちゃん”て……」

「あ……ゴメンな、“せつちゃん”」

木乃香は差し出していた手鞠を慌てて引っ込めて、小さく舌を出し

て恥ずかしそうに笑って刹那に謝罪の言葉を述べた。

いやだから……もういいや。

「い、いえ……」

まだ刹那はかなり緊張しているようで、表情は硬い。

ここは年長者（精神年齢）の俺がリードしてやるか……。

「俺は近衛木乃羽、こっちは愚妹の近衛木乃香。……双子なんだが、やっぱり俺たちって見分けつかなかったりするの……？」

前から気になってたんだが、俺と木乃香ってどれくらい似ているだろうな……。

父さんとアノ二人は見間違えるはずがないし、それ以外の人達とはあまり接点がなく、質問した事なんて無かった。

という訳で長年の疑問を解き明かす為、会ったばかりの刹那に質問してみた。

「は、はい。……か、かなり似ていると思います。……すみません」

そう言っただけで刹那は、今にも泣き出しそうな瞳で俺の様子を窺っている。

やっぱり似てるのか……てか緊張し過ぎだろ、まあ仕方ないか。

俺達は“任された護衛対象”であり“初めての友達”になるかもし

れないんだからな……。

チラッと真剣な表情のまま俯いている木乃香を横目で見る。

自己紹介を考えているのだろうか？

「あ、いや。怒ってないからな？」

俺は刹那を安心させる為に、慌てて両手を胸の前で振って否定した。

「なあ、うーちゃん。“ぐまい”って何の事？……お米？」

木乃香は不思議そうな表情をして首を傾げている。

突拍子もない木乃香の言葉に、俺は呆れ顔になってしまった。

真剣な表情で黙ってるから自己紹介を考えているんだと思っていたが、まさか愚妹の意味を考えていたとは……自己紹介しろよ。

「お米じゃない。まあ……気にするな」

そんな俺達のやり取りを見て、刹那の硬かった表情が柔らかくなった……ような気がする。

木乃香は未だに俯いて“ぐまい”の意味を考え込んでいる。

「もういいから……ほら、木乃香も自己紹介しろって」

いつまでも考え込んでいそうだったので、刹那に自己紹介するように木乃香を促した。

「あ、忘れとったわ……ウチの名前は近衛木乃香。このちゃんって呼んでなく、それでこっちは……え〜と、“ぐまい”のこのは姉様
！」

そう言っつて屈託のない笑顔を見せる木乃香。

「間違ってる、俺の場合は愚け……愚姉だ」

「……串？」

木乃香は小首を傾げている。

「はい、この話はもう終わり！」

このままでは自己紹介だけで日が暮れそうだ……。

木乃香は不満そうな顔をしてるが、もう付き合わん。

「俺と木乃香の事は好きに呼ん」

「姉様は“うーちゃん”、ウチは“このちゃん”って呼んでなく、
せつちゃん」

木乃香は俺の言葉を遮り、刹那にそう告げた。

「もう好きにしてくれ……」

俺は深々と溜め息をついて、その場にしゃがみ込み俯いて地面に落書きを始めた。

「拗ねんといてくなあ、うーちゃん。あと……“喋り方”」

木乃香にそう告げられ、数回肩を叩かれる。

肩を叩かれる度に自分が地面に埋まっていくような気がした。

てか、約束が違うぞ。

「木乃香と二人きりの場合のみ」

「……せつちゃんも、含む」

木乃香は口許を三日月のように歪め、黒い笑みを浮かべている。

刹那に助けを求める視線を送ると、苦笑いを浮かべて目を逸らされた。

……誰か俺に救いの手を差し延べてくれる人はいないのか。

「はいはい、……直したらいいんやろ、直したら」

俺は投げやりな調子で返事をした。

「そうそう、その調子やえ」

木乃香はご満悦の表情を浮かべて俺を見下ろしている。

俺は大きな溜め息をついて、もう一度刹那の顔を見上げた。

刹那は私たちの寸劇を見て口許を綻ばせている。

「あ……す、すみませんッ、これはお嬢様！」

刹那が私の視線に気づき、また元の硬い表情に戻ってしまった。

「いや、お嬢様なんて言わんとして……木乃羽って呼ん」

「……うーちゃん？」

木乃香の顔を見ると、ドス黒いオーラを漂わせながら、不気味な笑みを浮かべて俺を凝視している。

「はい、ごめんなさい」

一生……木乃香に勝てないだろうな。

「ほら、うーちゃん。一緒に遊ぶえ」

木乃香に手を引っ張られ、無理矢理立たされる。

「仕方ないなあ……もう」

案外、満更でもないのは二人には絶対に秘密である。

「せつちゃんからな、ハイ！」

そう言つて木乃香は柔らかな微笑みを浮かべながら、刹那に手鞠を差し出した。

木乃香に手鞠を渡された刹那は手鞠、木乃香、俺の順に忙しく視線を動かして最初は戸惑っていたが、すぐに真剣な表情になり。

「はいっ！このかお嬢様行きますえ」

「やん、お嬢様なんて言わんといてー」

刹那が投げた手鞠を取りに行こうとする木乃香。

そんな微笑ましい情景を俺は口許を綻ばせながら眺めていた。

その後、木乃香が投げた手鞠に気づかず、頭に直撃したのは誰にも言わないで下さい……木乃香様、刹那様。

第七話（後書き）

……執筆は投げ捨てるもの。

第八話（前書き）

なんてこった……。

累計PVが10万アクセス越え……。

感謝感激雨あられです。

こんな駄文小説ですが、これからもよろしく願います。

では、激変の兆候が見える第八話を……どうぞ。

第八話

あれから……刹那と出会ってから、一年が経過した。

三人とも六歳になり、本当なら小学校に登校している筈なのだが……。

家に教科書も無ければランドセルも無く、『学校？なにそれ美味しいの？』状態である。

今更、小学校に登校などしたくない俺にとっては好都合なのだが、木乃香と刹那にはちゃんと小学校に通って友達を作ったり、勉強したりして欲しい訳で……複雑な心境だ。

確か原作では、木乃香は麻帆良に引越するんだよね……。

で、刹那は剣の修業……か。

父さんが木乃香を引越させた理由がよく分からないんだよな……。

俺の予想では、関西呪術協会のイザコザに巻き込みたくなかったから、だと思っただが……。

一人娘を敵方の関東魔法協会の地域に引越させたんだから、周りから猛反対されたと思う。

それを押し切って……いや、夜逃げみたいな形か……？

しかも今回は原作と違って関西呪術協会長の娘が“双子”になっているってのが問題なんだよな……。

普通に考えれば……二人とも引越させざる何て“そうは問屋が卸さない”ってやつか。

最悪……離れ離れになるだろう。

もし片方しか麻帆良に引越し出来ないのなら、俺は迷わず木乃香を引越させろ。

本山にいてもイザゴザに巻き込まれるだけだろうし、何より“学校生活”って物を楽しんでもらいたいからな。

でも、刹那も俺もいないかもしれないんだよな……。

……あの事件さえ起きなければ、刹那は木乃香と一緒に学校に通ったりするのだろうか？

しかし、あの事件が無ければ刹那は剣の修業に励まない訳で……。

刹那に強くなって欲しい訳ではない……が、俺一人で木乃香と刹那を守るのは少々、無理があると思う。

そこいらの魔法使いには負けれないと思うが……例を挙げると『月詠』など近接戦闘を得意とする人物とは相性が悪いと思う。

……“見敵必殺”すれば関係ないが、木乃香や刹那の前で過激な事はしたくない。

だから刹那と俺の二人で木乃香を守りたいのだが……。

目の前で楽しげに遊んでいる二人が長い間、離れ離れになると思っていると心が揺らぐ。

……くぬぬ。

「いくえく、せつちゃん！」

「はい、このちゃん！」

本当に楽しそうに手鞠で遊んでいる二人を見つめながら、俺は小さく溜め息をついた。

……俺はどうするべき何だろうか。

今、俺達三人はあの“事件現場”で遊んでいる。

勿論、最初の内は警戒していたのが……一回、二回と回を重ねる事に警戒心が薄れ、逆に事件が本当に起きるのかどうか疑うようになるぐらいに、俺達が遊びに行くお馴染みの場所になっている。

川の近くで遊ぶという行動は、突発的に取った行動では無かったみたいなのだ。

もしかすると、“俺”というイレギュラーのせいで事件が起きないのかもしれないし……。

俺は今、木乃香と刹那に少し疲れたと言って木陰で休んでいる。

……心配を掛けたくないの二人には言っていないが、最近少し体調が優れない。

……熱に浮されているような感覚がする。

季節の変わり目だからだろう、と一人で思い込んでいるのだが……
本当のところは分からない。

当然、あの二人に隠し通せる筈が無く。

「このはお嬢様……本当に大丈夫なのですか？」

河原の近くに生い茂っている草むらから顔だけを出して、心配そうな表情で俺を見ている女中さんが一人。

ん……一人？

「……もう一人は、どうしたんだ？」

いつも二人セットの筈だが……？

「ああ、少々“仕事”が……」

「……成る程」

“仕事”というのは……詳しくまでは教えてくれないのだが、本山で何かイザコザがあった時の合言葉みたいな物である。

昔から俺は本山の情報を仕入れる為に、二人に聞いていたのだが、ずっとシラを切られ続けていた。

しかし、ようやく最近になって二人は本山で起きた事や関西呪術協会のイザコザを俺に隠し通せないと分かり、少しだけだが俺に教えてくれようになった。

……父さんや木乃香、刹那も知らない事である。

そっいえば最近、ようやく“二人”の名前も教えてもらえたんだっ
た。

以前は「私達は家具なので、名前なんて意味を持たない」とか何とか言っていたんだよな。

二人の名前は“御影”と“御国”というらしい。

本名かどうか分からないが……。

ロングヘアの方が“御影”。

ショートカットの方が“御国”。

で、今……目の前の草むらから顔を出し、髪の毛に大量の葉っぱをコーディネートしているのが“御影”である。

「風邪薬……持ってきましようか？」

人の心配より自分の姿を心配した方がいいと思うぞ……。

「ああ……頼む」

少しフラフラするし……好意に甘えさせてもらおう事にする。

「御意」

御影はそう言っつて、目の前の草むらから疾風のように姿を消した。

五分もしない内に水と薬を持って帰ってくるだろう。

「うーちゃん、大丈夫ー？」

遠くから刹那の元気のいい声が聞こえた。

「……大丈夫やえ〜！」

そう言っつて俺は手の平をヒラヒラと振っつてみせる。

刹那はそれに安心したのか、また木乃香と手鞠で仲良く遊び始めた。

それにしても……変わったなあ、刹那。

ふと昔の事を思い出す。

出会っつた当時はガチガチに緊張していた刹那だっつたが、時間がか経っつにつれて徐々に心を開いていっつた。

自分の事を“ウチ”と呼ぶようになっつて、堅苦しい敬語もほとんど無くなり、京都弁ですらすらと話すようになっつた。

そして最初は俺達の事を“お嬢様”と呼んでいたが、数日後には『うーちゃん』『このちゃん』と呼ぶようになっつた訳だが……。

正直に言って、俺の事を『うーちゃん』と呼ぶのは止めてもらいたい……。

身体が“ムズムズ”するんだよ……。

そういえば夜、就寝する際も一緒に寝るようになった。

……“一枚”の布団で。

一緒に寝るようになるまで色々とゴタゴタがあったのだが……まあ、いいだろう。

木乃香はいつも通り俺を抱き枕にして頭を撫でられながら、刹那は俺にひっそりと寄り添うようにして寝るようになった。

……さらに身動きが取れなくなってしまった訳だ。

狭い……本当に狭い。

それと木乃香が寝静まると頭を撫でる必要がなくなるので、何故か刹那の頭を無意識の内に撫でていたのだが……。

刹那も撫でられるのが癖になってしまったようで……木乃香に隠れて頭を撫でて下さい、と懇願するようになってしまった。

刹那曰く、俺に頭を撫でられると『ふわふわ』するらしい。

『クレイジー・D』の能力は依存性があるのか……？

木乃香といい刹那といい、大丈夫かな……この二人。

『クレイジー・D』の依存性の話は置いて、俺は刹那の頭を撫でる事に関しては何の問題も無いと思っていたのだが……少々、事件が発生した。

隠れて刹那の頭を撫でている場面を木乃香に発見されてしまったのだ。

そして……木乃香が嫉妬したのか何なのかよく分からないが、俺が刹那の頭を撫でている事に難色を示し、刹那と喧嘩になってしま

「あかんえ！うーちゃんに頭撫でてもらえるのはウチだけや！」

そう言つて木乃香は頬を膨らませながら、先程まで刹那の頭を撫でていた俺の右手を、自らの手元に引き寄せるようにぐいぐいと引っ張った。

「……引っ張るな引っ張るな」

この時、俺は木乃香に手を引っ張られながら、すぐに解決するだろうと思つていた。

何故なら嫌な言い方になるが……刹那が俺達に反抗する筈がない、

すぐに平謝りするだろうと思っていたからだった。

だが、予想外の事が起きた。

刹那が木乃香の目をじっと睨み、無言のまま俺の左手を引っ張ったのだ。

その行動を見た木乃香は、さらに俺の手を力を込めて引っ張り始め……それに呼応するかのように、刹那も俺の手を力強く引っ張り始めた。

「痛たたたたたたッ！」

あの時はマジで真っ二つにちぎれるかと思った。

「俺は一人しかいないけど、手は二つあるんだから同時に撫でたらいいだろ」と、俺は引っ張られながら最高の解決策を提示したのだが……何故か却下されてしまった。

結局その喧嘩は、うやむやのまま俺が無理矢理に鎮圧したのだが、未だに“この件”だけに関しては二人の仲が悪く、平行線を辿ったままである。

もうね、分けわからん。

……全部『クレイジー・D』のせいだ。

そう考えると俺の膝の上で寝ているコイツも中毒者……中毒犬になるのか？

そう、原作に出て来た仔犬である。

いやぁ……出会った頃が懐かしいな。

確か……いつも通りに河原で遊んでいたら。

「ゲルルルル……」

口角を吊り上げ、唸り声を上げて俺達を睨みつけている仔犬が一匹。

「う、うーちゃん……このちゃんはウチの後ろに！」

刹那は小さな竹刀を握り締めて、敵意と犬歯を剥き出している仔犬から俺達を守るように立っているが……。

今にも泣き出してしまいそうな雰囲気である。

仕方ない、俺が何とかするか。

試したい事もあったしな……。

木乃香と刹那、言わば“人間”に無意識の『クレイジーダイヤモンド』が効くのは分かったんだが……。

“動物”には効果があるのだろうか？

この疑問を解決すべく、仔犬の頭を撫でてみる事にする。

《あの時は、まだあんなに中毒性があるって知らなかったんだよ…
…畜生。》

刹那の横を通り過ぎ、仔犬の目の前で立ち止まる。

「うーちゃん危ないえ！」

「このはお嬢様!？」

二人は驚愕の声を上げているが……気にしない気にしない。

膝を曲げて腰を落とし、仔犬と目線の高さを同じにする。

「グルルルルル……」

おお……唸つとる唸つとる。

近くで見ると仔犬と言っても迫力満点だな。

勿論、このまま手を伸ばして頭を撫でる……何てそんな馬鹿な事はしない。

ならどうするかだか。

「『ザ・ワールド』、時よ止まれッ！」

俺は惜しみ無く『ザ・ワールド』を使用する。

木乃香と刹那は怯えて少し離れた所に立ってるから、俺の背中が邪魔して手の動きは見えないだろ……多分。

初めての使用相手が仔犬って……まあいいか。

ゆっくりと手を伸ばし数回、仔犬の頭を撫でてやる。

そして、仔犬の頭に手を乗せたまま『ザ・ワールド』を解除する訳だが……。

反射神経の勝負だな……。

もし効化がなければ俺の手が噛まれる事になるだろう。

本当は頭から手を離したい所なのだが……頭から手を離したら、仔犬は何が起きたのか分からないだろうし……。

もし噛もうとしてくるなら、後退しながら『ザ・ワールド』だ。

さあ……いくぞ。

「……時は動き出す」

静止していた時が、再び動き出す。

仔犬は唸り声を上げるのを止め、じっと俺の顔を見つめている。

お……効果あり、か……？

俺はもう一度、仔犬の頭を撫でてやった。

「……へっへっへっ」

すると仔犬は舌をペロツと小さく出して、尻尾を振り始めた。

「……よしよし」

また数回撫でてやると、今度は仰向けになって仔犬がお腹を見せた。

お望み通り、お腹も存分に撫でてやる。

効果あり……か。

思ってたんだが……。

……この能力、何か意味あるのか？

ふと気づけば、木乃香と刹那が俺の後ろに立っていた。

「「すごいえうーちゃん！」」

……結局そのまま懐かれてしまい、現在に至る。

今では三人と一匹で、そこいらを遊び回っている。

当時、本山に連れて帰って犬を飼いたい、と木乃香が父さんに懇願すると、渋々だが承諾してくれた。

ただし、家には上げない事が条件だった為、犬小屋が必要になったのだが……犬小屋は御影と御国が一晩で作ってくれました。

仔犬の名前は何故か木乃香が決める事になり、『マユ』と命名された。

眉毛が可愛いから『マユ』だそうなの。

うん……木乃香らしい。

命名した時に、刹那が俺の後ろでボソッと「ハチが良かった……」と言った時は吹き出しそうになったが。

うん……刹那も刹那らしいな。

ハチで、お前……。

「てか遅いな御影、そして重いぞ……マユ」

膝の上で寝息を立てているマユの頭に一度だけデコピンを食らわしてやり、優しく頭を撫でながら俺は独りごちた。

十分以上は経ったと思うが……何かあったのか……？

「このちゃんツ！」

その時だった。

何かが水の中に落ちる音がして、刹那の悲鳴にも似た声が上がったのは。

第八話（後書き）

【次話予告】

手鞠で遊んでいた木乃香と刹那は、不意な事故によって川で溺れてしまう。

木乃羽は2人の迅速な救出を目指し、一計を講じたのだが。

次話「瞬間、翼、重ねて」

この次も、サービス、サービスウ！

………すみませんでした。

第九話（前書き）

……燃え尽きました。

では、ごじごじ。

第九話

「このちゃんッ！」

刹那の悲鳴のような声が耳に届き、慌てて二人の姿を探す。

そこには川下へ流されていく木乃香と、必死に木乃香の後を追い掛けている刹那の姿があった。

川で溺れている木乃香の近くに手鞠がぶかぶかと浮いている。

手鞠で遊んでいて、何かの拍子に手鞠が川に入ってしまったのだらう。

それを取りに行つて……クソッ！

俺はマユを膝の上から乱暴に押し退けて、跳ね上がるように立ち上がって走り出した。

急に押し退けられ、マユが不満そうな顔をしていたような気がするが今はどうでもいい。

全速力で二人の後を追い掛ける、が……思うように差が縮まらない。

「……あ……っ」

目の前の景色が白くぼやけて見える。

急に立ち上がったせいで貧血を起こしたのか……。

「…………刹那！止まれッ！」

走れながら必死に声を張り上げる。

原作では川で溺れた時に大人が助けしてくれた、と木乃香が言っていた筈だ。

だが、今はその助けしてくれる大人はいない可能性がある。

…………俺の風邪薬を取りに行ってるからな。

せめて木乃香一人なら抱えて川を泳ぎ切れるかもしれないが二人は無理だ。

「刹那ッ！」

俺はもう一度、大きな声を張り上げた。

しかし、木乃香の後を追いついて掛けている刹那の耳には届いていないよ
うで。

「お嬢様、今助けますからッ！」

そうやって刹那は躊躇なく川に入っていく。

「刹那！」

…………聞こえていないのか、マズイ…………非常にマズイぞ。

刹那はどうにか藻掻きながら木乃香の元まで辿りついたが、そこで力尽きてしまったようだ。木乃香と同じように溺れてしまっている。

……『ザ・ワールド』を使うか？

だが今日は体調不良だ……十秒を三回も止めれる自信はない。

もっと近づいてから使うべきか……それとも。

「躊躇ってる場合かよ……『ザ・ワールド』時よ止まれッ！」

世界の時間が停止する。

俺は静止した時の中で全速力で駆け抜けた。

いつの間にか履いていた草履が脱げていて、砂利が足袋に食い込んでいるが、意に介さず走り続ける。

全速力で走り続け、ようやく二人に追いついてきた。

「……もうちょっとだ」

『ザ・ワールド』は重力を無視できる。

自分の意志で自由に動き回れる宇宙空間みたいな物だ。

このまま水面走っていけば。

速度を緩めず川に入り、水面を蹴って二人に向かって突き進んでいると、非情にも止まっていた時が再び動き出した。

「ッ!？」

地面に足が届かずに、水中に顔が沈んだ。

こんなに深くなっていたのか!?

「……………ぷはッ!」

パニックになりかけたが慌てて水面に顔を出し、息を大きく吸い込んだ。

『ザ・ワールド』が終わった時の事を考えてなかった。

時が動き出すだけじゃなくて重力も戻るんだよな……………俺は馬鹿か。

時を止めれる時間は七秒……………いや六秒か?

あまり『ザ・ワールド』はアテにできないな……………。

「木乃ッ……………ケホッ!」

獣が獲物に襲い掛かるかのように川の水が押し寄せ、水を大量に飲んでしまう。

目と鼻の先では二人が溺れながら川下へ流されていく。

「待ってるッ!」『ザ・ワールド』ッ!……………あ、しまっ

そうか、まだタイムラグが。

着物が邪魔で思うように泳ぐ事が出来ず、また顔が水中に沈んでしまった。

ヤバ……俺まで溺れ。

「……………」

最後の力を振り絞って水面に顔を出す。

……このままだと冗談抜きで俺まで溺れてしまつかもしれない。

早く二人を助けなくては。

「はあ、はあ……『ザ・ワールド』ッ！」

停止した川の水を掻き分け、水面に立つ。

「木乃香ッ！刹那ッ！」

ガクガクと痙攣している脚に力を込め、水面を蹴って走り出す。

ようやく二人に追いついて助け出そうとしたのも束の間、時が再び動き出し、俺はまた水中に沈んだ。

「ぶはッ……木乃香、刹那！大丈夫か！？」

木乃香と刹那に声を掛けるが返事がない。

二人とも息はしているが、顔を青ざめていてグッタリとしている。

早く助けないと……。

「すぐに助けるからなッ！」

二人を両脇に抱え、陸を目指して泳ぎ出そうとするが脚に上手く力が入らずにどんどん川下に流されていく。

体力的にも魔力的にも限界が近い。

このままだと三人とも……。

「ヤバい、これは……マジで」

……時を止める事が出来るのは、次がラストだ。

時が止まっている間に二人を抱えて川を泳ぎ切る事は不可能に近いだろう。

……仕方ない、最終手段だ。

「『ザ・ワールド』……時よ止まれッ！」

世界の時が停止し、川の流れがピタリと止まる。

「なりふり構ってられるかッ！」

俺は二人を両脇に抱えたまま、水面から脱出する為、未だ誰にも見せた事のない純白の翼を広げた。

翼を大きく羽ばたかせ、川から脱出する。

「ケホツ……ケホツ」

飲み込んでしまった大量の水を吐き出しそうになりながら、河原へ向かって飛行する。

『ザ・ワールド』中は重力が無い為、二人の重さは感じない……が、俺の体力、そして魔力が残っていない。

いつもなら魔力切れで倒れるか、気絶している頃なのだが……今、俺が気を失う訳にはいかない。

「無駄無駄無駄あ……ケホツ」

再び時が動き出しても水中に落ちないようにある程度高度を保ち、死力を振り絞って翼を羽ばたかせる。

「あれ……マユどこいった？」

ふと気付けば、先程まで一緒にいた筈のマユの姿がどこにも見当たらなかった。

「どこに行っただ……アイツ」

……今は二人を助ける事が最優先か。

必死に翼を羽ばたかせ続け、ようやく河原に辿り着き、ゆっくりと高度を落とそうとしたその瞬間、時が動き出した。

「…………ツ！」

両脇に抱えていた二人が重力を取り戻す。

今の俺の状態では二人どころか一人でさえ抱えて飛ぶ事なんて出来ないだろう。

「…………oh」

俺は二人を抱えたまま、地面に向かって真っ逆さまに落ちていく。

『クレイジー・D』で傷なら治せるが……当たり所が悪ければ最悪の予感が頭を過ぎる。

頼みの『ザ・ワールド』も使えない。

体力も魔力も残っていない。

八方塞がり…………か。

俺は咄嗟に翼を羽ばたかせ、身体を仰向けにして羽がクッションになるように二人を翼で包んでやった。

頭は守らないとな…………俺の頭は守られていないけど。

後は　　衝撃に耐えるだけか。

ああ、痛いだろうなあ…………後で二人ともお説教だな。

そして。

「ッ！」

思い切り地面に背中を叩き付けられ、激痛が全身を駆け巡る。

「あ……痛……い」

口の中に鉄の味が広がっていく。

あまりの激痛に意識が飛びそうになるが、俺が気絶していいのは二人を『クレイジー・D』治療してからだ。

最後の力を振り絞って、とっくに活動限界を越えている身体を起こした。

「……よかった」

二人とも気を失ってはいるが、息はしているし傷も腕や脚にかすり傷程度だった。

「もとに……もどす」

即座に二人の身体に触れて、治療する。

「ふう……あ」

二人が無事だということが分かると、張り詰めていた糸が切れ、意識が遠退き始めた。

遠くから犬の鳴き声と大勢の人間の足音が聞こえる。

無事だという事だけでも伝えなくてはと思い、ゆっくりと顔を上げた。

真っ先に駆け寄って来ようとするマユと……後は御影と御国……黒服を来た男の人も何人か……女中さんも……あ、父さん。

駆け寄って来たマユが俺の顔をぺろぺろと舐める。

「はは……いたって……マユ」

マユが顔を舐める度に傷が染みるような感覚がする。

もしかして……マユ、大人の人を呼んできてくれたのか……まさかな。

でも、これで良かった……。

ちゃんと『クレイジー・D』で治療出来ないかもしれないし……後は父さんに任せ
あれ？

マロは真っ先に駆け寄ってきてくれたが……後に続いて誰も近寄ってこない。

俺と一定の距離を保ってその場に立ち止まっている。

俺が知らない人はともかく、御影も、御国……父さんまでも。

もしかしたら、無意識の内に『ザ・ワールド』を使ってしまったのかと思っただが、未だに俺の顔をマユは健気に舐め続けているからそれはない。

心なしか、周りの人の顔が引き攣っているように見える。

はは……もしかして、そんなに酷い怪我をしてるのか……俺。

何故か身体に痛みは感じないけど、血まみれにはなっていないと思うんだけどな……

誰一人として言葉を発しない。

……おかしい、何故だ？

父さんに俺は嫌われてるかもしれないけど……木乃香と刹那がびしょ濡れになって倒れているんだ……どんな障害物も蹴散らして近寄ってくるはずなのに……何故？

「木乃羽……」

父さんの小さな掠れた声が、長い沈黙を打ち破る。

しかし俺の名前を呼んだだけで、その場を動かこうともしない。

「……とうさ……木乃香と刹那を……見てやって……くれないか……?」

俺は鉄の味が広がっている口を動かさず、しゃがれた声で言葉を発し

た。

しかし、誰も動こうとしなかった。

……何故？

その時、一枚の純白の羽が顔のすぐ近くを通過して地面にひらひらと落ちていった。

羽？

……羽。

あ。

慌てて広げたままだった翼を背中にしまい込む。

だが、そんな行動に意味など無かった。

未だに俺の瞳は紅く、髪は白いままだろう。

しまった……やってしまった。

……処分されるか“モルモット”になるかのどちらか、か……。

こんなボロボロの状態じゃ抵抗も何も出来ないだろうし……。

「ぐ……い、た……たた……」

激痛に耐え、全身に力を込めてよろめきながら立ち上がる。

驚愕の表情を浮かべたまま、硬直している父さんの目をじっと見つめる。

自分の娘に翼が生えていたんだ……驚いて当然だろう。

だけど今は。

「父さん……俺の事より……このかと、せつな……を」

全身に力が入らなくなり、前のめりに地面に倒れ込んだ。

意識が遠のいていく。

騒がしいマユの鳴き声と、砂利を踏み締め駆け寄ってくる大勢の足音を聞きながら、俺の意識は完全に途切れた。

第九話（後書き）

今回は筆者の精神状態が不安定だった為、誤字脱字があるかもしれませんが、ご了承ください。

第十話（前書き）

……京都過去編だけで十話、それもまだ終わりが見えない……。

いつになったら原作が始まるのだろうか……（笑）

では、今回は少し長めですが……どうぞ。

第十話

「あ…………う…………」

ズズキと響く頭痛と、聞き覚えのない大人達の声で俺は意識を取り戻した。

「ここは…………？」

重たい瞼をうつすらと開き、辺りの様子を窺う。

最初は視界がぼやけ、周りがよく見えなかったが徐々に視界を取り戻していった。

そこそこな広さの部屋の中に大人が十人ほどいるようで、俺を囲んで座っている。

関西呪術協会の重鎮の集まりだろうか…………見える限りでは、ほとんどの人がスーツに身を包み、いかにも“私は偉いんだぞ”と言いたげな感じだった。

和服を着た父さんの姿もあったが大人達の会話には参加せず、頭を垂れて無言のまま鎮座している。

俺は木製の椅子に座らされているようで、拘束はされていないようだった。

目が覚めたら手錠と足枷で拘束され、牢屋にでも閉じ込められてるかと思っていたのだが…………一応、関西呪術協会長の娘だから流石に

それは無かったか。

未だ夢を見ているような感覚のまま、周りの人間に気づかれないう、今度は自分の身体を確認する。

強烈な虚脱感を感じてはいるが、これは魔力切れのせいだろう。

どうやら身体の傷は治療してくれたみたいだが、魔力までは補充し
てくれなかったみたいだな。

『ザ・ワールド』は……使えそうだがアテにしないほうが良いだろ
う。

「ですから であるべきで」

「何を な事を 今すぐに」

部屋の中では様々な論争が繰り広げられている。

周りの人達は俺が意識を取り戻した事に、まだ気づいてないようだ
った。

とりあえずこのまま様子を見る事にした俺は、再び瞼を閉じて会話を
を聴く事に集中し始めた。

……。

「ふざけた 話を聞く為に」

「関西呪術協会の に関わる」

「それがどうした　　長の娘　　」

話を聞いている内にだんだんと分かってきたのだが、どうやら関西呪術協会は“穏健派”と“過激派”の真つ二つに分かれたらしい。

“穏健派”は様子を見るべき。

そして、然るべき“対処”を。

反対に“過激派”は、関西呪術協会長の娘が化け物だったという事実が広まれば、大騒ぎになる。

“処分” or “幽閉”すべき　と。

さらに過激派の中でも意見が二つに分かれたようで、今すぐにも存在を抹消したい処分派と……俺を“有効利用”しようとする派閥に分かれたようだった。

“有効利用”とは勿論、翼の事である。

人間の身で翼が生えているのだ、研究すれば膠着状態が続いていた西と東の戦いに終止符を打つことが出来るかもしれない。

これが俺を有効利用しようとしている派閥の主張だった。

穏健派と過激派に分かれたと言っても、ほぼ三つ巴状態になって論争が繰り広げられている。

どうやら幸いな事にあの“現場”に居合わせた人物の記憶は、父さ

んと側近の御影と御国以外、全て改竄したようだった。

本山にいる人物で翼の事を知っているのは、この部屋にいる全員と御影と御国だけ……か。

……やれるか？

いや、無理だな……流石に。

重鎮まで上り詰めたのだから、無能では無いだろう。

それに今は魔力切れだ、もう少し時間が経たなくては……。

……最終手段だけだな。

「だから、処分すべき」

「馬鹿な事を……利用できる物」

「長の娘だぞ」

ふざけた内容の論争が未だに繰り返されている。

このままでは埒が明かれないと思った俺は瞼を開き……いかにも今、目が覚めたというように辺りをキョロキョロと見渡してみせた。

俺が起きた事に周りの人間が気づいたようで、今まで騒がしいぐらゐに論争が繰り返されていた部屋の中が嘘のように静まり返る。

「おやおや……ようやくお目覚めですか、これはお嬢様？」

長い沈黙が続くかと思いきや、一人の眼鏡を掛けた男が憂鬱そうに立ち上がって言葉を発した。

「……………」

俺はその男をただ睨むだけで、返答などしなかった。

いや、返答などしたくなかった。

……………この男から何か薄気味悪いモノを感じたから。

「では、お嬢様……………早速ですが、翼を見せてはいただけませんか？」

その男の発言によって、静まり返っていた筈の部屋の中が再びざわめき始めた。

「……………」

俺は眉根を寄せ、敵意を剥き出しにして男を睨みつける。

何をふざけた事を抜かしやがるんだコイツ……………消すぞ。

「一度、現物を拝見させていただいた方が“お話”が早く済むと思うのですが？……………詠春様はどうお考えで？」

男は俺の視線を完全に無視し、横の上座に座っている父さんを見下ろした。

「……………」

父さんは一度、男の顔を見上げ……そして俺を見て。

「木乃羽……お願いします」

父さんは憑かれたような悲壮な表情を浮かべ、小さく消えてしまい
そんな声で呟いた。

な……父さん、冗談だろ……？

俺は思わず男を睨みつけるのを止めて、上座に鎮座している父さん
を凝視する。

目が合ったが、父さんはすぐ視線を下に落としてしまった。

仕方がない……分かったよ父さん。

……何か事情があるのだろう。

俺はゆっくりと椅子から立ち上がり、一度、周囲の大人達の顔を見
渡してから純白の翼を広げてみせた。

「……おお」

「これは……」

大人達は目を据えて、じっと俺の翼を見つめている。

父さんは……まだ俯いたままか。

俺は翼を大人達に見せている事に嫌気がさし、背中に翼をしまい込んだ。

「そ、その髪と瞳の色は……」

下座に胡座をかいて座っていた初老の男が俺に質問してきた。

しばらくすれば元に戻る、素っ気なくそう答えて俺は椅子にドックリと座った。

その男の何気ない質問が口火になり、俺への質問会のようなものが始まった。

「いつ翼に気づいたのか」

とか。

「翼はどうやって動かしているのか」

とか。

「痛覚・触覚などはあるのか」

などなど。

質問される事に俺は不機嫌になっていき、返答もかなり適当になっていった

こともあるうちに、一人の男が「何故、お嬢様は翼が生えているのかね？」なんてぶっ飛んだ質問をしてきやがった。

何故、俺は翼が生えているのかだって？

「お前は今まで食ったパンの枚数をおぼえているか？」って聞いているみたいなものだぞ。

まさか自分は転生者で自ら望んで翼を生やしてもらった、なんて言えるはずもなく。

俺は「知らない」と、素っ気なく返答しておいた。

……そして、俺への質問会が落ち着いてきた所で、再び本人を目の前にして論争が始まった。

非常に価値がある、とか……世界に名を残せるかも、とか……どうでもいい話を黙って聞いていたのだが。

「ふむ……では双子の妹である木乃香お嬢様も研究の視野に入れな」といけませんな」

何かを思案するかのように、腕を組んで短髪の男がそう言った。

なに　木乃香を、だと……？

自分はどうなるうが構わない……が、木乃香にまで手を出そうとする腐ったコイツらに完全に“プツン”してしまった俺は声を荒げて立ち上がるうとしたのだが。

「ふざけるなッ！黙って聞いていればよくもぬけぬけと……」

今まで沈黙していた父さんが怒声を響かせながら立ち上がった。

「例え、関西呪術協会長の娘さんでもこれだけは譲れませんねえ……」

ニヤニヤと笑みを浮かべ、立ち上がった父さんの顔を見ながら短髪の男が言った。

「人間の身で翼が生えているなど……おかしいと思いませんか長？……研究してみない事には！」

別の男が父さんに醜悪な笑みを見せながらそう言った。

「もし研究が成功すれば関東魔法協会に打ち勝つ新たな策になるかもしれませんぞ？」

援護射撃を受け、調子づいた短髪の男がそう言って立ち上がった。

「貴様ら……どこまで腐ってるんだッ！」

醜悪な笑みを浮かべている数人の大人達を睨みつけながら、父さんが怒鳴り声を上げる。

「そつだそつだッ！誰が研究なんてさせるか」

他の穏健派も立ち上がり、激しい口調で抗議の声を上げ始めた。

ああ……ヤバいな……こりゃ。

今にも殴り合いが始まってもおかしくない、一触即発の雰囲気である。

「ほう、では娘さんが“処分”されてもいい……そうおっしゃるのですね？」

父さんの横にいた男が眼鏡のブリッジを中指で押し上げ、芝居がかった調子で言った。

「そんな事、絶対にさせる訳ないだろう！」

その発言に父さんは完全に頭にキてしまったようで、激しい怒りの形相を浮かべて眼鏡の男に詰め寄った。

「では、研究する事に同意」

そう言って眼鏡の男はスーツの胸ポケットをまさぐった。

恐らく、誓約書か何かを出そうとしたのだろう。

その男の視線が、父さんから自らの胸ポケットに移った瞬間。

父さんが男の顔面を思い切り、殴り飛ばしていた。

「貴様らの汚い手が、私の娘達に触れる事など想像しかねる！」

父さんの怒鳴り声が部屋中に響き渡る。

そして……父さんの一発が引き金となり、穏健派對過激派の掴み合い殴り合いの騒ぎになっている。

「……あちゃー」

これはこの場に俺がいたらマズイな……。

そう思い、椅子から立ち上がってその場から退散しようとしたその時。

「なッ　　!？」

突然、後ろから誰かに抱き抱えられた。

慌てて身体を捻って逃れようとしたのだが。

「お嬢様、私です。御国ですよ」

ふと、顔を見上げると御国の顔が目の前にあった。

「あ……えっ？」

思わず俺は素っ頓狂な声を上げてしまう。

まさか待機してたのか……？

「さ、このはお嬢様。こちらへ」

訳も分からぬまま、御国に抱き抱えられ俺は部屋から脱出しようとしたのだが、入口に立っていた御影に呼び止められた。

「このはお嬢様、ご安心して下さい。……御国、頼みましたよ、私は詠春を護衛しますから」

そう言つて御影はニツコリと笑い、今も殴り合いが続いている部屋の中へと突っ込んでいく。

「では行きますよ、舌を噛まないようにして下さいね」

御国はそう言つと、俺を抱えて有り得ない速さで走り始めた。

身体が上下に激しく揺れる。

いや、舌を噛むつて冗談だと思つていたが……マジでこれは噛む可能性がががが。

「……誰がお嬢様を研究素材にするだつてええええコラアアアアアアッ！」

遠くから御影のドスの利いた声が聞こえてきた。

何か恐ろしい物の片鱗を味わつたような気がするんだが……。

「ギアを上げますよお嬢様」

そう言つて御国は床をさらに強く蹴つて、スピードを上げた。

おお、揺れる揺れる。

そして。

「このはお嬢様、到着しましたよ」

御国は俺を優しく床に下ろして真っ白な歯を見せて笑い、ガッツポーズを作ってみせた。

どうやら子供部屋の前まで運んでくれたらしい。

「このはお嬢様、私は“仕事”に戻りますね」

そう言っつて御国はウインクすると、俺に背を向ける。

「待ってくれ！」

俺は踵を返して駆け出していこうとする御国の背中に声を掛けた。

「……………どうしました？」

御国は振り返っつて俺を不思議そうな顔で見つめている。

「翼が生えている俺を……………化け物だと思わないのか？」

御影と御国は記憶は改竄されていない筈。

……………鳥族の子供でもない人間の背中に翼が生えているんだ……………普通の人なら。

「なあに言っつてるんですか、あの時はあまりの神々しさに動けませんでした……………」

お嬢様は、お嬢様ですよ。化け物なんかじゃありません」

御国はとんでもない、とでも言いたげに首を横に振ってみせた。
み、御国……。

その言葉を聞いて、思わず涙腺が緩んで泣いてしまいそうに。

「持つてるカメラで写真を撮りたかったですよ」

御国は頭を掻きながら、照れ臭そうに笑っている。

「はあ……」

俺は首を横に振って溜め息をついた。

……その一言、余計だな。

せっかく感動してたのに……コイツは。

「分かったから、さっさと行け」

俺は御国にとっと“仕事”に向かうよう促した。

……感動した俺が馬鹿だった。

「また今度、写真撮らせて下さいね」

御国はそう言って、俺に背を向けて疾風のような速さで廊下を駆けていった。

「…………誰が撮らせるかよ」

でも、ありがとうな…………御国。

「ちとと…………」

気を取り直して子供部屋の襖を開けると木乃香が、じっと床に座っていて俺と目が合った。

「…………」
どうやら俺の帰りをずっと待っていたようだ。

もう夜も遅いから寝てればいい…………って、そうか一人じゃ寝れないんだったな。

「うーちゃん！」

木乃香は俺の姿を見た途端、跳ね上がるように立ち上がり、駆け寄ってきた。

「木乃香、大丈夫だった　　うわっ！」

勢いよく抱き着いてきた木乃香を、俺は踏鞆を踏みながら辛うじて抱き留めた。

「ごめんな、うーちゃん…………ほんまにごめんな…………ウチな」

木乃香の大きな瞳が涙で潤んでいく。

俺は木乃香の頭を優しく撫でながら、黙って話を聞いてやった。

「手鞠が川に落ちてな……せつちゃんは危ない言ったんやけど、川が浅いの知つとつたから大丈夫やと思つて……」

木乃香の肩が細かく震えている。

瞳からは抑え切れぬ涙が零れ始めた。

「そしたら、急に深うなつてな……それで……それで」

木乃香は俯き加減で顔を伏せながら、言葉を振り絞るように続けた。床に敷いてある絨毯に、涙の雫で真ん丸の染みを作りながら。

「もういいえ、木乃香。ウチは怒ってないから」

俺は木乃香を優しく抱き締めてやり、言葉を遮った。

「……ありがとう、姉様」

木乃香がギュッと俺を抱きしめ返してくる。

この娘は本当に世話が焼けるな……。

……あと姉様言つな。

木乃香が落ち着くまで抱きしめてやり、あの後、どうなったのかを聞こうとしたのだが。

「……せつちゃんは？」

俺は子供部屋に二人ともいるものだと思っていたのだが、部屋の中に刹那の姿は見当たらなかった。

「ウチも探したんやけど、せつちゃん……どこにもおらんかってん……」

ああ……アイツの事だから自分のせいだと思い込んで、何処かの部屋に引きこもっているのだろう。

今から本山の部屋を全て見回る訳にもいかない、それに今……部屋の外に出るのは得策ではないだろう。

……小さな暴動が起こってるからな。

部屋の中にいれば、もし闖入者が現れても『ザ・ワールド』からの『キラークイーン』で対処出来る。

まあ、明日になれば……ひょっこり姿を現す……のか？

「明日また会えるやろ……ほら、もう夜遅いんやから寝るえ」

木乃香の手を取り、子供部屋の中心に敷いてある布団まで引っ張っていく。

木乃香はまだ何か言いたげな表情だったが、渋々ついてきてくれた。

先に自分が布団に入り、木乃香が入り込めるスペースを設けて招き入れると、もそもそと布団の中に潜り込んできた。

「おやすみ、木乃香」

先程と同じように木乃香の頭を優しく撫でてやる。

「……おやすみ、うーちゃん」

木乃香は俺の背中に腕を回し、顔を胸にうずめて静かに瞳を閉じた。

「うーちゃんは……どこにも行かんといてな……」

ぼつりと独り言のように、俺の胸の中で木乃香が呟いた。

「……ああ」

それを聞いた俺は、木乃香が安心するように何度も、何度も頭を撫でてやる。

木乃香の頭を撫でながら、俺も少しだけ眠りについた。

「ん……ふわぁ……」

目が覚める。

子供部屋の中はまだ薄暗い、まだ朝日も昇っていないのだろう。

……本山は落ち着いたのだろうか。

あれだけ派手に殴り合っていたのだ、ただでは済まないだろう。

それに、このままでは木乃香まで巻き込む事になる可能性がある。

父さんと話を付けなくてはいけない。

最悪、俺が本山から離れなくなってもいい……だから、木乃香を
。

すやすやと寝息を立てている木乃香の顔を眺める。

木乃香の目元には小さな涙の雫があった。

それを親指の腹で、そっと拭ってやる。

木乃香を起こさないように、優しく俺を抱きしめている手を解いて
立ち上がった。

少しズレてしまった布団を掛け直してやる。

「大丈夫、心配するな……俺がなんとかしてやるよ」

眠っている木乃香に一言掛けてから、俺は静かに子供部屋から出た。

春になったというのに吐く息はまだ白く、外は肌寒かった。

昨日の騒ぎが嘘のように、本山は静寂に包まれている。

父さんの部屋を目指し、素足のまま冷え切った廊下を一人で歩く。

「……さむ」

廊下を通り抜けていく風が冷たい。

さて、どうするか……。

刹那と木乃香を連れて、麻帆良に亡命するか……？

でもなあ、すぐに見付かるだろうし……。

そんな事を考えながら歩いていると何かにぶつかってしまい、よるめきながら数歩後退した。

「あ……すみません」

謝りながらその人の顔を見上げる。

どうやら女性だったようで、腰の辺りまで伸びた黒い髪を少しだけ靡かせながら、微笑を浮かべて俺を見下ろしている。

俺は軽く頭を下げて、その女性の横を通り過ぎた。

……どこかで見たとような気がするんだが。

「良い子は寝てる時間や、このお嬢様」

ボンヤリと考え事をしながら歩いていると、背後から声を掛けられ

る。

あ……眼鏡を掛けてないから分からなかったが思い出した
崎千草か！ 天ヶ

「むぐつ!?!」

慌てて振り向こうとした瞬間、口元を薬品の臭いがする布で塞がれ、
額に何か札のような物を貼られた。

「おやすみ、このはお嬢様」

視界が歪んでいき、天ヶ崎千草の声が遠くに聞こえる。

「『ザ……ワー……』」

すぐに『ザ・ワールド』を使おうとしたが、身体に力が入らなくな
り、何も考えられな……意識が。

「悪いなあ、このはお嬢様。でも安心しなはれ……酷い事はしまへ
んから」

俺の意識は、そこでプツプツりと途絶えた。

第十話（後書き）

こんなに京都過去編が長くなるとは……。

京都過去編……恐ろしい子！

第十一話（前書き）

今回は、かなり短いです。

では……どしどし。

第十一話

Side 天ヶ崎千草

「……………楽勝やな」

鬱蒼と生い茂る木々の中を走り抜けながら、そう独りごちた。

今、ウチは今回の作戦を立案してきた仲間達との合流地点へ向かっている。

勿論、今回の作戦で必要不可欠な鍵……………これはお嬢様は肩に担いでる。

連れて来る時に薬と札を使うたから、ちょっとやそつとでは起きへんやろ。

……………ホンマは転移札や式紙使ってお嬢様を運びたいとこやけど、もう少し本山から離れた場所で使わんと“探知”されるかもしれんし、そこまでお嬢様は重たないから大丈夫や。

このかお嬢様も誘か……………連れて来よかなと思っただけど、これはお嬢様の魔力量で充分足りるやろ。

……………リヨウメンスクナの召喚に。

それに、このはお嬢様しか連れて来なかった理由は他にもあるしな。

もし、二人とも連れて来たら関西呪術協会は総動員でお嬢様を血眼

になつて捜す事になるやろう……。

あらゆる手段を駆使して、お嬢様が見つかるまで。

そうなつてしまつたら、ウチらは直ぐに見付かつてしまう。

片方だけやと人数を捜索隊と護衛隊にバラけさせれるし、実際に本拠地の本山で誘拐されとるんや……もしかしたら、このかお嬢様まで誘拐されるかもしれん。

……そう思ってくれたら万々歳や。

良くて半々、最低でも全体の三分の一は護衛にあたりよるやろ。

本山がモタモタしとる間に、ウチは目標を達成しとるやろうしな。

加えて、このはお嬢様を連れてきたのにも理由はある。

今回、手を組む事になつた仲間が急に指定してきたんや。

可能であれば近衛木乃羽を連れてこい、と。

まあ確かに……このはお嬢様は、このかお嬢様より魔力量が多いみたいやけど……。

二人とも魔力量が多過ぎて、細かいとこまでウチにはよお分からん。

何でか分からんけど……このはお嬢様、今現在の魔力量は少なくなつてゐるみたいやな……。

……それでも尋常じゃない量やけど。

そやけど、何でこのはお嬢様を指定してきたんやろか……？

殆ど魔力量も変わらへんし、特に何も無いと思うんやけどな……。

まあ、ええわ……作戦は上手くいったんや……まさかこんな上手くいくとは思ってなかったけどな。

作戦は、ウチ以外のメンバーが本山で何度か騒ぎを起こしてる間に、ウチがこのはお嬢様を連れてくるって作戦やったんやけど……。

何や本山がバタバタしとったから、悠々と連れてこれたわ。

「ハツ……ハツ……ハツ」

真つ暗闇の中を、月明かりだけを頼りにして走り抜ける。

本当ならライトや何かを使って周りを明るくして行きたい所やけど、そんな事をしてしまったらお嬢様を誘拐した犯人がココにおると関西呪術協会に教えるハメになるからなあ……。

何しろココは本山の裏手にある山の中や……お札使ってお嬢様の膨大な魔力を封印して、探知されんようにはしてるけど……用心して損は無いやろ。

それにしても軽いなあ……このはお嬢様。

ちらりと横目で肩に担いでいるこのはお嬢様を一瞥する。

……ご飯、ちゃんと食べとるんか？

お人形さんみたいな軽さやで、ホンマに。
身体が弱いつて聞いてたけど……こんな細くて軽かったら、ちょっとでもコケてしまたら、骨折れてしまうんじゃないか？

……。

何を心配しとるんやウチは……。

……誘拐しとるんや、この娘を。

子供を誘拐するのは心が痛むけど、ウチは……両親の仇をとるためなら何だってする。

でも……ウチが使うのはお嬢様の膨大な魔力だけや。

このはお嬢様を傷付けるつもりは毛頭ないんやけど……アイツらは分からん。

ウチはお嬢様の魔力を、アイツらはお嬢様を使うって事になっとる。

役割は……、

ウチは内部に侵入、そしてお嬢様の奪取。

アイツらは潜伏中のアジトの確保と陽動。

利害が一致したから手え組んだけど……イマイチ向こうが何を企んどのんかウチには分からん。

……余計な詮索はしたくないし、ウチもされたくはない。

まあ、これはお嬢様は子供やし手荒には扱わんと思っけどな……。

金か……地位か、分からんへんけど……人質にでも使って“ゆるする”つもりなんやるか？

ウチがこのはお嬢様の魔力を使うまでは、アイツらは何も事は起こさへんって約束してくれたから安心やけど……。

関西呪術協会長の娘に手を出す、という事がどういう意味を持つんか分かってない阿呆では無いと思うんやけどなあ……。

何かを要求する時……関西呪術協会とコンタクトを取った時点で逆探知されて終わりやろ。

何を他人の事まで心配しとるんや、ウチは……ウチは両親の仇がとれば後はどうでもええ。

とにかく、関西呪術協会を相手に弓を引いたという事実は揺るがない。

……もう後には引かれへん、目標まで突き進むのみや。

ようやく……ようやく仇をとれる。

……待っててな父さん、母さん。

Side End

第十一話（後書き）

この話を投稿するか投稿しないかで悩んだ挙げ句、投稿する事になりました。

……今でも少し迷っております（笑）

第十二話（前書き）

今回は少し重たい話になります……。

賛否両論あると思いますが……どうぞ。

第十二話

「……………」

いつの間にか失っていた意識を取り戻し、重たい瞼を開くと目映い蛍光灯の光が目を直撃した。

少し顔を顰めて、数回瞬きをする。

「……」

……見馴れた天井。

どうやら自分は、本山の子供部屋に寝かされていたらしい。

……何故？

「何で俺……………寝てるんだ？」

浮かび上がった疑問を口にして、あれこれ考えていると。

「……………木乃羽！目が覚めましたかッ！？」

父さんの騒がしい声が聞こえた。

首を巡らせると、枕元に心配そうな表情を浮かべた父さんが居て、父さんの背後には御影と御国の姿もあった。

「父……………さん？」

また『ザ・ワールド』の練習中に倒れてしまったのだろうか……？
それにしても様子が少しおかしいような気が……。

俺の記憶も曖昧だし……。

「良かった……本当に良かった……」

そう言って父さんは心底安心したように、安堵の溜め息をついてみせた。

「……何かあったの？」

こんなに父さんが心配するほど、俺は大きな事件を起こしてしまったのだろうか？

未だに朦朧としている頭の中を掻き回し、何があったのか思い出そうとしたのだが、満足のいく答えは浮かんでこなかった。

「……覚えて、いないのですか」

そう呟いてから父さんは、俺が意識を失った間に何があったのかを分かりやすく説明してくれた。

いつものように仲良し三人組……俺と木乃香と刹那で、川の近くで遊んでいたらしいのだが……何かがあって三人とも川で溺れてしまったそうだ。

三人とも無事に助けられたのが不幸中の幸いだったらしい。

しかし俺だけは体調を崩してしまい高熱を出して、一週間弱は寝込んでいたらしく……そして現在に至る。

川イベントが起きたのか……。

「父さん……木乃香と刹那は？」

本当ならこんな質問、する必要はない。

目が覚めた時、既に二人の姿が無かった為……父さんに質問しなくても答えは分かっていた。

だが、それでも一縷の望みを掛けたかった……もしかしたら。

「……そ、その事なのですが」

父さんは言葉を詰まらせ、静かに頭を垂れた。

父さんの反応を見る限り、二人はもう本山にいないのだろう。

……最悪だ。

俺は何をやったんだよ……『ザ・ワールド』があるんだ、未然に防げただろ……。

それより、何で俺は川で溺れた事を覚えていないんだ……？

「こ、木乃香は……事情があつて……」

父さんは幾度か躊躇った後、言葉を搾り出すようにして話し始めた。

「……………麻帆良という所に引越しました」

見ている自分が辛くなるほど、苦しげな表情で父さんは言った。

あゝあ、置いてけぼりになっちまったよ……………俺。

溜め息をつきながら、俺は無言で父さんの話を聞いた。

「刹那君は……………剣の稽古が忙しくなって、少し本山を離れています

……………」

「……………」

俺は何も言えなかった。

もし俺に原作知識が無く、ただの子供なら「何故」とか「どうして」とか言って喚き散らして騒ぎ立てるのだろう。

だが俺は転生者で、元から離れ離れになる可能性があると覚悟はしていたし……………今の父さんの気持ちを考えると何も言えなかった。

「……………り、理由は聞かないのですか!？」

俺が何も言わずに黙っていると、突然父さんが叫んだ。

顔がくしゃくしゃに歪んでいる。

俺にとってこれ程感情をあらわにした父さんを見るのは初めてだった。

「……事情があつたのなら仕方がないし、剣の稽古に励む事は良い事だろ？俺は一人ぼっちになっちゃったけどさ……」

少し苦勞して、俺は弱々しい笑みを浮かべてみせた。

正直に言えば寂しいし、二人に会いたい。

でも、二度と会えない訳じゃないだろ……多分。

俺の予想だと、中学一、二年生ぐらいで麻帆良に行けると思つ。

それまで、一人だけど我慢すればいいさ。

「……こ、木乃羽」

父さんはポロポロと涙を零しながら、俺を見つめている。

いい年して泣くなよ父さん……俺まで悲しくなってくるだろ。

「……お嬢様は一人じゃありません。私も御国も……詠春様もいます」

御影が遠慮がちに声を掛けてきた。

「そ、そうですね……これはお嬢様」

続いて御国が心配げに声を掛けてくる。

そんなに俺は辛そうな顔をしているのだろうか？

……してるんだろっな。

守るって約束したんだけどなあ……畜生。

気づけば子供部屋は沈鬱な雰囲気にもまれていた。

……落ち込んでいても仕方ない、か。

「さてと……散歩でもしてくるかな！」

そんな空気を打破する為、わざと大きな声を出して俺は布団から起き上がった。

このまま布団で寝ていても気持ちが悪く落ち込むだけだし、父さんたちの辛そうな顔も見たくない。

そう思い、両手で地面を押しして元気良く立ち上がろうとした……のだが。

「あ、あれ……おかしいな」

お尻が地面から浮いただけで、立ち上がる事が出来なかった。

もう一度、起き上がろうとしたのだが先程と同じように、尻が地面から浮いただけだった。

「はは……恥ずかしいな」

立ち上がる、ただそれだけの動作をモタモタしている自分が恥ずか

しくなり、頭を掻きながら思わずそう呟いた。

脚がピクリとも動かない、一週間も寝ていたからだろうか？

苦笑を浮かべながら俺は父さんたちの方を振り向いた。

今の滑稽な自分を見て、硬くなっていた表情が少しでも柔らかくなっていれば……そんな事を思いながら。

だが、振り向いた先にあったのは先程よりも辛そうな表情の三人だった。

「見〜た〜な〜！なんちゃって……」

先刻よりも重くなった空気が明るくなるように、俺は少し戯けて見せた。

しかし思ったよりもウケは悪く、三人とも押し黙ったままだった。

腫れ物を触るように自分を取り囲む父さん達の妙な空気に、俺は首を傾げた。

「どうしたんだよ……三人とも」

俺は少し不安になって三人に声を掛けた。

……まだ何かあるのか？

「木乃羽……落ち着いて聞いて下さい」

今までとは違った声の調子で父さんが言った。

瞬間的に俺はある種の緊張を感じた。

「治らない訳ではないのですが……」

父さんはそう言いながら、俺の目を一瞥して、すぐに視線を下に落とした。

「身体に悪いバイ菌が入ってしまい……」

父さんは唇をきつく噛み締め、握り締めている拳を震わせている。

一言一言噛み締めるように父さんが言うのを俺は黙って聞いていた。

しばらくの間、沈黙が続き……そして。

「木乃羽の脚が……動かなくなってしまったのです」

父さんは、しばらく言葉を探していたが、やっと口を開いてそう言った。

「……………は？」

俺は思いも寄らなかった父さんの言葉を聞いて、全身の力が一瞬にして抜けるのを感じた。

ただ茫然と、その場に硬直する事しか出来なかった。

目の前で必死に何かを伝えようとしている父さんの言葉が、耳を滑り落ちていく。

御影と御国も心配げに声を掛けてきたが、呆然としていた俺の耳には届かなかった。

脚が……………動かないだつて？

……………下半身不随？

……………俺が？

……………何で？

最愛の妹と離れ離れになり、妹の……………そして俺の唯一無二の親友とも会えなくなり、あまつさえ自分は下半身不随に……………。

「こ、木乃羽……………リハビリをすれば治る可能性が……………」

そう言いながら父さんは、手を伸ばしながら近寄ってきた。

抱き締めようとしたのか……………頭を撫でようとしたのか分からない。

とにかく、近寄ってきた父さんの手に……いや、近寄ってくる“人間”に何かを感じて俺は。

「近寄るなッ！」

気づけば俺は、父さんの手を思い切り払い除けていた。

声を荒げた後、はっとして自分を落ち着かせる。

俺は何をやってる……相手は父さんだぞ？

父さんは伸ばしていた手を引っ込めて、何か言いたそうに俺を見たが、黙ったままだった。

「あ、ごめ」

「良いんです木乃羽……急にこんな事を言われて、落ち着いていられる筈がないのですから……」

直ぐに謝ろうとしたのだが、父さんに言葉を遮られてしまった。

「御影、……アレを持ってきて下さい」

「……はい」

父さんにそう言われ、御影はスツと立ち上がると足早に子供部屋から出ていき……数分もしない内に部屋に戻ってきた。

その時、御影が持ってきた物は何処にでもありそうな車椅子だった。

「木乃羽、これからは車椅子で生活する事に」

今まで自分の脚が動かなくなった……なんて半信半疑で話を聞いていたが、こうやって車椅子を持って来られると……その事実を受け入れるしかなかった。

「ですが、二度と歩けなくなった訳では」

父さんの言葉が右から左へ、耳の中を通り抜けていく。

「リハビリをすれば」

あゝあ、転生した先でこんな事になるなんてなあ……。

「木乃羽？」

そういえば転生する前に、神様が何か言ってたような気が……。

「木！」

段々と視界が暗転していき、そこで意識が途絶えた。

第十二話（後書き）

様々な謎は、いずれ徐々に解決されていく……と思います。

さあ……頑張らないと。

第十三話（前書き）

最後の余談は本当に、“余談”です。

では……ごんげん。

第十三話

「……………はあ」

俺は誰もいない本山の中庭を、縁側から眺めながら溜め息をついた。もう夜も遅く、真っ暗闇の空には下弦の月が静かに浮かんでいる。

…………… 本当に木乃香と刹那には悪い事をしてしまった。

俺があの子を引き裂いた、と言っても過言ではない筈だ。

突発的に起こった事故ならともかく、俺はあの川で木乃香と刹那が溺れてしまう事を知っていた。

それに、俺は力を持たないただの子供ではない。

『ザ・ワールド』も翼もある。

助ける手段は幾らでもあった筈なのだ。

にもかかわらず俺は二人を助ける事も出来ず、一緒になって溺れ、記憶も無くし……………この“ザマ”だ。

俺は動かなくなった自分の脚を一瞥し、視線を中庭に戻す。

この中庭で三人揃って仲良く遊ぶ事はもう無いのだろう、そう思うと胸が締め付けられるように痛んだ。

……木乃香は今頃どうしているだろうか？

俺の事を『うーちゃん』と親しく呼んでくれる木乃香。

いつも俺に撫でられながらじゃないと寝れない、と偉そうに言っていた木乃香。

その木乃香が今、単身で麻帆良に引越したのだ。

ちゃんと食事は摂っているだろうか？

新しい友達は出来たのだろうか？

学校で虐められたりしていないだろうか？

一人でちゃんと寝れているだろうか？

……心配で心配で堪らない。

至極当然、刹那の事も心配だ。

川で溺れた事を自分の責任だと思い込んで、身も心も削りながら剣の稽古に明け暮れているのだろう。

それにあの刹那の事だ……もし、俺の足が動かなくなった事を知っているのなら、それも自分の責任だと思い込んでいる筈だ。

本当に、二人には悪い事をした……。

俺はもう一度深い溜め息をついて、真っ黒な闇が広がる虚空を見上

げた。

「お嬢様、お身体に障りますので……そろそろお部屋に」

「ああ……分かった」

後ろから心配げに声を掛けてきた御影の言葉を遮って、俺は慣れない車椅子で移動し始める。

「あ、私が」

「いや、いい」

俺は御影が何かを言い出す前に、その言葉を遮る。

御影には悪いが、早く車椅子に慣れなくてはいけない。

……これからは“コレ”が俺の足になるのだから。

キィキィと金属が軋む音を響かせる車椅子で、俺も御影も無言で子供部屋へと向かう。

御影や御国、父さんにも迷惑を掛けてばかりだな、俺は……。

父さんに足が動かなくなつたと宣告され、気を失った俺が再び目を覚ましたのは先程の事である。

意識を取り戻し、少し落ち着いたところでこれからの事を父さんから説明を受けた。

そして色々な説明を受けている内に突然、白衣を着た男が部屋に入り込んできたと思えば、血液検査を行い……数種類の薬を俺に渡して去っていった。

血液検査は病気の経過を見るため、これからも定期的に続けるそう
だ。

いつになっても“注射”というモノは慣れないな。

……採血される時、思わず顔を背けてしまった。

渡された薬は虚弱体質を改善する為のビタミン剤や足の痛み止めらしく……朝昼晩、食事後に毎日欠かさず飲まなければならぬそうだ。

大小異なる様々な形の薬を目の前に並べられた時は、思わずウンザリしてしまったが……自分の身体の事なのだから仕方がない。

そして父さんの説明が全て終わり次第、さっそく俺はリハビリを始める事にした。

リハビリと言っても足が全く動かない為、歩行訓練ではなく指先を動かす練習からだった。

まずは足の指でビー玉を掴むリハビリを始めたのだが、たった一つ掴むのに数分掛かってしまう自分に苛立った。

そして気づけば夜中になっていて、外の空気が吸いたいと少し無理を言っただけは部屋を出ていった。

部屋を出る際に自分で車椅子に座る事が出来ない為、その場にいた御影に車椅子に座らしてもらわなければいけなかったのだが……。

御影に抱き抱えられ、車椅子に座らせてもらった時は、かなり恥ずかしかった。

これからはトイレや着替え、入浴なども手伝ってもらわないといけない、そう思うと軽い鬱になりそうだ……。

……玩具にされるだろうな。

……鬱だ。

子供部屋に戻った俺は御影に手伝ってもらい、布団に横になった。

「……おやすみ」

俺は小さな声で呟いて、瞼を閉じて寝ようとしたのだが。

「……何で“いる”のぞ」

再び目を開き、子供部屋の入口で静かに本を読んでいる御影を凝視する。

「……？」

御影は何がいけないのか分からない様子で、読んでいた本を閉じて太股の上に置き、こっちを見ている。

「いや、だから……」

御影はいつの間にか、子供部屋には無い筈のパイプ椅子まで持ってきていて、かなり用意周到だった。

「夜、お嬢様がトイレに行きたくなったらどうするんですか」

開き直るかのように御影はそう言って、再び本を読み始める。

「それに……いえ、何でもありません」

御影は何か言おうとしたが、途中で口を噤んでしまった。

「それに……何だよ」

俺は少し気になったので、御影に質問したのだが……

「……お化けが来るかもしれないよ？『こんな時間まで起きている悪い子はいね〜か』って」

「……もういいよ」

上手にあしらわれてしまった。

“お化け” ってのは…… 闖入者の事か？

関西呪術協会に喧嘩を売る奴なんて中々いないだろ……それに、
『 』
本山の守備力は世界一『イイイイイ』じゃないのかよ。

……フラグか、これ。

『やったか！？』 やってない。

……みたいな。

馬鹿げた事を考えるのをやめて、見慣れた天井をボンヤリと見上げる。

子供部屋の中は月明かりが入ってきている為、真っ暗とまではいかないが、それでも薄暗い。

俺には部屋の入口に座っている御影の姿がボンヤリとしか見えない。

……にもかかわらず御影は悠々と本を読んでいる。

「……………目、悪くするぞ」

「子供の頃、夜目が効くように訓練しましたので大丈夫ですよ」

……………“訓練”ねえ。

……………そういう問題ではないんだが。

そういえば、御影と御国の過去や父さんの側近になるまでの経緯を俺は知らない。

今度聞いてみよう……………そう思いながら瞼を閉じた俺は、ゆっくりと眠りに落ちていった。

そして、あれから数年が経過した。

必死にリハビリを続けた結果……ようやく、ある程度の歩行は可能になった。

足先を動かす事も出来なかった頃と比較すれば、大躍進と言えるだろう。

俺のリハビリの為に設置された手摺りを両手で掴み、蹠跟めきながらだが自分が歩いている姿を父さんに見せた時は、それはもう大変な事になった。

いきなり父さん大泣きし始めて……いや、思い出すのはやめよう。

……自分もあの時ばかりは、感極まって泣いてしまったからな。

歩けるようになったと言っても、今は数分間よちよち歩くのが限界で、車椅子はまだまだ手放せない。

もしかしたら“車椅子”と一生付き合っていく事になるかもしれないが、気長にリハビリを続けていこうと思う。

そして相変わらずだが、大好物の牛乳は欠かさず毎日飲んでる。

ただでさえ少なかった運動量が更に少なくなった訳で、少しでも身体を丈夫にする為に飲んでるのだが……本当は木乃香に身長が負けていたから飲み始めたんだよな。

……今はもう背比べも出来ないけどな。

確か、原作スタート時には刹那より身長が大きくなるんだったよな
……木乃香って。

再会した時に身長が負けてそうでかなり心配なので、牛乳をがぶ飲みする毎日が続いている。

続けていると言えば……薬や血液検査もしっかり続けている。

初めの頃は『億劫』の一言に尽きたが、“慣れ”というモノは恐ろしいと改めて実感させられた。

今では嫌いだった注射にも慣れ、薬の苦味も気にならなくなった。

病気の経過は良好らしく、最近は酷かった喘息も少なくなった。

少しずつだが、身体も頑丈になってきている……のかもしれない。

そういえば、特筆する点では無いとは思うが……気づけば本山が女性だらけになっていた。

な……何を言っているのか分からねーと思うが、俺も何が起きたのか分からない。

現在、本山にいる男性は父さんと俺だけである。

……俺は、男だからな。

昔は少人数ではあったが、男性もちらほらいたと思うのだが……父

さんの趣味なのだろうか？

もしそうであるなら少し幻滅である。

あ……それと、非常に言いづらく……自分で言うのも何だと思うのだが……。

……俺の父さんに対する反抗期（？）が始まったような気がする。

別に父さんの事が嫌いな訳ではない。

嫌いな訳ではないのだが……何と云うか、近寄られるのが嫌というか、触られるのが嫌というか……。

……“嫌い”というより“怖い”の感情に近いのかもしれない。

とどのつまり、なぜ父さんの事を嫌っているのか自分自身でもよく分からないのである。

……心が男性で、身体が女性だから何かしらの異常をきたしているのかもしれない。

これのせいで、父さんとの関係がさらにギクシャクしてしまった訳で……。

早急に改善策を見出さなくてはならない。

俺が関西呪術協会、及び本山から麻帆良に移る為には父さんの協力が必要不可欠である。

父さんとは友好的関係を保ちたいのだが……実の父親に対してこんな事を考えている時点で間違っている……か。

とにかく、改善が必要である。

後は……『ザ・ワールド』の反復練習は欠かさずに続けている。

最近では気を失ったりする事は少なくなったが、停止時間の成長は芳しくない。

一朝一夕で魔力量は増える訳ではないから……。これもあの二人を守る為だ、これからも気長に頑張っていこうと思う。

俺には力が必要だ、二人を守る為の力が。

もし数年後、麻帆良に行くことが出来れば……誰かに魔法を師事してもらうつもりである。

“誰か”と言っても一人しかいないのだが……。

こちらにも提供出来るモノは多いので、『Win-Win』の関係になれると思う。

……真つ先に教えてもらいたいのは、認識障害や瞬間移動か。

認識障害は、翼。

瞬間移動は、『ザ・ワールド』。

……魔法が使えるようになれば、俺も刹那の足手まといにはならずに済むと思う。

今のままでは……。

……足が自由に動かなくなった、というのはかなり痛手だからなあ。今……木乃香と刹那がいなくなってしまった本山の生活の中で、俺の数少ない楽しみと言えば、マユと戯れたり……隠れて行っている飛行練習だろうか。

ある程度で歩行が出来るようになったとはいえ、自由に動けなくなったのは非常にストレスが溜まる。

だが、翼を広げれば自由自在に部屋の中を飛び回る事が出来て、良いストレス発散になった。

……一度、はしゃぎ過ぎて御国と御影に見つかりそうになった事はあったが。

あの時は『ザ・ワールド』を使い、押し入れの中に隠れて難を逃れた。

……あの時は本当に危なかった。

翼が生えてるなんて本山で知れ渡ったら、二度と木乃香と刹那の二人に会えなくなっちまう。

そういえば大事な事を忘れていた……随分前からだが、俺は木乃香と文通をするようになった。

毎日のように送られてくる手紙を、俺が顔を綻ばせながら読んでい
る事は誰も知らない……等。

……木乃香に足が動かなくなった事は伝えていない。

伝えたら、すっ飛んできそうだから……木乃香は。

父さんも本山で療養している、としか木乃香に伝えていなかったみ
たいだった。

それでも木乃香は俺の身体の事が心配なようで……病気は良くなっ
たのか、とか……身体を壊さないように、とか手紙の最後に書いて
くれていた。

……早く会いたい。

……会って頭を撫でてやりたい。

木乃香はいつも通り元気そうで何よりなのだが……心配なのが刹那
と全く連絡が取れていない事か。

父さんや御影たちに聞いても『山に籠って修行しているので、連絡
が取れない』としか教えてくれなかった。

今の時代に山籠もりって……とツッコミを入れたかったのだが、黙
っておいた。

麻帆良で再び会った時に豹変してないか少し心配である。

川で溺れてしまっただけで自分の責任だと思い込み、好きだった

筈の木乃香の元から離れて剣の修行を始めたのだ。

それに俺の足の事までも背負い込んでいるとしたのなら……。

……早く再開するのが先決だろう。

だが俺には刹那を探したり、麻帆良に行く為の“足”が無い……色んな意味で。

頼むから正常のままできてくれよ……刹那。

……月詠みたいになっていたらどうしようかな。

後、数年もすれば中学生になる年齢だ……。

もし父さんが麻帆良に行かしてくれないなら……父さんや御影たちには悪いが、強行手段を使って麻帆良に行くつもりである。

それまで待っていてくれよ……木乃香、刹那。

余談だが、自分の能力について分かった事を纏めてこの日記に書いておく。

今まで殆どの場合『ザ・ワールド』しか能力を使用した事が無かったが、木乃香と刹那が本山からいなくなり……人目に触れる事が少なくなった為、能力の複数使用が可能になった為、判明したことが複数あったので書き記しておく。

まずは『ザ・ワールド』中の『キラークイーン』である。

判明した事、その一。

『ザ・ワールド』中は物体に触れて『キラークイーン』の能力を使用しても爆発せず、時が動き出すと同時に爆発する。

その二。

本来ならば『キラークイーン』の能力は連続使用は不可能だが、『ザ・ワールド』中ならば連続使用が可能な事が判明。

ただし原作通り爆弾に変えられるのは一つまでなので、“スイッチ”を押し『爆発した』という結果を残してから再び別の物体に触れる事になる。

なので、一気に色々なモノに触れて同時に爆発させる事は不可能である。

『その二』の方法が可能なのは任意起爆型だけで、接触起爆型は適用されない。

次は『ザ・ワールド』中の『クレイジー・D』で判明した事を纏めておく。

その一。

『ザ・ワールド』中に『クレイジー・D』を使用しても、壊れた物体は元通りに戻らず、時が動き出すと同時に直っていく。

(負傷した生物などは検証出来ないが、恐らくだが上記と同じだと思われる)

ただし例外があり、俺が“その物体に触れている”場合は壊れた物体が修復していく事が判明した。

なので、破片を手に握ったり触れたりしていれば……壊れた物体を引き寄せたり、自分自身が引き寄せられたりする事が判明。

最後に、今回判明した重要な事を書いておく。

バラバラにした物体の破片を爆弾に変え、『クレイジー・D』で元通りに戻すと……触れていなかった部分が混じった筈の物体を爆発させる事が可能だった。

これが物体ではなく、人間ならば……。

爪や髪の毛など、ちょっととしたパーツを爆弾に変え……対象者の身体に、元に戻す事が可能なら……相手は自分が爆弾に変化してしまった事に、絶対に気づかないだろう。

そしてこれに『ザ・ワールド』が加われば……。

恐ろしいぞ……この能力。

今回、判明した事はこれぐらいだろうか。

また何か新しい点が判明すれば、このように日記に纏めておく事にする。

第十三話（後書き）

もうすぐGWですね……。

はい、仕事が忙しくなり更新がストップすると思います。

出来るだけの努力はしたいと思うのですが……どうなる事やら。

第十四話（前書き）

NOSよ、私は帰ってrY

久しぶりの更新です。

では……久しぶり。

第十四話

……木乃香、刹那と離れ離れになってから数年が経過した。

本当なら俺は『中学一年生』になっている筈の年齢なのだが……中学校はおろか小学校に通った事も無ければ、家の外にすら出た事もない。

……完全に『箱入り娘』状態である。

外に出た事も無いのだから、幽閉されていると言っても過言ではないかもしれない。

どうせ車椅子では家の前のアノ長い階段を降りれないだろうし、一度も外に出たいと父さんに言った事は無い……が、父さんは俺を麻帆良に引っ越しさせるつもりはないのだろうか？

俺は一生、このまま飼育殺し……いや、父さんに限ってそんな事は……。

父さんが俺を麻帆良に行かしてくれると信じて……いや、思い込んで数年前からコツコツと勉強もしているのだが……。

正直に言って、いくら転生者で原作知識を有していると言えど、十一年以上勉強も何もせずに過ごし、いきなり中学校の範囲が出来るかと言われれば……少々不安である。

流石に足し算や掛け算、アルファベットなどを忘れた訳ではないが……復習しておいて損は無い。

備えあれば憂いなし、というやつだ。

そうして俺は御国と御影に勉強したいという旨を伝えたのだが……
その時の御国と御影の反応は面白かった。

焦っている時の某猫型ロボットのようになり、何処からともなく漢字ドリルや算数の教科書などを大量に取り出して、机の上に並べてくれたっけ。

もしかすると、二人は俺が勉強したいと言い出すのを待っていたのかもしれない。

だが俺は、復習がてら中学校の範囲をやり直すつもりしかなかった。
なので俺が勉強するのは中学校の範囲だけでいい事を二人に伝えると、有り得ないとも言いたげな顔で固まっていたよな。

確かに……見た目は子供で小学校に通った事も無い人間が『中学校の範囲だけでいい』何て言い出すのだから、驚くのも無理はない。

数日後、言われた通りに中学校で使用する教科書を持ってきてくれたのだが……二人とも納得しかねるといった様子だった。

そんな二人を気にせずに、俺は黙々と勉強した結果……百点とまではいかないが……九十点以上は確実に取れるようになった。

まあ……転生前にちゃんと習った範囲なのだから、これぐらい出来ないとは逆に恥ずかしいよな。

勉強の件はこれでいいとして……次は足の件だが、根気強くりハビリを続けた事で、走るなどの無茶な行為は出来ないが……手摺りや杖などの補助無しで、歩行は可能になった。

……数十分が限界だが。

あまり進歩が無いように見えるが、トイレや着替えを手伝ってもらわなくてもいいようになったので、俺にとってはかなりの進歩である。

だが……数年間リハビリを続けてきてこの調子なのだから、車椅子は一生手放せないだろう。

……相変わらず処方される薬は毎日飲んでいるが、ほぼ日課になっていた血液検査も数年前から無くなってしまったからな。

父さんに理由を聞いても言葉を濁して真相を教えてくれない。

多分だが、医者が“これ以上の進展は望めない”と判断したのだろう。

だが……諦めるつもりは毛頭ない、これからもリハビリは続けるつもりである。

だが……。

魔法を使えば俺の足は治るのだろうか？

最近、そんな無粋な事を考えてしまう事が多々あった。

俺が川で溺れて高熱を出した時、父さんは俺に魔法を使わなかったのだろうか？

何で父さんは俺を……。

何故……。

考えても仕方のない繰り言が、頭の中をグルグルと回り続けている。

……次の事を日記に書こう。

周知の事実だが、俺は男だ。

男なのだが……着付けを習得した。

理由は御影と御国が俺を着替えさせる際、まるで着せ替え人形のようにして着物を着せる事に、いい加減嫌気が差したからである。

木乃香は『楽チンちゃん』とか何とか言っていたような気がするが、もう我慢出来なかった。

俺を着替えさせる時の手付きは何か嫌らしいし……二人の息は荒いし……ニヤニヤしてるし……百害あって一利なしだったからな。

……以前からずっと俺は二人に着付けを覚えてくれと頼んでいたのだが、あれやこれやと理由を付けて教えてくれなかった。

だが、ようやく最近になって観念したようで……教えてくれるようになり、着付けをマスターしたのだ……男なのに。

着付けを習得し、これで落ち着いて着替える事が出来ると思ったのも束の間、今度は二人が俺の着替えを覗くようになったのだから困ったものである。

着物に着替えている際、ふと振り向けば閉まっていた筈の襖が少し開いているのだ。

アイツら絶対に覗いてやがる……。

訴えたら勝てるよな……コレ。

……書いていたらムシヤクシヤしてきた。

……もうこの話を書くのは止めよう。

……次は良かった事でも書くか。

ああ、そうだ俺は　。

『射法は、弓を射ずして骨を射ること最も肝要なり』

『心を総体の中央に置き、而して弓手三分の二弦を推し、妻手三分の一弓を引き、而して心を納む是れ和合なり』

『然る後胸の中筋に従い、宜しく左右に分かる如くこれを離つべし』

『書に曰く鉄石相剋して火の出ずること急なり』

『即ち金体白色、西半月の位なり』

射法訓を頭の中で反芻し、心を鎮める。

無心になり、引き分けた弦を自然に離す。

離すのではなく、離されるのでもない。

“自然”に離され、弦に番えられていた矢は吸い込まれるように直径36cmの的に向かって飛んでいき 的の中心に突き刺さる。

放たれた矢が的に中る音が、射場の張り詰めた空気を打ち破るかのように響き渡る。

体の芯に響くこの音が堪らなく気持ち良い。

今回の射は調子が良く、結果は皆中（放った矢が全て中る事）だった。

キチンと残心を取り、退場口から敷居を跨いで静かに退場する。

場外には驚愕の表情を浮かべて硬直している御影と御国の姿があった。

「どつした……二人とも」

いつもは弓道場を貸し切りにして一人で素引や巻藁、射の稽古に励んでいる……が、たまたま暇そうにしていた二人を弓道場に連れて

きたのだが……ぼかんと口を開けたまま呆けている。

手拭いで顔の汗を拭きながら、静かに弓を置く。

「……………おい、どした？」

二人は不思議な物でも見るような目で俺を凝視したまま硬直している。

そういえば、二人に俺の射を見せた事は一度も無かったな……。

少し邪魔苦しい胸当てを外しながら、ゆっくりと車椅子に座る。

最初の頃は違和感たつぷりだったが、今では装着する事に慣れてしまった胸当てを近くの棚に置く。

まさか生きてる間に胸当てを付ける事になるうとは夢にも思わなかったな。

……………それよか今は“コレ”が鬱陶しい。

視線を胸当てを置いた棚から自らの胸に移す。

そこにあつた物は、男だった俺にとって有り得ない物。

重さで肩凝りが酷くなり、衣擦れを起こす物。

弓を射るのに邪魔になるので、わざわざサラシをキツキツに巻いて無理矢理小さくしている物。

そう……何故か分からないが“胸”が無駄に大きくなってしまったのだ。

同じ年齢で比較出来る対象が周りにいない為、基準が分からないが……多分、大きい方……だと思う。

……どうしてこうなった。

……牛乳か、犯人は牛乳なのか。

身長も昔に比べれば大きくなったし、身体も丈夫になった事は感謝している……が、“コレ”は望んでないぞ……牛乳よ。

そんな事を考えながら、俺は未だ硬直している二人に車椅子で近づいた。

弓道場に車椅子を持ち込むのは心苦しいが、キチンと車輪は拭いているし、床を傷付けないように心掛けているから許してくれ……父さん。

「おい……どうしたんだよ」

俺はずっと硬直したままの二人が少し心配になり、再び声を掛けた。

「い、いえ……まさか、ここまで……」

御影が俺と矢が突き刺さったばかりの的を、交互に見ながら言った。

依然として御国は口を大きく開けたまま石像のように硬直している。

二人が驚くのも仕方のない事だろう。

この“ネギまの世界”で弓道を始めたのはリハビリが上手いきき、補助無しで立てるようになってからなのだから。

それに二人から見れば俺は、誰に教えてもらおう訳でもなく……こうまで射が上手くなったように見えている筈だ。

あまつさえ、俺みたいな貧弱な子供が弓を引く事が出来ている時点で驚愕に値するのだろう。

前々から父さんや御影達には弓道を始めた、とは伝えておいたのだが……まさかここまで出来るとは思っていなかったのだろうな。

そして二人の硬直が完全に解けた後、色々と質問攻めに合いながら弓道場を後にした。

この件以来……俺はやっぱり一人で練習するべきだなと思い直したのだった。

何故、急に弓道を始めたかと言うと……弓道は転生前の俺の趣味だったからだ。

そして転生前の俺の数少ない特技でもあった。

妹がよく俺が入部していた弓道部に見学にきてたよな……。

ちなみに剣道も齧る程度にやっていたのだが……今はもう意味が無い。

……転生してからも弓道と剣道は続けよう思っていた。

運良く本山には剣道場と弓道場がある事が分かり、もう少し大人になつて弓力の弱い弓を引けるぐらいの力が付いてきて、病弱な身体が丈夫になれば弓道や剣道を始めようと思っていたのだが……。

まさか……足が動かなくなるとは予想もしていなかった。

刹那と一緒に剣道の稽古に励むのを楽しみにしていただけに……かなり残念だ。

この足では二度と出来ないだろう……剣道型ぐらいは出来るかもしれないが。

剣道は出来なくなつてしまったが、転生前に胸を張って一番の特技と言えた弓道だけは、せめて出来るようにとり八ビリを必死に続け、補助無しで立てるようにはなつたが……それでも弓を引くのは辛い。

弓を引いている時、ただ立っているように見えるが……丹田に力を込め、大殿筋を軽く締め、重心を少し前にして身体を支えなくてはならない。

この動作が俺にとっては非常に辛いもので……疲労が溜まり、キチンと立てなくなつてくると……『ザ・ワールド』を使って重力無効にして弓を射っているのだが……。

結局は魔力を大量に使用し、同時に体力も削つているので悪循環である。

だが『ザ・ワールド』中の矢の飛び方は何度も見ても面白い。

離れた矢は的を目掛けて一直線に、高速で飛んでいくのだが……的に命中する直前にピタリとその動きを止め、再び時が動き出すと思い出したかのように矢が動力を取り戻し、的に突き刺さるのだ。

この一連の矢の動作を一言で表すなら『快感』である。

的に中る中らないにかかわらず、何度見てもウツトリしてしまう。

話は変わるが、俺の弓の腕前は……コツコツと練習を続けたおかげで、某赤い外套を着た男のように『百発百中』とまではいかないが、かなりの確率で的に中るようにはなった。

弓道を再び始めた本当の目的は、木乃香や刹那を守る為……。

『キラークイーン』の能力を使用するのに弓道は相性が良いからだ。

足が動かなくなり、機動力が無くなった今……幾ら『ザ・ワールド』が有ると言っても時間停止中に車椅子などで移動出来る距離に限界がある。

翼を使えば高速で移動も可能だが……翼を『使えば』の話である。

翼を使って移動して、時間停止中に再び翼を仕舞い込んでも髪の毛と瞳の色が戻らない。

周りに人がいれば『あなた誰？』状態になってしまっただろう。

よって翼をそう易々と使う事は出来ない。

なので弓矢に頼る事になるのだが、この“ネギマ”の世界では魔法が存在し、魔法使いから見れば弓矢など何の威力も持たないただの玩具に見えるかもしれない。

だが、その貧弱な矢は『キラークイーン』の能力を使う事によって、文字通り『必殺』の矢に化ける。

遠距離攻撃が可能な弓道と『キラークイーン』の合わせ技、接触起爆型の矢と任意起爆型の矢を使い分ける戦法は俺にとって主力になると思う……のだが、ここで幾つかの問題が浮上してくる。

一つは弓の全長が長く『携帯性が悪い』という点である。

刹那のように剣道が得意で、木刀や刀を竹刀袋か何かに入れて持ち歩く事が出来れば良いのだが……弓の全長は短くても7尺3寸ぐらい……まあ2メートル以上はあるのだから、持ち歩くのにかなり不便である。

更に、ずっと弓の弦を張っておく訳にはいかないので、弦を外して弓袋に収納する事になるのだが……弓の弦を張るのに幾許かの時間が必要になる事。

おまけに矢が無ければ何も出来ない。

以上の点が問題になってくるのだが……解決策が見当たらない。

今のところ仮契約カードに服装として弓と矢筒を無理矢理登録するか、アーティファクトで弓が手に入るまで、なりふり構わず契約しまくるぐらいしか思い付いていない。

最初の案はともかく、次点の案は本当に最終手段でしか使いたくない。

何か良い解決策は無いだらうか……。

そういえば、弓道を始め出した頃は弓道場に置いてあったお古の弓や矢を使わしてもらっていたのだが、冗談のつもりで父さんに竹弓や矢が欲しいと言ってみたら、次の日に宅急便で新品の竹弓や矢が届いた事にかなり驚いたのは記憶に新しい事である。

……総額が幾らしたのか聞いてないが、恐ろしい値段になってる筈だ。

父さんには本当に感謝してもしきれないのだが……誕生日や特別な事があった訳でもないのに、何十万もする筈の物をポンと買ってくれるのは……少し問題があると思う。

俺が転生者だから良かったものの、これで心が子供だったらマトモな大人になってないだろ……。

家の外に出て遊び回ったり、学校に通う事が出来ないから、せめて願い事はすべて叶えてあげたいと思っているのだから？

まあ、いいか……考えても仕方ない。

いただける物は有り難くいただいておこう。

「今日は……これぐらいにするか」

そう言っただけ俺は、パタンと音を立てて日記帳を閉じ、鍵の掛ける事

が出来る引き出しに日記帳を閉まった。

俺は小さく欠伸をしながら、机の電気を消した。

すると子供部屋の中は一瞬で真っ暗になり、暗闇の中をノロノロと車椅子で進む。

サイドブレーキをかけ、転げ落ちないように慎重に車椅子から降りて布団に横になった。

「ふあ、ねむ……明日も頑張るか」

もう一度小さな欠伸をして、俺は瞳を閉じた。

明日も忙しくなるだろう。

弓道に『ザ・ワールド』……リハビリには……料理を始めたんだよな、俺。

料理の腕は転生前から妹と交代で朝食などを作っていたので下手ではない。

勿論、料理を始めた理由もちゃんとする。

『クレイジー・D』の能力を使いたくなったからである。

料理を作り、少しだけ味見をして気にくわなければ『元に戻して』再び料理を作り直すの無限ループを繰り返している。

最初はキッチン……いや、あの広さは厨房か？

ともかく……本山の厨房に忍び込んでコソコソと料理を練習していたのだが、しばらくして父さんの部下に見つかってしまい……父さんに激怒された。

……理由は言わずもがな。

このままでは出入り禁止になってしまおうと思った俺は、父さんの目の前で料理を作り、試食してもらい……初めは美味しい美味しいと喜んでいた父さんだったが、やはり子供に火を使わせるのは忍びないと言つて俺が厨房を使う事を承諾してくれなかった。

そして色々と一悶着あり、結局……誰か監督者がいれば良いという事になり、あの二人が選ばれた訳で……。

数ヶ月して俺の料理の腕が確かな事を父さんも理解してくれて、一人で料理する事を許可されたのだが……正直に言つて厨房は子供部屋からかなり遠く、不便だった。

それに加えて車椅子に座つて料理する俺にとって大人用に設計されている厨房は使い辛かった。

そして……これも冗談で言ったのだが、子供部屋の中にキッチンが有ればなあと父さんの近くで呟いた次の日に、リフォーム会社がやって来て子供部屋の中にキッチンを設置してくれた。

そうして俺は部屋の中でノンビリと料理する事が可能になったのだが……うん、父さん……凄い行動力だね。

……眠くなってきたな。

……もう寝るか。

俺は布団を目深に被り、静かに眠りつ……………けなかった。

何故なら、急に子供部屋の襖が大きな音を立てて開き、ドタドタと誰かが入り込んできたからだった。

第十四話（後書き）

……ようやく更新出来ましたよ。

更新が遅くなってしまってすみません。

いやあ……久しぶりに文章を書いたので、少しおかしい所があるかもです。

いつかFateの世界と木乃羽をコラボさせてみたいなあと考えています……サーヴァント名は「ボマー」で（笑）

第十五話（前書き）

……どうしてこうなった。

今回は少し長めですが……では、よいしょ。

第十五話

複数の人影が子供部屋に躍り込んできた。

俺の部屋に……こんな不躰な入り方をする人間は本山にいない。

それに加えて俺が寝ている筈の真夜中に、部屋に入り込んでくる訳がない。

まさかとは思うが謀叛だろうか、と嫌な予感が頭をよぎる。

ここ最近、本山のイザゴザは鎮静化されたと二人から聞かされていたのだが……。

もしそうなら、こんな悠長に寝ている場合ではない。

俺が即座に取るべき行動は 。

「『ザ・ワールド』ッ！時よ止まれ！」

先手必勝『ザ・ワールド』。

俺は惜しみ無く時を止め、布団から起き上がった。

「誰……だ？」

重い瞼を擦りながら、こんな夜中に入り込んできた不届き者を凝視する。

見える人影は二人だが、部屋が真っ暗な為よく顔が見えない。

数回、瞬きしてから目を凝らして見るとボンヤリと顔が見えてきた……が、そこにいたのは。

「何だ、御影と御国か……そして時は動き出す」

部屋に躍り込んできた闖入者は、御影と御国の二人だった。

俺が時間停止を解除すると、再び二人が動き始める。

礼節を弁えず、これだけ焦っているのだから……何かあったのだろう。

「お嬢様、起きていましたか！」

御影の声はいつものように落ち着き払った声ではなく、焦燥感がヒシヒシと俺に伝わってくる。

御影が急に部屋の電気が点けた事によって、少し目が眩んだ。

「……誰かさん達に起こされたんだよ」

俺は眉をひそめて瞼をしばたかせ、不機嫌丸出しの仏頂面で二人をお出迎えしてやった。

「お嬢様、突然なのですが」

御影がどれだけ焦っているのかを確認する為に皮肉を言ってみただが、全く相手にしてもらえなかった。

則ち……それだけ焦っている、という事か。

「今すぐ必要な物だけ纏めて下さい」

「……は？」

思いもかけない御影の言葉に俺は呆気に取られて、思わず口を大きく開いたまま硬直してしまった。

御影は大きな鞆を手に持ち、バタバタと騒がしく部屋の中を駆け回り始めた。

子供部屋の箆笥を荒々しく開け、中に収納されていた着物や寝巻き、下着を鞆に詰め込。

「おいおい、ちょっと待てよ。寝ていたのをいきなり起こされて『荷物を纏める』、『はい、分かりました』とはいかないだろ？」

そう言った俺に御影は荷物を纏める手を止めて、子供部屋の入口に立って辺りの様子を窺っている御国と一度申し合わせるように視線を交わし、お互いに頷いてから返答した。

「単刀直入に言いますと、今ならお嬢様の長年の夢だった麻帆良に行く事が可能です……夜逃げのような形になってしまいましたが」

そう言いながら御影は止まっていた手を再び動かし始め、大きな鞆に着替えや何やらを詰め込んでいく。

『麻帆良』

その単語を聞いた瞬間、俺の心臓がドクンと大きく脈打った。

強行策も考えていた俺にとって、願ったり叶ったりな話だが……。

「時は一刻を争います……お急ぎを」

俺が寝ぼけている頭を叩き起こし、脳をフル回転させて事態を理解する為に尽力していると、今まで黙っていた御国が俺に背を向けたまま静かに呟いた。

いつもふざけた調子の御国が、真面目な調子で言うのだから……よっぽど切羽詰まった状況なのだろう。

「……俺が説明を聞いている暇は無いんだな？」

本当なら奇声を上げて喜びたい所だったが、この二人の前でそんな恥ずかしい事は出来ない為、俺は自然に高くなりかけていた声色を変えぬまま言った。

御影は言葉を発する事は無く、俺を真つ直ぐ見詰めて首を縦に振るだけだった。

「……分かった」

俺は小さく頷き、急いで車椅子に座って荷物を纏めようとした。

したのだが……別に持っていく物がこれと言って無かった。

着替え類は御影が纏めてくれている……日記帳と大事な木乃香の手

紙と……後は弓道具、それぐらいだろうか？

俺は急いで机の鍵を開け、秘密の日記帳と分厚い束になった木乃香の手紙を取り出して、忙しく鞆に荷物を詰めていく御影に手渡した。

「あ……悪い、御国。俺の弓道具ぜんぶ取ってきてくれないか？」

子供部屋から弓道場に行くのには、少し時間が掛かる。

それに俺が取りに行くぐらいなら、御国に取りに行ってもらった方がよっぽど早いだろう。

「分かりました、五分で取ってきます」

そう言い残して御国は弓道場を目指し、風のように走り去っていった。

いや、そんなに急がなくても……。

俺なら片道だけで十分は掛かるぐらい遠いんだぞ……？

「すみません、お嬢様……急ぎますので、着替えをお手伝いさせていただきます。いただいてもよろしいでしょうか？」

いつの間にか荷物を纏め終わった御影が、大きく膨らんだ鞆と着物を手に持って近寄ってくる。

「……分かった、今日だけだぞ」

俺は車椅子からゆっくりと立ち上がり、寝巻きの紐を解く。

「…………失礼します」

御影は礼儀正しく一礼してから、俺を着替えさせ始める。

そして…………俺が着物に異様な早さで着替え終わった頃に、御国が弓道具を抱えて子供部屋に戻ってきた。

「お嬢様、これで全てですか？」

御国は汗一つかかず、平然とした顔で俺を見据えている。

いや本当に凄いな、お前たち…………。

「ああ、ありが」

「行きますよ、お嬢様」

御国に礼を言おうとしたのだが、着替え終わった俺を御影が急に抱き抱えて走り出した。

御国は俺を抱えて子供部屋を飛び出し、真っ暗な廊下を走り抜けていく。

「えっ、ちょっ、やめ…………あ、車椅子車椅子！」

アレが無かったら生活する事が出来ない。

そうこうしている間に俺達は、どんどん子供部屋から遠ざかっていく。

「安心して下さい、御国が持ってきてくれますよ……私が荷物を持つていると“何か”があった時に対処が出来ませんので」

御影は柔らかな微笑を浮かべて俺を一瞥し、再び前を向いた。

いや、持ってきてますって……アイツ弓道具持つてる。

ふと後ろを見ると、数メートル後ろに弓、矢筒、弓道具、大量の荷物が詰まっている筈の大きな鞆、そして車椅子を持って走ってくる御国が見えた。

御国に辛そうな表情は見えず、それよか少しずつ俺達に追いついてきている。

「……………うわぁ」

御国に失礼なのだが、その時ばかりは少しドン引きしてしまった。

転生者の俺より“この二人”の方がチートだったりして。

そうして俺は御影に抱き抱えられたまま、本山を出てアノ忌ま忌ましい長い石階段を降り、御影達が事前に用意してあった黒塗りの車に押し込まれるように乗り込んだ。

残りの二人はトランクに荷物を詰め込むと、御国が運転席に、御影

が助手席に荒々しく乗り込んできた。

御国は運転席に座ると同時に、車のエンジンをかけてアクセルを思い切り踏み込んで車を急発進させた。

俺達三人が乗り込んだ車は砂利と砂煙りを辺りに撒き散らし、タイヤが激しい唸り声を響かせながら、舗装されていない真っ暗な砂利道を高速で走り始める。

俺は車内がガタガタと揺れたせいから、少し気分が悪くなってしまった。

……車酔いだろうか？

転生前は一度も酔った事なんて無かった筈……そうか、俺……車に乗るのコレが初めてか。

文明が発展し、魔法まで存在するこの“ネギま”の世界で……中学生になる年齢になってから初めて車に乗るってお前……あ、家の外に出るのも初めてだったな。

……どういう事なの？

あ………そういえば父さんやマロにお別れも何も言えてないな、どうしよう………後で電話しよう。

「さて、説明してくれないか……？」

少し落ち着いた所で俺は今回の件の真相を知る為に、話を切り出した。

「分かりました、出来る限りご質問にお答えします」

御影はゆっくり振り向いて、俺を正面に見据えた。

「じゃあ、まずは……本山で何があつた？」

あれだけ焦っていたのだ……よっぽどの事が起きたのだろう。

……父さんは無事だろうか？

「……今まで鎮静化されていた筈の一派が突然、叛旗を翻したので
す」

御影は一拍置いてから、静かに言った。

一派……ねえ。

……俺の魔力を利用しようとする過激派の事か。

「それで、その一派が叛旗を翻した事と俺が麻帆良に行く事……何
の関係性が？」

本当はこんな質問をせずとも、おおよその予想はつくのだが……。

「あまり詳しくはお伝え出来ませんが……本山で“内輪揉め”が起
きる可能性があり、詠春様がお嬢様の身が危なくなると判断し……
麻帆良に行く事を決断したのです」

「ふーん……成る程な」

それにしても、弁が立つな……御影は。

本当は“内輪揉め”なんて生易しい物ではなく、俺の魔力を使用して関東魔法協会と戦争が起きる可能性があったのだろう。

だが……父さんや御影達は俺に魔法の存在や関西呪術協会の事を知られたくない……だから、あくまで本山の内部分裂という事に仕立て上げたのだろう。

俺が原作知識……“裏側”を知らなければ簡単に騙されているだろう。

いや……まさか自分が利用されそうになっていたなんて分かる筈が無いが。

そもそも魔法や魔術が存在しているなど夢にも思わないだろう。

それに今まで“関西呪術協会”や“魔法”といったワードが父さんや御影たちの口から零れた事は一度もない。

父さんの事は……言い方がアレになるがヤクザの組長だと二人から聞かされているし……。

父さんがヤクザの組長という“設定”を聞かされた時は、流石に無茶があるだろうと思ったが……。

「本来なら一週間後に麻帆良に行きを予定していたのですが……まさか、こんな事になるとは」

そう言つて御影は肩を落とし、さも残念といった様子で溜め息をついた。

「そつといえば御影、父さんは……何か言つてた？」

「……詠春様からお手紙を預かっています、どうぞ」

御影は懐から手紙を取り出すと、俺に優しく手渡してくれた。

「……本当なら詠春様が直接お嬢様に」

御影の独り言を聞き流しつつ、俺は急いで手渡された手紙の封を開ける

そして中の便箋を素早く取り出して、手紙を読み始めた。

『突然、引越す事になって本当にすみません。』

こんな不甲斐ない父さんを許して下さい。

麻帆良に行つて辛い事や悲しい事が沢山有るかもしれませんが……私は木乃羽がそんな壁を乗り越えれると信じています。

何故なら、私の自慢の可愛い娘ですからね。

それに麻帆良には木乃香と刹那君がいます。

三人で手を取り合い、助け合っていきなさい。

良い意味でも悪い意味でも、木乃羽は頑張り屋さんです。

出来る限りの事は自分一人できちんとする癖があります。

誰からの助けも借りず、自分一人の力で何かを行う事はとても良いことです。

ですが……これだけは覚えていて下さい。

誰かに助けてもらった事は、悪い事ではありません。

誰かに助けてもらったのなら、次にその誰かを助けてあげれば良いのです。

麻帆良に行き、木乃羽は多くの人の助けを借りる事になるでしょう。

ですが、反対に木乃羽にしか出来ない事も必ず存在する、父さんはそう思っています。

くじけず前向きに、真っ直ぐ成長して行って下さい。

それでは木乃羽、また再び会える日を楽しみに待っています。

父さんより。

PS、マユの世話は任せておいて下さい。』

「父さん……」

思わず涙腺が緩んでしまい、泣きそつになる。

突然、別れる事になるなんて予想もしなかったけど……父さんは俺の自慢の父親だよ。

父さんと別れる事になった原因……。

何故、急に反乱が起きたのだろうか？

それに俺が家を出る際、本山は静寂を保ったまま何の騒ぎも起きていなかった。

一触即発の所までできていたのか、御影と御国が機転を利かして先手を打った……？

幾ら俺が原作知識を有しているとはいえ、今回の事は分からない点が多過ぎる。

俺という“イレギュラー”が関わる事によって、原作が少しずつ変わり始めているのかもしれない。

近衛詠春の子供が双子になっている時点で原作に何かしらの影響を……。

だが……本当にそうなのだろうか？

何か引掛かる……いや、何かを忘れているような気が。

「お嬢様、少しお話があるのですが……」

今回の事を頭をフル回転させて色々推理していると、不意に御影が声を掛けてきた。

「今……考え事してるから手短で頼む」

俺は額に指を当て、俯き加減でそう言った。

「もし、もしもですよ……私たちが、その叛旗を翻した一派の一味

だったら……お嬢様は、どうします?」

俺は突然そんな言葉を告げられて、思わず俯いていた顔を上げた。

車内の室内灯は点灯しておらず、辺りが真夜中で真つ暗な為……バツクミラーで二人の表情をボンヤリとしか窺う事が出来なかった。

成る程な……その発想はなかったな。

俺は再び俯いて、思考を巡らせた。

確かに……俺が本山の人間で信頼しているのは父さんの次に御影と御国の二人だし、俺が抵抗する事もなく本山から楽々と連れ出せ。

「……って、おい……冗談だろ?」

俺は御影の発言を聞いて少し不安になり、顔を上げて言葉を発した。

何故か心の奥底から沸き上がってくる嫌な予感をヒシヒシと感じながら、恐る恐る問い掛けてみたのだが二人からの返答は無かった。

全く……冗談キツイぜ二人とも。

……いや待てよ。

確かに今回の事は辻褄が合わない事が多々ある。

もし……もし本当に二人が叛旗を翻した一派の一味だとしたら……俺はまんまと騙されて敵の手中に収まったという事になるのか？

「嘘だよな、御影……御国」

意味の無い行動だと脳は理解しているのだが、思わず無意識に後部座席の床を蹴って後退りしてしまう。

ジワリと嫌な汗が背中を流れ落ちていく。

「どうして……どうして、そんなに怯えているんですか……お嬢様？」

御影の肌に纏わり付くような声が車内に響き渡る。

二人は依然として前を向いているので、表情は窺えない。

冗談……だよな……？

いやでも、よくよく考えてみれば父さんに会わせる事もなく、本山から俺を連れていくなんて……。

小さな不安の種は、どんどんと俺の心の中で成長していく。

「……冗談じゃない、と言ったら……お嬢様は更に怯えてくれますか？」

御影の低く、落ち着いた声。

その声は、まるで俺の反応を愉しんでいるかのようだった。

御国はともかく、御影は俺に対して悪ふざけをするような人間じゃない。

じゃあ、本当に二人は……。

もし本当にそうなら、一刻も早くこの車内から脱出する事が先決だ。

どれだけ車が高速で走行していようが、『ザ・ワールド』を使えば悠々と車から降りる事が出来る。

そう思った俺は、後部席のドアを開けようと咄嗟に手を伸ばそうとしたその瞬間……ガチャリと無機質な音を立てて後部座席のチャイルドロックが掛かった。

「危ないですよ……このはお嬢様。落ちたらどうするんですか？」

妙に頭の中に響いてくる御国の声を無視して、俺はドアを開けようと奮闘したが……ガチャガチャと虚しい音を立てるだけで、そのドアが開く事は無かった。

……しまった、『ザ・ワールド』を使ってから動けば……クソッ！

後悔していても仕方がない、『キラークイーン』を使ってロックを……いや、扉ごと吹っ飛ばすか？

それでは特殊な能力を持っているという事が二人にバレてしまうだろう。

もし関西呪術協会及び関東魔法協会まで知れ渡ってしまえば……俺だけの問題では済まなくなる。

必然的に双子の妹である木乃香にも火の粉が降りかかるだろう。

もし『キラークイーン』を使うのならば……それはドアではなく。

「おいおい……悪い冗談はこれぐらいにしてくれないか？……お二人さん」

ドアを開ける事を諦め、俺は車内全体が見渡せるように身構えて後部座席に座り直した。

『ザ・ワールド』そして……『キラークイーン』が即座に使えるように。

「……」

「な、なあ……嘘、……冗談なんだろう？」

二人は黙って前方を向いたままで、表情を窺わせてくれる事も、俺が望んでいる答えを言ってくれる事もなかった。

そ、そんな……御影と御国が、裏切るだなんて……。

じゃあ今までの事は全部……。

不意に頭の中に沸いて出てきた何かが、俺の耳元で囁いた。

“『キラークイーン』を使え、邪魔な物は悉く消してしまえ”と。

嫌、嫌だ……俺は二人を……。

“大切な物を守りたくないのか？”

そ、それは……でも……。

“簡単だ、時を止めて二人に触るだけで大事な木乃香を守れるんだぞ？”

俺は二人を……。

“なあに、躊躇う事はない……何故ならお前は”

「……このはお嬢様？」

「ひっ……」

突然、御影に声を掛けられ俺は心臓が口から飛び出しそうになった。

いつの間にか俺は俯いて頭を抱え、塞ぎ込んでいたらしい。

「な、なに……？」

恐る恐るゆっくり顔を上げると、目の前には三日月のように口元を歪め、笑みを浮かべている御影の顔があり……。

そして。。

「ドツキリ大成功ー！」

御国の嬉しそうな声が車内に響き渡る。

御影は何処からともなく大きな文字で『ドツキリ』と書かれたプラスチックカードを持って、ニコニコと笑みを浮かべて俺を見ていた。

「は……はあ？」

俺は目の前の出来事を理解する事が出来ず、素っ頓狂な声を上げてしまった。

「冗談ですよ、冗談！私たちが詠春様に盾突く訳無いじゃないですか。いや、お嬢様の驚いてる顔、可愛いかったな！」

御国は軽快な声でそう言っつて、笑いを堪えるかのように肩を震わせながらハンドルを操作している。

「すみません、お嬢様……御国がどうしてもお嬢様に会えなくなる前に一度だけやりたいと言いまして……」

御影は持っていたプラスチックカードを運転席に放り投げ、胸の前で両手を

合わせて謝罪の言葉を述べ始める。

御影の放り投げたプラカードは、綺麗に御国の横っ面に直撃した。

「痛ッ！……あ、ズルいぞ御影ー！お前だって結構ノリノリでプラカード作ってたじゃん！」

御影の弁解に、御国が抗議の声を上げる。

「なっ……それとこれとは話が別です！」

……今、目の前では御影と御国の責任の擦り付け合いが展開されている。

張り詰めていた糸が切れ、俺は思わず安堵の溜め息をついた。

でも……良かった、本当に……。

いつの間にか両目に涙が浮かび、頬を伝っていく。

「お、お嬢様……？まさか泣いて」

責任の擦り付け合いをピタリと止めて、御影が恐る恐る声を掛けてきた。

「……泣いてない！」

とめどなく溢れてくる涙を拭いながら、俺は泣き顔を二人に見せない為に俯いた。

うう……恥ずかしい。

でも……本当に良かった。

「うわぁ……御影がお嬢様を泣かせた……詠春様に、報告だー」

「は、はぁ！？違うやる御国！お前がドッキリやるう何て提案するから」

今度は取っ組み合いの喧嘩に発展しそうなぐらい、ヒートアップした責任の擦り付け合いが始まった。

そんな二人の微笑ましい姿を見ながら俺は思った。

後でコイツら“半殺し”にする、と。

そして……夜も遅く、体力的にも精神的にも疲労が溜まっていたのだろう。

気がつけば俺は二人の取っ組み合い及び殴り合いの喧嘩をボンヤリと眺めながら、瞼を閉じて眠りについていた。

ハンドルから手を離して殴り合っている御国を見て『安全運転してくれよ』と思いつつ。

第十五話（後書き）

次話……ようやく、『麻帆良』にッ！

……行けるのでしょうか？（笑）

第十六話（前書き）

ふう……ようやく投稿する事が出来ました。

いやぁ……仕事と執筆の両立は難しいですね（苦笑）

では……ごんげ。

第十六話

……夢を見ている。

それは遠い昔の記憶。

薄暗く狭い部屋の中、地面に這い蹲って涙を流す少女を遠くから眺めている。

精も根も尽き果てて、その小さな身体を動かす事さえ出来ない少女を眺める。

……他人事のように。

顔色一つ変える事もなく、絶望色に染まった双眸から涙を流し続ける少女は、まるで人形のようなだった。

そして奴らがやってきた。

いつものように蹂躪されていく少女。

声も上げず身体を守る事もなく、ただ少女は人形を演じ続けた。

少女は何も感じなかった、痛みも苦しみも……そして悲しみも。

何も感じなくなった筈の心に、奴らの毒が蓄積される。

溜まりに溜まった汚れた毒は、少女の心を蝕み続ける。

不意に少女は傷だらけになってしまった顔を上げた。

……まるで見えない誰かに助けを求めるかのように。

しかし少女が見上げた先に待っていたのは奴らの醜く歪んだ顔で、救いの手など誰も差し延べてはくれなかった。

それでも少女は堪え続けた。

……帰る場所が有ったから。

ある日突然、少女は奴らに捨てられる事になった。

使い物にならない、ただそれだけの簡単な理由で。

少女には反抗する気力も、逃亡する体力も残されてはいなかった。

これも運命なのだと、捨てられる事を受け入れる筈だったのだが。

『まだお前の代わりはいるから』と奴らに笑いながら宣告された。

それを聞いた瞬間に。

それまで必死に堪え続け、運命を受け入れようとしていた少女の心は真っ黒に染まり、針で突かれた風船のように容易く破裂した。

そして。

「お嬢様」

誰かの優しい声が聞こえる。

声の主に肩を揺すられて、俺は少しずつ意識を取り戻していく。

「起きて下さい、お嬢様」

ゆっくりと瞼を開けると、微笑を浮かべて俺を見ている御影の顔があった。

「ん……おはよう、御影」

さっきまで何か大事な夢を見ていたような気がする。

必死に思い出そうと頭の中を探ってみたが、霧散してしまった夢の記憶を取り戻す事は出来なかった。

忘れてしまうぐらいなのだから、それほど大事な夢では無かったのだろうと自分を納得させつつ、俺は小さく欠伸をした。

「おはようございます、お嬢様。外をご覧になってはいかがですか？」

「……ん？」

御影にそう告げられて、俺は首を巡らし眠気眼のまま窓の外をボンヤリと眺めた。

スモークの効いた窓の先に見える、ゆっくりと流れていく景色。

そこに見えたのは。

行き交う多くの人々。

街中を走る路面電車、

ヨーロッパの町並みを模倣したかのような商店街。

「……ここは」

食い入るように外の景色を見つめながら俺は呟いた。

「麻帆良ですよ、麻・帆・良。すぐに窓を開けますからね」

御国がそう言ったと同時に窓ガラスが自動で開いていき、外の空気が車内に入り込んでくる。

転生前では考えられないほど長くなった黒髪を風で少し靡かせながら、俺は窓に近づいて外の空気を目一杯吸い込んだ。

新鮮な春の匂い、だがこれから訪れる筈の雨季を感じさせるような少し湿った空気の匂い。

そうか、ここが……『麻帆良』か。

「そ、そろそろ学校に着くのか？」

もうすぐ木乃香や刹那に会える、そう思った俺は振り返って二人に問い掛けたのだが、突然……車がピタリと停止した。

止まったって事は……まさか。

「……着きましたよ、お嬢様」

御影がニッコリと笑って俺に言う。

それを耳にした瞬間、俺は居ても立っても居られなくなった。

早く鍵を開けるよう御国に言おうとしたのだが……外を見てみると御影に告げられ、怪訝に思いながらも再び窓の外を眺めた。

すると、窓の外に見えたのは。

「うーちゃん！」

手を振りながら車に駆け寄って来る木乃香の姿だった。

「木乃香！」

俺は思わず大声を出して、窓から車の外に少し身を乗り出した。

「うーちゃん！」

木乃香は走ってきた勢いを緩める事なく、俺に抱き着いてくる。

「久しぶり……木乃香」

俺は木乃香を優しく抱き留め、柔らかい髪の毛の感触を懐かしく思いながら頭を撫でてやる。

「やっぱしええなあ……うーちゃんに頭を撫でられんのは」

そう言っつて木乃香は俺の顔に頬を擦り寄せてきた。

「よしよし……これからは幾らでも撫でてやるからな」

俺は木乃香の頭を優しく撫でながら、再び会えた事に感動してしまい涙腺が緩み始めていた。

……涙脆くなつた俺も。

妹の前では泣かないと心に誓ったんだが……転生前の話だけだ。

「お久しぶりです、このかお嬢様」

いつの間にか車外に出ていた二人が、木乃香に深々と礼をした。

「やん、やめてや礼なんて……それにしても久しぶりやな、御影と御国に会うのも」

木乃香は俺に抱き着いたまま、首だけ巡らして笑みを浮かべながら二人を見ている。

「お会いにならない間に、このかお嬢様も大きくなられて……しかし性格は違えどお嬢様たちは双子だったということ改めて認識させられました」

御影は口元に手を当て、娘の成長を喜ぶ母のような瞳で俺達を見つめている。

「やっぱり似てるのか……俺達」

俺がそう言つと、御影と御国はほぼ同時に首を縦に振った。

御国曰く、もし服装が同じなら目を離れた隙に二人が入れ替わっていても、気づかない可能性があるらしい。

どんだけ似てるんだよ……俺達。

そして少しの間、四人で思い出話に花を咲かしていたのだが……急に木乃香が声を上げた。

「そつや！うーちゃん、あのな……学校始まるまでまだ時間あるから麻帆良を案内しようと思うけど……構わへん？」

木乃香は少しだけ首を傾けながら言った。

勿論、俺が木乃香の誘いを断る筈もなく。

自分がその誘いを受けると木乃香は表情を輝かせながら俺から少し離れ、後部座席のドアを開けて手を差し出してくれた。

しかし、その差し出された手を俺が掴む事はなかった。

何気ない木乃香の行動が、和やかだったその場の空気を凍らせる。

普通なら差し出された手を握り、感謝の言葉でも述べながら車から降りるのだろう。

別に……差し出された手を握り、少し無茶をして車から降りても良いのだろう。

しかし、そんな事をしても意味がない。

一人だけ理由を知らない木乃香は手を差し出したまま、車から降りてこない俺を見て首を傾げている。

「悪い木乃香、少し待っててくれ……御影、頼む」

俺は覚悟を決めて、口調を少し強くして言った。

「……？」

俺にそう告げられて木乃香は更に首を傾げてしまった。

御影は既にその場から移動して車のトランクを開けている。

木乃香は怪訝そうな表情で御影と俺を交互に見ていた。

悪いな木乃香、いつか手紙で話そうとは思っていたんだが……。

「お持ちしました、お嬢様」

木乃香は御影がトランクから持ってきた“ソレ”を見て、啞然とした表情になった。

当然の反応、か……。

足が少し不自由になったなど、木乃香に一言も言っていないのだから。

「ありがと、御影……よいしょ」

俺は少し苦勞して後部座席から車椅子に移る。

「……う、うーちゃん？」

木乃香は目を大きく見開いて、信じられないといった様子で俺を見ている。

次第に木乃香の瞳の色が驚愕と狼狽の入り乱れるものへと変わっていく。

「うーちゃん……ソレって」

「はは……ちょっと病気でな」

融通が効かなくなった脚を数回軽く叩きながら、俺は木乃香の顔を見上げる。

そして精一杯、笑ってみせた。

俺が落ち込んでいても仕方がないし、もう何年間も“この足”で生活してきたのだ。

今更、気にする事も落ち込む事も無い。

ふと御影と御国を見ると歯を食いしばり沈黙したまま、俯き加減でその場に立っていた。

「嘘や……そんな……」

木乃香は何度も首を小さく横に振りながら、呆然とその場に立ち尽くしている。

「大丈夫、二度と足が動かなくなった訳じゃない……ほら」

俺はそう言いながら車椅子のブレーキをかけ、足に力を込めてゆっくりと立ち上がった。

膝が笑い、少し前屈みの情けない姿になっているが……それでも二本足で立ってみせた。

「ほら……な、こつやって二人仲良く並んで立つ事も出来るから……少しの間しか立てないけど我慢してくれよな？」

俺は苦笑いを浮かべながら木乃香に近寄って、小刻みに震えている肩に手を置いた。

「う、うーちゃん……！ウチ、ウチ……」

酷く取り乱した声で木乃香は言いながら、ポロポロと涙を零し始めてしまった。

……木乃香が泣く必要は全くないのに。

俺はそんな世話の掛かる妹を優しく抱きしめてやった。

「泣くな木乃香……せつかく再会できたんだから……な？」

俺は木乃香を抱きしめながら、優しく丁寧に頭を撫でてやる。

「うう……ううちやああん！」

「ああもつ、泣くなって……」

わんわんと泣き叫ぶ木乃香の声を傍らに聞きながら、俺は黙って頭を撫で続けていた。

そして……俺は木乃香が落ち着くまで、ずっと頭を撫でてやった。

木乃香が泣き止む頃には、俺の足はとっくに限界を超えていたが……我が愛する妹の為だ。

……どうという事はない。

「……落ち着いたか？」

俺は木乃香から離れ、ゆっくり車椅子に座って少し息を吐いた。

「うん……姉様」

木乃香は一応、頷いてはいるが……俯いたまま涙を拭い続けている。

正常に木乃香が回復するまで、もう少し時間が掛かりそうだった。

俺がどうするべきか悩んでいると、今まで押し黙って俯いていた御影が顔をゆっくりと上げ。

「すみませんお嬢様……私たち“仕事”がありますので、残念ながら今すぐ京都に戻らないといけませんのです」

申し訳なさそうに御影は言つと、小さな溜め息をついてみせた。

「そんな、御影と御国も案内したろと思ってたのに……」

木乃香が少し赤く腫れてしまった瞳を擦りながら、さも残念そうに言った。

「すみません……このかお嬢様。またの機会にお願いします」

その場に立っていた二人がテキパキと動き出し、トランクの荷物を全て取り出して俺達に手渡してくれた。

流石に全ての荷物を一人で持つ事は不可能だった為、鞆は自分の膝の上に置いて弓道具は木乃香に持ってもらった。

木乃香は弓袋に入った弓や矢筒を不思議そうな目で見ていたが、俺の趣味である事を伝えると何を思ったのかは分からないが……「良かった」と一言だけ呟き、俺をじっと見つめながら笑みを浮かべていた。

……？

……何が「良かった」なんだ？

「それでは、お嬢様……お元気で」

「また会いましょうね」

荷物の受け渡しも全て終わり、二人は車の横に立って深々と俺達に最敬礼している。

「やん、だから礼なんてせんでいいって……また会おな御影、御国」
ニツコリと笑って木乃香が言った。

木乃香が俺が言いたかった事を全て代弁してくれたので、このまま黙って見送ろうかと思ったのだから……。

流石に何年間も色々世話になり、ここまで無理をして送ってもらいながら黙って見送るのではないだろう、と思い直し。

「その……何だ、あの……今までありがとな、御影……御国」

ぼそぼそと小さな声で礼の言葉だけは述べておいた。

二人は俺の言葉を聞いてニンマリと笑ったかと思えば直ぐに口元を引き締め、もう一度だけ最敬礼を行い、急いで車に乗り込んでいった。

助手席の窓がゆっくり開き、御影と御国が別れを惜しむかのように俺達を見つめていたので、俺は『早く帰って父さんを手伝ってやってくれ』と言ってやった。

すると二人は俺の言葉によって決心が付いたのか首を小さく縦に振り、別れの言葉をそれぞれ述べた後、車のエンジンをかけて走り去っていった。

木乃香の横に並んで手を振り、二人を見送る。

次第に小さくなっていく車を見送りながら、俺は考え事をしていた。

頭の中で何か引つ掛かったままになっていた為である。

何か大事な事を忘れているような気がするんだが……。

……あ。

あの二人を半殺しにするの忘れてた。

……oh、逃げられた。

第十六話（後書き）

寂しい事ですが最近、ネギま関連作品で更新がストップしてしまった作品が多くなったような気がします。

それでも自分は頑張って更新を続けていきたいと思っておりますので……
これからもよろしくお願いします！

不定期更新ですが（汗）

話は変わりますがネギま作品でオススメの小説がございましたら、
教えていただけると嬉しいです。

皆さんの作品を読む事によって作者のモチベーションが上がら

第十七話（前書き）

半分ほのぼの、半分シリアス。

では……ようこそ。

第十七話

「木乃香、これからどうするんだ？」

あの二人を懲らしめる事が出来なかったのは残念だったが、気を取り直して横に立っている木乃香の横顔を見上げた。

手を振るのを止めて、ゆっくりと木乃香は俺の方に向き直った。

そして、何かを話そうと口を開いたのだが……その開かれた口から声が発せられる事はなく閉じてしまい、自らの顎に指を添えて俺を見つめながら首を捻り、考え事を始めたようだった。

俺は怪訝に思いながら木乃香の様子を窺っていると、木乃香は暫くして何かを思い出したように胸の前でポンと手を打った。

そして突然、俺を指差して。

「……うーちゃん、“喋り方”」

そう言つて木乃香は微笑を浮かべている。

……。

よく覚えてたな……六年前ぐらいの話だぞ……？

「……わかつたえ、木乃香」

俺は木乃香の記憶力を褒め讃えるべきなのか呆れ返るべきなのか迷

いながら、仕方がないので従う事にした。

六年ぶりに京都弁を話したのだが……頭では忘れていても、身体は覚えてるんだな。

スラスラと京都弁を話せる自分に、違和感を感じずにはいられない。

……俺は“どっち”なんだろうか？

「ウチの事は“このちゃん”って呼んでな？……うーちゃん」

「了解したえ……このちゃん」

木乃香は相変わらず微笑を浮かべているが、俺はその天使のような微笑みの裏に何か黒いモノが隠れている事を感じ取った。

本能で理解する、従わなければ……いや、考えるのはよそう。

「ええ子やなく、うーちゃんは」

木乃香は俺の返答に御満悦な様子で、俺の頭を撫でながら陽気に鼻歌を口ずさんでいる。

「……そういえば、せつちゃんは？」

俺は無造作に頭を撫でる木乃香の手を優しく払いのけつつ、ふと感じた疑問を口にした。

刹那は原作通りだと修学旅行編が終わるまで俺達を避けている筈だが、礼儀を知らない人間ではない。

むしろ礼節を重んじるタイプの筈だ。

六年ぶりの再会なのだから流石に挨拶ぐらいは来てくれるだろうと思っていたが、刹那の姿は何処にも見当たらなかった。

原作では木乃香を助けられなかっただけで、あれだけ落ち込んでいたのだから……ああ、嫌な予感がする。

「あ、あのな……その……」

俺の疑問を耳にした木乃香は一体何と言えいいのか分からない様子で、暫く口ごもっていた。

「せ、せつちゃんにも……うちちゃんが麻帆良に引越して来るって言ったんやけど……」

暫くして木乃香は口を開いたが、まるで自らが悪事を働いて俺に叱られているかのように沈鬱な面持ちで俯いている。

「気にしんとき……用事か何かあったんやろ……それにウチは木乃香が迎えに来てくれただけでも十分嬉しいえ」

刹那の事だ……恐らく何処かの物陰に隠れて俺達を見ている筈だ。

……先程から何者かの“視線”は感じている。

その視線が刹那の物かどうかまでは分からないが、恐らく刹那が俺達を監視しているのだろう。

俺はアノ馬鹿二人に毎日着替えを覗かれていた為か、他人の視線を人一倍感じ取れるように成長した。

今も道行く人々が、ジロジロと横目で俺達を見ながら通り過ぎていく。

ただでさえ俺はこんな市街地で着物を着ていて目立つというのに……その上、車椅子に座っていて……あまつさえ俺に瓜二つな人物が横に立っているのだから良い見世物である。

俺は思わず癖で手を伸ばし、表情を暗くして落ち込んでいる木乃香の頭を優しく撫でようとしたのだが……。

車椅子に座っている為に俺の手は耳のあたりまでしか届かず、木乃香の頭を撫でる事は出来なかった。

伸ばした右手が虚空を彷徨い、俺は気恥ずかしくなって手を引つ込めた。

幸い、木乃香は空振りした俺の右手に気付いていない様子だった。

普通に頭を撫でる事さえ出来ない、そう思った途端……俺の心がチクリと針を刺されたように少し痛んだ。

「……………このちゃん、案内してくれるんやろ？」

俺はこの場にじっとしているのが嫌になり、未だ落ち込んでいる木乃香に声を掛けた。

木乃香は少しだけ顔を上げて口元を引き締めると、微笑を浮かべて

通常の朗らかな表情に戻った。

「ごめんな、うーちゃん。……ほな行こ！」

そう言っつて木乃香は俺の後ろに回り、車椅子のハンドルを握って歩きだそうしたのだが、俺が“ソレ”を許さなかった。

車椅子がギシリと鈍い音を立てて止まる。

「やめて、このちゃん！」

俺は咄嗟にハンドブレーキをかけ、否定の意を強く示して木乃香の方を振り向いた。

「ど、どないしたん……うーちゃん」

木乃香は突如怒りを顕わにした俺に驚いたらしく、恐る恐る問い掛けてきた。

「ウチの横に並んで一緒に“歩こ”？」

俺は後ろ手で車椅子のハンドブレーキを解除しながら、ニッコリと笑って見せた。

……木乃香の気持ちは嬉しいが、誰かに助けてもらわなくても俺は自分自身の“足”で歩ける。

ただ俺の“足”は車椅子になっている、それだけだ。

俺の“歩く”速度は他人より遅いだろう、それでも……俺は自分一人の力で歩く事は出来る。

歩く姿は違えども、共に並んで歩く事は出来るから。

それだけは木乃香に伝えておきたかった。

戸惑いの表情を浮かべていた木乃香は俺の“言葉の意味”を十分に理解してくれたらしく、非礼を詫びながら俺の横に立ってくれた。

そして。

「ほな行くえ、うーちゃん」

「分かったえ、このちゃん」

俺達二人は仲良く並んで麻帆良の町を、ゆっくり“歩き”始めた。

俺達二人は荷物があつた為、学生寮に向かう事になった。

荷物と言っても、生活する為に必要な最低限の物を詰め込んだ鞆と、後は矢筒と弓だけなのだが。

二人で麻帆良の町をノンビリ歩きながら、木乃香は最近あつた出来事を俺に話してくれた。

新しい友達が出来た事。

学校の授業が難しい事。

図書館探検部や占い研究会という部活に入った事などなど。

そんな他愛もない木乃香の話を聞きながら、俺は学生寮に向かって
いたのだが。

「それにしてもうーちゃん、さっき立ってくれた時に思ったんやけど昔に比べて大きくなったなあ……ウチより少しだけ“小さかった”けどな」

突然、木乃香の何気なく放った一言。

その一言は神話に登場するロンギヌスの槍より鋭く、俺の心に突き刺り……いとも容易く貫通していった。

「うーちゃん、どないしたん？」

黙り込んでいた俺を怪訝に思ったらしく、木乃香が声を掛けてきた。

「いや……なんでもないえ」

……畜生。

さすがの俺も、この時ばかりは妹に身長が負けてしまうという残酷な運命を用意した神様を呪った。

そして俺達は朝早い為か人通りの少ない麻帆良の町を歩き続け、ようやく学生寮に辿り着いた。

櫻の木が等間隔に植えられ、比較的まだ新しく綺麗な学生寮だった。まるで俺の為だけに作られたようなスロープを使い、学生寮に入る。木乃香の話によると、ここ最近になって新しく造られたスロープらしい。

俺は理事長の仕業だな、と即座に理解した。

本来なら感謝するところなのだが……理事長の孫娘という立場を利用してしまったようで何だか気が引けてしまった。

木乃香と並んで静かな学生寮の中を進む。

……時間は六時過ぎといったところか。

まだ朝日が昇ったばかりなので、学生寮に住んでいる他の生徒は殆どがまだ夢の中にいる時間だろう。

エレベーターを使い、上の階へ向かう。

暫くしてエレベーターが四階で止まった。

四階……？

確か木乃香達の部屋は六階だったような……？

小さな疑問を残しつつ、俺は木乃香と並んで静かな学生寮の廊下を歩いた。

そして。

「ココがウチの部屋やえー」

木乃香がピタリと立ち止まり、目の前の部屋を指差した。

木乃香が指差した部屋の扉の横には標札があり、麻帆良学園のエンブレムの横に443と部屋番号が書かれており、その数字の横には神楽坂明日菜、その下に近衛木乃香、最後に近衛木乃羽と俺の名前が書かれていた。

俺がしげしげと標札を眺めていると、部屋の前に立っていた木乃香が中等部学生寮の説明をしてくれた。

麻帆良学園中等部は全寮制で、一年生は全員三丁四階に住んでいるらしい。

それを聞いて先程の疑問が解消された。

……原作スタート時は二年生だったから六階に住んでいたのか。

「食堂やテナント専門店、大浴場から展望台まで……って、うちやん聞いとる?」

考え事をしていた俺の目の前に突然、木乃香の顔がヌツと現れる。

「……聞いとる聞いとる」

ああ、ビックリした。

「ふーん……じゃあ、入るえー」

木乃香は胡散臭そうな瞳で俺を見つつ、部屋のドアノブに手をかけたのだが……そのドアが開かれる事は無かった。

「あ……うーちゃんって人見知りする？」

「……？」

ドアノブに手をかけたまま振り向いた木乃香にそう言われて、俺は首を傾げた。

人見知り……？

「言うの忘れとったんやけどウチ、アスナって娘と一緒に住んでて……その……」

ああ、成る程……明日菜の事を忘れてたのか。

「心配せんでも大丈夫やえ」

俺は心配そうな表情で言葉を探していた木乃香に微笑みかけた。

それを聞いた木乃香は表情を輝かせ、今度は躊躇する事なく部屋のドアを開けた。

「アースナー！連れてきたえー！」

木乃香は御近所迷惑になりそうなくらい大きな声を出しながら、部

屋に入っっていった。

俺は一度だけ溜め息をついてから、部屋に入る。

俺が玄関に入り、最初に思った感想は『狭いな』だった。

玄関に入っってすぐ右手にトイレがあり、更に廊下を進むとお手洗いと“小さな”お風呂があった。

本山にあっった大浴場の広さに慣れてしまったせいか、普通の広さの筈である浴槽に違和感を感じずにはいられない。

俺も贅沢になっったもんだなど、心の中で嘆息した。

「あれ？……アースナー？」

どうやら木乃香はバタバタと部屋の中を走り回り、神楽坂明日菜を探しているようだった。

……いないのか？

ゆっくりと車椅子を操り、リビングルームに入る。

リビングルームにはキッチンがあり、テーブルやソファ、壁ぎわには三つの机が設置されていた。

後は……二段ベッドや収納スペースであるクローゼット、その上にロフトがあった。

「そっやアスナ、新聞配達始めるっって言っってたなあ」

部屋の中を忙しく走り回っていた木乃香が突然立ち止まり、胸の前で手を打っている。

そんな木乃香を見て、俺は苦笑しながら溜め息をついていた。

……クローゼットの中やベッドの下まで探していたからな、この妹は。

そして、それから俺は京都から持っていた荷物や弓道具をクローゼットに収納し、木乃香に部屋の説明を受けた。

最後に質問があるかと木乃香に問われたので、俺はずっと疑問に思っていた事を口にした。

「ウチは何処で寝ればいいん？」

そう このリビングには二段ベッドが置いてあるだけで、俺の就寝出来るスペースが見当たらなかった。

まさかロフトの上……？

流石にそれは無いか……。

もしかするとクローゼットに布団か何かが入っていたのかもしれない。

そんな事を考えながら質問したのだが、木乃香から返ってきたのは予想を超える言葉だった。

「なに言ってるの、うーちゃんはココで寝るんやえ？」

そう言っつて木乃香が指差したのは、二段ベッドの下段だった。

思考が停止し、黙り込んでしまう。

……落ち着け、クールになれ近衛木乃羽。

えーと……原作では二段ベッドの上段は神楽坂、下段は木乃香だった筈……。

ならば、推測される結論は　。

「もしかして……一緒に寝ろって事……？」

「そつやえ」

俺が恐る恐る質問すると木乃香は胸を張って、さも当然とばかりに肯定してみせた。

……待て待て待て。

「いや、それはちょっと問題があるだろ」

納得できない思いに齒噛みしながら、俺は京都弁で喋る事も忘れて木乃香の発言に突っ掛かった。

「昔は一緒に寝てたやる？」

あっけらかんと答える木乃香。

「昔は昔、今は今……それにもう中学生だぞ？」

俺は眉間に手を当てながら嘆息してみせた。

「……うーちゃん。ウチの事、嫌いになったん？」

俺が折れないと分かると、ついに木乃香は顔を両手で押さえて嘔泣きを始めてしまった。

勿論お約束で、指の間から俺の様子をちらちらと窺っている。

「いやでもなあ……」

そんな木乃香を見て、俺は言葉が喉に詰まった。

旗色が悪くなってきた、直感的にそう感じる。

木乃香にごねられたら、最終的には上手く丸め込まれると分かっていたからだ。

「分かったえ……ウチ、独り寂しく床で寝るから……。毎日、涙で濡れた枕を洗濯しなアカンやるなあ……よよよ」

木乃香は芝居がかった調子で崩れるようにその場に座り込み、嘔泣きを続けている。

指の間から俺の様子を窺う事を忘れずに。

もうこうなってしまうたら、白旗を掲げる事しか俺に道は残されていなかった。

それに……俺には反駁する言葉も反抗する気力も既に無かった。

「分かった……分かったから」

そう言つて俺は諸手を挙げ、未だに目の前で嘘泣きを続けている木乃香に降参した。

「わあい！」

木乃香は何事もなかったかのように立ち上がると、ぴょんぴょんと飛び跳ねて喜びを顔にしている。

……助けてせつちゃん。

「……はあ」

俺は額に手を当て、肩を落として溜め息をついた。

まさかこの歳になってまで一緒に寝る事になるなんて……。

絶対、狭いだろ……。

ん……？

ツッコミを入れる場所が違つような気が。

「そつや、おじいちゃんからコレ。プレゼントやっつて」

突然、俺は木乃香から紙袋を渡される。

「ん……何コレ？」

木乃香から紙袋を受け取りながら“おじいちゃん”という単語を聞いた瞬間、嫌な予感を感じながらも俺は紙袋の中を恐る恐る窺つた。

中に入っていたのは。

何処にもでも有りそうな携帯電話と赤い包装紙に包まれた何かだった。

俺は紙袋を膝の上に置き、まずは携帯電話を取り出した。

「うーちゃん、ウチとお揃やえー」

そう言つて木乃香は制服のポケットから携帯を取り出し、俺に見せてくれた。

手元にある携帯と同じ機種の携帯だった。

どうやら俺の携帯は既に木乃香や理事長のプロフィールはアドレス帳に登録されているらしい。

まあ……これは素直に有り難くいただいておこう。

さて、問題は次だ。

携帯を紙袋に戻し、今度は赤い包装紙に包まれた何かを取り出す。

……嫌な予感がする。

……この“何か”からは今まで出会ったどの物体をも超えている凄味を感じる。

エンジン音だけ聞いてブルドーザーだと認識できるように分かる。

ちらりと上目で木乃香を見ると、満面の笑みを浮かべて俺を見ていた。

覚悟を決めて、恐る恐る包装紙を開けると中に包まれていたのは。

麻帆良学園中等部の制服だった。

勿論、女子用です……スカートです。

俺は無言で綺麗に包装紙を包み直し、紙袋に戻して“ソレ”を床に置いた。

む、無理無理無理無理無理イ！

今まで生まれてから着物しか着たことないし、スカートとか無理！

そうだ、男子用に変えてもらおう。

それなら俺も……ん？

ふと顔を上げると木乃香が紙袋の中から取り出した制服を持ったまま、目を妖しく光らせて俺にジリジリと近づいてくる。

「な、なあに？このちゃん？」

全身に嫌な汗をかきながら、俺はゆっくりと後退した。

「何でもないえ。ただ“お手伝い”してあげようと思っただけやえ」

……ヤバい、ヤバいヤバい。

本能が引つ切り無しに警鐘を鳴らしている。

早くこの場から脱出せよ、と。

『三十六計逃げるに如かず』

そう思った俺は玄関を目掛けて一目散に遁走した。

「これが我が逃走経路だッ！」

本山で培った俺の車椅子移動術を見せてくれるわッ！

『コノハはにげだした！』

『しかし、まわりこまれてしまった！』

「な、なん……だと……？」

木乃香が後ろ手で鍵を閉めた音が、部屋の中に響き渡る。

そんな馬鹿な……ありえない。

「どこに行くん……？」

「い、いや……ちょっとトイレに行こう」

「トイレはソツチ、コツチは玄関やえ？」

有り難い事に、木乃香がトイレと玄関を指差して俺に教えてくれた。先程より木乃香の瞳が妖しく光り、一步、また一步と間合いを詰めてくる。

「ま、待て……やめろ木乃香、話せば分かるッ！」

俺が後退ると、同じように木乃香もジワジワと追い詰めてくる。

「うっちゃん、優しくするから大丈夫やえ？」

その発言は色々と問題が　　って今はそんな事を考えている場合ではない。

必死に後退を続けていると、暫くして全身に軽い衝撃を受けた。

咄嗟に後ろを振り返ると、目の前にあったのは部屋の壁だった。

これ以上、後ろに後退できない。

後退できないのなら……俺はどうなる？

恐る恐る首を巡らして前を見ると、そこには恐ろしい笑みを浮かべた木乃香がいた。

ど、どど、どうする……俺！？

そこで問題だ！

この部屋の隅に追い詰められた状況でどうやって木乃香を躲すか？

3 択、一つだけ選びなさい。

答え1 転生者近衛木乃羽は突如、起死回生のアイデアが閃く。

答え2 刹那がきて助けてくれる

答え3 逃げれない。現実には非情である。

答えは 。

「うーちゃん、お着替えするえー！」

木乃香は禍々しい女子用制服を両手で持ち、舌なめずりをしながらジワリジワリと間合いを詰め……そして 。

答え 3。

答え3

答え3

第十七話（後書き）

皆様のお陰でお気に入り小説リストが潤いました！。

これで作者のモチベーションが上がり、教えていただいた小説を更
新そっちのけで読むようにry

第十八話（前書き）

……泣きまくり近衛姉妹。

では、さようなら。

第十八話

「あー楽しかったわ〜」

木乃香は俺を強引に着物から制服に着替えさせ、まるで一仕事終了後のように満足げな表情を浮かべている。

「うう……酷い……もうお婿に行けない」

俺は車椅子の上で両手で顔を覆い、静かに涙を流している。

スカート履かされるなんて……もう駄目だ、お終いだ……。

俺の男としてのプライドが、大きな音を立てて崩れていく。

何だかスースーするし、足は寒いし最悪だよ……。

「ごめんな、うちちゃん……でも見てみ、似合とるえ？」

木乃香にそう言われて俺は涙を拭いっつ、顔を覆っていた手の平を退けると、いつの間にか目の前に姿見が用意されていた。

そこには車椅子に座り、瞳を涙で濡らしている少女が映っている。

鏡に映るその少女は、大きな瞳を驚愕で丸くさせながら呆然とコチヲを見返している。

その少女の横には顔や姿まで酷似しているもう一人の少女が立ち、満足げな表情を浮かべていた。

「な、似合とるやろ？」

木乃香は俺の肩に手を置いて、もう片方の手でグーサインを作って見せた。

こ、これが……俺？

俺は本山で過ごしてきた長い間、意識的に鏡などで自分自身の姿を見ないようにしてきた。

だが久しぶりに自分の姿を見て満更でもないという考えが脳裏に浮かんだが、直ぐに頭の中から払いのけた。

……前の世界で俺は男だったんだ。

それに男として生きていた年数も……ってあれ？

そこまで差が無くなってきてる……？

最初は違和感を感じていたこの身体にも慣れてきたし、あと数年もしたら俺は完全な女に……。

「それにしてもウチとそっくりやな」

俺は木乃香にそう言われ、改めて鏡を見る。

鏡に映る二人の少女を見比べたが、片方の少女が車椅子に座っていないければ見分ける事が困難に近いと思われた。

ただ一つ、一つだけ違う点があるとすれば。

「着替えさせて分かったけど、うーちゃんホンマは……胸おっきいねんな」

木乃香は突然、俺の胸に手を置いて感触を確かめるかのように揉んできた。

「んっ……って、どこ触ってるん!？」

俺は顔が赤くなって全身が火照る妙な感覚を感じながら、胸を鷲掴みにし無造作に揉んでくる木乃香の手を慌てて払いのけた。

「あーん、もう少しだけいいやろ?減るもんやないしー」

木乃香は叩かれた手を片方の手で押さえながら、至極残念そうな表情を浮かべている。

……お前はオッサンか。

「断る。自分の胸を……さ、触ってるよ」

そう言い放ち、俺はそっぽを向いた。

やっと覗き魔たちから離れられたと思ったら、こんな所に伏兵が存在するとは夢にも思わなかった。

木乃香は先程の無礼を詫びてから、俺の胸をじろじろと見詰めながら「どうして大きくなった?」とか「そういえばサラシは何の意味が?」なんて質問を矢継ぎ早にしてきたので、俺は渋々ながらも返

答してやった。

一つ目の質問には牛乳。

二つ目の質問には弓道で邪魔になるので、いつも巻いてたらクセになった。

と簡単に答えておいた。

木乃香はその答えを聞きながら、何度も首を小さく縦に振って何やらメモを取っている。

……何故にメモ？

本当のところを言うと、サラシの件については他にも理由がある。

ブラ……下着を着けるのが恥ずかしいし、転成前には“無かった物が有る”というのはかなりの違和感なのだ。

その逆もまた然り。

“有った物が無い”というのも……いや何でもない。

そんな理由、木乃香に言える筈が無いが。

木乃香が余りにも熱心にメモを取っていたので、俺は怪訝に思いながら「何でメモを取っているんだ？」と木乃香に質問した。

すると木乃香はメモ帳を閉じ、おもむろに顔を上げて一度、ニッコリと笑うと。

「ウチ……うーちゃんの事もっと知りたいから」

そう言つて突然、俺の胸に抱き着いてきた。

「うお……おとつと」

俺は衝撃で車椅子が傾き、倒れてしまいそうになるのを何とか防ぎながら、先程のセクハラ続きかと思つて軽く木乃香を突き飛ばそうと思つたのだが……。

どうやら木乃香の様子が少し変なので、しばらく見守る事にした。

木乃香は俺に抱き着き、顔を胸に埋めたままピクリとも動かない。

「……………どうしたん？」

俺は少し心配になつて声を掛けると、木乃香は胸に顔を埋めたまま小さな声で話し始めた。

「ウチ、うーちゃんの事なんも知らんかった……なんも知らずに過ごしてきた、だから……だから」

木乃香が胸の中で小さく呟く声は、次第に啜り泣く声に変わり、最終的には嗚咽になつていった。

本当に泣き虫だな……そう心の中で思いながら愛しい妹を抱きしめ、そして頭を撫でてやる。

木乃香はいつも能天気なのほんと暮らしているように見えるが、

本当は感情の起伏が激しい性格でもある。

泣きたい時に泣き、笑いたい時に笑う。

そんな手間隙の掛かる妹を胸の中で抱きしめながら、俺は自責の念を感じずにはいらなかった。

余りにも一人にし過ぎた、と。

木乃香は刹那に避けられ、俺もない日々を六年間も一人で堪えてきた。

よく泣き言を言わずに頑張ってきたと思う。

本山にいた時、毎日のように送られてくる手紙には『寂しい』『や』『辛い』といった後ろ向きな単語は、一度も書かれていた事は無かった。

「あのな、ウチ……うちちゃんの事、本当のお母様みたいに思うる……優しいし、頭撫でてくれるし……それに」

木乃香の肩は小さく震え続けている。

お母様……か。

会った事も無ければ見た事さえ無い存在。

そして、二度と会う事が出来ない存在でもある。

その存在を、ずっと木乃香は。

「だから、うーちゃんは……ウチの事を避けたり、嫌ったりしんどいてな……もし、うーちゃんに嫌われてしまたらウチ、ウチ　　ッ　　!?」

俺は木乃香には似合わない泣き言が口からもう出て来ないように、強く……強く抱きしめてやった。

第三者がいるのなら、窒息死するのではないかと思われるぐらいに。

「俺は木乃香の事を嫌ったりなんかしないし、お前が望むのならお母様でも何にでもなってる……だから　　」

俺が強く抱きしめるのをやめると、木乃香はゆっくりと顔を上げた。

木乃香の目尻に溜まった涙を、そっと親指で拭ってやる。

「もう泣くな……木乃香に泣き顔は似合わない」

俺がそう言うと、木乃香は涙を拭いながら小さく首を縦に振った。

そして突立ち上がったと思えば、何度もかぶりを振ってから顔を両手で叩き……。

「うーちゃん……麻帆良案内の続き、行くえ!」

木乃香は落ち着きを取り戻し、表情を目映いほどに輝かせて……。

「……分かったえ、このちゃん」

いつもの“木乃香”に戻っていた。

あれから俺達は学生寮の外に出て、静かな麻帆良の町をのんびり歩いている。

今、目の前で木乃香は俺の為に麻帆良を一生懸命に案内してくれている。

事あるごとにココのお店のご飯が美味しいだとか、ここから見る景色が最高だとか、世界樹に纏わる伝説を俺に話してくれる。

もしかすると木乃香は俺に気を使っているのかもしれない、ふと心の中でそう思った。

木乃香は俺が6年間も本山で治療を受けていた事を知っているから。

俺に対して罪悪感も少し持っているのかもしれない。

自分は友達を作ったり、美味しい物を食べたり、自由に走ったり歩いたり出来る……だけど俺は。

別に……俺は治療の為だけに6年間も本山に閉じこもっていた訳で

はない。

弓道の稽古や料理の練習。

隠れて飛行練習やスタンド能力も使ったりしていた。

それに俺は麻帆良から月に何通も届く、木乃香からの手紙が楽しみだった。

新しい友達が出来た、とか。

美味しい物を食べた、とか。

友達と遊びに行った、とか。

先生に酷く怒られた、とか。

そんな些細な事を何行にも渡って書いて送ってくれる。

俺は木乃香のそんな手紙が大好きだった。

だから、俺の事を木乃香が気に病む必要は無いのだが……。

今まで自分だけが麻帆良に来て良かったのかと、悩んでいたのかもしれない。

昔の話になるが、俺が本山にいた時……ある日を境に手紙がパツタリと来なくなつた時期があつた。

毎日のように届く手紙が急に来なくなつたので、俺は何か理由を知

っているかもしれないと思って父さんに訊ねてみた。

木乃香に何かあったのか、と。

すると父さんは一瞬、悩んだ顔を見せて……自分が送っている手紙は本当に姉様は喜んでくれているのか。

自分が送り続けている手紙は本山で療養している姉様にとって、嫌味になるのではないかと相談してきた事を教えてくれた。

それを聞いた俺は、直ぐに手紙を書いて送った。

「俺は木乃香の手紙を、いつまでも楽しみに待っている」

その手紙を送ってから、木乃香から再び手紙が届くようになった。

手紙の量は以前の倍になり、一日に何通も届いた時もあった。

木乃香や刹那と離れ離れになり……足が不自由になり……辛くなかった、と言えば嘘になる。

それでも再び会える事を信じて、木乃香から届く手紙を励みにして……俺は今日まで頑張って生きてきた。

だから……だから。

「右手の方に住宅街とウチらの住んでる寮があつて、こつから丘の向こうまでが大学施設やら研究所やら、あつこが中等部と高等部の校舎やねー。商店街がヨーロッパっぽいのは……うーちゃん？」

ずっと黙り込んでいた俺を見兼ねたらしく、木乃香が心配そうに見つめてきた。

「あ、ごめん……ぼーっとしてたわ」

慌てて俺は謝罪の言葉を述べながら、少し苦労して微笑んで見せた。本当に俺は笑えているだろうか、と不安になった。

もしかすると顔が引き攣っているかもしれない。

先程から心の中に靄がかかり、気持ちの整理がつかない。

「ホンマに大丈夫？気分悪かったりせえへん？」

その場にしゃがみ込んで俺と視線を同じにし、木乃香は不安そうな顔で首を傾げている。

「だ、大丈夫……大丈夫やえ」

俺は笑ってごまかそうとした。

しかし、不意に瞳から涙がポロポロと零れ落ち始めた。

慌てて俺は手の甲で頬を流れていく雫を拭ったが、依然として涙は止まらなかった。

自分でも涙を流す理由が分からない。

感動して……？

それとも。

勿論、何の前触れもなく泣き出した俺を木乃香が見逃してくれる筈もなく。

「うーちゃん！？何で泣いてるん？やっぱり気分悪いん？いますぐおじいちゃん呼ぶから」

狼狽えながら携帯を取り出し、電話を掛けようとしていた木乃香の手首を掴む。

「違う……違うんや」

俺は片方の手で涙を拭いながら何度もかぶりを振り、木乃香の手首から手を離した。

「……ホンマにどないしたん？」

木乃香は心底心配そうな表情のまま、俺の様子を窺っている。

いつでも誰かに連絡を取れるよう、携帯を片手に持ったまま。

「あのな、木乃香……木乃香がウチの事、どう思ってるかよく分からへんけど……。可哀相とか私が護らな、とか思ってるんやったら……それは大きな間違いやえ」

俺は一拍置いてから、真っ直ぐ木乃香の顔を見据えてそう言った。

……これだけは木乃香に言っておきたかった。

本山で周りの人間から嫌という程、感じ取る事が出来た感情。

憐れみや、同情。

そんな感情を木乃香の言動の節々に感じたからである。

本山には数少ない理解者もいた……父さんや御影たちは俺の事を理解してくれていた筈だ。

俺が他人からの手助けを極端に嫌い、自分一人で何かを行おうとする事を。

他の人達は……俺が何かをしようとする毎に気を使い、手助けしてくれた。

……有り難い事だということは、重々承知しているし、俺は甘えた事を言っているのかもしれない。

素直に周りの人から手助けしてもらう、そんな生き方のほうが正しいのかもしれない。

だが……周りの人達が気を使ってくれる分だけ、俺の心が摩耗していく。

『また気を使わせてしまっている』と。

だから、俺は。

「う、うーちゃん……」

どうやら木乃香は俺の言葉に動揺したようで、視線が泳ぎ始めた。

「木乃香はウチとどう接したらいいのか分からんへんのやろ……そら、こんな姿になってたら驚くのも当然やるなあ」

俺は自らを嘲るように軽快に笑いながら、自分の太股を数回叩いてみせた。

「でもな、ウチは何にも変わってないえ。だから……木乃香も昔と同じようにウチと接してくれへん？」

無茶苦茶な事を言っているとは分かっている。

それでも木乃香に、木乃香にだけは本山にいた人達と同じ……憐れみの瞳で俺の事を見てほしくなかった。

木乃香は俯いたまま、黙って俺の話の話を聞いている。

「今まで離れ離れやったけど……これからは一緒に遊んで、一緒に美味しい物食べて、一緒に過ごそうな……ウチと木乃香はずっと一緒やえ？」

「……………うう……………姉様」

ようやく顔を上げた木乃香の瞳からは、大粒の涙が溢れ出している。

今度は泣かせてしまったな、と俺は心の中で苦笑した。

「もう何かで悩む必要なんて無いし、困った事があつたらウチを頼ってな?…………頼りないかもしれんけど木乃香の為なら何だってする」

「姉……様……」

「それにな木乃香……ウチな、ホンマは強いんやえ？木乃香の為なら誰にも負けへんから」

そう言つて俺は泣き腫らした瞳のままニッコリと笑い、ガッツポーズを作つて見せた。

今は能力や翼の事は話せないけど……いつか、きっと。

「……姉様ああああ！」

木乃香は肩を震わせ、しゃくり上げながら俺の胸に抱き着いてきた。

「よしよし、いい子……いい子……」

木乃香の頭を優しく撫でながら、ふと気付けば俺の目からも涙が溢れていた。

この時ばかりは……まるで幼子のように、わんわんと泣き声を上げながら一緒に泣いた。

それから木乃香と俺が再起動したのは十分後ぐらいだった。

「あ……マズイ。うーちゃん、急がんと授業始まっちゃっわ」

大事な事をふと思い出したように、木乃香は慌てた表情を俺に見せながら呟いた。

町の中央に建っている時計塔を見ると、時計の針は8時を差していた。

そういえば、俺も始業前に理事長の所に行かないと駄目なんだっけか。

「うーちゃん、ちょっと走る　あ、走ったら駄目……痛ッ」

未だに俺の心配をする木乃香の額に、強烈なデコピンを食らわしてやった。

俺を心配する事が癖になってるな……。

ま、仕方ない……か。

「大丈夫、ウチはそんなに弱くないえー」

額を押さえて呻く木乃香を見て、笑いながら俺はそう言った。

「あ痛たたた……分かったえ……じゃ、全速力で行くなー」

額を押さえていた木乃香は跳ね上がるように立ち上がり、俺をその場に置き去りにして走り出した。

いや、木乃香さん……全速力はちょっと……。

「ほらほら、うーちゃん置いてくえー！」

木乃香は俺から随分と離れた所で立ち止まり、振り向いて挑発する
ように手を振っている。

「ちょ……待ちーや！」

慌てて俺も腕に力を込めて、木乃香の後を追い掛けた。

そうして俺と木乃香は、麻帆良学園を目指して“走り”出した。

第十八話（後書き）

おまけ。

「いやあそれにしても、ふかふかで気持ち良かったわ〜」

ん…………“ふかふか”？

もしかして。

「木乃香、どさくさに紛れて…………まさか」

「その“まさか”やえ〜」

「こゝの〜か〜あ〜！」

「ウチにあるのはシンプルなたったひとつの願いだけ…………。」

たったひとつ！

『うーちゃんの胸を触る』！

それだけ…………それだけが満足感や！

過程や…………！！

方法なぞ………！

どうでもいいんやアーーーーーッ

「真面目な顔でふざけた事を言っなああああ！」

おわり。

第十九話（前書き）

一歩進んで二歩下がる。

それがこの駄作小説の特徴です（笑）

では……どうぞ。

第十九話

「じゃあウチ、教室で待つてるえー」

ぶんぶんと元気よく小さな手を振ってから、木乃香は長い廊下をパタパタと走り去っていく。

あれから俺は木乃香に学園長室前まで案内してもらい、そこからは別行動になった。

「今の時間は……」

制服のポケットに入っている新しく貰ったばかりの携帯を取り出して、時刻を確認する。

携帯のディスプレイには8時20分と小さく示されていた。

ポケットに携帯を挿込みながら「何とか間に合ったな」と心の中で安堵の溜め息をついた。

始業時間まで……かなりギリギリだと思う。

この麻帆良学園中等部の始業時間を知っている訳ではないが、恐らく8時25分から35分の間ぐらいだろう。

……もう少しで転入初日から仲良く姉妹で遅刻するハメになりそうだった。

全速力でココまで来たせいで荒くなった息を大きく深呼吸をして整

えてから、俺は目の前にある木製の扉をノックした。

コンコンと木の乾いた音が辺りに響く。

「……入りなさい」

数拍経って中から低く渋い声が聞こえてきた、恐らく学園長の声だろう。

「失礼します」

俺はヒンヤリと冷たい鉄製のドアノブを掴み、ゆっくりと扉を押し開けた。

開けるのではなく“押し”開ける。

今、押し開けている扉は普通の人なら何とも思わないただの扉だが、車椅子に乗っている俺にとって開き戸は障害物に近く……かなり開けづらい。

……まだ引き戸なら何とかなるのだが。

片手で扉を押し開けながら、もう片方の手で歩を進める。

片手だと俺の足は真っ直ぐ進んでくれない為、微調整しながら進む事になる。

少しでも扉が開いてしまえば後は車椅子でガリガリと扉を削りながら進むか、思い切り扉を押ししてから開いている隙を進むとか解決策は少なからずあるのだが……。

流石にそんな乱暴な入り方で学園長室に入室する訳にはいかない。

本山で生活していた時は大半が引き戸だった為、俺は開き戸にはあまり慣れてない。

モタモタしながら扉を押し開けて進んでいると、急に扉が俺の手から離れて全開になった。

急に開いた扉に内心で驚きながら俺は顔を上げると、眼鏡を掛けて温かな雰囲気醸し出している男性が微笑を浮かべて立っていた。

「ゴメンね、気が利かない男で」

その男性は自嘲するように言って、俺に微笑みかけてきた。

ふむ、これは明日菜が惚れるのも分からんでもない。

だが百点満点ではなく“90点”だな……って何を考えているんだ俺は。

俺は部屋の中に入りながら、その男性に小さく頭を下げた。

「いえ、ありがとうございます……出来れば次から扉を開けて下さる時に、一言掛けて頂けると幸いです……少し驚いてしまいましたので」

それを聞いた男性は目を少し見開き、恥じ入るように鼻先を指で掻きながら非礼を詫びてくれた。

俺は今、完全に“外交モード”に入っている。

世の中、第一印象が大事だからな……。

最近は大トモに敬語も話せない若者が増えたと聞いているが……いや、今はそんな事どうでもいい。

学園長室の中を見渡すと、二人の人物がいた。

窓際に設置されている机……黒檀だろうか？

その大きな机に座しているのは顎髭を伸ばして不自然に頭部の長い人物で、麻帆良学園学園長及び関東魔法協会の理事……そして一応、不本意だが俺の祖父に当たる人物でもある。

未だに信じられないな……俺が目の前にいる“近衛近右衛門”の孫に当たるなんて……。

俺も歳を重ねたら、あんな頭に……いや、考えるのはよそつ。

……想像したくない。

気を取り直して俺は穏やかな表情を浮かべ、目の前に立っている男性を見上げた。

眼鏡と無精髭がトレードマークであり、髪をオールバックにしている男性。

恐らくだが俺の担任になるであろう人物。

“デスメガネ”こと高畑タカミチである。

「おお〜そっくりじゃのう！噂には聞いておったが……のうタカミチ君」

今まで沈黙していた学園長が口を開き、俺を見つめながら高畑先生に同意を求めた。

「ええ、見分けがつかないぐらいに」

そう言つて高畑先生は首を縦に振り、俺を優しげな瞳で見ている。

ふむ……やっぱり似ているのだな。

「初めまして、今日から麻帆良学園中等部に編入させて頂く事になりました、近衛木乃羽です。よろしくお願いします学園長、タ、えつと……？」

ぺこりと頭を下げ、高畑先生とは初対面だが名前を知っているのどどうするべきか考えていると、俺は二人が目をパチクリとさせながら固まっていることに気づいた。

「……どうかなさいましたか？」

硬直している事を怪訝に思い、俺は首を傾げながら二人に尋ねた。

「ふお！いやいや少し驚いていただけじゃよ……ここまで礼儀正しいと中学生じゃないみたいじゃの〜」

学園長はそう言つて軽快に笑い、感心したように何度も首を縦に振

りながら長く伸びた顎髭を弄っている。

学園長の指摘はあながち間違っではない、俺は転生者で中身……精神は中学生ではないからな。

「あと、ワシの事は学園長ではなく“おじいちゃん”と呼んで欲しいのじゃが」

「自分は人間のつもりです、学園長」

俺は嘆願してきた学園長の言葉を遮り、口調を強めてキツパリと告げた。

「成る程、ブラックなジョークも言えるのじゃな。ふおっふおっ……くふっ」

最初はバルオン笑いをしていた学園長だったが、急に大量の血を口から吐いて机に突っ伏した。

「……が、学園長！」

高畑先生が慌てて学園長に駆け寄って、テキパキと介抱し始める。

さすが“ネタキャラ”だな、と目の前にいる洋梨に酷似した人物を俺は心の中で賞賛しながら、寸劇を行っている二人をぼんやりと眺めていた。

暫くして色々な“後片付け”が済み、仕切り直すように学園長は一度だけ咳払いをしてから口を開いた。

「さてと、冗談はここまでにして……ワシの名前は近衛近右衛門。ここ麻帆良学園の学園長で、君の祖父でもある。だから“おじいちゃん”と呼んで欲しいのじゃが……」

「先程も話した通り、私は“人間”です。化け物ではありません」

「ふおっふおっふお……ウボアー」

「学園長ー！」

俺が先程と同じような受け答えをすると、再び学園長から口から血を吐いて今度は椅子から転げ落ち、高畑先生が介抱を始めた。

事後処理が終わり、このままでは話が進まないと思ったのか……学園長を介抱していた高畑先生が一步だけ前に進み出て自己紹介を始めた。

「自己紹介が遅れたね。僕の名前は高畑タカミチ。気軽にタカミチって呼んでくれていいからね」

高畑先生は俺に近寄って手を差し出してきた。

勿論、この状況で手を差し出してくるといえば求めている行動は一つ、握手しかないだろう。

差し出された手を無下にする訳にもいかない。

更に、これから担任になるであろう人物なのだから友好的な関係を築いても損は無いだろうと思ひ、俺も握手をしようと手を伸ばした。

筈だった。

「ッ！」

俺は、気づけば高畑先生の差し出された手を思い切り払いのけていた。

目の前で起きている出来事を理解する事ができない。

あ、れ……？おかしいな。握手しようとしたんだけど……。

心臓が早鐘のように打ち、背中を嫌な汗が伝っていく。

目の前で繰り広げられた不可解な出来事を噛み砕こうと必死に頭を働かせていた俺だったが、数拍経って全身に軽い衝撃を受けた。

慌てて首を巡らして後ろを振り返ると、そこには先程入って来たばかりの扉があった。

あれ……何が、どうなって。

ふと前を見ると、学園長と高畑先生が見てはいけない物を見てしまったかのように硬直していた。

当然至極だろう、握手しようとした手が払いのけられ、その手を払いのけた当人は後退って怯えているのだから。

え……お、怯えている……？

俺が……何で……？

「は、はは……すみません。少しビククリしまして……」

とにかくこのままではマズイと思い、停止しかけている頭の中に浮かんできた言葉を苦勞して口から紡ぎだした。

全く言い訳になっていないが、自分でも何を言っているのか分からない。

「少し驚かせちゃったかな……」

高畑先生は俺に払われてしまった手で頭を掻きながら、申し訳なさそうな表情で言った。

「い、いえ……すみません」

慌てて俺は何度も頭を下げて自らの愚行を詫びたが、頭の中は真っ白で脳が再起動するまで少し時間が掛かりそうだった。

……本山の頃から少しおかしいとは思っていたが、もしかすると俺は男性恐怖症になっているのかもしれない。

気づけば本山にいた男のお手伝いさんもいなくなっていたし、こんな事は考えたく無いが……父さんに近寄られると気分が悪くなったりした。

俺の様子に気づいた父さんは「木乃羽ももうそんな年頃ですかあ」

とか遠い目で言って笑っていたが……。

よくテレビや漫画で『お父さんが入った後のお風呂はイヤ』なんて……娘が父親を嫌う描写があつたのを思い出してその時は、そんなモノなのかもしれないと自分を無理矢理に納得させていたけど……今、俺が取った行動は明らかに異常だ。

転生前が男なのに男性恐怖症ってどういう事なんだ……？

「……タカミチ君、まさかワシの孫娘に手を出すとは良い度胸じゃな……」

少しの間、嫌な沈黙が部屋の中を包んでいたが……剣呑な雰囲気滲ませながら学園長が高畑先生を睨みつけていた。

「う、誤解です学園長ッ！」

高畑先生は狼狽しながら学園長に駆け寄って弁解の意を唱えているが、学園長は聞く耳持たずといった様子だった。

俺はそんな二人を傍目に見ながら、先程の自分が取った意味不明な行動を思い返していた。

「どうして……」

そんな言葉が思わず口から零れ出した。

自分の事が分からなくなる……俺は。

中学生にしては、どこか大人びて見える。

それが僕の近衛木乃羽という……麻帆良学園中等部に編入してきた生徒の第一印象だった。

Side タカミチ

「自己紹介が遅れたね。僕の名前は高畑タカミチ。気軽にタカミチって呼んでくれていいからね」

そう言っ僕はニッコリと笑って彼女に歩み寄り、右手を差し出した。

男性から女性に握手を求めるのはマナーに反するが、どうやら彼女は少し緊張している様子だったので僕から握手を求めた。

麻帆良に来たばかりで不安や心配も沢山有るだろう。

それに彼女は いや、こんな事を考えるのは失礼だ。

とにかく、困った事があれば僕に相談してもらっても構わない。

そんな意味も込めて僕は握手を求めたのだが、彼女は僕が右手を差

し出した瞬間に。

「近寄るなッ！」

彼女は伸ばした僕の右手を思い切り払って、目を剥いて怒号した。

それまでの物静かな雰囲気からは考えられないほどの豹変だった。

彼女は心底怯えた表情に変わり、後退って背後にあった扉にぶつかった。

「は、はは……すみません。少しビックリしまして……」

彼女は顔面蒼白になり、項垂れるように俯いた。

あまりに唐突過ぎる展開に思考が追いつかない。

そして僕は暫くして、大きな過ちを犯した事に気がついた。

前もって資料には目を通した筈なのに、すっかり失念していた。

……彼女の過去に何があったか知っていた筈なのに。

「少し驚かせちゃったかな……」

僕は頭を掻きながら、彼女に謝罪した。

本当に何をやっているんだろうか僕は……。

「い、いえ……すみません」

彼女は何度も頭を下げながら呟くその声は、微かに震えていた。

そして彼女は蒼褪めた表情のまま俯いて、小さな声で何かを呟いている。

自分が取った行動を理解する事が出来ず、頭の中で自問自答を繰り返しているのかもしれない。

……嫌な沈黙が続く。

このままではいけないと頭の中では理解しているのだが、いざ行動しようとしても何と彼女に声を掛けていいのか分からない。

「……タカミチ君、まさかワシの孫娘に手を出すとは良い度胸じゃない……」

暫くの間……僕が彼女に掛けるべき言葉を探し倦ねていると、学園長が妙な雰囲気醸し出しながら睨みつけてきた。

学園長が助け船を出してくれた、と心の中で感謝した。

「い、誤解です学園長ッ！」

わざと大きな声を出しながら、僕は学園長に駆け寄った。

学園長と茶番劇を行いつつ、ちらりと横目で彼女の様子を窺う。

彼女の表情は少しだけ柔らかくなったように見えたが、それでも蒼褪めたままだった。

彼女を……あのような表情にさせてしまったのは僕の責任だ。

詠春さんから直々に彼女を頼まれた時は「守ってみせます」と大口を叩いた癖に、何てザマだ……。

両手が彼女に見えないよう机の裏に隠し、僕は自戒の意味を込めて拳を強く、強く握り締めた。

あれから学園長が麻帆良学園の事などを彼女に説明し、今は部屋の中に彼女の姿はない。

学園長が僕と話があると言って、少しの間だけ部屋の外で待っててもらっている。

勿論、話というのは彼女に聞かれると少し困る内容の物である。

彼女が部屋の外に出て、扉が閉まると同時に学園長が一瞬で人払い

と防音の結界を張った。

「どうじゃ、タカミチ君。ワシの孫娘は」

「ええ、恐ろしいほどの魔力量……木乃香君を初めて見た時でも驚いたのですが……木乃香君の倍は優に越えているかもしれません」

学園長にそう訊ねられ、僕は素直な感想を口にした。

人の魔力量は生まれたと同時に粗方だが確定する。

鍛練を積む事で多少は成長する、が……彼女のように爆発的に成長する事は無いだろう。

詠春さんからは『生まれた時、それほど差は無かった』と聞いているけど……。

何か特別な才能があったのだろうか、と僕は少し疑問に思った。

しかし……ここまで魔力を保有していると、彼女の将来が心配になってしまう。

樹液を多く精製する木には、その分だけ虫も集まって来る筈だ。

その虫を駆逐するように、僕も詠春さんから頼まれたんだけどね……。

ここ麻帆良学園は治安も良く、結界も張られている為……比較的安
全な場所だ。

だが、万全とは言えない。

未だに関西側とのイザコザも続いているし、彼女も此方側……関東魔法協会側に来た事によって保たれていた均衡が崩れた今、何が起きてても不思議じゃない。

「ふむ……」

学園長は何か考え込むように神妙な顔で、顎髭を弄っている。

「それと学園長……先程はすみませんでした」

僕は深々と頭を下げ、心の底から謝罪した。

……僕は彼女の過去を知っておきながら、古傷を抉るような事をしてしまったのだから。

「頭を上げるんじゃ、タカミチ君……気にしてはイカンよ」

僕は頭を深々と下げたまま、頭の中で少し前に目を通したばかりの資料を思い出していた。

関西呪術協会長の娘、近衛木乃羽誘拐事件。

機密事項の為、学園長に決して口外しない事を約束させられ目を通した資料には、想像を絶する内容が記されていた。

……。

ふと気づけば、アスナ君の事と重ねて考えてしまう自分がある。

悲しい過去を忘れて生きる事と、悲しい過去を忘れずに生きる事。

……どちらが幸せなのだろうか。

……僕達の選択は正かったのだろうか。

頭の中でその答えを探し続けたが、一向に見つかる気配は無かった。

S i d e E n d

第十九話（後書き）

ようやく次で麻帆良動物え……じゃなかった、麻帆良学園のハチャメチャクラスに仲間入り出来そうです。

……もう、いいよね？

ゴールしても……いいよね？

第二十話（前書き）

前回は鬱成分を多く含んでいましたが、今回は……。

では、じじじ。

第二十話

「……………」

学園長と高畑先生は少し大事な話があるらしいので部屋から退室し、廊下の窓からまるで映画のワンシーンのように見える綺麗な町並みをボンヤリと眺めながら、俺は先程の出来事を思い返していた。

開け放れた窓から春風が吹き込んで来て、僅かに髪を靡かせていく。本来なら心地好い風の筈が……………その時は何故か無性に苛立って、開いていた窓をピシヤリと閉めた。

訳の分からない不安が沸々と胸の中に沸いて来るのを感じる。

分からない事が多過ぎるが……………明らかに先程の自分は異常だった、それだけは断言する事が出来る。

その次々に沸いて来る不安を頭の中から放り出すかのように、俺は軽くかぶりを振ってから溜め息をついた。

動転している頭を鎮めようと軽く深呼吸を試みたが、胸の中に蔓延り続ける不安はこびりついて剥がれ落ちてくれなかった。

……………堪らなく不安になる。

自分の知らない所で何か大きなモノが蠢いているような気がした。

両手でスカートの裾をギュッと握り締め、歯を食いしばる。

木乃香、刹那……俺は。

その時、背後でガチャリと扉の開く音が聞こえたので、俺は首を巡らせて後ろを振り返った。

「ゴメンね、待たせてしまって」

口に煙草をくわえて辺りに紫煙を燻らせながら、部屋から出て来る高畑先生の姿があった。

「いえ……お構いなく」

そう言いながら無意識の内に俺の視線は、高畑先生がくわえている煙草に段々と集中していった。

……煙草か、いいイメージは無いな。

「あ、ああ……ゴメンね。直ぐに消すから」

どうやら気づかない内に顔を顰めていたらしく、そんな様子の俺に気づいた高畑先生はスーツのポケットから携帯灰皿を取り出して、紫煙を燻らせていた煙草を挿込んだ。

恐らく高畑先生は、俺の肺が丈夫でないことを知っていたのだろう。

「すみません、気を使っていたいて……」

俺は申し訳なくなつて、車椅子の上で小さく頭を下げた。

「いや、こちらこそゴメンね……」

俺が顔をゆっくり上げると、高畑先生も頭を下げていた。

暫くして、俺と同じように顔を上げた高畑先生と目が合った。

「謝ってばかりですね……自分達」

俺は何だか可笑しくなって、思わず小さく吹き出してしまった。

「そうだね、さっきから謝ってばかりだ」

高畑先生も表情を柔らかくして、微笑みを浮かべている。

こうして見ると、先程の出来事が嘘のようだった。

先程まで何か悪い夢を見ていた、そんな錯覚さえ覚えてしまうほど和やかな空気が辺りを包んでいた。

「それじゃ、教室まで案内するよ」

「はい、お願いします」

そう言って俺と高畑先生は、誰もいない廊下を歩き始めた。

どうやら高畑先生は俺に歩調を合わせてくれているらしく、そのお陰でノンビリと教室に向かう事が出来た。

非の打ち所が無い紳士だな、と俺の横を歩いている高畑先生を心の中で褒め称えた。

「どうだい、綺麗な学校だろう？」

歩を進めつつ……高畑先生は柔らかい表情を崩さぬまま、俺の目を見つめている。

俺は高畑先生の目をじっと見つめ返してから、言葉を発する事なく首を縦に振った。

「それは良かった」

高畑先生はニツコリと笑ってから、再び真っ直ぐ前を向いた。

「……木乃羽君、何か困り事が有ったら何でも相談してね」

前を向いたまま、優しい口調で高畑先生はそう言った。

「は、はい。よろしくお願いします、高畑先生」

世の中に高畑先生のような人が沢山いればいいのになと思いつつ、俺は咄嗟にそう返答した。

「そんなに緊張しなくていいよ、それに……僕の事はタカミチで構わないからね」

柔らかかに微笑みながら高畑先生は言った。

自分では緊張しているつもりはないのだが……。

「そんな、呼び捨てだなんて……」

年上の方、ましてや自分の担任になる先生を呼び捨てで呼ぶのは流石に抵抗があつた為、俺は表情を曇らせて俯いた。

「いや、無理強いはいしないよ。その方が木乃羽君が緊張しなくて済むかなと思っただけさ」

そう言つて最後に「忘れてくれていいよ」と呟いた高畑先生の横顔が、少し翳りを帯びたように見えたので。

「で、ではタカミチ先生……と呼ばせて頂いてもよろしいですか？」

俺がそう言つと、高畑先生は若干嬉しそうな表情になつてから無言で頷いた。

「あ、ほら……着いたよ」

突然、高畑先生に告げられて俺は少しだけ顔を上げた。

見上げた先には中等部一年A組と書かれた札が下げた教室があった。

どうやら何だかんだ話をしている間に、目的地の教室まで着いてしまったようだ。

窓もドアも閉めきつている筈の教室から、恐ろしいほど大きな嬌声が洩れている。

まるで動物園みたいだな、と俺は心の中で嘆息した。

しかも今から……この動物園の仲間入りしないとイケないんだよね……。

「転人生が来るってクラスの皆には言ってるから、木乃羽君から入ってみるかい？」

タカミチ先生は珍しく、悪戯っ子のような表情を浮かべている。

こんな顔も出来るんだなと思いつつ、俺はタカミチ先生の提案に乗ることにした。

いきなり入ってみるのも一興かもしれない。

そんなくだらない事を考えながら、俺は若干の隙間が空いている教室のドアに手を掛けて、元気よく開けようとしたのだが。

「あ、ちょっと待って……やっぱり僕から入る事にするよ」

「は、はい。……？」

突然、背後からタカミチ先生に声を掛けられた俺は、怪訝に思いながらも教室のドアから手を離して後退した。

「……ホント、元気過ぎて困るよ君達は」

一度だけ肩を竦めてから教室のドアを開け、タカミチ先生は少しだけ手を真上に上げたかと思うと。

「あ……」

思わず俺は口から驚愕の声を洩らしてしまった。

教室のドアに黒板消しトラップが設置されていたのだ。

「はい、コレを仕掛けた人は素直に手を挙げる事。……じゃないと宿題をプレゼントするからねー」

そのトラップを何事も無かったかのように平然と回収して、後ろ手で教室のドアを軽く閉めながらタカミチ先生は教室へと入っていった。

そして直ぐに教室の中から不平不満の声を上げる生徒達の声が聞こえてくる。

トラップに全く気づいてなかった俺は、タカミチ先生に心の中で感謝した。

あのまま教室に入っていたら……仕掛けた方も仕掛けられた方も気まずい最悪のパターンになっていただろう。

「木乃羽君、入って来て良いよ」

暫くドアの前で待機していると、教室の中から俺を呼ぶタカミチ先生の声。

今更だが……何だか緊張してきた。

意を決して俺はドアを開け、騒がしい動物園の中にゆっくりと入っていく。

幸いな事に、この教室には教壇が存在しない為……俺は何の苦勞もせず教卓の後ろに立っているタカミチ先生の横まで進み、好奇の視線を送ってくるクラスメイトと向き合った。

少しだけ教室内がざわめき始める。

車椅子の人間が入って来たのだから、当然と言えば当然かもしれない。

自己紹介を行う前に、俺はうる覚えになっている原作キャラを思い出す為、左側から順番に生徒の顔を眺めていく事にした。

茶々丸とエヴァ……はまだ覚えている。

この辺の列で分かる生徒は……後は刹那ぐらいか。

「……………」

俺と目が合うと同時に、刹那は直ぐに視線を逸らして俯いてしまった。

やっぱり駄目か……と残念に思いつつも俺は順番に生徒の顔を眺めていく。

アスナと木乃香……やめる木乃香、手を振るな。

……恥ずかしいだろ。

えーと、最後は右端の　ん……今、見えてはいけないものが見えたような気がするのだが。

……まさか、新手のスタンドッ!?

という冗談は置いて。

青白くボンヤリと、誰にも気づかれる事なくこの世に存在している少女は、まだ俺の視線に気づいていないようで窓の外を眺めている。

確か何十年も教室の中にいた筈だ……そりゃあ転入生が来ても興味湧かないのも当然だよな。

名前は、相坂さよ……だっけ?

何で見えるし……もしかして最初から“いる”って分かってるから見えるのか?

俺は考え事に耽りながら、その幽霊少女を観察していると。

『…………?』

どうやら俺の視線に気づいたようで、幽霊少女と目が合ってしまった。

俺は慌てて左を向いて視線を逸らすと、自分が見えているのかを確認する為かどうかは分からないが、幽霊少女が不思議そうな表情をしたまま視界に映り込んできた。

今度は右を向いて視線を逸らすと、また幽霊少女が視線の先を追い掛けるかのように、音も無く移動してくる。

最終手段で俯いてみると太股の辺りから顔だけが突然現れて、俺の顔を下から覗き込んできた。

……怖いわ、もう少しで悲鳴を上げるところだったぞ。

『もしかして……私の事、見えてます？』

ついに声まで聞こえてしまった……。

瞳を潤ませて俺の事をじつと見つめてくる幽霊少女に根負けし、俺は無言で頷いてみせた。

会話してやりたかったが、ここで俺が声を出すと教室にいる全員から変人扱いされてしまう。

俺が黙ったまま頷いてみせると、途端に幽霊少女は表情をパツと輝かせて。

『本当ですか！？……嬉しいですー！』

歓喜の声を上げながら、その嬉しさを体現するかのように教室の中を縦横無尽に飛び回っている。

やっべえ……自己紹介どころじゃなくなってきた。

よくよく考えたら、教室に入って無言のまま一分以上経ってるよな……俺。

『私“相坂さよ”っていいいます！……あ、お名前教えてもらってもって、今から自己紹介して下さるんですね！もしかして私、

座ってた方がいいですか？』

かなり興奮しているらしく、相坂の声は上擦っていた。

俺が再び俯いたまま無言で首を縦に振ると、相坂は教室の中を飛び回るのを止めて静かに席に座ってくれた。

それを見て俺は、ようやく自己紹介が出来ると安堵の溜め息をつきながら真っ直ぐ前を向いた。

「えー、ゴホン……俺の名前は近衛木乃羽。名字で分かると思うが、このクラスにいる近衛木乃香の双子の姉だ……よろしく頼む。俺からは以上です、タカミチ先生」

俺は一度だけ咳払いをしてから、簡潔に自己紹介を済ませて横に佇んでいるタカミチ先生の顔を見上げたのだが……。

「あ、うん……皆、仲良くするようにな」

どうやらタカミチ先生は俺の口調に驚いたらしく、少しだけ眉を吊り上げていたが途端に何かを悟ったらしく、穏やかな表情に戻って俺に微笑みかけている。

「……？」

俺はそんなタカミチ先生に疑問に思いながら、ゆっくりと視線を前に戻すと。

「……そっくりー！」「」

……クラスのほぼ全員が大声を上げながら、俺の元に駆け寄ってきていた。

「何コレ！？そっくり過ぎない？鳴滝姉妹より似てるよ！」

「もしかして最近話題になってるクローンってやつ？」

「肌、白いねー！しかもスツベスベだし」

次々に髪や肌……おまけに顔を生徒達に引っ張られて、俺は揉みくちゃにされていった。

痛たたたた、止め……髪を引っ張つ……顔はやめる顔は。

「千切れちゃうから、あんま引っ張ったらあかんえー」

遠くから我が最愛の妹の声が聞こえてきたが、馬鹿な事を言っていないで早く助ける。

それと刹那、お前絶対笑ってるだろ。

俯いてるからバレてないと思ってるのなら大間違いだぞ。

「うっわ、髪の毛サラサラ！ねえねえシャンプー何使ってるの？」

「ボディソープはー？」

「どこから来たのー？」

「好きな食べ物はー？」

生徒達から数多の質問をぶつけられ、どうする事も出来ずに俺は揉みくちやされながら黙っていたのだが。

「はい傾注傾注ー！みんなストップー！」

パイナップルのような髪型をした生徒が手を叩き、暴動を鎮圧してくれた。

「転入生への質問は……この私、朝倉和美に任せなさい！」

そう言つて朝倉は何処からともなくボイスレコーダーと手帳を取り出して、意気揚々と俺に近づいてきた。

「あ、そうだ……先生、転入生への突撃取材（質問会）を行つてもいいですかー？」

クルクルと器用に小さなボイスレコーダーを手の平の上で回しながら、朝倉は屈託のない笑顔でタカミチ先生に問い掛けた。

おい……本音と建前が逆になつてるぞ。

「ん、本当は授業しなくちゃいけないけど、少しだけだったら構わないよ」

「「いえーい！さつすが高畑先生！」」

担任の公認許可が下りた今、生徒達の気分は『最高に“ハイ”つてやつたアアア』状態になっているようだった。

どうせお前ら授業をサボりたいだけだろと心の中で毒舌を吐きながら、一応俺の為に開かれたと思われる質問会に渋々付き合う事にした。

クラスの皆が席に座って落ち着いたところで朝倉が椅子から立ち上がって俺に近寄り、在り来たりの質問会がスタートした……筈だった。

「早速質問させてもらつよー。じゃあねえ、まずは小手調べで……
“スリーサイズ”は？」

「……はぁ？」

思いも寄らない朝倉からの質問を耳にして、俺は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

小手……調べ……？

いや……普通は『何処から来たの？』とか『何で麻帆良に？』とか
当たり障りのない質問からだろ？

「さすが朝倉！私たちに（常識的に考えて）出来ない事を平然と
やってのけるツ！そこにシビれる！あこがれるウ！」

聴衆は聴衆で何か盛り上がってるし……。

もう駄目だコイツら……早くなんとかしないと。

「だーから、スリーサイズは何って聞いているの！」

不満そうに近くにあった教卓をバンと一度だけ叩いてから、朝倉は声を荒げている。

俺は脱力のあまり二の句が継げなくなっていたが、暫くして脳が回復した俺はきつく眉を顰めて迷惑極まりないパラッチを睨みつけた。

「そんなもの調べた事はないし、例え知っていたとしてもアンタにだけは絶対に教えない」

俺が強く言い切ると、朝倉はさも不服といった様子で口を“へ”の字に曲げている。

「ケチだなあ……ま、いいや“セルフ”で調べるから」

朝倉がそう言った瞬間に、俺は生理的嫌悪寒を全身でヒシヒシと感じた。

「な、何だよ……」

俺は思わず身を硬くして車椅子の上で身構えたが、そんな事はお構いなしといった様子で朝倉は嫌な目つきで俺をジロジロと見ている。

「説明しよう！私の瞳は対象者のスリーサイズを測量する事なく、完璧に調べれる夢のような瞳なのだ！」

そう言いながら朝倉は舐め回すような視線を俺に送ってくる。

いや……説明しないでいいから。

「ヒップは……ふむ、ウエストは……成る程成る程」

鳥肌が立ち、寒気が全身を駆け巡る。

「バストは……むむツ!？」

ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべていた朝倉だったが、突如として妙な声を上げながら瞳を大きく見開いて硬直した。

「お、おい……どうし」

俺は嫌な寒気を感じながらも怪訝に思い、変態に声を掛けたその瞬間――。

「……近衛木乃羽!きさま!巻いているなツ!」

朝倉は突拍子もなく大声を出しながら、右手で顔を隠して反対の手で俺をビシッと指差した。

は?巻い……何だって?

「服の中に何かを巻いて胸をガードしているな……その何かで拘束器具のように胸に巻きつけて、サイズをこまかしているだろう……この私に自らの情報スリーサイズを調べられないようにするとは……策士だな、ぬけめない人間め」

「それはお互いのようじゃ　って違あああう!」

駄目だ、コイツラと話していると調子が狂う。

「隠すのなら……いずれ“触診”しないとイケないわねー」

ポリポリと頭を掻きながら朝倉は、さも当然とばかりにそう言った。俺は虚を衝かれて、一瞬だが口をポカンと開いたまま硬直してしまっただ。

触診で、お前……。

「はいはい、質問ー」

髪をツインテールにして纏め、中学生には到底見る事が出来ない体躯の少女が、右手を高々と挙げて立ち上がった。

確か……このクラスにいる双子、鳴滝姉妹の姉の方か？

「風香君、特別に発言権をやるう」

朝倉は偉そうに胸を張り、顎を摩っている。

……もう突っ込まないからな。

「彼氏はいるのー？」

無邪気な笑顔を浮かべながら、質問してきた鳴滝に対して俺は、少し眉を顰めてから「いない」と一言でキツパリと返答してやった。

だが、手帳の上でペンを走らせていた朝倉は納得出来なかったようで、ペンを握っている手を止めてから訝しむような瞳で俺の表情を窺っている。

「……………本当にいい？」

朝倉は腕を精一杯伸ばしてボイスレコーダーを俺に近づけながら、口説いばかりに念を押ししてくる。

くだらない質問に辟易していた俺は嘆息しながら目を瞑り、何も考えず反射的に『男に興味は無い』と無愛想に答えてやった。

その時、瞬間的に空気が固まったような気がした。

もしかして今の発言はマズかったかもしれないと心の中で沸々と焦りが沸いて来て、俺は恐る恐る瞼を開いたが……時既に遅しであった。

俺の瞳に大半の生徒がニヤニヤと嫌な笑みを浮かべている光景が映る。

そして。

「きゃあああああああ！」

「爆弾発言だあああああ！」

「公式百合宣言だとお！？」

「うーちゃんはウチの事、大好きやもんなー」

俺が今の発言を取り消そうと口を開きかけた瞬間、大勢の黄色い声が俺の耳に飛び込んできた。

おい誰だ、最後に発言した奴。

今や教室の中は阿鼻叫喚の騒ぎとなっている。

しまった、失言だった……！

「ちがッ、違うって！今の発言にそんな深い意味は」

慌てて俺は両手を振って、否定しようとしたが。

「百合っ娘じゃあああああ！今夜は祭じゃあああ！」

「祭じゃ祭じゃああああ！」

「槍を持って、出陣じゃああああ！」

「違っッて言ってるだろテーマーらああ！」

真っ赤に燃え盛っている炎に、油を注いだだけの結果に終わった。

俺は顔が紅潮して火照っていくのを感じながら必死に弁明を続けたが、教室の中の熱気はどんどんとヒートアップしていく。

もう……どんちゃん騒ぎのお祭り状態である。

ある者は、祝杯だと言って優雅にワイン……によく似た葡萄ジュースを飲み始め。

ある者は、これは薄い本が出るなど呟いて眼鏡を光らせながら不気

味な笑みを浮かべ。

ある者は、うーちゃんはウチの嫁宣言を声高らかに言う奴もいる。

もう突っ込み所が多過ぎて、どこから突っ込めばいいのか分からない。

俺はいつの間にか教室の隅に避難して掃除箱に背中を預け、呆然と佇んでいる高畑先生に助け（武力介入）を求める視線を送ったが、目が合った瞬間に俯いて首を左右に振られてしまった。

目の前の惨状を眺めながら俺は思わず額に手を当てて、肩をガックリと落として溜め息をついた。

もうやだ、このクラス……。

第二十話（後書き）

作者は切に願った……キンクリがしたい、と。

ほのぼのとシリアスを上手く調合出来ないものかと模索する毎日を
作者は送っております（笑）

第二十一話（前書き）

今回は短いです。

では、さようなら。

第二十一話

あの後、2 Aクラスメイトによるお祭り騒ぎはタカミチ先生の（武力）介入によって鎮圧された。

クラスが落ち着きを取り戻した後は俺の好物や趣味、入部する予定の部活など当たり障りのない質問を朝倉から受けた。

最初からこういう質問をしるよ、と心の中で思いながら俺は逐次、それらの質問に返答していたのだが。

「じゃあさ、特技は何かある？」

朝倉は俺に質問しながら凄まじいスピードで手帳にペンを走らせている。

「特技、か……少し待ってくれ」

俺は曖昧に首を傾げてから答えた。

料理と弓道は話題に使ってしまったので、改めて自分自身の特技を考えてみたのだが、頭の中に思い浮かんでこなかった。

散々考えた挙げ句、俺が苦し紛れに出した答えは「簡単なマジックなら出来る」だった。

俺の返答を聞いた瞬間、ぴくりと朝倉の眉が吊り上がった。

「へえ、見せてもらってもいい？」

朝倉は瞳を輝かせて興味津々といった様子で訊ねてくる。

ふと教室を見渡すと、大半の生徒が俺に好奇の視線を向けていた。

マジックというモノは、こんなにも女子中学生の気を引くのだろうか？

「ああ、いいけど……そんなに凄くないからな」

そう言っただけ俺は肩を少しだけ竦めてから、マジックの用意に取り掛かった。

……用意と言っても、ただ背後にあった白いチョークを手に持っただけだが。

「さて……ここに何の変哲もないチョークがある」

俺はクラスの全員が見えるように、チョークを持っている右手を掲げた。

「そして……このチョークを」

俺はチョークを胸の前まで持つてくると、両手に力を込めて

「折る……っつと」

パキッと乾いた音を教室の中に響かせて、俺はチョークを真っ二つに折った。

あれだけ馬鹿騒ぎしていた筈の教室に、チヨークが折れる小さな音が響き渡るなんて奇跡に近いかも、なんて思いつつ。

そして、俺は真つ二つに折れたチヨークを生徒達に見えないように両手で握り込み。

『…………元に戻す』

口にはせず、頭の中だけで不思議な“呪文”を唱える。

両手に包み込まれているチヨークが、どうなったかは言わずもがなである。

本当は『ザ・ワールド』を使って瞬間移動や『キラークイーン』による爆破シヨールなど、もう少し派手なマジックをするつもりだったのだが…………。

『ザ・ワールド』は魔力を大量に使用する為、“裏”に関わりを持つ者には俺が魔力を使用した事がバレてしまうだろう。

百歩譲って生徒に魔力使用がバレるのは仕方ないとしても、タカミチ先生にバレるのは非常に拙いので『ザ・ワールド』の案は却下。

『キラークイーン』は魔力をほぼ使わないが、色々面倒事が起きそうなので却下。

よって、マジックの種は安心安全の『クレイジー・D』で落ち着いた訳で。

『キラークイーン』と『クレイジー・D』の魔力使用量は0に近い。

裏の人間が目を凝らして俺を見ていても、恐らくだがバレる事はないだろう。

暫くして、俺は握り込んでいた両手をゆっくりと開いた。

当然、真っ二つになっていた筈のチョークは元通りに修復され、手の平の上に乗っている。

「これで終わりなんだが……どうだった？」

俺はマジックを見せ終わり、観客の反応を待った。

しかし……暫くしても観客の反応が無かった為、俺は少し不安になって無言のまま固まっている生徒達に訊ねた。

もしかして……つまらなかったかな？

「「「す……」」」

「……酔？」

「「「す……うーい！」」」

先程のように生徒達が波のように押し寄せてきて、周りを囲まれてしまった。

「す……くっついてるし！」

「ねえ、もう一回やってよ！」

「まさか転入生がマジシャンだったとは……」

騒がしいクラスだが……こんなクラスも悪くない……そんな事を考えながら、再び俺は生徒達に揉みくちやにされていった。

まさかマジックの種を探すと言われて全身を弄られ、セクハラされるとは思ってもいなかったが。

「さて、質問会もこれぐらいにして……授業を始めるよ」

掃除箱の前から教壇の横まで移動して、ちらりと腕時計を一瞥してからタカミチ先生は、教室に響き渡るぐらいの大きな声で言った。

タカミチ先生に促されて不平不満の声を上げつつも、嫌々ながら席に着いていく生徒達。

変に物分かりは良いんだよな……コイツら。

「あ、そうだ……木乃羽君の席はエヴァ君の横でいいかい？」

タカミチ先生は失念していた、といった様子で恥ずかしそうに頬を人差し指で掻きながら、反対の手でエヴァンジェリンの左隣の席を指差した。

俺がタカミチ先生が指差した席を見つめた時、隣の席に座っていた金髪吸血鬼……エヴァンジェリンと目が合った。

片肘を着いて退屈そうに座っていたエヴァンジェリンは、俺と目が合った瞬間に鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまった。

「気にしなくていいよ、本当は優しい娘だからね」

タカミチ先生は優しい微笑みを浮かべ、俺の目を真っ直ぐ見つめて言った。

即座に「余計な事は言わんでいい」とエヴァンジェリンから突っ込みが飛んできたが……タカミチ先生はニコニコと笑ったままで、一切気にする様子はなかった。

「あ、タカミチ先生……最後に一つだけ、いいですか？」

不意に忘れていた事を思い出した俺は、横に立っているタカミチ先生の顔を見上げながら口を開いた。

「……構わないよ」

俺の発言に最初はキョトンとしていたタカミチ先生だったが、直ぐに優しい表情を浮かべて首を縦に振ってくれた。

俺は生徒達の方に視線を向けて、一度だけ咳ばらいしてから口を開いた。

「見て呉れの通り、俺は足が少し不自由だ……立てない訳では無いんだが、車椅子に座っている……だから、何かと皆の手助けを借

りる事が多くなるかもしれない。迷惑だとは思つが、その時は……
よろしく頼む」

そう言つて俺は車椅子の上で、深々と頭を下げた。

するとー。

「ドンドン頼つてよねー！」

「迷惑だなんて……合法的に美少女に触れるんだから、寧ろ嬉しいからー！」

「お嬢様抱つこで運んであげようかー？」

「うーちゃんはウチの物やえー」

俺が顔を上げると、誰一人として嫌がるそぶりも見せずに快諾してくれた。

……だから最後の奴、ちよつと屋上までこい。

クラスメイトの軽い対応は些か俺に拍子抜けの感を味わせてくれたが、本心では凄く嬉しくて心がポカポカと暖かくなった。

「……あ、ありがとう」

思わず嬉し泣きしそうになった俺は気持ちを紛らわせる為、指定された席に向かう事にした。

刹那には視線を逸らされてしまったが、机と机の間を通る時も皆か

ら優しい声を掛けられた。

……泣きそうになってるから止めてくれ。

父さん、俺……麻帆良に来て良かったかも。

「じゃあ……授業を始めるから、教科書の」

今、タカミチ先生は教科書を片手に持ち、黒板の前に立って授業を始めている。

エヴァンジェリンの隣の席まで移動した俺は、とりあえず挨拶ぐらいはしておこうと思って口を開きかけたのだが。

「ふん……ソレでは宝の持ち腐れだな」

エヴァンジェリンは俺の足を一瞥してから、嘲笑するように鼻で笑った。

エヴァの口調は皮肉で満ちていて、容赦というものは無かった。

「何が言いたいのか良く分からんが、これからよろしく頼むよ……」

“先輩”」

俺はエヴァンジェリンの皮肉を軽く受け流し、飄然と肩を竦めてから軽い“挨拶”を済ませた。

「おい貴様、今のはどういう意味」

エヴァンジェリンは眉根を寄せて俺を睨みつけ、問い糾そうとしてきたのだが。

「……エヴァ君、授業中だよ」

タカミチが注意勧告の為に飛ばしてきたチヨークを見事に額の前で受け止め、そのまま握り潰した。

握り潰されたチヨークの破片がパラパラと机の上に落ちていく。

「チツ……興が醒めた」

エヴァンジェリンは顔を歪めて苛立ちを顕わにし、タカミチ先生を睨みつけてから急に椅子から立ち上がると何も言わずに教室から出ていった。

高畑先生はそんなエヴァンジェリンを見て深い溜め息をついていたが、気を取り戻したように新しいチヨークを右手に持つと、授業を再開し始めた。

タカミチ先生が鳴らしているカツカツと心地好いチヨークの音を聞きながら、俺は主がいなくなった隣の席をボンヤリと眺めた。

さて……教科書を見せてもらうつもりだったのだが、どうしようか。エヴァンジェリンの席を見つめながら思考に耽っていると、ふと誰か視線を感じたので俺は前を向いた。

するとエヴァの前の席に座っている茶々丸が俺をじっと見つめていた。

……首だけを180度回転させて。

恐いから……。

無表情のまま俺を見ているので、茶々丸の感情を読み取る事が出来なかった。

もしかして……怒っているのだろうか？

「……悪い」

とりあえず頭を下げて、俺は謝っておくことにした。

「何故、謝るのですか？」

俺を真つ直ぐ見つめたまま、茶々丸は小首を傾げている。

「いや、特に理由は……あのさ、エヴァンジェリンの教科書、借りてもいいかな？」

所有者の許可も無く教科書を拝借するのは心苦しかったので、何となく茶々丸に訊ねてみた。

「……少々お待ち下さい」

そう言つて茶々丸は瞳を閉じて、黙り込んでしまった。

もしかして念話してるのか……？

「構わないそうです、しかし……それなりの対価を要求すると言っています」

暫くして瞳を開いた茶々丸は、首を180度回転させたまま口を開いた。

対価……ねえ。

「そうか、ありがとうな……茶々丸」

俺は少し微笑みながら茶々丸に礼を告げ、エヴァンジェリンの机から無造作に詰め込まれていた教科書を拝借した。

「……何か可笑しい事がありましたか？」

茶々丸は再び首を傾げて俺を見ている。

確か茶々丸は原作の一年前だと、生まれたばかりだったような気がする。

俺が「いずれ茶々丸も分かるようになる」と茶々丸に告げると、更に首を深く傾げてしまった。

この後、茶々丸の後頭部にタカミチ先生が「私語は慎むように」と
投擲したチヨークが直撃したのだが、省略させてもらう。

勿論……チヨークは俺の額にも直撃した。

第二十一話（後書き）

今月のシフト表が鬼シフトだった為、6月の更新は少なくなると思います（汗）

……ご了承ください。

第二十二話（前書き）

ヒッター！久しぶりの更新だアー！

では、ごきげん。

第二十二話

昼休みを知らせる鐘が学校内に響き渡る。

借りてきた猫のように物静かだったクラスが、鐘が鳴ると同時に騒がしくなっていく。

……静かだった、と言っても他のクラスと比べれば騒がしい事この上ないと思われるが。

教科書やノート、筆記用具を机に押し込んで仲の良いグループと机を寄せ合い、小さな可愛らしい弁当を広げる者たち。

早く食堂に行こうと言って、友達と教室から脱兎のごとく飛び出していく者たち。

大きな声を張り上げながら、教室内で肉まんの出張販売を始める者などなど……。

本当に見ていて飽きないな……と率直な感想を心の中で思いつつ、俺は感動の再会が有耶無耶になっていた刹那と接触することにした。

幸い、まだ刹那はノートを纏めているようで……ペンを忙しく動かしている。

そういえば、刹那って勉強がどちらかと言えば不得手だったような……。

バカレンジャーの仲間入りになる一歩手前ぐらいじゃなかったか……

…？

俺が小さい頃、○歳児には有り得ない知識を用いて二人に国語や算数を教えた時……木乃香は直ぐに理解してくれたけど刹那は頭の上にクエスチョンマークを大量に浮かべていたからな……。

……○頭か、○頭なのか？

見る限りでは、ただ刹那は黒板に書かれた事だけをノートに写しているように見える。

今度、勉強の仕方を教えてやるからな……刹那。

さてと……此方が待っていても刹那はいつまでも話し掛けてこないだろうし、後手後手に回るのは俺の性分ではない。

早速、勉強している刹那に声を掛けようと自分の席から移動し始めた。

だが刹那は俺が近づいてきた事に気づいたらしく……急に荷物を纏めて鞆を持って立ち上がり、教室を出ていこうとした。

俺は急いで刹那の後を追いつけようとするが机と机の間が狭く、四苦八苦しながらも車椅子で何とか通り抜ける事が出来た。

「……刹那！」

俺は教室のドアに手を掛けた刹那の背中に声を掛けた。

だが刹那はピタリとその場に立ち止まっただけで、俺に顔を向けて

はくれなかった。

「このはお嬢様、お久しぶりです……では、私は用事がありますので」

刹那は振り返ることなく、まるで台詞を元から用意していたかのようになんげと俺に告げると、教室の扉を荒々しく開けて外に飛び出していった。

直ぐに俺も教室を出ていった刹那の後を追いつけたが、廊下に出た時には刹那の姿はどこにも見当たらなかった。

まさか、ここまでとはな……。

「……はあ」

俺は肩をガツクリと落として嘆息した。

ある程度、覚悟はしていたが……これほどまでに避けられると少し心が痛んだ。

俺が“アノ”事を打ち明けてしまえば……少しは改善されるのだろうか？

「……うーちゃん」

暫くの間、俺は呆然とその場に佇んでいると後ろから声を掛けられた。

後ろを振り向いて上を見上げると、沈鬱な表情で俺を見つめている

木乃香が立っていた。

「ウチもな……ウチも、せつちゃんに避けられてるんや。……ウチら、せつちゃんに何か悪い事してしもたんかな……」

木乃香は俺の顔を見つめながら不安げに言った。

「……………」

俺は応える言葉を持たず、ただ黙って俯く事しか出来なかった。

木乃香は刹那の余所余所しい態度を見て、胸の内不安を膨らませているのだろう。

「うーちゃん、教室に戻る……今日な、うーちゃんの為にお弁当作ってるえー！それにうーちゃんの事、皆に紹介したいし……な？」

懇願するように、縋り付くような瞳で木乃香は俺に言った。

その姿は……まるで俺が木乃香の最後の支えになっているかのようで、見ている此方の心が痛々しく感じるほど木乃香の様子は沈鬱だった。

……かなり無理をしているように見える。

それに加えて木乃香の言葉には諦念が滲んでいるように感じられた。

木乃香も刹那に何度も接触を試みたのだろう、だが全て失敗に終わった……か。

その心境を思うと痛ましさをあまり、無意識の内に顔が苦痛で歪んだ。

他の生徒達の声で賑やかになりつつある廊下を横目で一瞥してから、俺は木乃香と教室に戻った。

沈鬱な雰囲気とその身に纏わせながら。

けたたましい終業の鐘が鳴り響く。

教室の中が段々と活気を取り戻し始め、やっと憂鬱な授業から解放されたと体現するかのようになり、急いで鞆に荷物を詰め込んで教室から出ていく生徒達。

その騒がしくなっていく教室の中で、俺は教科書の重要な箇所に赤ペンで下線を引きつつノートにメモを纏めていた。

……断じて言うておくれ、俺はガリ勉ではない。

中学一年生の学習内容なのだから正直に言うと、ノー勉でも百点を取る自信はある。

ただ……こうしてノートを取っておけば、木乃香や刹那に勉強を教えてやれる。

……そう思ったただけだ。

それにノートは提出物になる可能性があるから……真面目にやっておかないと。

……って あ、やっちゃまった。

俺は重要箇所到下線が引かれ、机の上に広げられている教科書を呆然と眺めた。

「……………しまった」

すっかり失念していたが、これ……エヴァの教科書だった。

ま……まあ、落書きした訳じゃないしセーフだよな……？

……ノーカン、ノーカン。

俺は静かに首を左右に巡らせて、教室の中を窺った。

帰り支度をしてる者、お喋りに夢中になっている者、まだ夢の中にいる者。

いける……俺を見ている奴はいないッ！

そうと分かった俺は手際よく教科書をエヴァの机に直し、こそこそと帰り支度を始めた。

エヴァ……怒るだろうか？

大丈夫だよな……？

俺は少し内心の焦りを感じながら、ちらりと横目で木乃香の方を見た。

木乃香は横の席の神楽坂と楽しそうに談笑していて、机の上には教科書やら筆記用具やらが散乱している。

……俺は帰り道を記憶していない為、まだ一人では学生寮まで帰る事が出来ない。

今の内に色々とやっておきたい事はあるのだが、一人で帰る事になって迷子になる可能性があるくらいなら俺は安牌を選ぶ。

鞆に荷物……と言っても少し前まで白紙だったノート達と筆記用具くらいだが。

とにかく……それらを纏め終えた俺は鞆を膝の上に置いて、木乃香の元に向かおうとしたが。

「……木乃羽君、ちょっといいかい？」

不意に後ろから声を掛けられた。

クルリと後ろを振り向くと、傍にタカミチ先生が立っていた。

「……何でしょうか？」

俺は車椅子のブレーキを解除しつつ、ぎこちなく答えた。

朝の一件があった為、未だに俺はタカミチ先生と話すのが少し気ま
ずかった。

「新しい友達は出来たかい？」

優しい微笑みを浮かべながら、タカミチ先生は俺に言った。

「友達……ですか」

俺は小さな声で呟きながら、先程の昼休みを回想した。

あの時、会話したのはルームメイトの神楽坂と木乃香が入部してい
る図書館探険部の三人……後は相坂ぐらいか。

……相坂とは会話と言うより、一方的に話を聞いていただけ。

木乃香は妹だし刹那は家族みたいなモノだから何とも思わないのだ
が……何と言うか、うん……他人と会話するのが気まずい。

あの時の俺は刹那の事で頭が一杯で、他人と会話するのが億劫にな
っていたのだが……。

どうやら木乃香は俺が緊張していると勘違いしたようで、所々でフ
ォローしてくれていたけど……。

転生前でも女友達なんて殆どいなかったしな……もしかすると、こ
れが引きこもり生活をしてきた代償だろうか。

「……すみません、少し急いでいますので用件を言って頂けませんか？」

タカミチ先生には悪いが、俺は用件を言ってもらおう事にした。

俺は木乃香と刹那がいれば……他に何も必要ない。

「あ、ああ……ゴメンね、教科書の配布があるから職員室まで取りにきてほしいんだ。それじゃあ待ってるからね」

教科書……？

いや、でも俺は木乃香と帰。

「あ、あの……あ」

タカミチ先生は俺の声に気づかず教室から出て行ってしまった。

……気を悪くさせてしまっただろうか。

タカミチ先生は俺の事を心配して声を掛けてくれたのに……最低だな、俺。

「うーちゃん、かーえろ！……ってどないしたん？」

木乃香は誰もいない廊下をじっと見ている俺の事を不思議に思っただらしく、怪訝な表情を浮かべている。

「悪い、木乃香……今から教科書を貰いに行かないといけなくなっ

た。何か用事があるなら先に帰ってきてくれてもいいからな」

「うーん……用事はあるけど、ウチ“教室”で待ってるから……はよ戻ってきてなー！」

「あ、ああ。……？」

ニコニコと笑みを浮かべて手を振っている木乃香に見送られながら、俺は鞆を机の上に置いて教室の外に出た。

俺は教科書を貰いに行く序でに校内の見学をかねて、校舎の中を見てまわる事にした。

勿論、木乃香を待たせない為に寄り道せず真っ直ぐ職員室に向かうルートを通っているが。

生徒達が帰宅し始めた事で少しずつ静かになっていく廊下を進みながら、ふと俺は窓の外を見た。

そこにはトラックを全速力で走る陸上部、綺麗なフォームで球を打ち返す庭球部、熱心にグラウンドをトンボで慣らすソフトボール部など、元気良く声を出しながら部活動に励む生徒の姿があった。

俺は思わず立ち止まり、食い入るように窓の外の風景を眺めた。

部活……か。

刹那が入部している筈の剣道部に入れなくなった今、弓道部に入部しようかと思っではいるが……。

俺は頭を垂れて下を向き、殆ど使い物にならなくなった自分の脚を見た。

……仕方ない、けど。

「俺だって……」

無意識の内に、そんな言葉が口から零れ出た。

俺は窓の縁に手を掛けて、脚に力を込めて立ち上がる。

「……俺だって」

俺は何をやっているのだろうか……自分で自分の行動を理解する事が出来なかった。

ただ……無性に“そう”したくなった。

外からの風を受けて、真っ直ぐ伸びた黒髪が少し靡いた。

窓から軽く身を乗り出して、外の風景を眺める。

……俺は走ったり激しい運動は出来ない、けど……翼はある。

雲一つない空を見上げながら、何も考えずに大空を飛び回る事が出来れば……。

そんな馬鹿らしい事を考えてしまった自分自身に呆れてしまい、俺は大きな溜め息をついた。

そして早く教科書を貰いに行かなくては、と思い直して車椅子に腰を下ろそうとしたのだが。

「いけませんッ！これはお嬢様ッ！」

突然、誰かに後ろから腰に手を回され、窓から引き剥がすように床に座らされた。

俺は訳が分からないまま後ろを振り向くと、真剣な表情の刹那が俺の腰に手を回したまま同じように床に座っていた。

「……どうした、刹那」

俺は首を傾げながら突然現れた目の前の刹那を見つめた。

「どうした、ではありません！何故そんな事をしようと思ったのですか！」

刹那は大きな瞳を三角にして、声に怒気を含ませている。

……そんな事って、どんな事さ？

どうやら刹那は俺の取った行動の何かを咎めているらしい。

「窓から飛び降りようとするなんて……」

今にも泣き出しそうな表情になりながら、刹那は小さな声で呟いた。

「は……？ いや別に自殺する気なんてサラサラないぞ？」

そう言いながら俺は先程まで自分が取っていた行動を回想した。

えーと……。

確かふらふらと廊下を進んでいて、いきなり止まって窓の外を眺めて……暫くしたら窓の縁に手を掛けて立ち上がって……更に窓から身を乗り出して……おまけに大きな溜め息をついた……と。

……何の問題もないよね？

「し、しかし窓に身を乗り出して……」

しどろもどろになりながら、刹那は口を開いた。

「いや、外の空気を吸いたかったただけだし……」

俺は肩を竦めながら刹那に平然と言ってやった。

「思い詰めたような表情に……」

「ああ、それは自分の馬鹿さ加減に呆れてただけ」

「で、ではお嬢様は……」

「自殺なんてしないさ、後……刹那」

「どうしましたか……?」

刹那は安堵したような表情を浮かべながら、小首を傾げている。

刹那の顔は30センチも離れていない場所にあって、流石の俺も恥ずかしかった。

「あの……擦ったいから、手を離してくれないか?」

俺はチラリと自分の腰に手を回している刹那の腕を見てから、顔を上げてそう言った。

すると刹那の顔は見る見る内に紅潮していき、跳ね上がるように立ち上がると。

「し、失礼しましたー!」

刹那は大声を出しながら、廊下を全速力で走り去っていった。

「おーい、出来れば車椅子に俺を座らせてから……っってもういないし」

廊下の床に取り残された俺は、溜め息をつきながら気づけば少しだけ微笑んでいた。

第二十二話（後書き）

作者迷走中……。

この小説に唯一出てくる“あの”スタンドを早く出たくてウズウズしている作者です。

ああ……執筆が早く出来るようになる方法はないものか……。

第二十三話（前書き）

前書き + 後書きを考えるのに10分以上掛かる事がある自分って…。

では、どうぞ。

第二十三話

廊下の床に放置されてしまった俺は苦勞して車椅子に這い上り、校内にあるエレベーターを利用して漸く目的地の職員室に辿り着く事が出来た。

そして職員室の中に入ると、俺は待ち侘びていたらしいタカミチ先生から大きな紙袋を渡された。

大きな紙袋を受け取って膝の上に乗せると、ズシリとくる重たさを感じた。

「う……………」

タカミチ先生から手渡された紙袋は想像していた重量を遥かに凌駕しており、あまりの重さに俺は思わず小さな呻き声を漏らしてしまった。

膝の上に乗っている大きな紙袋をまじまじと見つめる。

俺は基本的に手荷物は持てない為……………バックサポートの裏側にある収納スペースを利用するか、膝の上に物を置いて持ち運びする事になるのだが……………。

目の前の紙袋は収納スペースの許容量を明らかに越えており、膝の上に乗せるしか持ち運ぶ方法はない。

黙り込んでいた俺を心配したようで、タカミチ先生に「やっぱり僕が持つて行こうか」と提案されたが、丁重にお断りしておいた。

幸いな事に……この麻帆良学校にはエレベーターが整備されており、これから使う事になる自分の教科書ぐらい自力で持ち運びたかった。突然、タカミチ先生は「用事がある」と俺に告げて、忙しそうに机の上の散らばっていた資料を一纏めにしてから教室から出て行った。……やはり、タカミチ先生に嫌われてしまったのだろうか？

「はぁ………」

教室での愚かしい行動を思い出し、俺は小さな溜め息をついた。

……木乃香を待たせている、早く教室に戻らなくては。

俺は膝の上の紙袋を落とさないように気をつけながら、職務に追われている為なのか通常通りなのか分からないが、やけに騒がしい職員室を後にした。

ハンドリムを掴む手に力を込めながら、紙袋に注意しつつ廊下を進む。

次の角を曲がればエレベーターがある。

そう思い、角を曲がろうとした瞬間。

「きゃっ……あ、ごめんねー」

突然角から急に二人組の見知らぬ女子生徒が飛び出してきた。

その場に慌てて止まる事で何とか衝突事故は防げたのだが。

慣性の法則が働いた事により膝の上に置いてあった紙袋が床に落ちていき、その中身をぶちまけていった。

「でさ、聞いてよ！ウチの彼氏マジありえない」

飛び出してきた女子生徒達はソレに気づく事なく、廊下に大きな声を響かせながら走り去っていった。

「……はあ」

床にぶちまけられた教科書達の惨状を見て、俺は思わず嘆息した。

首を左右に巡らして廊下を見渡したが、誰一人として廊下を歩いている人は見当たらなかった。

下校時間は疾うに過ぎており、今の時間に学校に残っている者は部活動をしているか、よっぽどの物好きな者しかいないだろう。

……仕方ない、最終手段を使うか。

「せつちゃん、出てこんと恥ずかしい過去を暴露するえー！」

何故か京都弁で言ってしまったが、誰もいないから大丈夫だろう。

「……」

暫く待つてみたが刹那からの返事はなく、もしかすると今は木乃香を護衛しているのかもしれない。

よくよく考えてみたのだが、一人で二人を護衛するのは無理があるよな……。

式紙や何かしらの札で対応しているのかもしれないが……正直な所よく分からない。

どれだけ俺が原作知識を有していると言っても、魔法を唱えられる訳でもなければ、陰陽術を扱える訳でもない。

そういう類いの物がコノ世界に存在している事を“知っている”……ただそれだけである。

基本的に木乃香と俺は一緒に行動する事が多いが……今回のように別々に行動されると刹那も大変だろうな。

「……さてと、どうするかな」

頭を左右に振ってから……もう一度、目の前に広がっている惨状を見下ろした。

まだ車椅子から立つ事は出来るが……車椅子から“床”に降りると

なると話は変わってくる。

少しでも気を抜けば、顔面を床に叩き付けてしまつ可能性もある訳で……。

「ん〜！よいしょつと……クソ、時間が掛かるな」

どうにか座つたままの姿勢で教科書を拾えないかと試してみたが、教科書一つを取るのにかなり時間が掛かってしまった。

しょうがない……どうにかして車椅子から降りよう。

立って拾い集めるのは不可能に近い。

屈伸運動を何回も行わなければならないから……良いリハビリにはなるかもしれないが、流石にキツイ。

拾い集める時“ハイハイ”のように不格好な姿になってしまうだろうが、今は形振り構ってられない。

腕に出来るだけ力を込めて、どうにか車椅子から降りようと身体を前屈みにした……その時。

スツと視界の端から球体関節のある腕が伸びてきて、床に散蒔かれていた教科書の一つを拾い上げた。

慌てて俺が顔を上げると、そこには無表情の茶々丸が立っていた。

「今、拾い集めますので座っていて下さい」

そう口にしながらか茶々丸は、手早く次々と教科書を拾い集めて紙袋に入れていく。

「目標完了、收拾終了しました」

俺は茶々丸に礼を告げて教科書を渡してもらおうと手を伸ばしたのだが、茶々丸は紙袋を持ったまま何かを考え込んでいるようだった。

「…………私が持ちますので教室に行きましょう」

俺が手を伸ばしたまま首を傾げて茶々丸の横顔を見つめていると、そう言つて茶々丸は黙々と歩き出してしまった。

「ちよつ、茶々丸!？」

俺は慌てて茶々丸の後を追いかけた。

今、冷静になつて考えてみれば無意識の内に『茶々丸』って呼んでたけど…………呼び捨てだよな。

ちゃんと他のクラスメイトは名字で呼んでいるのだが…………何故だろうか？

「俺が持つつて…………！」

茶々丸に追いついた俺は右手を伸ばして紙袋を奪い取ろうとしたのだが、後もう少しの所で避けられてしまい…………紙袋をひょいと頭の上に掲げられてしまった。

茶々丸は…………かなり身長が高く、170センチは軽くあるだろう。

その茶々丸が腕を真上に真っ直ぐ伸ばして紙袋を掲げているのだから、俺の手が届く筈がない。

もし第三者が居れば、俺が虐められているようにしか見えないだろう。

「私が持ちますので、結構です」

真っ直ぐ前を向いたまま茶々丸は無機質な声で呟いた。

「……………分かったよ」

眉を顰めて嘆息しながら、俺は茶々丸に甘える事にした。

「……………」

何も口にする事なく、茶々丸と俺は無言のまま廊下を歩く。

うん……………かなり気まずい。

茶々丸に話せるような話題が何か無いものかと頭の中を探っていると、突然……………茶々丸が口を開いた。

「私は“感情”というモノをまだ理解する事が出来ませんが……………先程感じた感情は“怒り”というモノなのでしょうか？」

相変わらず無表情で声色に変化は無かったが、どうやら茶々丸は“怒り”という感情を感じ取る事が出来たらしい。

「もしかして、見ていたのか……？」

先程、確認した時に人影は何処にも無かった筈なのだが……。

「はい、窓の外からですが」

茶々丸は小さく頷いた。

茶々丸が頭を傾けた事により、連動して頭上の紙袋が傾き、ガサガサと音を立てた。

窓の外、か……それは見ていなかった。

あれ……ココ2階だったような……？

「そして同時に貴女を見て……護りたい、そう思ってしまいました……これが母性心というものでしょうか？」

茶々丸は独り言のように呟いて、小首を傾げている。

その時……また頭上の紙袋が音を立てて、その中身が溢れそうになる。

下からソレを見ている自分にとって、その光景は冷や冷や物だった。

……並んで歩いている自分に中身が墜落してくる可能性があるからだ。

「さあ……な、茶々丸がそう思ったのなら、そうなんじゃないか？」

俺は肩を少しだけ竦め、茶々丸に返答した。

暫くして漸くエレベーターの前まで辿り着き、上へ行くスイッチを押そうと手を伸ばしたのだが、先に茶々丸が手早くスイッチを押してしまった。

そのまま手を引っ込めるのも恥ずかしかった為、俺は仕方なく既に点灯してしまった“低い位置”にあるスイッチを押した。

うん……虚しい。

「……先程のアレには、どのような効果が」

「ん、アレって何だ？」

茶々丸の小さな独り言を聞き取る事は出来たが、その言葉の意味を理解出来なかった為……俺は傍に紙袋を掲げて立っている茶々丸に訊ねた。

「いえ……桜咲さんを京都弁でお呼びしていましたが、アレにはどういう意味が」

茶々丸の言葉に、俺は思わず盛大に吹き出してしまった。

聞いていたのか……茶々丸。

「い、いやアレはだな……その、何と言っか」

俺は俯いてからボソボソと小さな声で呟き、弁解の言葉を探したが上手く頭の中に浮かんで来なかった。

「恥ずかしい過去、とは一体……?」

真剣な表情のまま茶々丸は俺を見下ろしている

「Curiosity killed the cat. だ……茶々丸」

その時、エレベーターが到着した事を知らせる小さな機械音が聞こえた。

……どうやら空気を呼んでくれたらしい。

通常のエレベーターより倍以上に入口が広いドアがユックリと開き、茶々丸と一緒にエレベーターの中に入った。

「京都弁で話す木乃羽さんは凄く可愛かったです」

茶々丸は一年A組のある階のボタンを片手で押しながら、そう言った。

「……そうか」

俺は不機嫌な様子を隠す事なく、若干ぶっきらぼな調子になりながら答えてやった。

可愛いと言われても、嬉しくないから。

エレベーターのドアが閉まり、少しずつ上昇し始める。

「……ウチも今度から京都弁で話してみるえ、どうでしょうか？」

「……やめるッ、喧嘩売ってんのか!？」

俺が目を剥いて大声を出した時、ずっと無表情だった茶々丸がクスリと微笑んだような気がしたが……気のせいだろうか？

そしてあれから茶々丸と1年A組の前まで並んで歩き、漸く教室に辿り着いたのだが急に茶々丸がドアの前でピタリと立ち止まった。

「……どうした？」

「マス……いえ、少し忘れ物をしましたのでコレを」

俺が怪訝に思いながら茶々丸の横顔を見詰めていると、茶々丸は俺に紙袋を手渡してフラフラと何処かへ行ってしまった。

「……?」

取り残された俺は大きな紙袋を抱えて首を傾げながらも、気を取り直して教室のドアを開けた。

ドアを開ける瞬間に今朝の出来事……黒板消しトラップが頭の中にフラッシュバックしたのだが 既に遅かった。

突如として大きな破裂音が耳に届き、俺は思わず驚いて目を瞑った。

「近衛さん、1 Aへようこそーッ」

恐る恐る瞳を開くとクラスメイト達がクラッカーを手に持ち、バタバタと駆け寄ってきた。

俺は思わず驚きのあまりポカンと口を開けたまま、その場に硬直してしまった。

教室の中は色紙で施された装飾があり、中央に固められた机の上には様々なお菓子や飲み物。

黒板には『近衛木乃羽さん、一年A組にようこそー！』と大きく書かれている。

教室の中を見渡すが……刹那がない。

恥ずかしくて来れなかったか……。

よく見れば用事があると言っていた筈の、タカミチ先生の姿があった。

俺の視線に気づいたタカミチ先生は、ニッコリと笑って手を小さく振っている。

まさかタカミチ先生、準備の為に……わざと俺を教室から。

「どこを寄り道してたのさ、みんな待ちくたびれたんだよー」

「ほら、近衛さんコッチコッチ！」

「主演は真ん中だよー！」

「ちよっ、やめ……怖いから！」

誰かに後ろから車椅子を押され、俺は教室の真ん中に連れていかれる。

「なんや近衛さん言われたら、ウチも歓迎されてるみたいやわー」

気づけば木乃香が横に立っていて、頭を掻きながら照れ笑いを浮かべている。

「ほら、ジャンジャン食べてジャンジャン飲んでよー！」

「近衛さんの為に開かれた歓迎会なんだからさー！」

「飲んで飲んで飲んで、飲んでー」

いきなり口にお菓子やら肉まんやらを詰め込まれ、更に飲み物を流し込まれた。

しかも……流し込まれた飲み物は炭酸である。

「ん~~~~ッ!?ん~~~~ッ!」

顔を歪めて抗議の声を上げようとしたが、次々と口の中に物が詰め込まれていく。

今日で死ぬかもしれない……と死の恐怖を感じながら、1年A組クラスメイトによるお祭り騒ぎはヒートアップしていった。

クラスメイトによる馬鹿騒ぎ……一応、俺の為らしい歓迎会の後片付けも終わり、少しずつ街に夕日が差し始めた事で橙色に染まりつつある麻帆良を、俺と木乃香と神楽坂の三人で歩いた。

木乃香と神楽坂の二人は他愛ない話で盛り上がり、そんな楽しそうな二人をボンヤリと眺めていると、気づけば学生寮に着いていた。

「さーと、お風呂にでも入りに行きますか！」

「さーんせーい、うーちゃんも行くやろ？」

三人とも部屋に入り、俺が今日の疲れを癒す為にベッドの上で寝転んでみると、神楽坂が妙な提案してきた。

俺の横に寝転んでいた……というか俺の上に乗っていた木乃香は嬉しそうな声を上げながら起き上がり、その拍子にベッドの天井で頭を打ちながらも俺をキラキラと輝く瞳で見詰めてきた。

一緒に風呂に入るのは約六年ぶりぐらいになるだろうか……？

ソレを木乃香は楽しみにしていたのだろう、だが。

「いや……俺はいい」

木乃香の期待を裏切る事になるが、俺は反対の意を木乃香に伝えた。

木乃香と刹那と一緒に入るのでさえ慣れるまで時間が掛かったのに、出会ったばかりの神楽坂と風呂に入るなんて俺には想像出来なかった。

それに大浴場なのだから当然、他の生徒たちも利用しているだろう。

……そんな所に行ける筈がない。

「……って何やってんだ、木乃香」

ふと身体を少し起こして木乃香を見ると、まだ引越してきたばかりで整理が終わっていない俺の鞆を……いつの間にかゴソゴソと漁っていた。

瞬間移動……？

「下着みつけー。あ、寝巻きもみつけー」

俺の鞆から次々に服やら下着やらを……っておい。

「何ヲ……シテルンダツテ訊イテルンダゼ……？」

嫌な汗が全身から吹き出してくる。

……凄く嫌な予感がするんだが。

コチラに背を向けている木乃香に気づかれないよう静かにベッドから這い出し、そっと車椅子に乗って部屋から逃げ出そうとした……その時。

「準備完了、アスナ……ごうむーぶツ！」

突然、グルリと木乃香が振り向いた。

振り向いた木乃香の瞳はキラキラと怪しく光っている。

ヤバい、と全身で感じた時には決着は既に着いていた。

「えッ!？」

俺は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

何故なら 神楽坂に後ろから羽交い締めにされたからである。

伏兵……だと……？

「捕まえたわよ〜!」

俺の目の前で神楽坂は満面の笑みを浮かべている。

しまった……コイツは“そういう”キャラなんだった。

「グツジョ〜ブ、アスナ!」

背後から悪魔の足音が近づいてくる。

「ば、馬鹿ッ……離せッ!」

神楽坂の拘束から逃れようと奮闘したが、俺は完全にホールドされていた。

気づけば木乃香に太股をガッチリと両腕で抱えられ、俺の身体がフワリと持ち上げられた。

「じゅうじゅうじゅうおー!」

「じっとしてなさいよー、このは!」

二人は俺を抱えたまま、全力疾走で走り出す。

「おい馬鹿やめろ、離せッ!俺は大浴場になんか行きたくなあああああああああ。

第二十三話（後書き）

幽体離脱〜！

……すみません。

次回、拉致された木乃羽の瞳に映った光景とは

！？

ご期待下さい！

勿論……安心信頼のキングダムゾンですけどね。

第二十四話(前書き)

今回は短いですが、どうぞ。

第二十四話

あの後、大浴場の脱衣所に御神輿担ぎでワッシュイワッシュイと運び込まれたかと思えば、二人に制服・下着・サラシなど何から何まで全て剥がされて大浴場に放り込まれた。

生まれたばかりの小鹿の如く、融通が利かなくなった脚をガクガクと震えさせながら何とか逃亡しようとして試みたが、俺を待っていたのは獰猛な瞳をキラキラと輝かせ、血に飢えた獣の凶相でジワリジワリと躍り寄ってくる二匹の肉食獣だった。

そうして小鹿は肉食獣の餌食になり、否応なしに全身を隈無く卒無く抜かり無く洗われてしまった。

唯一の幸運が、自分達以外に入浴者がいないのが救いだとは最初は思っていた。

そう　最初は。

しかし、その幸運は一瞬にして跡形もなく崩れ去った。

何故なら、暫くすると大勢の1　Aクラスメイト達がゾロゾロと

『キングクリムゾンッ！』

ようやく長かった苦行が終わり、俺は疲労困憊によって部屋の床に倒れ伏している。

しかし背中の上に木乃香が座り込んで本を読んでいる為、俺の疲労が一向に癒される事は無い。

もう一人の同居人、神楽坂は新聞配達バイトがあるからと言って早めの眠りにについている。

「ふぁ……うーちゃん、もう寝るやる？」

俺の怨嗟の呻き声を無視し続けて本を読んでいた木乃香が、欠伸を噛み殺しながらようやく俺の背中から退いてくれた。

木乃香は片手に本を持ったまま眠そうに手の甲で瞳をゴシゴシと擦り、二段ベッドの下に入り込んでいった。

「そう、だなぁ……」

身体を起こして大きな欠伸しつつ、俺は一度だけ背筋を伸ばす。

今日は色々な事が有りすぎて疲れが溜まっている為、今すぐに寝ておきたいのだが……まだやるべき事が残っている。

トイレに行くから先に寝ておいてくれ、と木乃香に伝えて俺はリビ

ングを出た。

木乃香の了承を得てからリビングの電気を消し……トイレの電気を点けてドアを開ける。

そして“自分”が入る事なく、わざと大きな音を立ててトイレのドアを閉めた。

これでよし……と。

トイレの直ぐ真横の玄関に向かい、俺は音を立てないように静かに鍵を開けた。

ゆっくりとドアノブを掴み、扉を開けようとした瞬間。

「うーちゃん、どこいくん？」

心臓がドクンと脈打ち、一瞬にして全身から血の気が引いていく。

俺は錆び付いた機械のように緩慢な動作で後ろを振り向くと、木乃香が微笑を浮かべて仁王立ちしていた。

可笑しそうに笑ってはいるが、木乃香の瞳は少し尖っている。

「なあ、うーちゃん……こんな時間にどこ行くん？」

「あ、いや……その、少し用事が……」

笑顔のまま睨みつけてくる木乃香に、俺はあたふたしながら苦笑交じりに返した。

木乃香の恐ろしいほど強烈な威圧感に、思わず竦み上がりそうになる。

俺は蛇に睨まれた蛙のように、身動きが取れなくなってしまった。

俺が何と言いつれば良いのか分からずに、目線を泳がせながら暫く口ごもっている。

「……明日じゃアカンの？」

木乃香の表情が憂いを帯びたような表情に変化し、小さな声で訊ねてきた。

俺は無言のまま小さく頷いた。

早く解決しておいたほうが良い、俺の為にも……木乃香の為にも。

木乃香は俺の真意を推し量るかのように唇を固く結び、じっと目を見つめてくる。

絶対にアカン、と木乃香に一喝されるのを俺は覚悟していたのだが、暫くすると木乃香は仕方ないとも言いたげに肩を竦め、大きな溜め息をついてから。

「はよ……帰ってきてな？」

そう言って木乃香は小首を傾げながら、少し微笑んだ。

しかし木乃香の微笑には親しい者でも気づかない可能性があるぐら

いの、小さな翳りを帯びているように感じた。

「あ、ああ……」

俺は少し驚きながら部屋のドアを静かに開けて、誰もいない廊下に出た。

やけに素直だったな……。

ああいう時の木乃香は後が怖いと心の中で焦りながら、誰もいない無人の廊下を一人で歩く。

俺が目指す場所、それは　。

暫く歩き続け、俺は目的地の部屋の前まで辿り着いた。

俺はチャイムは押さず、数回軽く扉をノックした。

「……はこ」

部屋の中から女性の声が聞こえる。

暫くしてガチャガチャと鍵を開ける音が聞こえ、目の前のドアが開いた。

「早かったな龍宮、今日は楽だつ　　お、お嬢様……!？」

「こんにちは、刹那」

ドアの間から顔を覗かせている刹那は表情を凍らせながら、大きく目を見開いて硬直している。

直ぐに落ち着きを取り戻した刹那は、即座にドアを閉めようとしたが。

籠城させる訳にはいかないんでな、強行手段……っと。

「『ザ・ワールド』、時よ止まれ!」

そして、世界の時が停止する。

必死になってドアノブを掴んでいる刹那の手を丁寧に引き剥がし、

閉まりかけていた部屋のドアを開けて刹那を部屋の外に引っ張り出してやる。

「そして……『時は動き出す』」

「ッ！……えッ！？」

目の前でポルナレフ状態になっている刹那の横を悠々と通り過ぎ、俺は部屋への侵入に成功した。

「さて刹那……お話、しよつか」

手慣れた手つきで車椅子を回転させて振り返り、俺は仰々しく肩を竦めながら言い放った。

「……な、何のご用ですか、お嬢様」

刹那は部屋の中に入って警戒心を顕にしつつ、じっと俺の様子を窺っている。

「単刀直入に言うぞ刹那、隠し事……してるだろ？」

「……ッ」

刹那の息を呑む声が聞こえ、顔を強張らせて少しだけ俯いた。

「し……してませんッ」

刹那は俯いたまま震える声で呟いた。

本当に嘘をつくのが下手くそだな、と目の刹那を眺めながら俺は心の中で溜め息をついた。

……まどろっこしいのは終わりにするか。

「例えば、そうだな……“背中に翼が生えている”とか？」

刹那は俺の言葉を聞いて見る見る内に顔が青ざめていき、その場に茫然と立ち尽くしている。

「な、なぜ……翼の事を……」

この世の終わりが来てしまったような絶望に染まった表情になり、刹那は力の無い声で言った。

「有るんだろ？……翼が」

俺は刹那を真っ直ぐ見据えて呟いた。

刹那は小刻みに身体を震わせ、黙して何も話さない。

「……何故、そんな……そんな……」

暫くして刹那は何度もかぶりを振りながら、小さな声で呟いた。

そんな刹那の様子は見ている此方まで辛くなるぐらい、悲壮感に包まれていた。

「大丈夫、刹那……俺は」

「わ、私は卑しい人間です……禁忌とされる存在なのです……見て

下さい、この翼をッ！」

刹那は俺の言葉を手で遮り、覚悟を決めたように口調を強めて声を張り上げ、その背中に生えている純白の翼を広げて見せた。神々しいほどの双翼を目にして、何故か俺は深い感動を覚えていた。

「人間に翼が生えている……私は化け物なんですよ、これはお嬢様ッ！」

刹那が肩を震わせながら、慟哭の声を張り上げた。

「……俺は刹那の事を化け物だなんて思わな」

「嘘ですッ！」

俺は自分の正直な気持ちを伝えようとしたのだが、刹那が急に目を剥いて怒鳴り声を上げた。

「化け物の私が……お嬢様たちと仲良くする資格なんて無いんですッ！」

静かな部屋の中に、刹那の悲痛な声が響き渡る。

「刹那は鳥族と人間のハーフなんだろ？」

「……はい」

刹那は静かに涙を流しながら首を縦に振り、消え入りそうな声で呟いた。

「鳥族と人間の間から生まれたハーフの刹那が化け物なのなら……」
俺は脚に力を込めて車椅子から立ち上がり、翼を広げたまま泣き続けて
いる刹那に近寄った。

そして。

「人間と人間の間から生まれ、翼を持つ俺はどうなるんだろうな……」
……？」

今にも泣き崩れてしまいそうな刹那の目前で、今まで誰にも見せた
事の無かった純白の翼を広げてやる。

「えっ……？」

刹那は目の前で起きている事が理解できならしく、口をポカンと
開けたまま硬直している。

「ほら……贗物じゃないぞ？こっやって飛行も可能だ」

双翼を羽ばたかせて宙に浮き、目を丸くしたまま茫然と立ち尽くし
ている刹那を見下ろした。

今、こんな事を考えるのは場違いかもしれないが……人を“見下ろ
す”って……良いな。

いつもは見下ろされてばかりだからな……。

「……翼の事は俺の口から木乃香に伝えてもいいし、刹那から話し

「てもいい」

俺は床に着地して翼をしまい込み、そのままへなへなとへたり込んだ。

……また見下ろされてしまった、まあ仕方ないが。

「一人で何でもかんでも背負い込まなくていい、だから……な？」

俺はニツコリと笑って刹那に手を伸ばした。

これからも仲良くしよう、という意味と。

立たせてくれ、という意味も込めて。

「……」

刹那は感情を押し殺しているような陰気な面持ちで沈黙している。

驚くのも仕方ないよな……まさか俺に翼が生えているなんて思いもしなかっただろう。

「……お嬢様」

それまで黙って俺の話聞いていた刹那が、小さな声で呟いた。

「ん、どした……？」

俺は刹那に手を伸ばしたまま、小首を傾げた。

長い間、刹那は辛そうな面持ちで俺を見下ろしていたが、ふっと真顔に戻ると口を開いた。

そして、俺の耳に届いたのは思い掛けない刹那の言葉だった。

「……………帰って下ろせ」

第二十四話（後書き）

ざんねん！木乃羽の作戦は失敗してしまった！

第二十五話（前書き）

遅くなりましたが、久しぶりの更新です。

では、ごきげん。

第二十五話

「え……今、なんて……？」

動揺を隠し切れずに慌てふためきながら、俺は思わず刹那に聞き返した。

声が情けないほど震えているのが自分でも分かる……まさか拒絶されるなんて思いもしなかったから。

「帰って下さい」

刹那は俺を見下ろしたまま先程よりも語気を強め、ぴしゃりと言いつ放った。

刹那の思わぬ発言を聞いて、俺は息が詰まった。

何とか言葉を紡ごうとしたが、海中から砂場に打ち上げられてしまった魚のように、口をパクパクと開閉するだけだった。

滅多な事が無い限り、刹那は冗談や嘘を言ったりしない。

という事は。

「な、なんで……？」

唐突な刹那の言葉に戸惑いながらも、俺は譫言のように刹那に訊ねた。

得も言われぬ虚脱感に喉が詰まり、それ以上の言葉が出なくなる。

「明日、部活の朝練がありますので……ですから帰って下さい」

刹那は声色の温度を変える事なく淡々と、俺を正面に見据えながら言った。

ぶ、部活の朝練……？

動揺しながら床に座ったままの俺を見下ろす刹那の眼差しは、限りなく冷ややかで、まるで他人を見ているようだった。

半狂乱になっている頭を何とか鎮静化させ、脳の中の原作知識を整理する。

刹那は翼の事を気にしていた筈で、それが解決したのに……何故？

「頼む……本当の事を言ってくれ」

納得する事が出来ない展開に頭を抱えなくなる気持ちを我慢しつつ、俺は刹那の真意を訊ねた。

「……」

刹那は黙って俺を見下ろしている。

嫌な沈黙が部屋の中を支配する。

部屋の隅にある質素な壁掛け時計の、時を刻む無機質な音が頭の中に響いた。

「何で、嘘なんて」

「……嫌いなんですよ、お嬢様達の事が」

沈黙に耐え切れなくなった俺の言葉を遮った刹那は、肩を小さく竦めながら毅然とした口調で刹那は言った。

俺は刹那の辛辣な発言を聞いて、全身が石像のように硬直してしまつた。

「詠春様に助けられたから仕方なしに仲良くしているだけで、本当は友達にもなりたくないですし……生まれが良いだけで周りからチヤホヤされる、お嬢様達が妬ましいくらいですよ……良かったですね、近衛家に生まれて。皆が優しくしてくれますから」

溜め込んでいた何かが発火するように捲し立てて言った刹那は、半笑いになりながら嘲るように俺を見下ろしている。

刹那の口から、こんな言葉が聞ける日が来るなんて……泣けるぜ。

普通の人なら激怒して汚い言葉でも喚き散らしながら、刹那の胸倉に掴み掛かってもおかしくないだろう。

それぐらいの事を目の前にいる友達……いや、親友だと思っていた人物から告げられたのだ。

だが、俺は刹那の胸倉に掴み掛かるところか立ち上がる気力さえ失つており……反対に木乃香がこの場に居なくて良かったと安堵の気持ちまで覚えていた。

俺は原作知識があるから“コレ”を嘘だと看破できるが、もし木乃香が今の刹那の発言を聞いていたらと思うと全身がゾツと粟立った。

……今は刹那の本心を訊き出す事が先決だ。

あの刹那にココまで辛辣な言葉を吐かさせる“何か”があった事を、言外に顕しているのだから。

「……頼むから本当の事を言ってくれよ、刹那」

冷やかな刹那の瞳を真っ直ぐ見つめて、俺は小さな声で訊ねた。

「……」

刹那は俺から目線を逸らしてしまい、俯いたまま黙っている。

肌を刺すようなピリピリとした空気が、部屋の中を包み込む。

考える事を放棄して部屋から逃げ出したくなかったが、何とか我慢して刹那の返答を待った。

「鳥族と人間のハーフでもないのに翼が生えている俺を見て幻滅したのか……？それとも俺が知らない間に何かあったのか……？」

何も答えずダンマリを続けている刹那に痺れを切らして再び質問したが、刹那は暗い眼差しのまま俯いて口を閉ざしている。

……口を割ってくれそうにないな。

仕方ない、今日は妥協策で辛抱するか。

「……化け物の俺とは無理に仲良くしないでいい。だけど、お願いだ……木乃香とだけは仲良くしてやってくれ」

俺は俯いている刹那の横顔をじっと見つめて懇願した。

……これ以上、木乃香の悲しむ顔は見たくないからな。

現状打破が不可能ならば、現状維持するしかないだろう。

刹那は俺の言葉を聞いた途端に表情を青ざめてしまい、戦慄くように肩を小刻みに震わせている。

「お、お嬢様……わ、私は」

暫くして黙り込んでいた刹那は俺の様子を窺うように恐る恐る口を開いたが、言葉を途中で区切って後ろを振り返り、入口の扉を凝視している。

何故なら扉をノックする乾いた音が、部屋の中に響いたからである。

俺は慌てて首元の辺りの髪を掴み、目の前まで持ってくる。

幸い、髪色は元の黒髪に戻っていた。

瞳の色は確認する事は出来ないが……恐らく大丈夫だろう。

「刹那、入る……誰かいるのか？」

部屋の外から声が聞こえ、暫くして扉がゆっくりと開き……現れたのは同じ中学生には見えない俺のクラスメイトだった。

褐色の肌、ストレートロングの艶やかな黒髪、羨ましいほどの身長。

そして、刹那のルームメイトでもある『龍宮真名』だった。

「……転校初日の人物を真夜中に呼び付けて、しかも車椅子から……乱暴な女は嫌われるぞ、刹那」

部屋の入口で立ち止まっている龍宮は呆れるような表情を浮かべながら、頭をポリポリと掻いている。

「なッ!? 違う違うッ、勘違いするなッ!」

刹那は両手をパタパタと振りながら、抗議の声を上げて龍宮に詰め寄った。

刹那は必死に無実を証明しようとして声を張り上げて説明を続けているが、龍宮は聞く耳を持たず、といった様子だった。

龍宮が帰って来てしまった……か。

せっかく刹那が何かを言おうとしていたのに空気読め、と言いたくなるが……仕方ない。

残念だが、今日は諦めて撤退しよう。

「刹那……また話は今度にしよう」

必死に弁明を続けている刹那の背中に声を掛けて、俺は背後にある車椅子まで這いずっていく。

すると、刹那は車椅子まで這いずる俺の姿に気がついたのだろう。

直ぐに俺の傍まで駆け寄ってきて、片膝を床に着いて手助けしようとしてくれた。

が……敢えて俺は刹那の助けを拒絶した。

お前の“そういう中途半端な態度”が誰を一番傷付けているのか理解しているのか……刹那。

一人で大丈夫だと刹那に伝え、俺は腕に力を込めて車椅子に這い上る。

車椅子の上で身体の向きを入れ替えて前を向くと、刹那が辛そうな顔を浮かべて下唇を噛みながら、その場に呆然と立っていた。

刹那も辛いだろうが、同じように俺も辛いんだよ……と心の中で嘆息した。

その時、龍宮が何やら曰くありげな目つきで、ちらりと俺を一瞥したような気がしたが……気のせいだろうか？

呆然と立っている刹那の横を通り過ぎ、俺が部屋から出ようとした時、龍宮が扉の前に立ち塞がった。

「……何か用か、龍宮」

俺は眉を顰めて目の龍宮を睨みつけた。

声の調子がぶつきらばうになっているのが自分でも明らかに分かる。事が思い通りに進まなかった為、俺はかなり苛々していたのだ。

「いや、別に大した事じゃないんだが……」

そう言っつて龍宮は飄々と肩を竦めて見せた……右手を後ろ手に回したまま。

訳が分からずに俺が首を傾げた瞬間、静まり返っていた部屋の中にガキリと嫌な金属音が響き渡る。

……何の音だ？

龍宮は扉から少し離れているから、鍵には手が届かないだろう。

まさか、もしかして……。

「龍宮！？何のつもり」

「動くなよ刹那……“お前より私の方が早いぞ”」

何かに気づいた刹那が声を荒げたが、龍宮が左手を前に突き出して言葉を遮った。

まさか……銃か？

俺に喧嘩を売って何の意味が……そうか、“クライアント”からの

指示か。

……この距離だと“止めても”貫通する可能性がある。

龍宮の銀の弾丸が俺を貫くか、俺の『ザ・ワールド』が早いか。

『ぬきな！どっちが素早いか、試してみようぜ』というやつか。

異様なほどに張り詰めた空気が、俺と龍宮の間に立ち込める。

俺の邪魔をするというのなら仕方ない。

『ザ・ワールド』。

「……出逢ったときから思っていたんだが」

ぼつりぼつりと独り言のように龍宮が口を開いた為、慌てて『ザ・ワールド』の使用を中止した。

「……私たち、口調がカブっていると思ってるな」

「はあ？」

龍宮の予想外の発言に、俺は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

いや、別に似てない……よな？

次第に凍りついていた部屋の空気が解凍されていき、背後にいる刹那から安堵の吐息が漏れたように感じた。

「言いたい事はそれだけか……？」

「それだけだが？」

龍宮はケロリとした表情で平然と言った。

コイツ……。

無意識の内に俺は額に手を当てて、大きな溜め息をついていた。

龍宮は不思議そうな表情を浮かべ、目をパチクリとさせながら俺を見下ろしている。

もういいや……帰ろう。

「……刹那、まだ話は終わってないからな」

そう言い残して俺は後ろ髪引かれる思いに堪えつつも、逃げるように刹那たちの部屋を後にした。

木乃香たちの部屋の前まで戻ってきた俺は、ゆっくりとドアノブに手を伸ばした。

……が、思わずドアノブの数センチ手前で手が止まり、部屋の扉を開ける事に躊躇してしまふ俺がいた。

何故なら刹那とのゴタゴタが少し長引いて帰りが少し遅くなった為、鬼の形相をして腕を組んでいる木乃香が玄関に仁王立ちしているような気がしたからである。

「……………（怒られる）覚悟はいいか？俺は出来てる」

ボソリと蚊の鳴くような小さな声で呟いてから、俺は恐る恐る扉を開けた。

劈くような木乃香の怒声を耳に受け入れる覚悟をしていた俺だったが、待っていたのは木乃香の鬼の形相でもなく、近所迷惑を顧みない大きな怒声でもなかった。

戦きながら扉を開けた俺の瞳に映り込んできた光景は、玄関で猫のように丸くなつて眠っている寝巻き姿の木乃香だった。

……………俺を待っていたのか。

俺を待つてくれていた事が嬉しい反面、こんな場所で寝かせてしまった自分に罪悪感を感じた。

ふと、ある事に気づいた俺は今現在の自分自身の姿を恐々と確認する。

未だに見慣れる事のない、肩凝りを酷くさせ、その存在を主張してくる二つの大きな山……………ではなく。

目の前で丸くなって静かに寝息を立てている木乃香と同じ、薄桃色の寝巻きを着ている自分の身体を見下ろした。

「しまった」と心の中で独りごち、恥ずかしさの余り赤面しつつも、俺は首を横に振りながら溜め息をついた。

自分自身の迂闊さに嫌気が差してしまう。

子供の頃に一緒に布団で寝た事のある刹那はともかく、麻帆良に来て出逢ったばかりの龍宮に自分の寝巻き姿を曝してしまうなんて……。

しかも、こんな女の子みたいな寝巻きを来ている自分を見られてしまっなんて……もう駄目だア……お終いだア。

着替えていけば良かったと肩を落としながら後悔した俺だったが、よくよく考えてみれば自分の持っている服は『制服』『着物』『寝巻き』という三つの巫山戯たカテゴリーしかなく、『私服』という重要な部分が抜け落ちている事に今ココで生まれて初めて気づいたのであった。

今まで引きこもり生活で外に出た事が無かったから……私服を持つていなくても当然と言えば当然か。

うん……別れる前に御影達から手渡されたお小遣で服を買いに行こう、そうしよう。

半ば投げやりになりつつ心の中で明日の決定事項を決めながら、俺は目の前の寝ている木乃香をつま先で軽く揺すった。

勿論、靴は脱いでいる。

我が愛する妹を足蹴にするのは心が傷んだが、風邪を引かれてしまふよりはマシである。

暫く木乃香をつま先で軽く揺すり続けたが、ただ寝苦しそうに小さな呻き声を上げるだけで、一向に目を覚ます気配は無かった。

一度“スイッチ”の入った木乃香は、よっぽどの事が無い限り……起きる事はない。

仕方ないな、と溜め息をついてから俺は木乃香を車輪で踏まないよう慎重に横を通り、月明かりで淡く照らされているリビングに向かった。

ここで気の利いた人間なら優しく抱き上げてベッドに寝かしてやるのだろうが、俺はそんな器用な事が出来る“人間”じゃないからな。そんな皮肉を頭の中で考えながら、俺はベッドの中の掛け布団を手にとって再び玄関口に戻った。

寝ている木乃香に優しく布団を掛けてやり、自分も車椅子から降りて横になった。

玄関の床は氷のように冷ややかだったが、床が冷たければ冷たいほど横で眠っている木乃香の温もりを感じる事が出来た。

「ゴメンな、木乃香……役に立たない兄ちゃんです」

木乃香の頭を愛おしむように撫でながら、俺はボソリと呟いた。

まさか拒絶されるなど夢にも思わなかったが、チャンスが無くなっただ訳ではない。

頭の中で刹那と昔の関係に戻る為の策を練りながら、俺は深い眠りに落ちていった。

翌朝……新聞配達のために目覚めた神楽坂によって、二人とも豪快に蹴り起こされた事は言うまでもないだろう。

第二十五話（後書き）

龍宮工……。

第二十六話（前書き）

お久しぶりです、更新が遅れてしまい本当にすみませんでした。

スランプに陥ってました……。

執筆しようとする 書けない 落ち込む ぶりだしに戻る、の無限ループ……。

では、少し短いですが……どうぞ。

第二十六話

「はあっ、はあっ……はあっ」

全身の筋肉が小刻みに痙攣を起こし、もう動けないと悲鳴を上げる。埋火が燻るように身体が火照り、見る見る内に息遣いが荒くなっていく。

今までに無いぐらい筋肉を酷使した為だと思いが、もう筋肉痛になっているような気がした。

「もう少し……もう少しなんだよ」

一筋の汗が頬を伝わって顎先から落ちていき、制服のスカートに小さな染みを作った。

右手で階段の手摺りを離さないよう必死に掴み、左手で車椅子のハンドリムを握りつつ後方及び上方を確認する。

本来なら前を向いて登る筈の階段を俺は車椅子に座っている為、後ろ向きで登らなくてはならない。

右手で手摺りを掴み、腹筋と僅かに残っている脚力を総動員して身体を車椅子から浮かせる。

そして、左手で掴んでいるハンドリムを力一杯後ろに回すと。

「よいしょ、っと……しんど……」

また一段、車椅子に乗っている俺でも階段を登る事が出来た。

車椅子で階段を登るといふ荒業をやったのけている訳だが、一つでも些細なミスをしてしまえば重力に従って階下に転げ落ちていく事になる。

運が良ければ打撲程度で済むかもしれないが、打ち所が悪ければ簡単に死んでしまう可能性だってあるだろう。

『ザ・ワールド』を使えば何とかなるかもしれないが、危ない橋は渡りたくないからな……。

よって、失敗は絶対に許されない。

「ふう……」

まだ階段の途中だが、車体が安定した事が分かった俺はそこで溜まり込んでいた疲労を吐き出すように大きく深呼吸した。

滝のように汗をかいてしまったせいで制服が肌に吸い付くように纏わり付き、些か気分が悪かった。

俺は額に浮かんでいる大粒の汗を手の甲で拭い、少しは運動した方がいんじゃないかと心の中で自嘲しながら、肩を落として溜め息をついた。

突然だが、俺は今とある場所へ向かっている。

あんな場所に自ら足を運ばなければ会話すら儘ならないアノ人物を、この時ばかりは心から恨んだ。

この学校には車椅子の人間でも悠々と搭乗する事が可能な大型エレベーターが設置されており、ほぼ全ての階にエレベーターを使って向かう事が出来るのだが、最上階……言い方を変えると“屋上”にはエレベーターで行く事が出来ないのである。

その為、屋上に向かう為には一つ前の階でエレベーターを降り、自らの足で階段を少しばかり登らなくてはならない。

階段を登るといふ動作は普通の人にとっては大したことのない行為だろうが、俺にとっては……。

頬の辺りを流れ落ちていく汗を手で拭いながら、俺は再び深い溜め息をついた。

俺が教室を抜け出してから二十分以上経ってしまっている。

「体調が悪いので保健室に行ってくる」とタカミチ先生に言って教室を抜け出してきたので、その時に木乃香と刹那の本当に心配そうな表情を見る事になって非常に心苦しかった。

早く教室に戻らなくては心配した木乃香と刹那が、“ひと騒ぎ”を起こす可能性も否定できない。

ハア……と、魂が抜けていきそうなくらい大きな溜め息をついてから、俺は再び車椅子で階段を登り始めた。

「……やっと終わった」

ようやく長かった階段を登りきる事ができ、俺は落ちなくて良かった、と安堵の溜め息をついた。

もしかしたら車椅子を使わずに、自力で登った方が早かったかもしれないな……いや、どっちもどっちか。

俺は改めて自分が無心で登ってきた階段の階下を見下ろした。

高くは無い、それに高所恐怖症だった覚えは無かったが……何故だか今にも自分が階段を転げ落ちていきそうで、一抹の恐怖を感じずにはいられなかった。

その場にいるのが嫌になり、クルリと半回転して前方を向く。

すぐ目の前には何の変哲もないドアがあり、この先に目的の人物がいる筈である。

ドアノブを掴みんで右に回し、そして少しばかり重たく感じるドアを押し開けた。

その瞬間……校舎内に爽やかな風が通り抜けていき、火照った身体を冷やしてくれる。

屋上に出た俺は爽風に髪を吹き煽られながら、暑苦しい小豆色のブレザーを脱いで窮屈な首元のネクタイを緩めた。

おまけにワイシャツのボタンを一番上から胸元の辺りまで外し、一層の解放感を得た。

「はあく、極楽極楽」

少し一息ついたところで首を左右に巡らして、俺は目的の人物を捜した。

「お………いたいた」

暖かな陽光が燦々と降り注ぐ屋上に、その少女は居た。

その少女の名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

魔法世界にその名を轟かせている最強の吸血鬼。

艱難多き人生を過ごし、数多の七難八苦を乗り越え、そうして舐めてきた分だけの辛酸を自らの糧としてきた老練の魔法使い。

揺るぎない実力と威厳を備えた人物の筈なのだが、どう見ても今の彼女は……そのような名高き伝説の人物には見えなかった。

何故ならエヴァは太陽の光を避けるようにして日陰になっている校

舎の壁に背中を預け、座ったままの状態です。頭を前後に揺らして舟を漕ぎ、優雅な長い金髪を風に靡かせているからである。

あ、涎……垂れたぞ。

そんな気持ち良さそうに眠っているエヴァを起こさないよう静かに移動して、すぐ傍まで近寄った俺は改めてマジマジと目の前の少女を見下ろした。

こんな無防備な姿を曝しているので、真祖の吸血鬼には一切見えなかった。

もしかすると、真祖の吸血鬼だからこそその余裕なのかもしれないが。

それにしても……良く寝てるな。

「ん……？」

流星は『闇の福音』といった所だろう。

彼女は俺の気配に気づいたのか不機嫌そうな表情を浮かべ、寝惚け眼を擦りながら俺を見上げている。

「茶々丸……もうそんな、時間か？ふわあ……zzz」

顎が外れてしまうのではないかと此方を心配させるくらい大きな欠伸して見せたエヴァは、開きかけていた瞳を閉じて再び夢の世界に入り込んでしまった。

逆光になっているとはいえ自らの従者と他人を間違えるなよ、と心

の中で苦笑しながら俺は爆睡中のエヴァに声を掛ける事にした。

「起きて下さい、マスター」

真祖の吸血鬼にはそぐわない挙動を見て悪戯心が芽生えた俺は、金髪少女の従者である茶々丸の声真似をしつつ、舟を漕ぎ続ける身体の動きを止めるように頭を右手で鷲掴みにした。

ふむ…… 『キラークイーン』 を使ったら真祖の吸血鬼はどうなるのだろうか……。

再生するのか…… それとも……？

いや、冗談だからな？

「うう…… にやーめー、ろお…… zzz」

頭を鷲掴みにされたエヴァは眉間に深い皺を寄せ、目を瞑ったまま手をパタパタと上下に動かしていたのだが……。

次第に力を失っていく発条仕掛けの人形のように手の動きを緩慢にさせていき、最後には反抗の意志の顕れだった手の動きを完全に止めて、再び静かに寝息を立て始めた。

そんな光景を目の当たりにした俺は、引っ切り無しに沸いて来る笑いを噛み殺しながら、今度は何となく気紛れで優しく頭を撫でてみる事にした。

すると。

「…………おかあ、さん」

信じられない事にエヴァは一筋の涙を流しながら、小声で寝言を呟いたのだ。

「…………どういうことなの？」

これも『クレイジー・D』の能力なのか…………？

俺は少し罪悪感を感じつつも、エヴァの頭を撫で続けていると。

「ん…………む？」

ようやく目を覚ましたエヴァと視線が搦ち合った。

「…………よ、よう」

俺は頭を撫でるのをやめて、ぎこちなくエヴァに挨拶した。

思わぬ闖入者に驚いたらしいエヴァは大きな瞳をパチクリとさせ、信じられないといった様子で俺を見ていたが、暫くしてからゴホンとわざとらしい咳払いをしたかと思えば、ゆっくりと立ち上がった。

この時、直立状態でも車椅子に座っている俺と身長が余り変わらないエヴァに、少し哀愁を感じてしまったのは秘密である。

「ふ、ふん…………転入二日目ですボリとはな…………昨日の教科書の礼でも言いに来たのか？」

エヴァは嘲るように鼻を鳴らし、高圧的な物言いで俺をジロジロと

観察するように睨みつけている。

「先輩”に挨拶しに来たっていうのに……そんな言い方はないだろっ?」

そう言つて俺は飄々と肩を竦め、わざとがましく溜め息をついて首を横に振つた。

「……貴様」

抜き身の刀のような鋭い敵意を剥き出しにして、エヴァは俺を睨みつけている。

悪ふざけを続けようかとも思ったが、エヴァの強烈な視線に耐え切れなくなった俺は単刀直入に話を切り出す事にした。

「と、まあ冗談はここまでにして……早速で悪いんだが……内密に交渉がしたい。だから“場所”を整えてくれないか?」

毅然とした態度で提案するとエヴァは顎に手を添えて、どう対処すべきか考えあぐねるている様子だった。

エヴァは暫くの間、俺の事を凝視しながら沈黙していたが。

「……貴様、どこまで知っている?」

エヴァは顎に手を添えたまま少しだけ眉間に皺を寄せ、値踏みするように此方を睨み据えている。

虚偽の発言は許さないとでも言いたげに顔を顰め、そして敵意の眼

差しを向けるのを忘れずに。

さてと……ここからは一歩間違えればデッドエンドまっしぐらってか……転生前に培ってきた交渉術の見せ所だな。

「どこまで……とは？」

一応いつでも離脱できるように『ザ・ワールド』を使う事を念頭に起きながら、さも質問の意味が分からないといった風に首を傾げながら、俺はエヴァに聞き返した。

「質問を変えてやる……では私の正体を知っているか？」

エヴァは冷ややかに値踏みする眼差しのまま、俺を真っ直ぐ見据えている。

「真祖の吸血鬼……だろ？」

エヴァの威圧感をヒシヒシと感じつつも、平然を装ってエヴァの質問に返答した。

すると、ここにきてようやくエヴァは口元に微笑めいたものを覗かせて、

「……ふむ、いいだろう」

そう言っただけでエヴァは納得顔になると、一度だけ小さく頷いてからパチンと指を鳴らして見せた。

恐らくだが、人払いや防音の結界を張ってくれたのだろう、僅かに

だが魔力の気配を感じる事が出来た。

「それで……私が真祖の吸血鬼、そして悪の魔法使いだと理解しておきながら、お前は一体何の用だ？」

それまでの鬻めっ面から打って変わり、俺という珍しい闖入者に興味を示してくれたようで、エヴァは口元を歪めて俺を睨みつけている。

「此方が出す提案と条件を呑んでくれるのであれば……俺の血を提供してもいい」

本格的に交渉スタート、っと。

第二十六話（後書き）

久しぶりに執筆したので、文体などが変わっているかもしれません
（汗）

誤字などがありましたら、報告していただけると嬉しいです。

第二十七話（前書き）

のんびりペースすぎますかね……？

今回は少し短めですが、どうぞ。

第二十七話

「何イ！？……お前の血液を私にくれるのか？」

エヴァの声の調子は明らかに上擦っていて、金色の瞳を満月のように丸くして、半信半疑の表情を浮かべて俺に熱い視線を送ってくる。

……それほど驚く事なのだろうか？

俺は『ああ』と小声で言っただけでエヴァに頷いて見せ、その後に『ただし条件があるがな』と付け加えた。

するとエヴァはシンキングタイムに入ったようで口元に手を添え、俯き加減に頭を垂れて何やら小さな独り言をぶつぶつと口から漏らしている。

恐らくだが、エヴァにとって俺の血液は喉から手が出るほど貴重な物なのだろう。

よく考えた事は無かったが、俺の総魔力数は一般人の何人分に値するのだろうか？

「……提案、そして……条件とは何だ？」

どうやらエヴァは思考が纏まったらしく、顔を上げたかと思えば両腕を胸の前で組み、此方の様子を窺うように訊ねてきた。

面倒事を嫌がって拒否される可能性があるかとは思っていたのだが、交渉材料としての“血”の威力は絶大だったという事か。

まだエヴァに対して切れる“カード”は残っているが、俺の場合はソレを証明できる証拠が無いからな……。

「提案はたったシンプルに一つだけ……俺に魔法を教えてください、それだけだ」

血の滴る肉を前にした獣のようなギラギラと滾る視線を受け止めつつ、俺は長年考えていた提案をエヴァに提示した。

俺の足は自分で言うのも何だが、もう“使い物”にならないだろう。

原作が始まる前の今……断定は出来ないが恐らく安全だろう。

だが、原作が始まると多くの“災難”に遭う事になる。

今の俺では大切な木乃香を護るところか、確実に刹那の足手纏いになっってしまう。

どれだけ俺がスタンド能力や弓を駆使しても、弓は街中では使えなければ魔力にも限界がある。

となれば、残る手段は一つしかない。

魔法を覚えて肉体強化で自らの足で動き回れるようにするか、転移魔法などでカバーするか……。

ただでさえ燃費の悪い『ザ・ワールド』に加えて魔法を使用する事になるのだから、魔力の減りが尋常ではなくなると思っが悠長な事は言ってられない。

……身体はボロボロになるかもしれないが。

「……条件は？」

俺の提案を聞いたエヴァは目を瞑って沈黙していたが、暫くして瞳を開くと独り言を呟くように小さな声で言った。

提案に対して何も言わないという事は……うむ、重畳重畳。

「条件は俺が魔法を知っているという事実を誰にも口外しない事、俺の妹の近衛木乃香、友人の桜咲刹那には絶対に手を出さない事のことだ」

「……本当にそれだけか？」

「それだけだが……どうした？」

どうやらエヴァは何か気が食わなかったのか、溜め息をついてから苦笑いを浮かべている。

「いや、拍子抜けしただけだ……やれ真祖吸血鬼の力が欲しいとかやれ私の後ろ盾が欲しいだとか言い出すかと思えば……コレだからな」

エヴァは嘲るように頭を横に振り、吐息を吐きながら肩を竦めている。

「……馬鹿にしてるのか？俺は真面目に」

「ならば問おう、なぜ悪の魔法使いの代名詞にされる“私”に魔法の教えを乞おうと思った？」

エヴァの動作を見て少し癢に障った俺は声を荒げようとしたのだが、尋問するかのようなエヴァの低い声に遮られてしまった。

先程までの嘲るような態度から一変し、エヴァは毅然とした調子で俺を見据えている。

「あ……いや、それは……」

「……」

特に何の考えも無かった為、しどろもどろになっている俺を静かに睨みつつ、エヴァは黙って返答を待っている。

何か答えなくてはと思い、暫く考えた末、苦し紛れに口から出た俺の言葉は。

「席が隣りだったから」

だった。

その巫山戯た返答を耳にしたエヴァは俯いて肩をプルプルと震わせ始めたので、地雷を踏んでしまったと俺は心底焦っていたのだが。

「クツクツクツ……フハハハハハハハ！」

突然、エヴァは腹を押さえて高笑いを上げ始めた。

その光景を目にした俺は……正直に言っただけ少し引いてしまった。

「ククク……いいだろう、気に入ったぞ近衛木乃羽！魔法を教えて欲しいと言っていたが、具体的には何を教えて欲しいのだ？上位古代語魔法か？それとも私が編み出した秘術か？」

そう矢継ぎ早に言っただけエヴァは大仰に天を仰ぎ、そしてエヴァにとっても良く似合う酷薄な笑みを咲かせている。

「ふむ……まだお前には少し早かったか。では中級魔法か？」

俺が顔を引き攣らせて頭の中で言葉を必死に探していると、何かを悟ったのかエヴァは呆れた風に溜め息をついてから、俺を見据えて半笑いを浮かべている。

「……いや……その」

俺の歯切れの悪い言葉にエヴァは首を傾げざるを得なかったようで『初級魔法ぐらいは唱えられるのだろう？』と問いを重ねてきたが、俺はその問いに沈黙で答える事しか出来なかった。

「まさか初級魔法すら唱えられないのか……？」

訝しげに目を細めるエヴァに、俺は無言のまま怖ず怖ずと首を縦に降って見せた。

するとエヴァは一呼吸の間だけ口をポカンと開けたまま呆気に取ら

れ、それから深く吐息をついて頭を掻いている。

「お、お前は……『闇の福音』と恐れられるこの私に、一から魔法を教えてもらうつもりだったのか？」

何も返す言葉が見つからず、俺はエヴァの言葉にただ黙って頷いた。

「わ、わかった……魔法に関しては何色にも染まっていないという事だな。ま……まあキャンパスは綺麗な白色の方が自分の好きな絵が描けるからな」

エヴァにしては珍しい筈のフォローが心に染み入る……どころかザクザクと突き刺さる。

「す、すまない……あ、そうだ！能力は持っているぞ」

このままではエヴァの中での評価がマズイと思った俺は、声高らかにそう言って車椅子の背中のポケットから“ある物”を取り出した。

……師弟関係になる訳だから、一つぐらい能力を教えてもいいだろう。

あと二つは多分、教えないと思うけど。

「能力？……む、それは私の教科書か？」

どうやらエヴァは興味を示してくれたようで、俺の膝の上にある教科書を覗き込み、少しだけ瞳を輝かせて小首を傾げている。

「ああ、まあ見てくれ」

パラパラと適当に教科書のページを捲り、エヴァの所有物だという事を忘れて赤線を引いてしまったページを開けた。

その際、所有者からの抗議の視線が全身に突き刺さり、エヴァは何かを言おうと口を開きかけたが、抗議よりも興味が勝ったように開きかけていた口を閉じ、無言のまま先を促してきた。

「瞬き厳禁だぞ、と」

そう言っただけは人差し指で教科書に引かれてしまった赤線を、ゆっくりとなぞって見せた。

……結果は言わずもがなである。

エヴァからは感嘆の声が上がり、教科書に書かれた線はペリペリと宙に向かって剥がれていき、そして細かい粒子となって霧散した。

「時間の逆行……いや、何か違うな……」
顎に手を添えて、エヴァはぶつぶつと独り言を呟いて思考を巡らせている。

俺は伊達に600年も生きていないな、と心の中でエヴァを称賛した。

“時間の逆行”とは言い得て妙である。

『クレイジー・D』の元に戻す能力。

言い換えれば物体を元の“時間”に戻す能力とも、言えない事もな

いと思う。

流石に生物や物体の修復、という答えまでは辿り着いてはいないよ
うだが。

「今のは……どういう能力だ？」

「弟子の個性ぐらい何も言わずに見抜いてくれ、“師匠”」

解答を聞けなかったエヴァは不満げに不平を漏らしていたが、どう
やら師匠と呼ばれた事が嬉しかったらしく「もう一度言え」と催促
してきたが、敢えて無視しておいた。

暫くして頬を膨らませて黙っていたエヴァが

「昨日の茶番のタネはこれか？」

と訊ねてきたので、俺は黙って首を縦に振って見せた。

「ふむ……成る程な。で、これが何の役に立つんだ？」

「……は？」

エヴァの突拍子もない思わぬ発言に、俺は素っ頓狂な声を上げてし
まう。

「いやだから今の能力……実戦で役に立つのか？」

……『クレイジー・D』の能力の本質を見抜けていないと、そう思
ってしまうか。

何も答えまで教える必要はないだろうと思った俺は、能力の件をうやむやにして話を打ち切った。

それからはエヴァと適当な会話を言い、そして最終的に「学校が終わったら私の家に来い」と言われ、交渉も無事に完了したので俺は早く教室に戻ろうと、屋上のドアに向かったのだが。

「待て」

突然、背後からエヴァに声を掛けられた。

「……どうした？」

ゆっくりと振り返った時、目に入ったエヴァの表情は。

「血の“味見”を、させてくれないか？」

吸血鬼特有の鋭い牙を見せ付けるかのような、歯を剥き出しにした満面の笑みだった。

第二十七話（後書き）

今回はエヴァの濃厚な吸血シーンをr y

おまけ。

何となく三人をF a t e風ステータスにしてみました。

こんな事してるから更新遅れてんじゃねえのか、というツッコミは
厳禁です。

クラス：ボマー

真名：近衛木乃羽

性別：女性

身長・体重：150？ 38？

属性：中立・中庸

能力値

筋力 E

耐久 E

敏捷 E

魔力 E X

幸運 D

宝具（スタンド能力） E X

……なんて涙を誘う能力値なんだ（笑）

敏速は羽を出せば何とかなるかもしれませんが、その他は……うん。

クラス：ヒーラー

真名：近衛木乃香

性別：女性

身長・体重：152？ 40？

属性：秩序・善

能力値

筋力 D

耐久 E

敏捷 C

魔力 EX

幸運 B

ア
ー
テ
ィ
フ
ァ
ク
ト
宝具 B+

至って普通……なのか？

敏速が高いのはローラーブレイド着用的な意味で（笑）

クラス：セイバー

真名：桜咲刹那

性別：女性

身長・体重：151？ 41？

属性：秩序・中庸

能力値

筋力 C

耐久 C

敏捷 B

魔力 D

幸運 C

アーティファクト
宝具 C+

前の二人と比べると、まだバランスが良いですね。

アーティファクトは……仕方ない(汗)

この三人が聖杯戦争に参戦する小説のプロットが頭の中で出来r y

第二十八話（前書き）

エヴァ無双の一言に戻きます。

では、さようなら。

第二十八話

「今ここですか？……まあいいけどさ」

魔法を教えてもらう代償に血を提供する、そういう契約を交わしたのだから拒否する訳にはいかないのだが……まさか行き成りこんな場所で提供する事になると思いもしていなかった俺は、少し戸惑いながらも首を縦に振った。

「で……俺はどうすればいいんだ？」

よほど俺の血を吸えるのが嬉しいのか、先程からニヤニヤと含み笑いを漏らしているエヴァに近寄る。

「……そうだな、とりあえず車椅子から降りて地べたに座れるか？」
するとエヴァは緩んでいた表情を引き締め、真顔に戻してそう言った。

エヴァの言葉に内心で首を傾げながらも、俺は渋々エヴァの要求に従う事にした。

勿論、俺一人の力だけで地面に降りるのは少々危険なので、エヴァに補助してもらいながら車椅子から降りる事にはなったが。

「ふう……で、どうするんだ？」

また少し汗をかいてしまったので、心の中で溜め息をつきながらエヴァに先を促す。

胡坐をかいて座りたかったが、今の“服装”でソレをすると少々拙いと思い、正座の状態から両足を外にして、お尻を地面にぺたんと付けた座り方……所謂、“女の子座り”の状態で俺は地べたに座っている。

この座り方が非常に楽だった為、何だか複雑な気持ちになりつつ俺は次の要求を待っていたのだが、一向にエヴァが口を開こうとしなかった。

難問を前にした学生のように、瞳を閉じて顎に手を添え、熟慮している様に見える。

「しかし本当に良いのか……？吸血鬼に血を吸わせるという行為が、どれだけ無謀な行為だと分からない馬鹿ではないだろうか？」

まるで俺の身を案じるかのように、エヴァは小さな声で呟いて小首を傾げている。

普通なら吸血鬼に血を吸われた人間は、同じように吸血鬼化したり、操り人形に変えられて使役されたりする事になるが……。

「大丈夫、俺はエヴァを信じているから」

俺は軽い調子でそう言って、複雑な表情を浮かべているエヴァに微笑みかけた。

原作を見ている限りでは芯から悪い人物ではなさそうだし、まあ……大丈夫だろ。

「そうか……よし、では」

暫くの間、再び黙っていたエヴァだったが、一度だけ納得するように首を縦に振ると、突然俺に歩み寄って向かい合うように膝の上に座ったかと思えば。

「いただきます」

礼儀正しくエヴァはそう言うてから、大きく口を開いて吸血鬼特有の鋭い牙を太陽の光で輝かせ、俺の首元に。

「………ちょっと待てい金髪幼女ッ！」

突然の事で思考が停止していた俺だったが、訳の分からない状況を咀嚼する事に成功した為、慌ててエヴァの肩を掴んで押し退けた。

エヴァは尻餅をついて誰が金髪幼女だ、と不平そうに俺を睨んでいるが……無視する事にする。

「何が“いただきます”だッ！いきなり首元に襲い掛かるんじゃない」

「ああ、そんな事か。実はな」

………どうやらエヴァの説明によると、血を吸うのに一番適している場所は首元らしい。

首元の皮膚は柔らかく頸動脈などの大きな血管が集中している為、血を吸いやすいそうだ。

俺は腕など他の場所では駄目なのか、とエヴァに訊ねたのだが、どうやら場所によっては血を吸いにくかったり、気分が乗らないらしい。

そう言うって熱心に吸血行為の何たるかを懇切丁寧に説明してくれるのだが、俺には全く理解できなかった。

首元でなければ駄目なんだ、と駄々っ子のように不満を撒き散らしているエヴァに、

首元……更に向かい合って血を吸われる事に納得がいかなかった俺は、妥協案として後ろからでは駄目なのかと提案したのだが……。

「駄目だ」

と一言でピシヤリと一蹴されてしまった。

理由としては、後ろからだと襲っているようで血がマズくなるらしい。

ブライドの問題かよ、と心の中でツッコミを入れつつ、このままでは平行線を辿る事になると思った俺は、渋々だが条件を呑む事にした。

血を提供するという条件で契約を交わしたのは俺で、いきなり約束を反故にする訳にはいかない。

「では、動くなよ……?」

俺の膝の上に座り直し、勝ち誇ったような表情を浮かべながらエヴァが静かに呟いた。

改めて俺はゴクリと息を呑んだ。

目の前には均整の整ったエヴァの顔。

宝石のように輝いている魔性の瞳。

香水を付けているのか甘い香が鼻腔を擦った。

少し目眩がして、正常に物事を考えられなくなる。

今度は獲物を逃がさない為か、エヴァは俺の両肩をガツチリと鷲掴みにして顔を近づけてくる。

エヴァの生暖かい吐息が首筋に当たる。

……もう逃げられない。

「では今度こそ……“いただきます”」

エヴァが耳元で呟いたと思った次の瞬間。

「……………」

チクリと針を刺されたような痛みを首筋に感じた。

血を吸われているというのに、不思議と嫌悪感は沸いて来なかった。

それどころか反対に、高揚感に似たような心地好い感覚が全身を支配していくような気がする。

心臓が早鐘のように高まれば高まる程、それに呼応するかのよう
にエヴァが俺の血液を吸っていく。

母性を擦られる、というのはこういう事をいうのだろう。

何故かチュパチュパと音を立て吸血行為に勤しんでいる目の前の少女が、まるで我が子のように見えてきて愛おしく感じてしまった。

ふと気付けば俺はエヴァの金色の髪を梳かすように、優しく頭を撫でていた。

ハッと我に返った俺はエヴァの頭を撫でる手を止めて、赤子のように俺の首筋にむしゃぶりつくエヴァに声を掛けた。

「おい、エヴァ……もういいだろ……？」

血を吸い始めてから二、三分は経過しているのだが、未だにエヴァは終始無言のまま、さも美味しそうに俺の血を吸い続けている。

まるで乳離れが出来ない子供のようだ、と俺は心の中で苦笑した。

「……………エヴァ、聞いているか？」

早く教室に戻らなくては、もうすぐ昼休みを知らせる鐘が学校中に鳴り響くだろう。

そうすれば教室に閉じ込められていた、二匹の“野獣”が野に解き放たれる事になる。

その二匹の野獣は真っ先に保健室に向かい、そこで“獲物”いないと分かれば……。

……考えたくない、早く教室に戻ろう。

「エヴァ……もう、いい……だろ？」

先程から声は掛けてはいるが、悪ふざけをしているのか聞こえてないフリをしているのか、とにかくエヴァは俺の血を吸うのを止めようとしなない。

正直に言って、とうの昔に“味見”なんて範疇は越えてしまっている。

……別に魔力は幾らでもエヴァにくれてやるが、血液は俺にも限界がある。

血を吸われ過ぎたのか少し頭がクラクラしてきた俺は、両肩に手を当ててエヴァを押し退けようとしたのだが、何かに感づいたのかエヴァが両腕を背中に回してガツチリとホールドされてしまった。

当然ながらエヴァはコクコクと軽快に喉を鳴らしながら、吸血行為は続けている。

「ち、ちよ……エヴァさん……？」

じわりと嫌な汗が背中を伝っていく。

まさか……暴走……？

もう一度押し退けようとしたのだが、背中に回されたエヴァの腕にキリキリと胸を締め上げられた。

「い、たたた……おいエヴァ？」

ヒシヒシと嫌な予感を感じながらも声を掛けたが、エヴァからの返答はない。

「エヴァ、いい加減にし　痛ッ!？」

今度は本気でエヴァを突き飛ばそうとしたその時、背中に突き刺すような鋭い痛みを感じた。

恐らく獲物を逃がさないように爪を突き立てているようで、エヴァは俺の背中を引き裂かんばかりに力強く爪を立ててくる。

背中 of 痛みに耐えながら、このままではマズイ事になると思った俺は最終手段に打って出た。

「『ザ・ワールド』ッ!」

俺の身体を冷ましてくれた涼風が吹き止み、空を流れていく雲が動きを止める。

そして世界の時が停止した。

俺は急いでエヴァの両肩に手を添えて、軽く突き飛ばした。

停止した時の世界で突き飛ばされたエヴァは、某お化けのように両腕を前に突き出し、空中に髪を振り乱した状態でピタリと停止した。よく見れば本当に小さな赤い水玉が、間合いの開いた俺とエヴァの間に幾つか浮いている。

「そして時は……えっ？」

自分の血液だなと薄気味悪く感じながらも、俺が時間停止の解除キ―を言う前に時が再び刻み始めてしまった。

それ程エヴァに魔力を奪われたという事だろうか……？

もしそうだとすれば、今の俺の魔力量ってガス欠になってる……？
時が刻み始めた事で再び動き出したエヴァは屋上の床に後頭部をゴン、と鈍い音を立てて打ち付けてしまった。

「だ、大丈夫か……？」

力強く突き飛ばし過ぎたかもしれないと少し心配になった俺は、頭を打ち付けたまま微動だにしないエヴァに声を掛けたのだが。

「……」

暫くしてエヴァは無言のまま、むくりと起き上がって俺をマジマジと見つめている。

「お、おい……正気に戻った……ッ！？」

俺の心配は杞憂だったようで、エヴァは平然と満面の笑みを浮かべている。

真っ白で整った綺麗な歯を、俺の血液で真っ赤に染めて。

補食者の瞳に睨みつけられ、全身で危険を感じ取った俺は何とか立ち上がって逃亡しようとしたが、貧血のせいか上手く脚に力を込めれずに立ち上がる事が出来なかった。

すぐ近くに車椅子はあるが……。

エヴァの方を振り向くと、フラリと立ち上がって一歩、また一歩と俺に歩み寄ってきている。

恐ろくだが車椅子に攀じ登っている間に、エヴァに追いつかれてしまったらう。

車椅子で逃亡する事を諦めた俺は、とにかく屋上から脱出する事にした。

嫌な原作再現だな、と心の中で俺は皮肉を呟いた。

重傷を負って主人公から逃走する某吸血鬼のように、俺は融通の利かない脚をズルズルと引き摺りながら、入口のドアに向かって這いずっていく。

後ろを見れば歯を真っ赤に染めて満面の笑みを浮かべ、獲物を追いかけるようにユックリと間合いを詰めて来る金髪幼女。

色々ツッコミ所が多くあるが、今は律儀にツッコミを返している場合ではない。

必死に地面を這いずっていき、入口のドアまで後少しという所で誰かにガシリと足首を掴まれた。

錆び付いた機械のように、ゆっくり首を巡らして後ろを振り向く。

そこには……。

「待て待て待て、落ち着けて」

その光景を目にした俺は全身に怖気が走り、冷や汗が滝のようにダラダラと吹き出していく。

ホラー映画でこういう場面に陥った主人公が取る打開策を、頭の中で並べてみる。

一、持っている何かしらの武器で反撃。

二、もう片方の足で蹴り飛ばす。

三、脚を激しく動かして振り払う。

恐らく、この三択になると思うが……。

一、武器持ってないです。

二と三、足が不自由です。

……詰ん……だ？

足首……膨ら脛……膝……太股と網を手繰り寄せるかのようにならぬアは、その体軀からしては考えられない力で俺の身体を引き寄せていく。

脚から血を吸わないという事は、意識を失っている癖に妙なポリシ―はまだ覚えているようで、あくまでも俺の首筋から血を吸うつもりなのだろう。

俺は地面を引き摺られながら、もし後ろから襲われたら反撃が出来ないと思い、咄嗟に身を抜って仰向けになったのは良かったが……。

「……フッフ」

エヴァは仰向けになった俺の腹の上にドスンと座り込み、悍ましい笑い声を上げながら舌を出して唇を舐め回している。

……どう見てもマウントポジションです、本当にありがとございしました。

このままでは乾物になってしまおうと感じた俺は、少し痛い目にあってもらおうと右手を咄嗟に伸ばしたのが。

「…………ツ!？」

有り得ない早さで手首を掴まれ、そのまま地面に叩き付けられた。

……流石は真祖の吸血鬼という事か。

慌てて左手も伸ばしたのだが、同じように手首を捕まれて無惨にも失敗に終わった。

……オワタ？

エヴァの顔がゆっくりと首筋に近づいてくる。

どうにかして拘束から逃れようと身を擦ったり、腕に力を込めたりしたがピクリとも動かなかった。

体格差のある幼女に組み伏せられて身動き一つ取れないとはな……。

生暖かいエヴァの吐息が首筋に当たったかと思えば、再び注射針で刺されたような小さな痛みを感じた。

また……血を……ツ。

エヴァのなまめかしい血を吸う音が、頭の中まで響いてくる。

「……………は、マジ……………やば……………」

高熱にやられてしまった時のように、頭がポーツとして何も考えられなくなってきた。

このままでは非常にマズイ事になると思い、大声を上げて誰かに助けを呼ぼうと口を開いたが。

「……………！……………ッ？……………ッ！？」

酸素を求めて水面上がった魚のように口をパクパクとさせるだけで、喉から声が出る事はなかった。

そういえば吸血鬼は吸血行為を行う際に、獲物を催眠術で眠らしたり声を出せないようにすると何かの文献で見たことがあったな……………。

よくよく考えてみれば人払いと防音の結界を張ってもらってるよな……………俺。

……………先程から『ザ・ワールド』を何回も心の中で唱えているが、時間が止まる気配は一切なかった。

完全に魔力切れ状態である。

妖艶なエヴァの血を吸う音も聞こえなくなり、頭の中が真っ白になって何も考えられなくなってきた。

八方塞がりになった俺は、目を閉じて諦めかけた次の瞬間。

すぐ頭上でドアが荒々しく開いた音がしたかと思えば、次の瞬間にはエヴァの身体がフワリと宙に浮いていた。

第二十八話（後書き）

ふいー……疲れました。

さて、F a t e 編の話ですが r y

今のところマスターは……刹那です（笑）

そして近衛姉妹が“双子”のサーヴァントで主従が逆転してしまうという無理矢理設定（苦笑）

アーチャーのマスターが金切り声を上げて慌てふためく姿が頭の中に浮か r y

第二十九話（前書き）

哀れモブキャラ……な話になってしまいました。

では少し長めの二十九話、どうぞ。

第二十九話

突然の出来事に驚きながら上を向くと、頭上には茶々丸が立っていてエヴァを片手で摘まみ上げていた。

そして……まるでゴミでも棄てるかのように、ポイツと遠くに主である筈のエヴァを茶々丸は放り投げた。

「へぶぶぶツ!？」

可笑しな悲鳴を上げながら地面を転がっていくエヴァを尻目に、茶々丸が心配そうな表情で声を掛けてくる。

「大丈夫ですか、木乃羽さん」

その場でしゃがみ込んだ茶々丸は、今にも涙を流して泣き出しそうな表情を浮かべて俺を見ている。

徐にフワリと優しく頭を持ち上げられて、茶々丸に膝枕された。

太股の柔らかな感触を感じながら、俺は助かったと安堵の溜め息をついていた。

俺は助けしてくれた茶々丸に礼を述べようとしたのだが、口がパクパクと開閉するだけで声が出ない。

どうやら喋る事が未だに出来ないらしい。

茶々丸は何かを感じ取ったのか、辛そうな表情のまま無言で首を横

に振っている。

余りにも茶々丸が辛苦の表情を浮かべていた為、少しは安心させてやろうと思ひ、俺は少し苦勞して力無く笑つて見せた。

「……………イタタタ、主である私に何て事を」

「……………マスター！」

暫くしてエヴァが起き上がったかと思えば表情を歪めて不平を漏らしていたが、反省の意を示さない主を諫めるかのように、茶々丸がぴしゃりと言ひ放つた。

茶々丸の声には明らかに怒氣が含まれており、いつも無表情の顔は柳眉を逆立てて、怒っているように見えた。

茶々丸の膝に頭を預けながら、思わず俺は息を呑んだ。

従者に激怒されている主の方に視線を移すと、どうやらエヴァは状況を飲み込めていないようで、忙しく視線を動かして寝転がっている俺と憤怒の表情を浮かべている茶々丸を交互に見ている。

「マスター、私は今までの経緯をある程度は把握しているつもりです。“リンク”してましたから」

茶々丸の話聞いて、俺の頭の上に疑問符が幾つか浮かぶ。

エヴァが念話か何かで茶々丸に話していたのだろうか？

……………アポも無しに行き成り接触したのだから、警戒したエヴァが茶

々丸を呼んだのかもしれないな。

いくら真祖の吸血鬼とはいえ、今は弱体化してるからな。

「ですが、途中から連絡が途絶えました。何をしていたのですか……マスター」

茶々丸が氷塊のように冷え切った声で静かに呟き、先程までの憤怒の表情から一変して感情の無い冷徹な機械のように無表情でエヴァを睨み据えている。

「い、いや私は血の味見をしていただけ……」

「酷い貧血状態になり、その上……誰かに声も出せなくされた木乃羽さんを見て、まだその言葉が言えますか？」

母親に叱られている子供のように、しどろもどろになって言い訳しているエヴァに対して、茶々丸は冷酷な視線を送っている。

「……もういいです、木乃羽さん……じっとしていて下さい」

茶々丸は情けない主を見て諦観したかのように吐息を吐き、一呼吸置いてから俺の頭を優しく地面に置いた。

何事かと思って茶々丸の動作を目で追っていると、茶々丸は俺の真横に移動したかと思えば。

「失礼します」

そう言って茶々丸は小さく一礼し、突如として俺の貧弱な身体を抱

き抱えた。

所謂、お姫様抱っこというやつである。

「~~~~ツ!？」

そんな茶々丸の突拍子も無い行動に驚いた俺は、小さな声にならない叫びを上げてしまった。

何回も瞬きを繰り返しながら茶々丸に説明を求める視線を送ったが、知ってか知らずか茶々丸は優しい表情のまま黙って俺を見つめている。

女性に抱き抱えられるという行為は非常に恥ずかしかったが、自分で移動する事は疎か身体を起こす事すら出来そうになかったので、茶々丸の好意に甘える事にした。

「保健室に行きます、マスターは車椅子を運んで下さい」

まるで主従の立場が逆転したように茶々丸はエヴァに言い付けて、俺を抱き抱えたまま屋上を後にしようとしたのだが。

「なツ!？この私に車椅子を運ば」

「……マスター何か囁きましたか、何も言ってないですよね？」

エヴァの方を振り返った茶々丸は有無を言わさぬ口調で畳み掛ける
と、瞳を三角にしてエヴァを睨みつけている。

茶々丸の視線に耐え切れなくなったのか、エヴァは頭を垂れて無言

で傍にあつた車椅子を持ち上げた。

「木乃羽さん、少し眠っていて下さい。二度と強姦魔は近寄らせたりしませんので」

茶々丸は俺を抱き抱えたまま開け放たれているドアを通り抜けようとしたのだが、まだ納得が出来ないのかエヴァが反論の意を示した。

「だ、誰が強姦ま……あ」

茶々丸は電力を失った機械のようにピタリと足を止め、首だけを半回転させて真後ろを振り向くと。

「違つのですか？」

そう言つて茶々丸はエヴァを正面に見据えたまま、微動だにしなくなつた。

「あ……う……」

言葉に詰まつたエヴァが見る見る内に萎んでいくと、茶々丸は首を元の位置に戻して階段を下りていく。

どうやら茶々丸は疲労困憊な俺の事を考慮してくれているのか、振動が来ないように移動しているようだった。

虚ろな瞳のまま茶々丸を見つめていると、視線に気づいたのか俺と目が合った。

「木乃羽さん、おやすみなさい」

そう茶々丸に優しく告げられた俺は、まるで魔法にかかったように
瞼が重くなり、気づけば眠りについていた。

「……ん」

霧散していた意識が再び覚醒して重たい瞼を開けると、そこには知
らない天井があった。

お決まりの独り言をボソリと呟いてから、首を左右に動かして辺り
を見渡す。

少し目に痛い、眩しい蛍光灯の光。

この場所が清潔な事を証言しているかのような真っ白のシーツ。

何処か懐かしい鼻にツンとくる消毒液の匂い。

真横には乗り慣れた俺の“足”が主を待っているかのように、ポツ
ンと置いてある。

どうやら此処は保健室のようで、眠ってしまった俺を茶々丸が運ん

してくれたのだろう。

「あら、起きたのね」

不意に声を掛けられた。

首を巡らして声の聞こえた方向を向くと、長い黒髪を髪止めで一つに纏め、白衣を来て黒縁眼鏡を掛けた妙齡の女性が机に向かっていった。

手に持っていた万年筆を机に置いて、ヒールの乾いた音を静かな部屋の中に響かせながら、その女性は俺に近寄ってきた

そして俺の枕元に立つと額に優しく手を宛行つて、その女性は納得したように頷いて見せた。

「うん、やっぱり熱は無いようね」

そう言つて女性は微笑むと白を基調とした小さな事務用の机に戻り、何やらカルテのような物に万年筆を走らせている。

「顔を戻つたようだし……今の気分はどうかしら？」

カルテに何かを書き込みながら、女性は左手に持ったマグカップを啜っている。

仄かに薫る香ばしい珈琲の匂いが少し鼻についた。

……苦いのは苦手だ。

「いえ……大丈夫……ッ!？」

ベッドから身体を起こそうと上体を持ち上げたのだが、突然フツと意識が飛んで、再び後頭部を柔らかな枕に埋めてしまう。

そんな危なかつしい動作を見た女性は、慌ただしくマグカップと万年筆を机に置いて俺に駆け寄ってくる。

「駄目よ安静にしてなくちゃ。さっきまで死にそうぐらい顔が真っ青だったんだから」

少し垂れ目な黒い瞳を尖らせて、女性は俺を見下ろしている。

「すみません、でも本当に大丈夫です」

そう言って俺は再びユツクリと上体を起こし、顔を顰めている女性に微笑みかけた。

依然として不満げな表情を浮かべている女性の視線を受け止めつつ、女性の背後の壁に掛かっていた時計に目をやった。

針が示している時間は、なんと3時を回っていた。

「今頃HRの時間じゃないかしら？」

俺が視線の先に何を見ていたのか気づいたのだろう。

女性はそう言うってから「激しい動きは厳禁」と俺に釘を刺し、再び椅子に座ってカルテに万年筆を走らせている。

まさか、こんな時間まで意識を失っているとは……。

「そういえば、妹が来てませんでしたか？」

今の俺はそれだけが気掛かりだった。

俺が眠っていた間に昼休みがあったのだから、恐らく木乃香が来ていた筈なのだが……。

「ええ、来てたわよ。神楽坂さんや他のクラスメイトと一緒にね」

心底疲れたとでも言いたげな横顔を俺に見せてから、女性はシミジミとマグカップを啜っている。

どうやら女性の話によれば1 Aのクラスメイトのほぼ全員が、昼休みの鐘が鳴ると同時に保健室に駆け込んできたらしい。

ほぼ全員で保健室に押し寄せるなんて馬鹿な奴らだと溜め息をつきながら、心の中でそんな馬鹿なクラスメイト達に少しだけ感謝しておいた。

俺が安静なおいた方が良くと判断した女性は、保健室に雪崩込もうとする生徒達を放課後になつたら保健室に来なさい、と言って何とか押し戻したらしい。

次いでに今度は代表者を決めて来いと付け加えて。

ナイスな判断だ、と目の前の女性を心の中で称賛した。

もし保健室に侵入を許していれば、何だかんだで俺が叩き起こされ

ていた可能性が高い。

「ホントに疲れたわ……あら、噂をすれば何とやらね」

俺が心底気疲れしていた女性を労っていると、女性がボソリと呟いた。

女性の言葉を疑問に思いながら、何となく耳を澄ませてみると。バタバタと慌ただしい足音が廊下から聴こえてくる。

ああ来たか、と胸中で苦笑しながら保健室の入口のドアをボンヤリと眺めた瞬間。

「ううううううちやああああん！」

荒々しくドアが開かれたと思えば、木乃香が大声で叫びながら保健室に飛び込んできた。

俺の身体を案じてくれたのか、慌てて暴走機関車の前に立ち塞がった女性だったが、そんな柔な制止で止まる筈もなく木乃香に無惨にも跳ね飛ばされた。

錐揉み回転しながら吹っ飛んでいく女性を尻目に、暴走機関車はそのままの勢いで俺に突っ込んできて。

「ううううちやああん！」

よく分からない奇声を上げながら、俺の首に腕を回して抱き着いてきた。

「お、おい……やめ」

抱き着いてきた木乃香は飼い主に再び会うことが出来た忠犬八チ公のように、激しく俺に頬擦りしてくる。

そして徐々に頬擦りしてくる木乃香の顔が下に落ちていき、胸に顔を埋めて。

「ドサクサに紛れて何やつとるんやツ！」

“何故”か手に持っていた小さなトンカチで、胸に顔を埋めてグリグリしてくる木乃香の頭を殴りつけた。

アニメチックに腫れたタンコブを手で押さえながら、バレてしまったかとも言いたげに舌を出し、木乃香は無邪気な笑みを浮かべている。

「へえー、アンタ……京都弁喋れるんじゃない」

不意に誰かの声が聞こえ、木乃香の背後を恐る恐る窺うと、そこにはルームメイトの神楽坂が立っていた。

「男みたいな喋り方しかないから喋れないんだと思ってたけど……やっぱり木乃香の姉だったのね」

神楽坂は髪飾りの鈴を凜と鳴らしながら、俺に近寄ってくる。

「か、神楽坂……居たのか」

「居たのか、ってアンタねえ……心配して様子を見に来た友達にソレは無いでしょ」

木乃香の真横で立ち止まると神楽坂は心外だ、と言外に伝えるかのように溜め息をついてから首を横に振っている。

「……た、頼むから俺が京都弁を喋れる事を黙っててくれないか？」

瞳を閉じて肩を落としている神楽坂に、俺は京都弁を喋れる事を黙っているように頼み込んだ。

「……はあ？別に似合ってるわよ？」

訳が分からないといった様子で神楽坂は首を傾げている。

「京都弁が喋れるなんて……お、俺が女みたいじゃないかッ！」

一拍置いてから俺が声を振り絞って言うと、神楽坂は一瞬ポカんと呆けた表情を浮かべてから、ああ、と一言納得するように呟いて頻りに首を縦に振っている。

「ま、まあ黙つといてあげるから……そんな顔で私を見ないでよ、私が虐めてるみたいじゃない」

「ありがとう……神楽坂」

俺は感謝の言葉を神楽坂に述べて、ふと部屋の隅を見ると先程まで痙攣を起こして床に倒れ伏していた女性が、可笑しな方向に傾いた眼鏡を戻しながら立ち上がっていた。

「き、今日は絶対安静よ……木乃羽さん」

女性は覚束ない足取りでフラフラと左右に揺れながら椅子まで歩いていき、ドスンと腰を降ろして深い溜め息をついている。

「なあせんせー。うーちゃん、どないしたん？」

自分が跳ね飛ばした事を覚えていないのか、普通に木乃香は珈琲を啜って体力回復を行っている女性に声を掛けた。

急激な環境の変化に身体がついてこれなかったのでは、と女性は冷静に述べてからマグカップの中身を一気に飲み干して、力尽きたように机の上に突っ伏した。

神楽坂は慌てて女性に近寄り、肩を叩いてドンマイと励ましているが……へんじはない、ただのしかばねのようだった。

そんなボロボロになっている女性を無視するように振り向いて「そうなん？」と俺に向かって木乃香が首を傾げている。

まさか契約した吸血鬼に血を吸われて貧血状態になりました、なんて言える筈もなく。

俺は少しばかり顔を引き攣らせながら、曖昧に言葉を濁らせて木乃香に返答した。

その後、少しだけ体力が回復した女性から体調管理などの説明を受けて、寮に帰ろうとしたのだが。

「……………ん？」

車椅子に座った時、脚に何か違和感を感じた。

どうやらスカートポケットに何か入っているようで、ポケットをまさぐってみると一枚の紙が丁寧に折り畳まれてポケットに収まっていた。

俺は咄嗟に手紙を手の内側に隠し、辺りの様子を窺った。

どうやら木乃香と神楽坂は何かを話し込んでいるようで、俺の方を見ていない。

女性は役目を終えて力尽きたのか、再び机に突っ伏して沈黙している。

そっと手の平を開き、手紙の内容を黙読した。

今日の放課後の予定でしたが“話”は後日という事にしましょう。また連絡します。

茶々丸。

一応、もし第三者に内容を見られても分からないようにはなっていたが、俺は万全を期して『キラークイーン』で証拠隠滅しておいた。勿論、内側から爆発させて爆風や爆音は出ないように。

「うーちゃん、帰るえー」

神楽坂との対話が終わったのか木乃香が俺に歩み寄り、背後に立って車椅子を押し始める。

咄嗟に俺は自分の力で帰れると声を上げようとしたのだが、

「絶対安静言うてたやろ。だから今日はウチが、うーちゃんの足になるえ」

そう言っただけ木乃香は車椅子を押し、ズンズンと廊下を進んでいく。

こうなった木乃香は如何なる正当な理由を並べ立てようとも、首を縦に振ってはくれないだろう。

何となく俺の真横を歩いている神楽坂の顔を見上げると、複雑な表情を浮かべてから徐に神楽坂は腰を屈めて俺の耳元で囁いた。

「アンタが倒れたって聞いた時の木乃香の気持ち、姉のアンタなら嫌でも分かるでしょ？」

そう言つて神楽坂は姿勢を戻し、俺の返答を待たずに前を向いてしまった。

車椅子を押し続ける木乃香が神楽坂に何の内緒話をしてるんだと声を掛けているが、神楽坂は何でもない、と一言だけ呟いて木乃香に微笑みかけている。

また心配かけてしまったと俺は心の中で反省してから、今日一日だけは反省の意味も込めて木乃香に“足”になつてもらつ事にした。

「うーちゃん今日の晩御飯は何がいい？」

黙っていた俺の事を気にかけてくれたのか、木乃香が俺に話し掛けてくる。

当然、車椅子を押ししてくれている木乃香の表情を窺う事は出来ないが、いつものように天真爛漫な笑みを浮かべているのだろう。

俺は前を向いたまま、

「木乃香の好物が俺の食べたい物だから」

と呟いて瞳を閉じた。

心配かけてゴメンな木乃香……刹那にも謝っておかないと。

「ん〜じゃあ今日はハバネロカレーやな」

ちよ……木乃香さん、俺が辛い物苦手つて知ってますよね。

「いいわねえ、私も賛成！」

おい、神楽坂……悪ノリするな。

「うーちゃん、ええやんな？」

木乃香の表情は後ろを振り向かなくも分かった……悪魔の表情だ。

結局、寮に帰った俺は二人の悪魔に激辛カレーを口の中に押し込まれ、唇を真っ赤に腫らして泣きながら口から火を噴く事になった。

第二十九話（後書き）

人払い、防音の結界を張られている状態に気づけるのは従者しかいないという事で、木乃羽を護ろうの会、会長の茶々丸さんが登場しました。

え？……刹那？

式紙を飛ばす事を忘れるぐらい、教室で慌てふためいただけry

そして隙あらば姉との過剰なスキンシップを謀る妹。

もうね……これで良かったのかと最近、疑問に思う作者です。

第三十話（前書き）

どうも、原作の展開に置いてきぼりを喰らっている作者です。

マ〇ー2を思い出したのは自分だけでしょうか……？（笑）

では、短いですが……とつぎ。

第三十話

次の日……俺と木乃香と神楽坂の三人は何事も無かったかのように何時も通り登校したのだが、俺が教室に入った途端に1 Aクラスメイト達によって周りを囲まれてしまった。

「ちょっと、ホントに大丈夫なの？」

「昨日は心配したんだからねー」

「学校に来て大丈夫なのですか？」

「……無理はしないで下さいね？」

クラスメイト達は思い思いの言葉を口にしながら、恒例行事のように、また俺を揉みくちやにしていく。

新手的イジメなのではないかと心の中で猜疑の芽がすくすくと育ててはいたが、不思議と嫌な気持ちはしなかった。

肩を叩いてくれたり、頬を引っ張ったり、髪の毛を優しく撫でられたり。

しかし俺にも限度というモノがあり、どれだけ時間が経過しても解放されないという事が分かってくると、纏わり付いてくるクラスメイト達を振り払おうとしたのだが。

「はい、そこまで。HRを始めるから席に着きなさい」

開け放たれたままになっていた教室のドアから救世主、1 A担任であるタカミチ先生が現れたのである。

担任には逆らえないと思ったのか、生徒達は、平不満をブツブツと漏らしながら席に着こうと移動していく。

俺は安堵の溜め息をついて、乱れた髪や制服を元に戻していると、俺の事を心配してくれたのだろう。

タカミチ先生が「色々大丈夫かい？」と心配そうな面持ちで訊ねてきたので、俺は苦笑しながら「大丈夫です」と一言だけ返しておいた。

その後、俺は指定された席に着き、ふと横を見れば、いつも詰まらなさそうにしているエヴァの姿が見当たらなかった。

俺と顔を合わせにくかったのか、茶々丸から自宅謹慎を言い渡されたのか。

視線を動かさず、前方を見る。

茶々丸は学校に来ており、今も席に着いてタカミチ先生の話を聞いている。

ぼつんと空席になっている右隣の机をボンヤリと眺めながら、俺は思考に耽っていった。

猛獣達を教室という檻から解き放つ鐘の音が、学園内に響き渡る。

授業が全て終了し、1 A生徒達はHRが終わった途端、蜘蛛の子を散らすように教室から走り去っていく。

動物園のように騒がしかった教室の中が、急に静かになっていく。

人も疎らになってきた教室の中、俺は今も机に向かっていた。

赤ペンとシャーペンを交互に持ち替えながら、ある人物による妨害行為を物ともせず、ノートに今日の授業内容をキツチリと纏める。

ふよふよと俺の周りを飛び回り、無駄な力を使って消しゴムの位置を動かしたりする等、小さな悪戯を仕掛けてくる相坂を適当にあしらいつつ、ノートを書き進めていく。

ついに消しゴムを何処かに隠してドヤ顔を浮かべている相坂を尻目に、俺は心の中で消しゴム何て俺には必要ないとほくそ笑んでいた。

『クレイジー・D』万歳である。

諦めずに悪戯を仕掛けてくる地縛霊に対し、授業中に相手してやっただろ、と心の中で溜め息をつきながら相坂を無視していると、ノートを突き破るようにして顔を現したかと思えば頬を膨らまし、捨て台詞を吐いてから姿を消してしまった。

俺は怒らせてしまったか、と心の中で反省しつつも、明日になったらケロッと忘れているだろうと楽観的に考えていた。

ノートに重要事項を書きながら、チラリと横目で木乃香と神楽坂の二人の方を確認する。

二人は他愛もないお喋りに夢中になっているようで、まだ帰り支度も出来ていなさそうだった。

早く纏めてしまおう、そう思って視線をノートに戻し、定規を使って赤の下線を引いていると。

突然、俺の机に大きな影がヌツと差した。

赤ペンを握ったまま顔を上げると、目の前に学生鞆を手にした茶々丸が立っていた。

「木乃羽さん、今日は何か御予定はありますか？」

一度だけ恭しく頭を下げてから、茶々丸はよく通る静かな声で、俺に今日の予定を訊ねてきた。

「いや、特に無いが……もしかして“話”は今日か？」

「はい、マスターが張り切って地下室の掃除をしていましたので、恐らく今日かと」

茶々丸は表情を一度も変えず、終始無表情のまま俺を見下ろしている。

「そうか……茶々丸がログハウスまで案内してくれるのか？」

俺はエヴァのログハウスが麻帆良の何処にあるか知っていない為、必然的に誰かに案内してもらおう事になる。

「はい……………ですが」

一度は軽快に頷いて見せた茶々丸だったが、何かを言いづらそうにして、表情を少しだけ歪めて言葉を濁している。

「どうした？」

俺が小首を傾げながら茶々丸に訊ねると、茶々丸は決心したように首を縦に振ってから、ゆっくりと口を開いた。

「本当によろしいのですか？……………昨日、あのような事がありましたか……………」

茶々丸に恐る恐るそう言われ、昨日の出来事が頭の中に蘇る。

屋上での事件。

確かに強烈なインパクトを俺に与えた出来事ではあったが、血を提供すると提示したのは俺だからな……………。

「ああ、大丈夫……………もし何かあっても茶々丸が助けてくれるだろ？」

俺は少し戲けた調子になって、冗談のつもりで茶々丸に言ったのだが。

「はい、木乃羽さんは私がお守りします」

そう茶々丸に力強く断言されて、反対に俺は少し呆気に取られてしまった。

「……なあ、何でそこまで俺を気にかけてくれるんだ？」

ふと頭の中に浮かび上がってきた疑問を口にすると、茶々丸は唇に指を当てて熟考しているようだった。

「……分かりません、私が木乃羽さんをお守りしたいと思う気持ちは、痴がましいでしょうか？」

暫くして茶々丸は、小さくかぶりを振りながら少し寂しそうな表情を浮かべてそう言った。

「いや嬉しいよ……茶々丸、ちょっと」

俺は気恥ずかしさを心の端に感じながら微笑むと、招き猫のように手を動かして、その場にしゃがむよう茶々丸を呼び寄せた。

「……？」

茶々丸は疑問符を頭の上に浮かばせながらも、机の前で律儀にしゃがんでくれたので、俺と目線の高さと同じになった。

「ありがとな、茶々丸」

感謝の言葉を述べながら、何気なく茶々丸の頭を優しく撫でてやったのだが。

「…………ひゃうツ!？」

茶々丸は奇声を上げながら、まるで水を掛けられた猫のように機敏に立ち上がってしまった。

「ち、茶々丸…………もしかして触れられたのが嫌だったか？」

「い、いえ…………そういう訳では」

突然の動作に驚いた俺が問い掛けると、茶々丸は顔を赤らめながら、曖昧に言葉を濁して俯いてしまった。

「あ…………の、そのですね…………」

もじもじと胸の前で両手を擦り合わせ、茶々丸は頬を紅潮させて視線を泳がせている。

「…………？」

俺は疑問に思いながらも、黙って茶々丸の口から答えが返ってくるのを待っていた。

暫時、恥ずかしそうに少し身体を擦らせていた茶々丸だったが、コホン、と可愛らしい咳払いをしてから、やや言いにくそうに口を開いた。

「その…………“気持ち良かった”のです」

「はあ？」

茶々丸の思い掛けない返答に対して、俺は素っ頓狂な声を上げずにはいられなかった。

「い、いえ違うのです変な意味ではないのです木乃羽さんに触れられた瞬間に身体が暖かくなったと言いますか気持ち良かったと言いますか」

湯気のような物を頭から噴き出しながら、茶々丸は必死にかぶりを振って、捲し立てるように言葉を紡いでいる。

狼狽えて取り乱している茶々丸とは対照的に、そんな茶々丸の慌てぶりを見て反対に冷静になった俺は、顎に手を添えて思考に耽っていた。

暫し思考を巡らして導き出した答えは、恐らくだが『クレイジー・D』の仕業だろう、と俺は頭の中で結論づけた。

今までの経験上、無意識の『クレイジー・D』が人体等に及ぼす影響は、ある程度は把握しているつもりである。

これは推測だが、茶々丸には無意識の『クレイジー・D』の効果が顕著に現れたのではないかと思う。

何故なら、茶々丸はアンドロイド……機械の身体で出来ているから。人間は常に生まれ変わっていると云っても過言では無い。

人間の身体を生成している細胞は、一秒間に約五千万個も生まれ変わっている。

一秒間にそれだけの数が生まれ、そして死んでいく細胞で出来ている人間の身体を最高の状態にまで“戻す”のは限界がある。

だが、茶々丸の身体には限界が無い。

機械で出来ている身体を、最高に「ハイ！」な状態にまで治してしまおうのだから。

俺が触るだけで茶々丸は最高の状態を保ち続ける事が可能で、整備士要らず、という事になる。

もしかして俺が茶々丸に好かれている理由は“コレ”だろうか？

「ででですから誤解されないよう心中お察しいたしまままま」

未だに茶々丸は両手をパタパタと振りながら、訳の分からない弁明を続けている。

「おーい、茶々丸さん……？」

「私はロボット 私はロボット 私はロボット」

ひらひらと顔の前で手を振って名前を呼んではみたのだが、どうやら茶々丸には俺の姿は見えていないらしい。

仕方ないな、と苦笑してから俺は茶々丸が冷静さを取り戻すまで待つことにした。

第三十話（後書き）

何やら歌詞に関する規制が厳しくなり、違反があれば警告なしに削除されると聞いたのですが……じ、自分の小説は大丈夫です……よね？（汗）

さて、そんな事は置いといて……今回、茶々丸が木乃羽に対して好意的な行動を取る理由が明らかに。

木乃羽が居る限り、茶々丸は半永久的に活動が可能……なのか？

次回から、ようやくエヴァの魔法教室が始まら

第三十一話（前書き）

お気に入り登録数が千件を越え、もうすぐ総合PVが百万になりそうで……ユニークが十万越え……。

ちょっとアクセス数が変化しただけで一喜一憂していた昔が懐かしいです。

今でも十分な楽しみではありますが（笑）

こんなグダグダな小説ですが、何卒よろしく願いします。

では、第三十一話……どうぞ。

第三十一話

ようやくブルースクリーン状態から復帰した茶々丸は、先程までの自らを恥じるようにペコペコと何度も頭を下げてから、これからの予定を話してくれた。

「今から私がマスターの家まで御案内しようと思うのですが……よろしいでしょうか？」

まだ少し頬を赤く染めながらも、茶々丸は俺に同意を求めるように小さく首を傾げている。

「ああ、構わない……けど」

俺は頭を掻きながら言葉を濁し、そつと茶々丸の後方を窺う。

視線の先には机に腰掛けて身振り手振りを加えながら、楽しそうにお喋り続けている神楽坂と木乃香の姿があった。

まず、我が妹が第一の壁。

教室の中に姿は見えないが、恐らく何処から俺や木乃香の様子をジッと窺っているであろう刹那。

おどろおどろしい何者かの視線を、先程からヒシヒシと感じているからな。

……刹那が第二の壁。

俺はこれらの天高く聳え立つ壁を、どう乗り越えようかと頭を悩ませていた。

刹那は案外、何とかなるかもしれないが……問題は我が妹である。

基本的に二人一緒じゃないと嫌だ、という考えの持ち主だからな……

…木乃香は。

……そのおかげで刹那の護衛が何とかなっているのかもしれないが。

「どうかしましたか……？」

俺が額に手を当てて溜め息をついていると、茶々丸が怪訝そうな面持ちで訊ねてきた。

「あ、いや……それがだな」

頭上に疑問符を浮かべて小首を傾げている茶々丸に、俺は悩みの種を説明しようとしたのだが。

「うーちゃん、そろそろ帰るえー」

俺の悩ましげな視線に気がついたのか、神楽坂とのお喋りが終わったのか、木乃香が此方を向いて手をブンブンと振りながら近づいてくる。

「木乃香、あのな……今日は……」

しどろもどろになりながら木乃香を納得させる事が出来る理由を、どうにか頭の中で模索する。

目の前で立ち止まっている木乃香は、そんな俺を見て大きな瞳を瞬かせ、不思議そうな表情を浮かべている。

「お、俺……茶々丸の家に遊びに行こうと思うんだが……駄目か？」

俺は恐る恐る、小首を傾げて目の前に立っている木乃香に告げた。

……シンプル過ぎただろうか？

恐らく反対されるだろうと覚悟しながら、木乃香の返事を待っていたのだが。

「ええよ」

何と、アッサリと許可が下りてしまった。

満面の笑みを浮かべて頷いた木乃香は、直ぐに条件を付け加えるかのように口を開いた。

「暗くなるまでに帰ってくる事、知らない人にはついていかん事、何かあったら連絡する事、この三つ約束できるんやったらええよ？」

顔のすぐ横で三本指を立ててニッコリと笑う木乃香に、お前は俺の母親かと心の中でツッコミを入れながら無言で頷いてみせた。

すると木乃香は俺の傍に佇んでいた茶々丸の方に向き直り、礼儀正しく頭を下げて。

「姉様の事、よろしくお願ひします」

そう言つて顔を上げたかと思えば話についていく事が出来ず、怪訝な表情を浮かべて背後に立っていた神楽坂の手を握り、そのまま走り去つていこうとする。

「ちょ、ちよつと木乃香！？どういふ事が説明

「いーから、行くえッ！」

有無を言わず神楽坂の手を引つ張つて、木乃香は教室から出ていった。

教室に取り残された俺と茶々丸は、ほぼ同時に互いの顔を見合い、首を傾げる事しか出来なかつた。

また一層と教室の中が静かになつた所で、ふと俺は先程から感じていた重々しい視線が消えている事に気づいた。

もしかしたら突拍子もない行動を取つた木乃香を心配して、後を追いついて掛けたのかもしれない。

そうして俺は難無く二つの大きな壁を乗り越える事ができ、無事に茶々丸とエヴァのログハウスへ向かう事になった。

人混みの多い賑やかな麻帆良の町から少し離れ、本当に同じ麻帆良という土地なのだろうかと疑問に思えるほど、鬱蒼と生い茂る森の中を茶々丸と進み続けて10分は経っただろうか。

「チツ……またか」

車体がガクンと揺れ、少しばかり右に傾く。

車椅子の車輪が至る所に張り巡らされている、木の根と木の根の間に嵌まり込んでしまったのだ。

先程から幾度となく繰り返される不愉快な出来事に苛立ちを隠し切れず、思わず小さな舌打ちが口から漏れる。

「よッ、と……ふう」

精一杯……腕に力を込めてハンドリムを押す事で、何とか窮地から脱出する事が出来た。

麻帆良の町とは違って地面が整備されていない為、俺は木の根や石ころに四苦八苦しながら歩を進め続ける事になっている。

俺が立ち往生する度に、何度も「私が押しましようか？」と茶々丸に提案されたが、その度にかぶりを振って茶々丸の提案をやりわりと断った。

茶々丸の助けを借りたいのは山々だが、助けを借りなければログハウスに行けないのなら、必然的に俺が一人でエヴァの家に通い続け

るのは無理という事になる。

いずれ転移魔法や認識阻害を覚え、陸路以外での方法で行けるようになったとしても、それはまだまだ先の話になるだろう。

茶々丸の目には意地を張り続けている子供ののように、俺の姿が映っているかもしれないが折れるつもりは一切なかった。

大量の汗を流して肩で息をしながら黙々と進み続けると、突然、視界が開いた。

木々達が忌み避けるように生えていない場所があり、そこからエヴァのログハウスを見る事が出来た。

小さな石造りの橋を渡り、小川を自由に泳ぎ回る魚達を眺めながら俺はログハウスの前に立った。

それにしても大きいログハウスである。

この家に二人しか住んでいないというのだから、何だか勿体ないような気がする。

そんな下らない事を考えながら一度深呼吸をして、早鐘のように鳴り続けている心臓を落ち着ける。

早く何かしらの移動に使える魔法を覚えなければ、と心の中で独りごちながら俺はある重大な事に気がついた。

ログハウスの玄関の扉は、ちょっとした階段の先にあったのだ。

……別に階段は問題無い。

ある程度の時間は掛かれども、車椅子で階段を登る方法は会得している。

だが問題は……その階段には“手摺り”が設置されていなかったのだ。

手摺りが無ければ身体を持ち上げる事が出来ず、車椅子で階段を登る事が出来ない。

どうするべきかと頭を悩ませて階段の前で立ち往生していると、フツと身体が宙に浮く感覚。

慌てて横を見れば、目の前に茶々丸の顔があった。

どうやら立ち往生している俺を見兼ねた茶々丸が、車椅子ごと持ち上げてくれたらしい。

「ちゃ、茶々丸ッ!？」

「じっとして下さい」

……自らの体重は少なくとも車椅子の重さが付加されている筈なので、かなりの重さになっていると思われるのだが、茶々丸は辛そうな顔を一つも見せずに悠々と階段を登っていく。

俺が何かしらの抗議の声を上げる前に茶々丸は階段を登り切ってしまい、ゆっくりと俺を地面に下ろしてくれた。

俺が眉根を寄せて無言のまま茶々丸の顔を見上げていると、茶々丸はクスリと微笑して俺を見下ろしている。

「鍵は空いていますので」

悪戯っぽく微笑えんでいる茶々丸にそう伝えられ、俺は肩を落としかぶり振ってから目の前の扉と向き合った。

このドアを開けてしまえば、もう後戻りは出来ない。

元から後戻りするつもりも無ければ、後戻り出来る場所も無い。

心を引き締めてからドアノブを確りと掴み、ゆっくりと木製のドアを開けると原作を知っているとはいえ、そこには異様と思われる光景が広がっていた。

黒と白のチェック柄の絨毯。

爛々と目映い白光を放つ小さなシャンデリア。

天井から吊されている人形のような物。

リビングの真ん中に置かれたテーブルにも隙間無く人形が置かれ、更に血のような深紅の色をしたソファーにも所狭しと可愛らしい人形が座らされていた。

そして、そこに埋もれるように。

まるで座らされている人形達の仲間のように。

この家の主であるエヴァはティーカップを片手に持ち、脚を組んで踏ん返り返るようにソファーに座っていた。

「ようこそ、近衛木乃羽」

何が嬉しいのかエヴァは妙にニヤニヤと顔を綻ばせながら、ティーカップの中身を味わうかのようにユツクリと口に含みつつ、俺に舐め回すような視線を送ってくる。

そんなエヴァの視線を平然と受け流し、気が気でなかった俺は傍に立っている茶々丸の顔色をソツと窺った。

主の態度を見た茶々丸は眉間に深い皺を寄せ、明らかに不快感を顕にしている。

エヴァに口出ししたいが客人在る手前、自重している、そんな感じだと思う。

「もう来ないかと思ってはいたが、私の目に間違いは無かったようだな」

そう言ってほくそ笑むエヴァは、持ち前の不敵な自信に満ち溢れていた。

仰々しくティーカップを少し掲げて見せ、くつくつと笑い声を漏らしている。

俺は恐る恐る首を巡らして、再び茶々丸の様子を窺った。

茶々丸は魂が吐き出てしまいそんな深い溜め息をつき、沈鬱な眼差

しで不遜な態度を崩さない主を見据えている。

「マスター……話が違います」

胸中で埋み火を燦らせるように、声音に静かな怒りを滲ませながら茶々丸は言った。

「ふ、ふん……アイツの血が美味すぎるから悪いのだ。それにだな
アイツは」

「……マスター、いい加減にして下さい」

反省の色を見せない主に業を煮やしたのか、茶々丸はエヴァの言い訳を最後まで聞く事は無く、目を更に険しくしてソファに脚を組んで座ったままの主を静かに叱り付けている。

「私は悪くない……よって、謝らん」

「マスターッ！」

よほど腹に据えかねたのか茶々丸は眉間の皺をより一層深くして、鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまったエヴァに詰め寄っていく。

客人である筈の俺を置いてきぼりにして、二人は睨み合いの口論を始めてしまった。

親子喧嘩のように見えない事も無いが……いつ戦闘に発展しないかと冷や冷や物である。

そんな二人を眺めながら、俺は顔を引き攣らせて苦笑する事しか出

来なかった。

「お恥ずかしい所をお見せしました」

そう言つて茶々丸は主の粗相を詫びるように深々と頭を下げた。

茶々丸の背後から未だに反省していない事を言外に伝えてくれる、エヴァの鼻を鳴らす音が聞こえる。

忌ま忌ましそうに振り向いた茶々丸がエヴァを睨みつけているが、当の本人は“どこ吹く風”といった様子で、平然とティーカップを傾けて中身を口に含んでいる。

「木乃羽、これは先日の詫びだ……受け取れ」

ティーカップをテーブルの上に置かれていたソーサーの上に置き、エヴァは一度だけ咳払いをしてからポケットを弄ると、そこから小さな包みを取り出してソレを俺に向かって軽く投げてきた。

その包みは緩やかな弧を描き。

膝の上でソレを受け取って一度まじまじと包みを眺めてから、顔を上げてエヴァを見ると……早く中身を見る、と言わんばかりにニヤついて俺を見ている。

お望み通り包みに視線を戻し、ゆっくりとソレを開けると。

「これは……」

中に入っていたのは金色のリングに、二色の宝石が嵌め込まれた指輪だった。

「それは常に指に嵌めておけ。赤色……ルビーは魔法発動体だ。指に嵌めておくだけで魔法詠唱が可能になる」

そつと指輪を右手の中指に嵌めると、ブカブカと隙間が空いていたのだが、主を覚えたかのように形を変えて、俺の指にピッタリ合うような大きさに変化した。

これを嵌めてれば杖とかを携帯しなくていいって事か……それは有り難い。

「そして、透明……ダイヤモンドは老化対策だな」

「老化対策？」

エヴァの口から出た老化対策という言葉に、俺は疑問を抱かずにはいられなかった。

脳をフル回転させて思考を巡らせた結果、たどり着いた答えは。

「お前はダイオラマ魔法球という所で魔法の鍛練をする事になる。そこでは一日が現実世界の一時間になって……後は分かるな？」

そう言つて悪魔の笑みを浮かべたエヴァはソファから立ち上がり、俺に歩み寄ってくる。

「そのダイヤモンドは現実世界での時間軸で設定してある。そして設定された時間軸をズレると発動し、使用者を一時的な不老状態に
つてオイ……茶々丸、何だその目は」

含み笑いを漏らしながらエヴァは近寄ってきていたのだが、茶々丸が身体を割り込ませるように俺とエヴァの間に入り、どんな些細な動きも見逃さない、といった様子で主を見つめている。

「いえ、ただマスターが再び罪を犯さないかと注意を払っていただけ
です」

その姿はまるで俺を護ってくれている護衛のようで、どうやら未だにエヴァという前科者に対する茶々丸の眼差しから猜疑の色は消えてはいないようだった。

「……お前のマスターは誰だ？」

半ば呆れるように呟いたエヴァに、茶々丸は「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルです」とプログラミングされた機械のような早さで即答し、

「では、お前が再犯を起こすだろうと目を光らしている人物は？」

エヴァが再び茶々丸に問い掛けると。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルです」

と躊躇う様子もなく茶々丸に即答されたエヴァは、苦虫を噛み潰したような表情になり、金色の髪を振り乱すかのように頭を掻きむしっている。

「……もういい、今から魔法に関する知識を叩き込んでやる。茶々丸、二階に運んでやれ」

溜まったストレスを吐き出すように大きな溜め息をついて、かぶりを振りながらエヴァはそう言つと何処かに行つてしまった。

「では、移動します」

俺とエヴァの間に立ち塞がるように立っていた茶々丸が振り向き、また車椅子ごと持ち上げようとする。

「いやいや、今度は一人でいけ　うわッ!？」

茶々丸は俺の言葉を完全に無視して車椅子ごと俺を持ち上げ、移動を開始してしまった。

「……わかったよ、もう好きにしてくれ」

茶々丸と睨み合いのバトルを展開していた俺だったが、茶々丸の無言の威圧感に負けてしまい、肩を竦めて降参のポーズを取って白旗を振ってみせた。

どうやら茶々丸は満足したようで、聖母のように優しげな表情を浮かべ、階段を上り始めた。

二階に案内され、茶々丸が入った部屋は真ん中に木造の机が置かれており、向かいの壁には小さな黒板のような物が設置されていた。

暫くしてエヴァも部屋に来たのだが何故か銀縁眼鏡を掛けており、似合わないぞとツツコミを入れたかったのが、どうやら暗黙の了解でツツコミは厳禁らしい。

俺が笑いを堪えながら茶々丸の顔を見上げると、無言で首を横に振られてしまった。

「さて、近衛木乃羽……今から魔法の知識に関する授業を始める訳だが、その前に質問がある」

いつの間にかエヴァが表情を引き締め、剣呑な面持ちになっていた。

「お前は……血反吐を吐くような鍛練に耐えられるか？」

それが、唐突にエヴァの投げつけてきた質問だった。

第三十一話（後書き）

裏話。

刹那、爆走していく木乃香を追跡中。

茶々丸、エヴァと木乃羽の優先度が絶賛移行中。

エヴァ、あーでもないこーでもないで木乃羽の迎え方に時間を掛けていたのは秘密である。

第三十二話（前書き）

いつも通りの深夜更新。

今回は作者の妄想（独自解釈）が含まれておりますので、そういった表現が嫌いな方は適当に流し読みしちゃって下さい（汗）

では、ごっご。

第三十二話

「お前は……血反吐を吐くような鍛練に耐えられるか？」

その言葉の意味を十分に噛み締め、吟味した上で俺はエヴァの問いに決然と頷いて見せた。

「そうか……ならば良いんだ」

俺の返答に、エヴァはニヤリと満足げに破顔した。

連帯保証人の欄に名前と住所を書いてしまったような気分になりながら、俺は不意に茶々丸が気になり、視線を従者の方に向けた。

満足げな表情を浮かべている主とは反対に、従者の顔色は思わしくなかった。

腰の辺りで手を組んで主の横に佇んでいる茶々丸は、悲しそうに目を伏せて押し黙っている。

目は口ほどに物を言う……という諺の通りで、沈黙している従者の悲痛な色に染まり切った瞳が、何よりも雄弁に茶々丸の心中を物語っていた。

その瞳は言外に、

貴女は此方側に来る人間ではない。

日陰ではなく、日向に居るべきだ。

と……俺に伝えているようで。

自らの従者の心中を知ってか知らずにか、エヴァは俺の手を掴み、嬉々として日陰側に引っ張っていく子供のようになり、とんとん拍子に話を進めていく。

「では……これからお前に魔法の知識を叩き込む事にする」

一拍だけ間を置いてからそう言ったエヴァは、私の一語一句まで傾注しろと言わんばかりに、手にしていた指示棒で背後に設置されていた黒板を数回叩いた。

「お前の魔力容量は強大だ……私も驚きを隠せないぐらいにな」

エヴァは俺に背中を向けたかと思えば、黒板に筆記体で何か文章を綴っていく。

ぱわー、おぶ……まいんど？

W i t c h c r a f t ……？

大体の意味は分かりそうだが……筆記体は苦手だから良く分からん。俺の思考を置いてきぼりにして、チョークの軽快な乾いた音を響かせながら、エヴァは鼻歌混じりに次々と文章を綴っていく。

「所謂、天賦の才というやつだ……ふむ、しかし」

チョークを持つ右手の動きを止め、途中で言葉を言い差したエヴァ

は突然、振り向いたかと思えば実験動物を改めて観察するように熱烈な視線を送ってくる。

「な、何だよ……」

突拍子もないエヴァの行動に少し身を強張らせながらも、俺は思わずスカートの裾をギュッと握り締め、精一杯の虚勢を張ってエヴァを睨み返す。

「魔力容量は殆どが血筋で決まる。だから血縁者とは若干のズレがあるうとも魔力保有量が同等になる筈なんだが……」

エヴァは解せぬ、といった様子で顎に手を添え、神妙な顔付きで微かに身体を左右に揺らし、俺をマジマジと見据えている。

「お前の双子の妹、近衛木乃香との魔力容量が違い過ぎるような気がするんだが……気のせいかな？」

エヴァの疑問を耳にした俺は、悪戯が見つかった子供のように顔を引き攣らせて、全身を更に硬直させる事になった。

俺は心の中で『ザ・ワールド』の所為だな、と小さく呟いた。

「魔力容量は一朝一夕で伸びたりはしない……自分の魔力が枯渇し、気絶するほど死に物狂いで鍛練を積まなければ強化は出来ない筈なんだが……」

銀縁眼鏡のブリッジを中指で押し上げながら、エヴァは怪訝な表情を浮かべている。

何度も枯渇して気絶してましたと心の中で冷や汗を流しながら、俺は乾いた笑い声を漏らしていた。

「まあいいか、少ないなら問題だが多いなら文句は言えんからな」

エヴァは自らの疑問を断ち切るように呟いて、クルリと半回転して再び黒板と向き合った。

ようやく俺は、ホツと安堵の溜め息をつく事が出来た。

まだ『ザ・ワールド』の事だけは知られる訳にはいかない。

この世界で『ザ・ワールド』がどういう扱いになるかは分からないが、“時空魔法”と認識される可能性がある。

魔法が当たり前のように使われているこの世界でも“時空魔法”を唱えられる者は居ない筈だ。

となれば……もし、俺が時を止めれるという事実が広まってしまえば……。

……考えたくもない。

「お前の膨大な魔力……但し、それだけではただの魔力タンクだ。有り余る魔力を使いこなすためには、それを扱えるだけの精神力及び術の効率化が必要になってくる。ちなみに『魔力』を扱うためには精神力を必要とし、『気』を扱うのは体力勝負みたいな所があるんだが……」

エヴァは最後まで長々と言葉を紡ぐ事はなく、言葉を途中で区切っ

て一度休憩するように吐息を吐いてから、また突如して振り向き、手に持っていたチョークをビシリと俺に向けた。

「ま、最初からお前の『気』には期待していないがな」

エヴァは嘲り笑うように小さく鼻で笑い、俺を……いや、俺の脚を眇め見た。

「そうか……それは良かった。俺は二つの事に集中出来るほど器用じゃないんでね」

エヴァの揶揄を平然と受け止めて、俺は飄然と肩を竦めてみせた。

すると、挑発に乗って来るどころか簡単にあしらわれてしまった事に腹を立てたのか、エヴァは微かに顔を歪めて俺を睨んでいたが、わざとらしい咳払いをしたかと思えば話題を転換させた。

「さてと……修業の方向性を決める為、お前には戦いのスタイルを決めてもらおうと思う。基本として魔法使いと魔法剣士の二つが代表的なスタイルになるんだが……お前のその脚では魔法剣士は無理だろう」

エヴァの言葉には先程のような揶揄する調子は一切無く、さも残念といった様子で肩を落とし、かぶりを振っている。

「絶対に無理だと決め付けれる訳ではないんだが……試してみる解決法は二つほどあるからなあ」

ポリポリと鼻先を掻きながら、エヴァは眉根を少しだけ寄せてボソリと呟いた。

……解決法？

「ん？……ああ、それは後で試すから今は気にするな」

俺の表情から察したらしく、エヴァは問いに先回りして答えてくれた。

「……話は変わるが、お前は何色が好きだ？」

「……どういう意味だ？」

突拍子もないエヴァの質問の意味が分からず、俺は怪訝な表情を浮かべながらエヴァに問い返した。

「いやなに、ただの余興だ……余興。で、何色が好きなんだ？」

しつこく同じ質問を繰り返すエヴァを不思議に思いながらも、俺は微かに俯いて思考に耽った。

何色が好き……か。

余り深く考えた事は無かったが……。

「黒……かな……？」

転生前は黒色の服を好んで着ていたしな。

こら、ソコ……厨二病乙とか言っつなよ。

暫く頭を悩ませて、ポツリと独り言のように呟いて顔を上げると、俺は突然の事に驚いて顔を引き攣らせる事になった。

顔を上げた先には、それはもう最高の満面の笑みだと言っても差し支えないような、破顔したエヴァが俺を見ていたからである。

「フフ……そうかそうか、黒か……フフ」

エヴァはブツブツと独り言を呟きながら、ニヤニヤと底意地の悪い笑みを浮かべている。

俺はエヴァの薄気味悪い表情に寒気を覚えながらも、どうする事も出来ずに話が展開していく事を期待して、ただ押し黙ってエヴァの様子を窺っていた。

「ん……？ああ悪い悪い……私の“勘”は良く当たるんでな」

また訳の分からない事を言いながら、エヴァは含み笑いを漏らしている。

大丈夫かな……コイツ。

「余興はこれぐらいにして、そろそろ本番にするか」

そう言ってエヴァが徐に懐から取り出した物は無色透明になってしまった満月のように、茫洋とした輝きを放ち続ける小さな水晶球だった。

小さな、と言っても野球ボールぐらいの大きさはあるが。

「昔は大きくて邪魔になるだけだったんだが……時代の進歩は早い、という事か」

それを俺に手渡したエヴァは虚空を見上げたかと思えば、少しだけ感慨深そうな面持ちになる。

「さて、それはお前の得意属性を知る為の水晶球だ。瞳を閉じ、その水晶球に力を込めてみる」

視線を俺に戻したエヴァは、顎先に手を添えながら静かに呟いた。

成る程……突然渡されたコレはマジックアイテムだったという訳か。

膝の上に置いていた水晶球を両手で包み込むように持った俺は、言われるがままに瞳を閉じて、全神経を手に集中させた。

すると。

「……………おお」

暫くしてエヴァから感嘆のような呟きが上がった。

その声に触発されるように閉じていた瞳をゆっくりと開けると、先程まで無色透明だった筈の水晶球が、まるで別の物にすり替わってしまったように色を変えていた。

一概に言えば、『黒』と『赤』。

深淵を思わせる真っ暗な闇の中に、その闇を照らすかのように真っ赤な焰が瞬いている。

「……………あ」

色を変えた水晶球は暫くすると効力を失ったのか、パキリと硝子が割れるような音を立ててから、手の平の上でバラバラになってしまった。

壊してしまったかもしれない、と内心で焦りながらエヴァの顔色を窺うと、エヴァは心配するなどでも言いたげに微笑を俺に向けている。

「気にするな、この手の物は数回も使ってしまったえば壊れてしまう……所謂“使い捨て”というやつだ。別に値段もそれ程しないしな」

そう言つて豪快に白い歯を見せて笑うエヴァに、それでも罪悪感を感じてしまった俺は水晶球に視線を戻して“別の”力を込めた。

再び力を込められた水晶球は、その力に呼応するかのように自ら動き出す。

バラバラになってしまった水晶球の破片が集り、再び元の円形に戻っていく。

「壊しちゃって悪い……………多分、元に戻つてると思っただけど」

完全に修復された水晶球を一度検品するかのように目の前で眺めて

から、俺は傍に立っていたエヴァに手渡した。

見た目は治っていても、中身……効力が壊れているかもしれない。

確認してくれという意味も込めて、俺はエヴァに水晶球を手渡した筈だった。

「一度、確認しておいてくれないかって、ああ!？」

罰が悪そうに頬を掻きながらエヴァを見上げていた俺だったが、目の前の光景に驚愕して素っ頓狂な声を上げてしまう。

何故なら、突如としてエヴァが俺の治した水晶球を 無造作に放り投げたのだ。

後ろに投げられた水晶球は綺麗な弧を描いて地面に激突し、儂い音を奏でながら再び粉々に壊れてしまった。

「馬鹿あ!せつかく俺が治したのに ツ!？」

突然、エヴァに両手を取られて撫でるように摩られた俺は、慌ててエヴァの小さな手を振り払った。

「いきなり何すんだ」

「お前、今……何をした？」

言い切る前に言葉をエヴァに上乘せされる。

エヴァの言葉は先程までとは打って変わり、重圧のような物を纏っ

ている。

敵意、とまでは言えないがエヴァは厳しい視線を俺に送ってきている。

「何を……って治したただけだろ？」

突然の事に驚きながらも、俺は呆れるようにエヴァに問い返した。

それに屋上でも見せたじゃないか、と付け加えそうになったのだが、慌てて俺は口を噤んだ。

屋上では能力の本質を明かさずに、うやむやにした事を思い出したからである。

「治した？……治しただと？」

まるで警察官が被疑者を詰問するかのようになり、言葉の端に若干の怒気を含ませながら、エヴァは詰め寄ってくる。

「生物を治癒するのは容易い、何故なら相手が“生きている”からな。魔力を通せば勝手に細胞などが活性化されて修復を開始する」

突然、何を思ったのかエヴァは雄弁に語りながら俺に一步、また一步と歩み寄ってくる。

昨日の出来事を思い出したのか、俺の身体が勝手に動いて後退りを始める。

「だが無生物となれば話は変わってくる。相手は細胞や細菌など魔

力を働き掛ける事が出来る物を殆ど持ち合わせてはいない。簡単に言えば同程度の傷を負った二人の人間……生者と死者のどちらが傷を治しやすいかと言われれば、答えは火を見るよりも明らかだ」

まるで反発しあう磁石のS極とN極のように、俺達は一定の間合いを保って移動を続ける。

「中には無生物に対して働き掛ける事が出来る術者も存在する……だがそれは、ある程度修復させる事が出来るだけで、お前のように一瞬で完治させている訳ではない」

一縷の望みを賭けて横目で茶々丸に助けを求める視線を送ってはみるが、どうやら好奇心が勝ち鬨を上げてしまったようで、エヴァの言葉に耳を傾けながら俺の返答を待っている様子だった。

「しかもだ……お前が水晶球を治した直前と直後。魔法を使用する際に現れる筈の魔力の兆候、そして残る筈の魔力の残滓……それが一切見当たらなかった」

背後の壁に車椅子がぶち当たる。

もう後退する事が出来ない。

相変わらずエヴァは間合いを詰めてくる。

「となれば、お前が使った能力は魔法では無いという事になる……思い出せば先日の屋上で見た能力も魔力を使用した形跡が無かった」

ほぼ零距离。

エヴァの端正な顔が目と鼻の先にある。

まるで此方の心中を見透かそうとしているかのように、黄金色の双眸が俺の目を覗き込んでくる。

エヴァに逃げられぬよう右手で顎先を捕まれた俺は、身動きが取れずにいた。

「魔力という対価を払ってこそ魔法という奇跡の現象が起きる。対価を支払わずに発動する能力など有り得ない。近衛木乃羽、もう一度問おう……お前は何をした？」

助けて、このちゃん。

第三十二話（後書き）

木乃羽の得意属性が明らかに。

そしてまたエヴァに詰め寄られるが、助けは来ず。

次回、木乃羽はどうなってしまふのか!?

御期待下さい。

まあ、ぶっちゃけ……どうにもならな～

第三十三話（前書き）

ようやく……ここまで来ました。

もう少しでマイツを小説に出せよう

では……さようなら。

第三十三話

どうにか活路を見出だそうと話を逸らそうとはしてみたが、しつこくエヴァに問い詰められた俺は完全に根負けし、粗方だが『クレイジー・D』の説明を二人に行う事にした。

二人には「物体や生物を元に戻す能力」と身振り手振りも加えながら親切丁寧に説明してやり、弱点である病気や自分は治療できないという欠点は敢えて黙っておく事にした。

弱点まで教える必要は無いと思うし、この能力は完璧ではないと言っているから大丈夫だろう。

もしもの話だが……俺が特殊な能力を使えるという情報が流出したとしても、『クレイジー・D』の能力なら恐らく危険視はされないと思う。

原作でも木乃香は治癒魔法が得意だったから、双子の俺が修復能力……『クレイジー・D』を使える事は、ある意味間違っていないだろう。

……残り二つのスタンド能力は論外だが。

エヴァが誰かに話す事は無いとは思うが茶々丸がなあ、と心の中で考えつつ熱心に話を聞いてくれる聞き手に説明を続ける。

……茶々丸が話す事はなくても、記憶を記録として覗かれる可能性があるからな。

絶対に口外しないでくれ、と念は押しているが……どうだろうか？
全ての説明を聞き終わったエヴァは僅かに纏っていた怒気を霧散させ、俺を拘束していた右手を離し、そんな能力は聞いた事が無いな、と考え込むように胸の前で腕を組んで思考に耽っている。

茶々丸は無表情のまま頻りに首を小さく縦に振って、黙って話を聞いてくれていた。

俺はデモンストレーションを兼ねてエヴァが再び壊してしまった水晶球の一片だけ拾ってもらい、実際に目の前で実演してみる事にする。

「元に戻す……」

呪文のように独り言を呟いて、水晶球の欠片を持つ指先に力を込める。

すぐ目の前には食い入るように俺の手元を見つめる主と従者。

特殊な力を込められた水晶球の欠片は淡い光を周囲に帯び、俺の指先から離れて微かに宙へと浮き上がっていく。

ふわふわと浮き上がった小さな欠片は、目を丸くして目前の光景を見つめていた主と従者の間をスルリと通り抜け、床に散らばっている“仲間”の元へと飛んでいく。

バラバラになっていた仲間達と合流できた欠片は再びパズルを組み合わせるように修復していき、再び元の形へと姿を変えた。

「と……まあこんな感じだ」

ほぼ同時に俺の方を振り向いた二人に対して、飄々した調子で肩を竦めて見せる。

欠片を掴んだままにする事で“固定”して、引き寄せたり引き寄せられたりしても良かったのだが、それは“応用編”になるので今回は止めておいた。

……水晶球は床に散らばっていたから、俺は車椅子から落とされて床を引きずられる事になったりするだろうし。

目の前で奇跡のような光景を目の当たりにしたエヴァは、興奮冷めやらぬ様子で修復された水晶球を手にとって観察している。

茶々丸は茶々丸で、いきなり何気ない動作で俺の両手を取ったかと思えば。

「あの〜、茶々丸さん……？」

あまりの突拍子もない茶々丸の行動に、俺は驚きを通り越して少し呆れ返ってしまう。

何故なら茶々丸は真剣な表情で俺の手を撫でてみたり、何故か匂いを嗅いだりしているからである。

想像できると思うが、車椅子に座っている俺と茶々丸の身長差は残念ではあるが……かなりある。

至極当然ながら、直立状態のまま茶々丸が俺の手の匂いを嗅げる筈

がなく。

まるで紳士が跪いて女性の手の甲にキスをして恭しく挨拶するように、茶々丸は臣下の礼を取るかの如く片膝を床に着け、俺の手を取って匂いを嗅いでいるのである。

エヴァの場合は手を振り払ったが、茶々丸には邪念が一切無いことは理解出来た為、茶々丸が気が済むまで俺の手を貸してやる。

……少し、いや淒く恥ずかしかったが。

「魔法”の手……ですね」

どうやら茶々丸は気が済んだようでソツと俺の両手を離し、跪いた状態まま先程までの真剣な表情を一変させて優艶な微笑を浮かべている。

その微笑を見せ付けられた俺は……何故か少しだけ心臓が高鳴ってしまった。

「そ……そんな大層な物じゃないから」

この身体になつてから初めての経験に酷く困惑してしまった俺は、恥ずかしさを紛らわそうと目の前にあった茶々丸のワシヤワシヤと頭を撫でてやる。

茶々丸は目を見開いて一瞬だけ身を強張らせていたが、気持ち良さそうな虚ろな表情に変わったかと思えば、暫くすると頬を紅潮させて下を向いてしまった。

「嫌……か？」

形勢逆転した事で調子に乗った俺は、俯いてしまった茶々丸の頭を優しく撫でながら問い掛ける。

すると茶々丸は耳まで赤くした状態で上目遣いになり。

「いえ………もっとお願いします」

従者が主に懇願するように、恥ずかしそうな表情を浮かべながらそう呟いた。

「そ………そそ、そうか」

再び形勢が逆転してしまったようで、俺は茶々丸から視線を外し、虚空を見上げながら黙々と頭を撫でてやる。

段々と心臓の鼓動が早くなり、心がフワフワと浮ついた感覚がする。そろそろ色々な意味で危険だった為、撫でるのを止めようと口を開きかけたのだが。

「………オイ」

「「ひゃいッ!?!」」

突然エヴァに声を掛けられて、二人同時に上擦った声を上げてしまっ

慌てふためきながら横を見ると修復された水晶球を一人でキャッチ

ボールするように、何度も宙に放り投げながら顰めっ面を浮かべているエヴァが立っていた。

しまった……完全にエヴァが居た事を忘れていた。

「私の目の前でイチヤイチャするんじゃない、やるなら隠れてやれ」
小さく鼻を鳴らして痺れを切らしたように呟いたエヴァは、誰がどう見ても不機嫌そうだった。

「なッ、イチヤイチャなんてしてねえ！」

「そ、そうですマスター……イチヤイチャなんて……そんな」

俺が声を荒げてエヴァに反論すると、茶々丸も慌てて立ち上がり、恥ずかしそうに身をモジモジと擦っ……てオイ、茶々丸……その動作と口調は反対意見を言っているようには見えないぞ。

「わかったわかった、ハイハイハイ……何だかお前に従者を寝取られた気分だ」

かぶりを振りながら溜め息をつき、エヴァは酷く低い声でそう吐き捨てた。

「ね、寝取ッ……エヴァ！」

俺はエヴァの両肩を掴んで力一杯に揺さ振ってやるが、エヴァは無表情のまま乾いた笑い声を漏らしている。

「こ、紅茶を汲んできますッ」

忘れていた仕事を思い出したかのように突然そう言った茶々丸は、パタパタとスリッパの音を響かせて部屋を出て行ってしまった。

部屋に残された金髪幼女と車椅子少女。

暫くエヴァの肩を揺さ振り続けていた俺だったが、次第に力が弱まっ
っていき。

「……すまん、取り乱した」

気づけばエヴァに頭を深々と下げて謝罪していた。

「フン……まあ、いつも無表情な茶々丸が楽しそうにしているのは、
見ている面白いからな」

冷笑するように鼻を鳴らしてから、エヴァは底意地の悪い笑みを浮かべている。

「話を戻すが、お前の特殊な能力は後々に研究剖していくとして……
…どうやらお前の得意属性は炎と闇のようだな」

エヴァは胸の前で偉そうに腕を組み、見下すような視線を送ってくる。

「闇は私が得意とする属性の内の一つだ。だから充分に鍛えてやれるんだが……炎は私の得意とする氷の属性と、ほぼ対極にある属性だ……余り伸びんかもな」

そう言って苦々しそうに顔を歪めたエヴァは、俺の肩をポンポンと

数回叩いてくる。

「さて、お前の足の事で解決法が二つあると言ったが、一つは魔法……肉体強化や転移及び飛行魔法によって移動する方法だ。肉体強化は無理矢理に自らを強化する方法もあれば他人に強化してもらう方法もあるが……転移と飛行魔法は余りオススメは出来んな」

一度、そこで一拍置いたエヴァは再び演説するかのように口を開いた。

「転移魔法は所詮、“転移”であって瞬間移動ではない。移動するまでに時間が掛かってしまう……目まぐるしく状況が変化する戦闘中に、ノンビリと移動している暇など無いからな。飛行魔法も飛行魔法で速力は申し分ないんだが、細かい動作が出来んのだ。時速百キロ以上で走っている車が急に右折出来るかと言われれば、答えは一つしかない」

自らに酔いしれるように演説を続けているエヴァを眺めながら、俺は最終手段で羽があるけどな、と心の中で呟いて苦笑していた。

「もう一つの解決法はアーティファクトの能力を期待する……移動補助の能力とかだな。アーティファクトは生み出す者の心を顕すと言われていて、お前が足を動かしたいと渴望しているなら生み出せるかもしれない。だがこれは飽くまでも希望的観測で」

そこで言葉を言い差したエヴァは、はたと思い出したかのように手を打ち鳴らし、小さく頭を下げた。

エヴァは悪い悪い、と謝罪しながら俺が存知していないと思ったのだろう、アーティファクトの説明を丁寧に行ってくれた。

原作知識が有るため理解はしていたが、取り敢えず確認の意味も込めてエヴァの説明を念入りに聞いておく。

一通り説明を終えたエヴァは、一度わざとらしく咳払いをしてから。

「そこでだ…… “闇の福音” と呼称されるこの私と、仮契約してみないか？」

まるで胸に飛び込んで来いと言わんばかりに、エヴァは大仰に腕を真横に広げ、白い牙を見せて笑みを浮かべている。

“仮契約” と聞いた俺の脳に浮かんでくるイメージは、一つの不埒なイメージしかなく。

「……い、今からするのか？」

俺は少しだけ途方に暮れてから、戸惑いながらも質問を質問で返した。

どうやら俺は勘違いしていたようで説明を聞く限りでは、エヴァは魔法陣のような物を仮契約に使用するらしい。

「待っている、直ぐに済む」

少し安堵した俺が仮契約を承諾する旨を伝えるとエヴァは喜色を浮かばせて、何処からともなく取り出した紅いチョークのような物で木の床に“お絵かき” を始める。

地面にしゃがみ込んで嬉々としてチヨークを走らせるその小さな姿は、フローリングの床に落書きをする子供にしか見えぬ。

絶対に口に出して言えない事を考えながら、俺はエヴァの様子を含み笑いを漏らしつつ、その光景をノンビリと眺めていた。

「出来たぞ、木乃羽」

よつこらしよ、と年寄りじみた掛け声と立ち上がったエヴァは、描き終えた魔法陣のような物の真上に仁王立ちしてドヤ顔を浮かべている。

「もう出来たのか？」

脇で見守っていた俺には思いの簡素な準備に見えた為、胡乱げな調子でエヴァに問い掛けると、エヴァは一度だけ真下の魔法陣を確かめるように眺めてから力強く頷いてくれた。

そして話はとんとん拍子で進んでいき、どうやら前もって準備していたらしい宝石をポケットから取り出したエヴァは、それを魔法陣の中央に置いて早くこっちに来い、と手招きしている。

誘われるがままに車椅子で魔法陣の上に立った俺は、今度は仮契約の説明をエヴァから受けた。

どうやら血を媒介にした契約を行うらしく、契約には雀の涙程度の血を必要とするそうだ。

エヴァは見本を見せてやる、と偉そうに胸を張ってから、目の前で

指先をガリツと噛んだ。

そして、傷口から滴る紅い雫を数滴だけ宝石に垂らすと、血液に反応したらしい宝石がボンヤリと光り輝き始める。

私の傷口が塞がる前に早くしろ、とエヴァに急かされ、俺は見よう見真似で中指を噛んでみる。

やはり自傷行為というのは気が進まない物で、何度か躊躇しながらも奥歯に力を込めていく。

ズキリと指先に痛みを感じて口内に鉄の味が広がっていくが、直ぐに口から指を抜いて先程と同じように宝石に血を垂らす。

「私と両手を合わせる」

準備が終わった事を見届けたエヴァに透かさず言われ、俺は言われるがまま傷口を合わせるようにしてエヴァと両手を合わせた。

すると先程まで何の反応も示していなかった魔法陣が妖しく光り始め、部屋の中まで目映い光に包まれていき、そして。

暫くして沈黙するかのよう魔法陣と宝石が光りを失っていき、部屋の中を包んでいた目映い光も消え始めた頃。

先刻まで何も持っていなかった筈のエヴァの右手には、一枚のカードがあった。

第三十三話（後書き）

後書きでアーティファクトのカード内容を……。

名前表記 CONOE CONOHA

番号 X—V

称号 REGINA ALATA（翼ある姫君）

色調 nigror（黒）

徳性 fides（信仰）

方位 septentrio（北）

星辰性 Pluto（冥王星）

アーティファクト Pyrobolus insanus

之をやりたいが為に何千円もする分厚い羅和辞書を買っただけで、
絶対に言えなry

第三十四話（前書き）

珍しく早い時間での更新。

先日、エヴァとデミオリが紅茶を飲み交わしながら談話する夢を見た……。

何かの天啓でしょうか？（笑）

では第三十四は、どうぞ。

第三十四話

先刻まで何も持っていなかった筈のエヴァの右手には、一枚のカードがあった。

何故かエヴァは目を白黒させながら、生成されたパクティオーカードを無言のまま、しげしげと見つめている。

暫くの間、そんなエヴァを怪訝に思いながらも見守っていたのだが、いつまで経っても手元のカードを凝視しているだけで、俺にカードを見せてはくれなかった。

俺から何か声を掛けるべきなのかと思案していると、エヴァが瞳を閉じて不自然な咳払いしたかと思えば、不意に面を上げた。

「……このカードを渡す前に、説明しておく事がある」

そんな前置きを言うてからエヴァは何とも名状し難い複雑な面持ちで、パクティオーカードの特性を口にし始めた。

契約者と念話が可能になったりする事や、遠方からパートナーを召喚したり等……。

一連の説明を終えたエヴァは俺とカードを見比べるように視線を交互させ、ポリポリと蟀谷を指で搔いてから、まるで手品のように俺の目前で一枚だったカードを二枚に分裂させた。

「これが複製カードだ……無くすなよ」

そう言つてエヴァは徐に腕を前に突き出して、ようやく複製カードの方を俺に手渡してくれた。

簡単な礼を述べ、裏向きになっているカードの内容を見る前に、ちらりと上目でエヴァの表情を窺う。

エヴァは若干だが眉根に皺を寄せて、俺を睨んでいるようにも見えただ。

その表情は「お前に問い詰めたい事が山程ある」と言外に顕しているようで。

嫌な予感をヒシヒシと全身で感じつつ、カードに視線を戻す。

受け取ったカードをクルリと半回転させて表を向けると、そこに描かれていた物は。

「……………ッ」

その生成されたばかりのカードの内容を目の当たりにして、思わず俺は生唾を飲み込んだ。

ゆっくりと血の気が引いていき、気が遠くなるような感覚がする。

まず目に飛び込んできたのは、カードに描かれた俺の姿だった。

正面を向いて、ちょこんと車椅子に腰掛けている少女。

その少女は、まるで表情を隠すかのように真っ白な右手を顔に覆い被せている。

影になっている為、本当に表情を読み取る事は出来なかったが、微かに窺う事が出来る口元は三日月のように口角を上げて、歪んだ笑みを浮かべているように見えた。

反対に左手は何かを求めているかのように、手の平を下に向けて前に突き出している。

百歩譲って、ここまでは良いだろう。

多少、気恥ずかしさを感じるポーズではあるが……まだ許容範囲内だ。

だが問題は　その少女の背中から生えている、一对の翼にあった。神々しさまで感じる、純白の翼。

少女の周りには、小さな羽が降り積もる雪のように舞い散っている。当然至極、その少女の髪色は墨を塗ったような漆黑ではなく、眩しい程に輝く白色である。

瞳の色も黒ではなく、紅玉のように燃え盛るような紅色。

カードを持つ指先が小刻みに震え、焦点が定まらなくなる。

余りの驚きに息が詰まり、冷や汗が背中を流れ落ちていく。

次第にエヴァの刺々しい視線を全身で感じるようになる。

現実逃避するかのように、俺は瞼を閉じて深い深呼吸をした。

鼻で大きく息を吸い、口から肺に溜まった色々な物を空気と共に吐き出す。

……きつと、これは夢なんだろう。

そう、これは夢だ。

生まれてから尊敬する父親にも愛する妹にも隠し続け、同じ翼を持つ唯一無二の親友に一度しか見せた事のない翼が。

長年の夢だった翼を神様から貰い、その時が訪れるまでは隠し続けようと思っていた翼が。

俺の翼がこんな形でバレルわけがない。

動揺と焦りで平静さを失った心を何とか鎮め、閉じていた双眸を夢から覚める為に、重たい瞼を開けるが。

その双眸に飛び込んできた光景は、先程と寸分も変わらないカードの内容。

カードに描かれている少女が俺を嘲笑うかのように、酷薄な笑みを見せている。

思わず契約の証であるカードをビリビリと破りたくなるが、何とか思い止まる。

……夢ではない、現実是非常だった。

よくよくカードを注視してみれば、称号が『REGINA ALA TA』になっている。

『翼ある姫君』ってお前……。

「さあて……説明してもらおうかあ？」

脳内で深刻なエラーが発生した事で我を忘れていた俺に、エヴァが意地の悪い笑みを浮かべながら詰め寄って来る。

「……この翼は何だあ？」

エヴァはズイツとカードを俺の目前に突き出して親切丁寧、尚且つ分かりやすいようにトントンと翼を指差してくれた。

まるで犯人特定に繋がる物的証拠を得意げに突き出した警察官と、揺るがない証拠を突き付けられて顔を蒼褪める被疑者みたいだな、と冷静に考えながら俺は後退を続ける。

が、またもや俺は壁際に追い詰められてしまい……エヴァに顎を捕まれて拘束されてしまった。

目の前でカードがヒラヒラと左右に揺れ、そのすぐ後ろにはエヴァの満面の笑み。

「昔から空を飛ぶのが夢だったからさ……っ、翼はアーティファクトじゃないか？」

嘘は言っていない、嘘は。

エヴァの“優しい”詰問に肝を冷やしながらも、俺はどうにかして光明を見出だそうと打開策を模索する。

「……本当にか？」

真偽を確かめる為に瞳を覗き込もうとするエヴァと、そうはさせまいと顔を左右に背け続ける俺。

俺の顎を掴むエヴァの指先に力が籠り始めるが、ひ弱な首の筋肉で何とか反抗する。

エヴァの指先の力が勝り始めると、今度は視線だけを動かして対応する。

暫くの間、そんな黜ごっこを続けていたのだが。

「……マスター、止めて下さい」

凜と、無機質な良く通る声のエヴァを制止させた。

小さな盆の上にティーカップを二つ乗せた茶々丸が、さながら救世主のように現れたのである。

「む……茶々丸か」

邪魔が入ったと言わんばかりの視線を茶々丸に送りつつ、エヴァは俺から少しだけ後ろに引いた。

そして、茶々丸からティーカップを受け取り、良い香りがする中の

物を口に含む。

「木乃羽さん、どうぞ」

茶々丸はニッコリと微笑んで、俺にティーカップを渡してくれた。

入れたての茶葉の甘い香りが部屋の中に広がっていく。

ダーズリン……だろうか？

「ありがとう……茶々丸」

……色々な意味でな。

じわじわと痛む顎先を舐るように撫でながら、俺は茶々丸からティーカップを受け取った。

「……それは、パクティオーカード……」

盆を脇に抱えて紅茶を飲む俺の反応を楽しんでいた茶々丸だったが、とある物が目に入ったようで、ぼそりと独り言のように呟いた。

「ああ……エヴァと契約したんだ、あくまでも“仮”だけだな」

「そう……ですか」

それを聞いた茶々丸は目線を落とし、少しばかり俯いてしまった。

またも茶々丸の微かに憂いを帯びた表情を見る事になり、罪悪感を感じてしまう。

俺は自らの足で“此方側”に来たのだから、茶々丸が悲しむ必要は無いのだが……。

その後、微妙な空気が部屋の中を包んでいたのだが、ティーカップを荒々しく呷る事で中身を飲み干したエヴァが口を開いた。

「話を戻すぞ……お前が何処の馬の骨か分からん人間なら背中を裂いて中を見物してやるんだが、お前は“じじい”の孫娘で後始末が面倒だ」

恐ろしい事を躊躇なくペラペラと話したエヴァは、阿吽の呼吸で茶々丸が差し出した盆の上に飲み終えたティーカップを置いた。

「それに、お前の父親は“人間”だ……よって、その娘である近衛木乃羽も人間……の“筈”だ」

微妙に含みのある言葉を言いながら、エヴァはニヤリと尊大な笑みを浮かべる。

「とにかく、アーティファクトを出せ……翼がアーティファクトの可能性がある。色々と疑問は残るが話はそれからだ」

上から目線で言い終えたエヴァは小さく鼻を鳴らし、腕を組んで俺を見据えている。

「本当にいいの」

「御託はいいから早くアーティファクトを出せ」

俺が最後まで言う前に、エヴァは語調を強めて言葉を上乘せしてくる。

「わかったわかった……アデアツ」

言い差して、黙り込む。

アーティファクトを呼び出そうとした瞬間、何故か俺の胸の内を名状し難い隙間風のような不安が、静かに吹き抜けていく感覚がした。

もう一度、手にしたカードを注意深く観察する。

言われるがままにアーティファクトを出そうとしていたが、良く考えてみれば何が出てくるか……さっぱり予想がつかない。

アーティファクト名は『Pyrobolus insanus』……。

原作に出てきた単語ではないので、意味は分からないな……。

目前の二人は突如として黙り込んだ俺を怪訝に思い、不思議そうな視線を送ってきているが、無視して今は思考に没頭する。

どうやらエヴァはカードに描かれていた翼をアーティファクトだと思っ込んでいるようだが、それは違う。

何故なら羽は生まれた時から、この背中に内包している。

よって純白の翼はアーティファクトではない、と断言できる。

では俺のアーティファクトは何か？

それは　俺のスタンド能力と大きく関係のある物だと思われる。

もう一度、まじまじとカードを凝視する。

突き出すように、前方に伸びた左手。

注意深い見なければ分からないだろうが、その手の甲に……まるで浮き上がる入れ墨のように彫り込まていたのは　。

一般的に死の象徴とされる不吉な模様。

禍々しい“髑髏”が描かれている。

しかも、普通に想像する事が出来る髑髏の模様ではない。

人間が白骨化した場合は鼻が存在した部分には、ぼつかりと虚空が空いているのが普通である。

しかし、この髑髏には鼻腔が存在したと連想させる穴が一切無かった。

その代わりに、まるで元から鼻全体が一つの骨の固まりで形成されていたかのように、異常に突起した骨がある。

そして猫の耳……いや、鬼の角のように出っ張った骨が頭部に二つ。

額には、まるで十字架のように張り付けられた小さな短剣。

これらの事柄から、導き出される答えは。

「悪いんだが……二人とも少しの間だけ部屋を出ていってくれないか？」

カードから現れるアーティファクトは大体想像する事が出来た。

なので、安全性を第一に考えての提案だったのだが。

「何故だ、別にアーティファクトを見るだけだから部屋に居てもいいだろう？」

ところが、その気遣いはエヴァにとって甚だ不服だったようで、眉間に皺を寄せて否定的な意見を漏らした。

「……駄目だ、上手くは言えないがアーティファクトから嫌な予感がする」

そう言っただけは小さくかぶりを振った。

何を仕出かすか分からんからな……アイツは。

否定を否定で返す俺の言葉を聞いて、エヴァの片眉がピクリと吊り上がる。

「嫌な予感？……私は不死の吸血鬼だ、多少の事では驚かんぞ」

口元を露骨に尖らせたエヴァの表情は、見るからに不機嫌だった。

しかしエヴァの意見に、俺は又しても首を横に振る。

数回、押し問答が繰り返されたが俺は頑なに首を横に振り続けた。

「必ずアーティファクトは見せる。だから……頼む」

俺がそう言って頭を下げると暫し熟考するように間を置いてから、ようやくエヴァは納得がいかない様子ではあったが、渋々頷いてくれた。

ふう、と胸の内で安堵の溜め息をつく。

絶対に見せるよ、絶対にだぞ、と喚きながら茶々丸に引きずられるようにして部屋を出ていくエヴァの姿は、哀愁を感じずにはいらなれなかった。

キッチンと最後までドアを閉めてもらい、念には念をといて事で施錠も忘れずに行く。

意味は無いかもしれないが、やらないよりかはマシだろう。

静かになった部屋の中で一人、溜め息をついてからカードを見つめる。

まさか主人を襲ったりはしないよな……？

もし襲ってきたら『ザ・ワールド』で時を止めて、カードに戻すか。

大きく息を吸い込んで、吐息を吐き出す。

……覚悟はいいか、俺は出来てる。

「……………アデアット」

手元のカードが淡く光り輝き始め……………そして
。

第三十四話（後書き）

凸凹コンビになりそうだ……（苦笑）

第三十五話（前書き）

漸く、アイツが登場です。

では……どしどし。

第三十五話

手元のカードが淡く、輝きを放ち始める。

その周囲に燐光のような青白い輝きを帯びたカードは、次第に小さな光の粒子となって辺りに霧散していき、形を失っていく。

そして、瞬きをした次の瞬間には　。

まるで、そこが定位置であるかのように、膝の上に“ソイツ”が居た。

一目見た瞬間、全身が戦慄で粟立つ。

原作を知る者にしか分からぬ恐怖。

一瞬で沸点に達した血液が身体中を駆け巡り、心臓が早鐘のように動き始める。

蛇に睨まれた蛙のように身体が凍りつき、ソイツを凝視したまま全身が硬直する。

気づけば……膝上には戦車のような型をした、丸い物体が乗っていた。

戦車と言っても砲身は無く、丸みを帯びたボールのような車体にキヤタピラが付いており、カードに描かれていた髑髏が、まるで顔であるかのように車体の前方に張り付いている。

全長は20cmぐらいだろうか、膝上に乗っているが、余り重さを感じない。

そんな禍々しい戦車のような球体が俺の膝上に鎮座している。

「……シアー、ハートアタック」

無意識の内に俺は、ソイツの名前を口から漏らしていた。

『シアーハートアタック』

自動操縦で敵を追尾し、対象者と接触する事で爆発及び爆破を起こすスタンド。

この爆発はシアーハートアタック自体が爆発する訳ではなく、爆炎を放つ事で周囲を破壊するか、『キラークイーン』のように触れた物体を爆破する為、爆発してもシアーハートアタックはその場に残っている。

物理攻撃に対しては無敵と言っても過言ではないだろう。

例えばロードローラーに踏み潰されたとしても、多少パーツが欠損するだけで数秒後には元の姿に戻っている筈である。

しかし自動操縦であるが為に欠点も複数あり、もし原作通りの能力ならば、その欠点が非常にマズイ事を引き起こすのだが。

緊張していた所為だろうか、少し強張った面持ちで沈黙したまま動かないソイツの出方を窺っていたのだが。

「……………命令シロ」

そんな突拍子もない言葉を膝上の球体から聞いた瞬間に、俺の見えない緊張の糸が、ぷつりと音をたてて千切れたような気がした。

主人を襲う事は無いだろうと予想はしていたが、まさか『命令しろ』等と言われるとは露ほども思っていなかった俺は。

「はあ？」

思わず、そんな素っ頓狂な声を上げてしまう。

俺は強張っていた全身の筋肉が、一瞬にして弛緩していくのを感じた。

少し気の抜けた俺の返事が気に入らなかったのか、まるで地団駄を踏むかのように、膝上の球体が左右にカタカタと揺れたような気がした。

「オイ……………命令シロツテ、イッテルンダゼ？」

聞き取りづらい、無機質な片言の口調。

どうやら目の前の爆弾戦車は命令を欲しているみたいなので、とりあえず当たり障りのない事から命令してみる。

「……………お前の名前は？」

「シアーハートアタック、ダ」

まるで俺の質問を突っぱねるかのような即答だった。

「シアーハートアタック……お前の能力は何だ？」

恐るべき早さの返答に少し顔を引き攣らせながらも、再び膝上の球体に問い掛ける。

そして、徐にシアーハートアタックの口から行われた聞き取りづらい自身の説明は、目を見張る物があった。

何故なら、原作で登場した物と能力に違いがあったのだ。

まず原作ではガラガラヘビのように熱を感知する事で、指定された“獲物”を始末していたが……。

どうやら『命令』された事を傭兵のように、忠実に遂行するようになったらしい。

この変化は開口一番にシアーハートアタックが言い放った言葉で、何となくではあるが薄々感づいてはいた。

原作では体温を感知する為に、開口一番に言う言葉が『コッチヲミロ』だったからである。

能力の変化に安堵の溜め息をついていた俺だったが、どうやら“欠点”あるらしく複雑な命令には従えないらしい。

例えば、『○○を護れ』は可能だが……。

『○○を護りながら××を倒せ』等の複数の命令になってしまうと、

遂行できないらしい。

簡潔に纏めると……簡単な命令しか聞けないそうだ。

面倒だな、とは心の中で思っていたが、落胆はしていなかった。

単一の命令でも『護れ』と命令すれば、襲い掛かってくる敵を駆逐してくれるだろうし、『倒せ』と命令すれば結果的には誰かを護る事に繋がるだろう。

というのが、今のところの見解だった。

熱を感知して襲い掛かる能力のままだったら関係のない人間まで襲ってしまう為、使わずに封印しておこうと考えていたので面倒ではあるが、『感知式』より『命令式』の方が都合が良かった。

「後八追加サレタ“特殊能力”ガアルナ」

「特殊能力……？」

特殊能力という単語を頭の中で反芻しながら、その言葉に興味を惹かれた俺は膝上の球体に直ぐさま質問を投げ掛けた。

「アア、目ヲ閉ジテ額ニ手ヲ当テテミロ」

感情の籠っていない単調な片言口調で、シアーハートアタックは俺の質問に返答してくれた。

シアーが口にした一連の動作に若干の疑問を抱き、小首を傾げながらも黙したまま瞳を閉じて徐に右手を額に当てる。

第三者から見れば嫌々ながら行っているように見えたかもしれないが、正直に告白すると……期待で胸がはち切れそうになるぐらい高鳴っていた。

大好きだった漫画のキャラクターから新たな特殊能力がある、と聞いて胸が高鳴らない男は居ない筈である。

そんな胸を高ぶらせる期待に身を委ねながら、暫時、黙って目を閉じていたのだが。

端的に言うと、何も起きなかった。

痺れを切らした俺は膝上の球体に苦情を漏らしたのだが、それに対してシアーハートアタックは「集中シロ」と一言だけ口にして黙ってしまった。

眉根を寄せて顔を顰めながら、俺は一連の動作を再び行った。

武道の修練に励む者が稽古の初めと終わりに黙想を行うように、静かに息を整えて意識を集中させる。

すると、閉じている筈の瞼の裏に映り込んできた光景は。

小豆色の服を来た、誰かの下腹部だった。

俺は視線を動かしていないのに、瞼の裏に映っている光景が上へ上と動いていく。

豊満な二つの山に、赤色のリボン。

細すぎる真つ白な首元、真一文字に引き締められた血色の良い唇。

俺の瞼に映った光景は、若干だが俯き加減になり、額に手を当てて瞑想に耽る自身の姿だった。

《ドウダ、主……チャント見エテルカ？》

恐らく“念話”なのだろう。

ポルナレフ状態になっていた俺の脳内に突然響いてきたのは、聞き間違える事のない片言口調の声だった。

《シアーハートアタック、これは》

《『共感知覚』ノ能力ダ》

俺の質問を遮るかのように口早にそう答えた球体は、俺の膝上で転回したらしい。

ぐるりと景色が流れるように動き、部屋の中の景色が瞼の裏に写る。

《ダカラ、俺ガ動ケバ……》

ふわりと身体が宙に浮くような感覚。

どうやら、シアーハートアタックが俺の膝上から飛び下りたらしい。

《ちよっ……待っ》

俺の制止の言葉を聞く前に、シアーハートアタックは部屋の中を駆

け回る。

机の下を通り抜け、壁に激突する寸前に急カーブし、部屋の中を縦横無尽に走り回った後に俺の足元まで戻ってきた。

《ダガ、コノ能力ニモ欠点ガアツテナ……主ヨ、耳ハ聞こエテイルカ？》

乗り物酔いのような感覚に苦しみながら、シアーの言葉に耳を傾ける。

壁掛け時計の針が時を刻む音が耳に届く。

俺以外の人間が誰も居ないこの部屋の中なら、集中すれば自身の息遣いも聞こえるかもしれない。

シアーハートアタックが本当に言いたい事は薄々だが理解できた。

重要なのは俺の耳が聞こえているのか。

ではなく、俺の耳で聞こえているのか。

なのだろう。

理屈は分からないが、シアーハートアタックが地面から離れて俺の脛の辺りに飛びついたらしい。

木で作られた天井が見える。

蛸の吸盤のようになっていているのだから、シアーハートアタックは重

力に負ける事なく、垂直に俺の脚を登り。

定位置である、膝上に戻ってきた。

《……何も感ジナカタダロ？》

そう、シアーハートアタックの言う通り、“何も感じなかった”

脛の辺りに飛びついた時。

脚をキヤタピラで登っていた時。

思い返せば膝上から飛び下りた時も。

俺は何も感じていなかった。

《……モウ言ワナクテモ分カルト思ウガ、コノ能力ヲ使ッテイル時、主八完全ニ無防備ニナル》

……俺自身の聴覚や触覚は働いていない、という事か。

誰かに名前を呼ばれて肩を揺すられても、思いつ切り魔法を喰らっても、俺が感じる事は無いのだろう。

厄介だな、と心中で苦々しく独りごちる。

移動能力が極端に乏しい俺にとっては、神からの授け物かと思えるぐらいの能力だったのだが……。

索敵や斥候には使えるが、本体が無防備になってしまう……か。

……安全が確保されている場所じゃないと使えない能力だな。

若干だが、あの時間を巻き戻す能力の欠点にも似ているような気がする。

《能力の解除の仕方は？》

《目ヲ閉ジテ、額カラ手ヲ離セバ解除サレル》

目を閉じているのに再び目を閉じるとは、これいかに。

言われるがままに瞼を閉じ、額から手を離す。

そして再び瞼を開けると……膝上にはシアーハートアタックの姿があった。

「……大体ハ説明シタナ。後ハ物理攻撃ニ対シテハ文字通り痛クモ痒クモネエ〜ガ、“重力”トカ“特殊ナ攻撃”ヲ喰ラツチマウト、主ノ左手ニ反映サレルカラ気ヲツケロヨオ〜」

そんな言葉を聞きながら、俺は先程の特殊能力の利用方法について

思考を巡らしていた。

「へえ〜反映ね……反映反映ってオイ、シアー……今なんつった？
一々『シアーハートアタック』と名前を長々と呼ぶのが面倒だった
為、『シアー』と短くして呼ぶ事にしたのだが……」。

そのシアーが、さも当然の事であるかのようにか“重要”な事を
ポロリと言い放ったので、文字通り爆弾発言をした球体を鷲掴みに
して顔の前まで持ち上げてやる。

「ダカラ……特殊ナ攻撃マデハ防ギキレネエ〜カラ、主ノ左手ニ反
映サレ
」

言い切る前に手を離し、シアーを膝上に落とす。

突拍子もなく離されたシアーが何やら喚いているが、そんな文句の
言葉は今の俺には届かなかった。

脱力の余り、何も考えられなくなる。

左手に反映される……だと……？

待て待て待て……て事は何だ？

そついう描写は原作には無かったが、もしもシアーが石化魔法を喰
らったら左手まで石化するのか？

炎を喰らえば、俺の拳が真っ赤に燃えてしまうのか？

魔法が存在する、この摩訶不思議な世界で特殊な攻撃を喰らったら危ないですよ、と無茶な事を言っているのかコイツは……。

衝撃の事実に驚愕した俺は、肩をガツクリと落として魂が出てきそうなぐらいの深い溜め息をついた。

そんな所は原作を忠実に再現しなくていい、と恨み言を心中で呟いていた。

その時、俺に電流走る。

「って事は……お前、俺の“身体の一部”って事になるんだよな」

喉の奥に引つ掛かった魚の骨のような疑問を取り除く為に、まだ駄々っ子のように車体をカタカタと揺らし、文句を呟いているシアーに質問してみる。

「アア……ソウダガ？」

少しづつきらぼつな調子だったが、シアーは返答してくれた。

その返答を聞いて、少しばかりだが光明が見えてきた。

「……………ザ・ワールド」、時よ止まれ」

魔力の浪費を惜しまずに、俺は静かに呟いて時を停止させた。

……膝上のシアーはピクリとも動かない。

俺の身体の一部だと言っならば。

「おい……シアー、聞こえるか？」

この静止した時の世界でも。

「……何ダア？」

主人の呼び掛けに対して、シアーは忌ま忌ましそうな声の調子で返事をした。

片言口調なのに感情が分かるようになってきた……って今はそんな事どうでもいい。

止まった時の世界の中で、シアーを自由自在に動かせる。

俺は奇声を上げて喜びなくなる衝動を抑えつつ、シアーに再び声を掛けた。

「聞こえてるのか！……という事は今、動けるか？」

恥ずかしいほどに声の上擦ってはいるが、今は気にしていられない。

「……ソレハ命令カ？」

「いいから早く動けッ！」

緊張感を一切感じられないシアアの返事に歯噛みしながら、俺は金切り声を上げて催促する。

「……了解シタ」

金属が軋むような音を立てながらキヤタピラが回り始め、シアアが俺の膝上でラジコンのように動き出す。

スカートの上で動き回るシアアの所為で少し太股がこそばゆかったが、今は攪りたい感覚より感動の方が大幅に上回っていた。

「……そして、時は動き出す」

俺は感極まってしまった所為か、腑抜けた声の調子で解除キーを呟いて、膝上で健気に動き回るシアアを見下ろした。

無言のまま、再びシアアを摘まみ上げて顔の前まで持ってくる。

キヤタピラが空回りし、目の前で虚しい回転音を上げている。

「ン……何ダ、モウイイノカ？」

駆動音と共に回転していたキヤタピラがピタリと静止する。

何故か無性に“そう”したくなった俺は。

シアアのゴツゴツした球体の身体を撫でながら、思いつ切り頬擦りしてやった。

「ドウシタ、主？」

「……………いいから黙ってる」

耳元で呟いたシアアを黙らせて、頬擦りを続ける。

「……………了解シタ」

頬擦りする度に頬がヒリヒリと痛んだが、気にしない事にする。

こんな事を言うのも何だが……………シアアが可愛く見えてきてしまった。

特殊能力が左手に反映される欠点は大きい、身体の一部だからこそ『ザ・ワールド』中も動ける長所も大きい。

まさか本当に『ザ・ワールド』中でも動けるとはな……………今まで“独りぼっち”だったから……………その分だけ喜びも一入だけど。

という事は……………『共感知覚』で何キロメートルも離れた所から、『ザ・ワールド』で時を止めてシアアを指示通り動かせるって事か？

うん……………夢が広がるな。

足が動かなくなった俺にとっては頼もしい仲間に頬擦りを続けつつ、そろそろエヴァ達を呼びに行こうと思いはじめた、その時。

突如として階段を踏み抜くように駆け上がってくる二つの大きな足

音が耳に響いた。

その大きな音に驚いてしまい、慌てた俺は再びシアーを取り落とし
てしまった。

シアーはゴロゴロと太股の上を転がり、鈍重な音を響かせて床に落
ちた。

降参した犬の様にお腹を見せて、床の上で文句を呟くシアーに平謝
りしながら、手を伸ばしてシアーを拾い上げようとしたのだが。

部屋の入口のドアノブが、ガチャガチャと激しい音を立てた。

が、きつちりと施錠されていた為、当然扉は開かない。

余りにも切羽詰まった音のように聞こえた為、シアーを拾い上げる
のを止めてドアの方向を向く。

背後から聞こえるシアーの怨嗟の声を聞き流しつつ、何かと怪訝
に思いながらも施錠を開けようと、ドアに数歩近づいたその時。

突然、施錠していた筈のドアが蹴破られ、俺のすぐ横をドアだった
木の塊や破片が掠め飛んでいく。

そして……けたたましいぐらいの甲高い音を響かせている光り輝く
剣を構えたエヴァと、小脇に突撃銃のような物を抱えて武装した茶
々丸が部屋に躍り込むように入ってきた。

第三十五話（後書き）

さあ……上手く扱いきれるだろうか？（汗）

シアーが言っている『主』は、『しゅ』でも『あるじ』でも『マス
ター』でも……はたまた『お前』とでも、お好きなようにルビを振
ってやって下さい（笑）

第三十六話（前書き）

試験的に文体を少し変えてみました。

そして、今回は主人公の出番無しです。

では、短いですが……どうぞ。

第三十六話

時は少し巻き戻り……そして。

「もういい……いい加減に離せ！」

エヴァの苛烈な金切り声が、冷え切ったように静かな廊下に響き渡る。

そして、間髪入れる事なく自らの襟首を掴んで廊下を無造作に引きずっていく、茶々丸の手を思い切り払い除けた。

エヴァはその端正な顔立ちを歪めて髪を振り乱すように荒々しく振り返り、背後に立っている茶々丸の顔を見上げた。

先程から主を粗雑に扱う従者に対し、エヴァは文句の一つや二つぐらい言っただけでやるつもりだった。

が、茶々丸の表情を目にした瞬間、そんな言葉達は喉元で引っ掛かり、臆したように出てこなくなった。

思わず尻込みしてしまうぐらい、見ている此方まで悲しくなるような余りにも悲哀に満ちた表情。

まるで親の仇を見ているかのような、気圧されそうになるぐらいの強烈な視線で茶々丸はエヴァを見下ろしていた。

希望を失い、絶望に染まった翡翠色の双眸からエヴァは視線を逸らして俯いた。

「……アイツが望んだ事だ」

電気の切れた機械のように呆然と立ち尽くしている従者を、突き放すかのように呟いてから、エヴァは茶々丸の横を通り過ぎる。

「……分かっています、ですが……」

背後から茶々丸の弱々しい声がエヴァの耳に届いたが、従者の助けを求めるような言葉を完全に無視し、主は歩を進める。

躊躇いながらも開かれた口から、それ以上言葉が紡がれる事は無く。

茶々丸は下唇を苦々しそうに噛む事で自らの想いを封じ込め、黙々と前を歩いていく主の後に続いた。

床を踏み締める度に鳴るギシギシと木の軋む音が、二人の耳に響く。

もう……後には戻れない。

そんな事を胸中で考えながら、エヴァ達はリビングへと続いている階段を下りていく。

リビングに戻ったエヴァは、暇潰しで作っている内に溢れ返ってしまい、地下室に入り切らなくなった人形達が鎮座している深紅のソファーへ、その身を投げ出すかのように座り込んだ。

そして額に手を宛行い、深々と溜め息をつく。

まるでソファーに沈み込んでしまいそうになるぐらいの激しい倦怠感が、エヴァの矮軀に重く伸しかかる。

本当にアイツを此方側に引きずり込んで良かったのだろうか？

解答の見つからない疑問が心に浮かぶ。

だが、アイツは自ら望んで此方側に来た。

入れ替わるように心中に浮かんできた言い訳にも良く似た解答を、誰にも聞こえぬようにエヴァは小さな声で独りごちた。

頭の中でエヴァに酷似した小さな天使がアイツは手放すべきだ、と囁いてくる。

しかし一方で、もう一人の小さな悪魔がアイツは千年に一度の逸材で、手放す必要はないと囁く。

頭の中で行われる論争は、平行線を辿り続け、エヴァは一向に解答の見つからない自問自答を頭の中で繰り返し、また一層に気分が悪くなってしまふ。

頭を悩ませるなど私の性分ではないな、といった様子で激しくかぶ

りを振ったエヴァは、額を押さえて俯き加減だった姿勢を伸ばすように、荒々しくソファアの背もたれにその身を預けた。

そして徐に右手を高々と宙に伸ばし、瞳を閉じたままパチンと指を鳴らす。

お盆を小脇に挟んでエヴァの傍に控えるように佇んでいた茶々丸は、ぺこりと小さく頭を下げてから、何も言葉を発する事なくキッチンへと向かっていった。

アイツの過去に何があったかは知らない。

だが、過去に何か“あった”のは分かる。

ぼんやりと虚空を見上げ、エヴァは再び沈鬱な吐息を吐く。

魚の小さな骨が喉に突き刺さってしまったかのような、僅かな違和感がエヴァを苛ませていた。

それに先日、エヴァは近衛近右衛門から孫娘にあたる近衛木乃羽の身の上話などの、大まかな情報を提示されたばかりだった。

その唐突に提示された情報が、エヴァの頭を更に悩ませていた。

いや、唐突に、というのは若干語弊があるかもしれない。

あの日いきなり現れた近衛木乃羽と契約を結び、靄が掛かったよう

に頭の中が霞んでいる為に思い出す事は叶わなかったが、自らが木乃羽に襲い掛かり、そして全ての片が付いた後。

保健室を後にした茶々丸とエヴァは罪悪感を感じながらも、帰路に着こうと廊下を歩いていった。

エヴァは目を空けてからではあるが、近衛近右衛門の元を訪れようと目論見を立てていた。

何故なら、簡潔に一言で言えば『アイツには疑問点が多すぎる』からであった。

何処で魔法や自らの呼称名を知ったのか、あの特殊能力は何なのか、悪魔法使いと卑下される私と契約して何の旨味があるのか……等々、疑問は尽きない。

契約している為“その”方面の事を聞き出す事は出来ないが、ある程度の前情報として近衛近右衛門から聞き出そうとエヴァは目算していた。

……目算していたのは、契約を終えた直後ぐらいだったが。

彼女には、そこから先の記憶が無かった。

今し方……恥ずかしながらも自らが不祥事を起こしたばかりで、屋上で何が起きたのかは結界を張っていた為、もしかすると近右衛門はエヴァが木乃羽を襲った事を認識していないかもしれない。

しかし、何か起きて自らの孫娘が保健室送りにされた事は知っている筈である。

廊下を歩いていた所を偶然倒れていた木乃羽を私達が運んだ、という事にはなっているが……『まず第一発見者を疑え』という言葉が、この世には存在する。

とどのつまり、今から学園長室を訪れたとしても警戒……もしかすると門前払いまで喰らう可能性があった為、日を改めようと考えていた　その時だった。

《ふお、エヴァ……聞こえとるかの?》

嘔れてはいるが、何処か若々しく感じれる澁刺とした学園長の声が、エヴァの頭の中に響く。

《何だ……じじい》

エヴァは靴箱を開こうとしていた手を止めて、唐突に念話で話し掛けてきた老人に嫌嫌そうに返答する。

その時、エヴァは表情を僅かに歪ませて、少しばかり背中に冷や汗をかいていた。

まさか、もうバレてしまったか……と。

ただでさえ学園長の孫娘を保健室送りにした可能性があると思われるのだ、それが我を忘れて襲い掛かったとバレてしまったのなら、いつでも彼女の寝首を搔こうとしている正義の魔法使いからの非難は免れない。

最悪、この麻帆良から追放される可能性も否定できない。

そんな事態になってしまった事を後悔しながら、エヴァは学園長の次の言葉を黙して待っていた。

《ふおっふおっ、何……今から学園長室に来てくれんかのう？》

お茶でも飲みながら他愛ない話でもしようではないかといった調子で、そう言ってきた学園長に対してエヴァは更に警戒心を強める。

《私は忙しい、また今度》

《来てくれんかのう？……勿論、一人でじゃ》

声色が変わり、口調が強まった学園長の声にエヴァの言葉は容易く塗り潰された。

《……分かった、直ぐに行くから首を洗って待っている》

そう言つてエヴァは学園長との念話を断絶し、覚悟を決めるしかない、と吐息を吐いて肩を落とす。

エヴァの傍には念話を傍受していた茶々丸が、心配そうな表情を浮かべていた。

そんな茶々丸に、先に帰宅するよう指示したエヴァは重い足取りで学園長室に向かった。

向かった先で、学園長から聞かされた話が……まさか孫娘に対する惚気話とは彼女も思いもしなかっただろう。

だがしかし、その惚気話も次第に重たい話題へと変わっていき。

「マスター……どうぞ」

ふと気づけばエヴァの目の前に茶々丸が立っており、甘い香りのするティーカップが差し出されていた。

ありがとう、と礼を述べてからエヴァはティーカップを受け取り、鼻腔を擽る香りを楽しんでから、その中身を口に含んで堪能する。

口の中に広がっていく茶葉の香りと味を楽しみ、ティーカップから口を離れたエヴァは小さな吐息を吐いて、徐に先程のカードを取り出して観察するようにソレを凝視する。

カードに描かれた近衛木乃羽の姿。

真紅の双眸。

純白の双翼。

絹のように艶やかな白髪。

その姿は、まるで。

「……烏族だな」

ぼそりと小さな声で呟いて、エヴァは再び味わい深い紅茶を啜る。

しかし近衛木乃羽は近衛詠春の娘で、詠春は歴とした“人間”である。

だとすれば、この姿は一体何だというのか。

またも近衛木乃羽という人物に対する疑問が一つ増え、エヴァの頭を悩ませる事になった。

「…………ふむ、しかし遅い　　ッ!？」

紅茶を口に含みながら横目で壁掛け時計を視線に捉えたエヴァは、時間の経過を気にして様子を見に行こうとした、その時だった。

血液が凍り付いてしまったかのような、尋常ではない寒気。

びりびりと肌に響く程の莫大な量の魔力が一瞬で使用された痕跡。

何かが手遅れになってしまったような、そんな喪失感を感じたエヴァは、跳ね上がるように立ち上がり、テーブルの上にティーカップを乱暴に置く。

嫌な予感がする。

木乃羽が顔を顰めて言っていた、そんな言葉がエヴァの頭の中に蘇る。

「…………マスターッ!」

茶々丸も異常を感じ取ったらしく、いつの間にか突撃銃を小脇に抱えて声を張り上げている。

思わずエヴァは何処から銃を取り出した、とツツコミを入れそうに

なるが、何とか言葉を飲み込んで、右手に断罪の剣を生成する。

咄嗟に二人が武装したのは意味があった。

近衛木乃羽のカードに書かれていたアーティファクトのラテン語が、かなり不気味な意味だったからである。

それに、魔法を一つも知らないと言っていた木乃羽の魔力が減る時点で、何か異常が起きているのは確かだ。

ほぼ同時に二人は銃口から放たれた弾丸のような早さで走り出し、階段を駆け登る。

そして先に部屋の前まで辿り着いたエヴァが、ドアを押し開けようとドアノブを回すが 開かない。

……どうやら中から鍵が掛かっているようだった。

開かない事を確認したエヴァは背後の茶々丸に中に入ると無言で指示を送り、左手の指でカウントを始め。

躊躇なくドアを蹴破り、木乃羽が居るであろう部屋の中に押し入った。

第三十六話（後書き）

どう……ですかね？

いつもは一人称視点で書いていますので……というか今回も若干、
一人称視点になっているような（汗）

まあ……こんな書き方も出来ますという作者のry

今回でよく分かりましたが、やっぱり作者には三人称視点は合いま
せん（苦笑）

特に御意見が無ければ次回からは通常通りに戻ると思います。

第三十七話（前書き）

何とか更新出来た……。

では、短いですが……どじょう。

第三十七話

けたたましいぐらいの甲高い音を響かせている光り輝く剣を構えたエヴァと、小脇に突撃銃のような物を抱えて武装した茶々丸が部屋に躍り込むように入ってきた。

「大丈夫かッ!？」

エヴァは両目をカッと見開き、光り輝く剣を油断なく構えたまま部屋の中を見渡している。

突然の不意打ちに、息が詰まる。

まさか目の前でドアが爆散するなど予想だにしていなかった俺の心臓は、胸の内で激しく喚き立てていた。

エヴァの背後では見るも無惨な姿になってしまったドアが、パラパラと音を立てて木屑へと成り果てていく。

部屋の中には舞い上がった埃が充満し、電灯の光を受けてキラキラと輝いている。

ソレを吸い込んでしまったせいか、俺の肺が白旗を振ってしまい、何度か激しく咳込む事になった。

ようやく呼吸が落ち着いて僅かに涙の溜まった目尻を拭いながら、俺は剣を構えたままのエヴァを正面に見据えた。

「だ、大丈夫だけど……?」

何が何だか分からずに目をパチクリとさせながら、俺は若干言葉を詰まらせつつもエヴァに返答した。

掠れるような小さな呼吸音を自らの肺で奏でながら、またも激しく咳込んでしまう。

空気が悪く、そして重かった。

どうやら部屋の中は埃が舞い上がっているだけではなく、熱っぽい物騒な空気も含んでいるようだった。

……また何かしてしまっただろうか？

「……クリア。私達以外に体温及び魔力を感知する事が出来る者は存在しません」

ぐるりと部屋の中を凝視するように見渡した後、茶々丸はそう呟いてから腰溜めで構えていた突撃銃の銃口を下ろす。

「ど、どうしたんだ……？」

展開についていけない俺は、少し落ち着いた様子になった目前の二人に問い掛ける。

するとエヴァは雨傘の雫を振り落とすかのように光り輝く剣で血振りを行くと、その剣は光の粒子となって消え失せてしまった。

「アーティファクトは安全だったのか？」

そう言つてエヴァは頭を掻きながら、安堵するかのよつな吐息を吐き出した。

質問を質問で返された為、若干戸惑いながらも“一応”安全だった旨を伝えると、エヴァは俯いて譫言のように小さな声で何かを呟いている。

何度か声を掛けてはみたが、へんじはない、じぶんの世界にはいりこんでいるようだ。

金髪少女は俺の問いに答えてくれるつもりは無いみたいだと見切りをつけて、物騒な物を手にしたままの茶々丸に意味ありげな視線を送る。

が、ただ茶々丸は未だに咳込んでいる俺を心配するよつな表情を浮かべるだけで、その口から解答が出てくる事は無かつた。

「もしかすると……発作か？」

「……エヴァ、何か言つたか？」

何か俺に関係のある事を言われたよつな気がして、腕組みをしたまま独り言を呟いていたエヴァに視線を戻す。

しかし「なんでもない」とエヴァに一蹴されてしまい、俺は僅かな蟠りを胸中に感じながらも、沈黙したまま頭上に疑問符を浮かべる事しか出来なかつた。

「で、アーティファクトはどうだつたんだ……早く見せる」

まるで居心地が悪くなった子供が突如として話を転換させるかのように、エヴァは俺に問い掛けてきた。

「あ、ああ……シアーって、あれ？」

小首を傾げたままではあったが、新しい仲間を紹介しようとする自らの膝上に視線を落とす。

しかし、膝上が定位置の筈であるシアーの姿がそこには無かった。

おかしい、と更に疑問符が頭上に展開されていく。

まさかとは思うが勝手に動いて……いや、命令式だとあ。

その時、脳内に電流走る。

俺がシアーに命令した、最後の言葉は確か。

慌てて車椅子の上で身体を捻り、背後を振り向く。

やはり、床の上にはシアーがお腹を見せたまま無造作に転がっていた。

《シ、シアー……おいで》

気まずさを感じながらも念話で呼び掛けるが返答は無く、シアーはピクリとも動かない。

確かに黙っているとは命令したが、動くなとは言っていない……まさか。

《シアー……まさか拗ねてるのか？》

《……拗ネテネエ》

ボソリとぶつきらぼつな調子の声が、頭の中に響き渡る。

《ほったらかしにしてたのは悪かったからさ……な、だからおいで》

《チツ、仕方ネエーナ》

どうやらシアーは機嫌を直してくれたようで、徐に起き上がると滑走するように床の上を走り始め、定位置である膝上に戻ってきてくれた。

「……………」

沈黙したままのエヴァはシアーを一瞥し、そして直ぐに視線を俺に戻す。

そしてエヴァが膝上のシアーを見て、言い放った忌憚のない言葉は。

「この気味の悪い、小さな物体は何だ」

だった。

エヴァの発言を聞いて呆気にとられた俺は、ポカンと口を開けたまま硬直してしまった。

「……おい、そんな玩具はいいから早くアーティファクトを見せる」
エヴァは苛立ちを隠せないようで、腕組みをしたまま不機嫌そうに顰めっ面を浮かべている。

「え、いや……コレだよ……コレ」

俺は戸惑いながらも膝上のシアーを指差すと、エヴァは訝しげな面持ちでシアーを睨みつけている。

「……まさか、それがお前のアーティファクトなのか？」

エヴァは膝上のシアーを凝視しながら、「冗談は止めてくれとでも言いたげな調子で俺に問い掛けてくる。

「ああ、そうだが……どうかしたか？」

俺が肯定の意を示した途端、落胆の溜め息を吐きながらエヴァは頭を掻いている。

落胆の理由を問えば、エヴァ曰く『覇気も無ければ魔力も一切感じない……本当に玩具じゃないのか』らしい。

そして、再びエヴァが無然とした様子で吐息を吐いていると。

「コノ失礼ナ糞ガキハ何ダア……主ヨ」

そんなエヴァの態度にシアーの堪忍袋の緒が切れてしまったようで、暴言を吐きながら命令を待つ忠犬のように俺を見上げている。

短気なエヴァが怒らないかと冷や冷やしていたのだが、どうやらエヴァはシアーに興味を示してくれたようで、物珍しげな視線を膝上の物体に送りながら俺に歩み寄って来る。

「ほう……自我があるのか、珍しいな」

「俺二触ルンジャネエ〜！」

摘み上げられて宙ぶらりんな状態になったシアーが声を荒げているが、どこ吹く風といった様子でエヴァは観察を続けている。

「ふむ、自我は持っけていても主体的では無く受動的である……合ってるか？」

「あ、ああ……良く分かったな」

摘み上げた物体の外周を確かめるように、指先でシアーをクルクルと回しながら呟いたエヴァに、俺は感嘆の声を上げる。

伊達に六百年も生きてはいない、か。

「ふん……コイツはお前の膝上に戻ってから、私達を見てもピクリとも動かなかつたからな……恐らく念話か何かで命令を受けて膝上に戻ってきただけなのだろう？……それに能動的であるならば、私達が部屋に入ってきた時点で何かしらの行動を取っている筈で、更に今こうやって摘み上げられているにも関わらず、反抗もせず声を荒げて喚んでいるだけ……よって、コイツは指示を受けないと動かない……違うか？」

すると、感嘆の声を上げた俺を見て気を良くしたのか、エヴァは得

意顔を浮かべながら饒舌に話し始めた。

「ほれほれ、どうしたどうした？」

「離シヤガレエ〜！」

シアーはキャタピラを空回りさせて唸り声を上げているが、エヴァは底意地の悪い笑みを浮かべてシアーをプラプラと揺さ振っている。

「……正解だからシアーを虐めてやるなよ、シアー……おいで」

俺の言葉を耳にしたシアーはエヴァの手から脱出し、待つてましたと言わんばかりに機敏に動いて定位置に戻ってきた。

そして仇敵でも見ているかのようにエヴァを睨んだまま沈黙している。

だいぶ嫌われたみたいだぞ……エヴァ。

「で、コイツの能力は？」

シアーを虐めた事で満足感が満たされたらしく、エヴァは口元に笑みを浮かべながら、禍々しい視線を自身に送り続けている膝上のシアーを指差した。

俺は突進と爆発を繰り返す小さな爆弾だ、と端的に纏めてエヴァに説明する。

爆発の規模はどれくらいだ、とエヴァに問われた俺は危うく人が木っ端微塵になるくらいだと、口を滑らせそうになったが何とかごま

かす事に成功し、威力は高いらしいとだけ答えておいた。

「……そうだ、爆発の規模を計る為に不死である私が爆発を受けてやろうか？」

無い胸を張りながら笑えない冗談を言ったエヴァに、俺は溜め息をついて頭を左右に振って反対の意を示す。

俺は建前で『例え不死だとしても友人を傷つけたくはない』とエヴァに答え、本音は『洒落で済まない事になる可能性がある』と心の中で呟いていた。

原作で最強だった主人公に致命傷を与えた数少ないスタンドなのだから、何が起きてもおかしくは無い。

俺の返答を聞いたエヴァは、さも詰まらないといった様子で肩を竦め、気を取り直すかのように「他には？」と問い掛けてきた。

膝上の不機嫌そうなシアアを撫でながら、思考を巡らせる。

当然、『ザ・ワールド』の件は言えないので……後は。

「後は……斥候能力ぐらいか」

「……斥候能力？」

そう俺が呟くと、エヴァは僅かに瞳を輝かせながら小首を傾げている。

口で説明する何かしらのボロが出る……ではなく『百聞は一見に如

かず』という事で実際に能力を使用する事となり。

額に手を添え、

瞳を閉じ、

精神を沈め、

心を同調させる。

そして大きく深呼吸してから、再び瞳を開ける。

……………成功、つと。

瞳に映った光景は、じつと俺に視線を送り続けているエヴァと、無表情のまま部屋の入口に佇んでいる茶々丸の姿だった。

《……………命令シロ》

そう面倒臭そうに呟きながらも、シアーはエヴァを睨み続けている。

どうやら、まだ根に持っているらしい。

命令か……………そうだな、あの時は能力の説明をしてくれて頼んでいたから勝手に動いてくれたから。

《……………取り敢えず好きに動いていいぞ》

と、適当に命令したのだが……………後で激しく後悔する事になった。

《……了解シタア》

いい加減な命令を受けたにも関わらず、何処かシアアの返事は喜びに満ちているような気がした。

《………主三》

俺の膝上に留まったまま、シアアがポツリと呟く。

《………どした？》

俺は命令を受けても動かないシアアに疑問を抱きながらも、一応返事だけはしてやる。

《………復讐ノ機会ヲ与エテクレタ事ニ、感謝スルゼエ〜！》

頭の中に生き生きとしたシアアの声が響き渡る。

《………へ？》

俺は言葉の意味が理解できずに素っ頓狂な声で返答してしまうが、その間にもシアアのキャタピラは唸りを上げて目標に突撃しようとしている。

目標………？

誰に………？

シアアの視界の中心に映っている物は、ただ一つ。

腕を組み、怪訝そうな表情を浮かべているエヴァの姿。

ま……さ……か……？

嫌な予感が全身を支配していく。

大きな氷柱を口の穴から突っ込まれたような……血液が凍りつきそうになるぐらいの寒気。

《お……おい、ちょっと待てッ！命令は中止》

俺の制止の声を振り切って、シアーは鬨牛さながらの勢いで膝上から離陸し、そして。

疑問符を浮かべて油断していたエヴァの鳩尾に、思いっ切り直撃した。

第三十七話（後書き）

終わった……？（笑）

第三十八話（前書き）

今回は少し長めです。

では、ごきげん。

第三十八話

膝上から離陸したシアーは疑問符を浮かべて完璧に油断していたエヴァの鳩尾に、容赦ない体当たりを打ち噛ました。

エヴァの鳩尾に直撃する寸前、俺は思わず目を瞑ってしまった。

何故なら、もしシアーが最大出力及び全力全壊で突進しているのであれば、文字通り“貫通”していてもおかしくなかったからである。

もし貫通しているのなら瞼に映る光景は……いや、考えるのはよそう。

しかし、目を閉じれば耳が良く聞こえるようになるのは当然の理で。

何かをゴリゴリと押し潰すような鈍い音が、鋭くなった耳朶へと響き渡る。

そして、首を絞められた鶏のようなエヴァの呻き声が後から続く。

ある程度時間が経ち、本当に貫通してしまったのではないだろうか、心底怖じけづきながら恐る恐る両目を開くと。

どうやらシアーは壁に少し減り込んでいたボールがポロリと落ちるように、重力に従って床に下り立ったらしく、目前には可愛らしいスリッパを履いたエヴァの両足が見えた。

床の木目に鮮血の華が咲き誇っている訳でもなく、エヴァが断末魔の声を上げながら倒れ伏している訳でもない。

これらの情報から推測される結論は、どうやらシアーは手加減だけはしていたようで、エヴァの下腹部を貫通していなかった。

貫通していない事に安心した俺は、無意識の内に安堵の溜め息をついていた。

だが手放して喜びの声を上げるのは、まだ時期尚早らしい。

「ぐ……ッ……」

苦虫を何十匹も噛み潰したような苦悶の表情を浮かべ、大粒の汗を流しているエヴァと目が合った。

背筋が凍りつき、息が詰まる。

エヴァの瞳に映るのは、深い憎しみの炎。

この場から早く逃げるべきだと、本能が危険信号を発している。

しかし、この深刻な状況を引き起こした当の爆弾は何も感じていないらしく、苦痛に歪むエヴァの表情を見て、さも嬉しそうな調子の声で「ザマアミロオ」と一言。

轟々と燃え盛っている炎にドボドボとガソリンを注ぐようなシアーの無謀な発言に、俺の心臓は縮み上がっていた。

恐らく、その一言にエヴァは完全に“ぷつつん”してしまったのだろっ。

この世全ての憎悪を込めた視線をシアーにぶつけながら、まだ痛む
であろう下腹部を手で押さえ、エヴァはわなわなと唇を震えさせて
口を開いた。

「き……さ、まあ！」

甲高い声で喚いたエヴァは後退るように数歩後ろへと蹠踉めいてい
たが、今にも後ろに倒れそうになっていた所を駆け付けた茶々丸が
優しく抱き留めた。

「大丈夫ですか、マスター」

矮躯を抱き留めた茶々丸は心配げな面持ちで主に声を掛けているが、
残念ながらエヴァの耳には届いていないようだ。

「許さん……絶対に許さん……」

ぷるぷると小刻みに震える手でシアーを指差し、エヴァは口をパク
パクと開閉させている。

気付けば、和やかだった場の空気が険悪な雰囲気へと一変してしま
っている。

俺はこれから先の展開を考えると鬱になりそうだったが、どうする
事も出来ずにシアーの瞳を借りて成り行きを見守る事しか出来な
かった。

「貴様、どういつつもりだ……？」

エヴァは冷え切った刺々しい調子の声で、シアーを睨み据えながら

眩いた。

まるで獲物を前にした狼のように、エヴァは血走った獰猛な双眸を滾らせている。

「サツキノ仕返シダ、糞ガキイ」

思わず目も逸らしたくなるような鬼気迫る表情のエヴァに、シアアは少しも臆する事なく燃料を投下し続けている。

その瞬間……シアアが燃料投下しているにも拘わらず、部屋の中の空気が零点まで一気に下がったような気がした。

普段は滅多に平静さを失わない茶々丸でさえも、その表情には焦燥の色が見え、エヴァの背後から声を掛けようとはしているが、喉から言葉が出てこないようだった。

「クツ……フッフ」

それまで肩で荒々しく息をしていたエヴァだったが、ようやく痛みも和らいできたのだろう。

蟬谷に青筋を浮かべて柳眉を逆立てたエヴァは、嫌な含み笑いを漏らしながら茶々丸の手を肩から払い除け、一步前へと歩み出る。

「いいだろう、後で血祭りに上げてやる……だが今は」

そう言ってシアアを見下ろしていたエヴァは視線を外し、その双眸で違う獲物を正面に捉えたようだった。

「お前だあ……近衛木乃羽」

エヴァの視線の先には額を手で押さえ、“抜け殻”状態になっている俺の姿があった。

残酷な満面の笑みを浮かべながら、無防備になっている抜け殻へとエヴァは歩を進める。

《おいおいおい、俺が狙われてるじゃねえーか！》

《頑張レエ、主ヨ》

焦りを隠し切れずに上擦った声の俺に対して、シアーは腹立たしいと感じるぐらいの生返事を返してくる。

《頑張れって、おま……俺が動けないって知って》

狙いを定めた獲物との距離を十二分に詰めたエヴァは、突如として抜け殻の頭部を右手で鷲掴みにした。

「さあ……言い訳を聞こうか？」

エヴァは可愛らしく小首を傾げ、どす黒いオーラを周囲に撒き散らしている。

あのまま俺が片手で持ち上げられても不思議ではない、そう錯覚してしまうほど、エヴァの右腕に力が籠っているように見えた。

鷲掴みにされている自分の姿を見ているだけで、痛みは感じないけど痛かった。

今、元の身体に戻るべきなのか……それとも……。

「……む、痛くないのか？」

暫く残酷な笑みを咲かせて獲物の頭部を捕らえていたエヴァだったが、何の反応も示さずに甘んじて驚掴みにされている俺を不思議に思ったのだろう。

怪訝な表情を浮かべ、眉一つ動かない俺の抜け殻を覗き込んでいる。当然、しつかり頭部を驚掴みにしたまま。

「主八何モ感ジテナイゼ」

そんなエヴァの素朴な疑問に答えを提示するかのようになり、シアアが口を開く。

それを耳にしたエヴァは首を巡らしてシアアを見下ろし、何も言葉を発する事なく唇を固く結んでいる。

エヴァの沈黙は話を続けろという催促らしく、その要求に答えるようにシアアが再び口を開く。

「簡単ニ言エバ主八今、俺ノ身体ニ乗り移ッテイル状態ダ……俺ノ目ヤ耳ヲ通シテ今コノ状況ヲ見テ聞イテイル。ダカラ本体八何モ感ジチャイネエ〜シ、何モ聞コエチャイネエ〜」

一度そこで言葉を区切り、シアアは移動を開始する。

そして定位置である俺の膝上に戻り、相も変わらず右手で抜け殻の頭部を掴んだままのエヴァを見上げる。

「言ワバ“抜け殻”ツテヤツダ」

そう言って話を締め括ったシアーは突然、真上に飛び上がってエヴァの右腕に体当たりを打ち囃ます。

打ち囃ますと言っても、先程のように怨みを目一杯込めた力ではなく、エヴァの右手を軽く弾き飛ばすぐらいの力だったが。

「ダカラ、コウヤツテ誰カガ主ヲ護ラナクチャナラネエ……マ、コノ能力ヲ使ツテイル時点デ俺ガ主ヲ護ル事ハ滅多ニネエト思ウケドナ」

膝上に着地したシアーは心配しているかのように一度だけ俺の顔を見上げ、再びエヴァに視線を戻す。

「……成る程な。斥候能力……か」

エヴァは俯き加減になり、細い顎先を摩りながらポツリと呟いた。

そして、急に顔を上げたかと思えば底意地の悪い笑みを浮かべ、シアーから抜け殻へと視線を移す。

「なら今コイツに何をしても反抗しないって事だな？」

胸の前で両手をワシヤワシヤと動かして舌舐めずりをしたエヴァは、獲物を仕留める肉食獣のように少し身を屈めた。

身の毛が弥立つ危険を感じた俺は、即座に瞼を閉じて額から手を離す。

「待て待てま　　てッ!？」

抜け殻に戻り、慌ててエヴァを止めようと制止の声を上げた俺だったが、真っ先に襲い掛かってきたのはエヴァではなく、尋常ではない痛みだった。

霧に包まれていくように、視界が真っ白になっていく。

「おい、ど………た？」

誰かの声が微かに聞こえるが、耳鳴りが酷くて誰の声か分からない。

「　　ッ、　　?」

薄れていく意識の中で俺が最後に思った言葉は、

「どれだけ力を込めて頭を鷲掴みしてたんだよ」

だった。

「ん………」

車椅子が揺れ動く、微かな震動。

鼻を擽る、淡い潮風の匂い。

微かに聞こえる、海猫の鳴き声。

霧散していた意識が次第に雲集していく。

うつすらと瞼を開ければ、上空には一面の青空が広がっており、蒸し暑いと思えるぐらいの太陽の光が肌を刺すように燦々と降り注いでいる。

「ここは……？」

思わず自分の居場所が分からなくなり、首を左右に巡らせる。

今自分は塔のような場所の頂上に居るらしく、足元には魔法陣の五芒星が描かれている。

目前には細い橋のような物が真っ直ぐに伸びており、その先には椰の木などが生えた大きな広場のような物が見えた。

……先程まで俺は部屋の中に居た筈だ。

もしかして夢でも見ているのだろうか、自分の意識を疑問に思った、その瞬間。

「……………痛ッ」

ズキリと軋むような頭痛を感じ、額を手で押さえて少しだけ顔を歪める。

段々と事の顛末を思い出してきた。

確かエヴァに頭を鷲掴みにされて

「あ……目が覚めましたか？」

突然、誰も居なかった筈の背後から優しい調子の声が聞こえた。

緩慢な動作で身体を捻りながら、声のした方向を振り返る。

そこには翡翠色の艶やかな長髪を、潮風で靡かせている茶々丸が立っていた。

「本当はベッドで休んでいたかどうかと置いていたのですが、マスターが魔法球の中の方が魔力が充溢しているから治りが良いと……か、勝手な事をしてすみません」

俯き加減に視線を下の方に落とし、辛そうな表情で懺悔するかのように呟いた茶々丸は、俺に深々と頭を下げた。

何処かで見えた事があるとは思っていたのだが、どうやら此処は魔法球の中だったらしい。

「あ……いや、頭を上げてくれ」

目の前にある茶々丸の頭を優しく数回叩き、俺は頭を上げるように促した。

「……は、はい」

徐に頭を上げた茶々丸の表情は若干まだ強張ってはいたが、それでも先程よりかはマシになっていた。

「そつえば、エヴァやシアーは……？」

目が覚めてから疑問に思っていた事を茶々丸に訊ねると、先に来ている筈なのですが、と小首を傾げながら曖昧な返答が返ってきた。

ここに佇んでいても仕方がないという結論に至った俺達は、とりあえず広場へと向かう事になった。

塔の周囲を囲んでいる海からの潮風は、遮る物が無い為に渺々と吹き渡っている。

その風が俺の伸びに伸びた黒髪を巻き上げていく度に、若干の苛立ちを感じながらも前を進んでいる茶々丸の後に続く。

手摺りも防護柵も何もない橋の上を吹き抜けていく横殴りの風に、少し身を竦ませながら前へと進み続け、そして。

「……居ませんね」

広場に辿り着いた茶々丸の口から衝いて出たのは、そんな言葉だった。

茶々丸と同じように首を左右に巡らして、俺も辺りを見渡すがエヴァ達の姿は無かった。

「下……なのでしょわか？」

その場でクルリと転回し、茶々丸は階下へと続いている階段の方に視線を向ける。

その時、とあるアイデアが雷光のように閃いた俺は、小首を傾げている茶々丸に声を掛けた。

「茶々丸。少し待っててくれ」

返答は待たず、額に手を添え瞳を閉じる。

意識を集中させ、精神を統一させる。

……成功。

《おいシアー……お前、今どこに》

そんな小言のような言葉を口にしながら再び瞼を開いたのだが、網膜に映る光景に驚いてしまった俺は、思わず胃の中の物が逆流してそうになってしまった。

どうやらシアーは何処か部屋の中を尋常じゃない速さで走り回っているようで、目に映る景色が目まぐるしく動いている。

キヤタピラが地面を削り取るような音と共に、姿は見えないが何処からかエヴァの馬鹿笑いが聞こえる。

《何ダ、目ガ覚メタノカア？》

シアーは止まる素振りを一切見せず、どこか焦燥しているような声で返事を寄越す。

《うえ……い、今……… どのような状況だ？》

車酔いのような感覚に襲われた事で些か気分が悪くなりながらも、俺はシアーに状況を訊ねたのだが。

《悪イガ、手ガ離セル状況ジャネエ〜！》

お前には手が無いだろ、と冷静なツツコミを入れたくなるような返事をシアーが返してきた。

狂ってしまったのではないかと心配になるぐらいの、エヴァの馬鹿笑いが再び耳に届く。

その時。

「ケケケケケ……オオ、速イ速イ」

シアーに良く似ているが、少し聞こえ方の違う片言口調の音が頭上から聞こえた。

「俺ノ上ニ乗ルンジャネエ〜！」

シアーの怒号と同時にスピードが上がり、目が回しそうになるぐらいの早さで景色が動いていく。

さっきの片言口調は……もしかして。

《主ヨ、下二早く来テ命令シテクレ……オイ、俺八乗り物ジャ》

突然、ブツンと電話線が断線したかのように目の前が真っ暗になった。

恐らくだが、シアーが能力の使用を止めたのだろう。

下に居る事は分かったから良しとしよう、半ば諦観するよつに溜め息をつきながら再び瞼を開けたのだが。

「……………」

「……………」

何故か茶々丸の顔が目と鼻の先にあり、俺の頬つぺたが人差し指で突かれていた。

見てはいけない物を見てしまったかのような、気まずい雰囲気か二人を包む。

「な……な、何？」

額から手を退けるのも忘れて硬直していた俺は、頬つぺたが凹んでいる為に若干の喋り辛さを感じながらも、同じように硬直している茶々丸に声を掛ける。

すると見る見る内に茶々丸の表情が紅潮していき、頭からは湯気が上がり始めた。

「あ、あ　こ、これは声を掛けても反応なさらない木乃羽さんに悪戯心が生まれたといえますか何と言いますか……ぷにぷに頬つぺた気持ち良か　あわわわわ私は何を、すみませんすみませんッ！」

飛び退くようにして俺から距離を取った茶々丸は、上擦った声で捲し立てるように言葉を紡ぎ、頻りに頭を上げ下げしている。

「わ、分かったから……どうやらエヴァ達、下に居るみたいだぞ」
人に無防備な状態に晒すという意味を改めて噛み締めながらも、俺は話を変えようと苦笑いを浮かべつつ口を開いた。

「そ、そうですか……」

茶々丸は頬を赤く染めてはいたが、どうやら少しは落ち着いたようだった。

何と無く気まずい雰囲気のまま、茶々丸の横に並んで階段へと向かう。

そして、床を剝り貫くようにして造られた階段の前に立ち止まり、

どうして降りようかと思いを巡らしていたのだが。

ふわりと身体が宙に浮く感覚。

またか、と胸中で溜め息をつきながら、後ろを振り向く。

「……………茶々丸」

「はい、何でしょう？」

何か不都合な事でもありましたか、とでも言いたげな表情で茶々丸は小首を傾げている。

茶々丸の返事を聞いて、俺は再び深い溜め息をつくことになった。

その間にも、茶々丸は俺を車椅子ごと運びながら階段を下りていく。

「運んでもらっておきながら、こんな事を言うのはアレ何だけどさ……………お荷物になってるみたいで、嫌なんだよ」

「お荷物……………とは？」

茶々丸は俺の目を真っ直ぐに見つめ、言葉の意味を問い返してくる。

「俺さ……………昔は普通に歩けたんだよ」

その瞬間、ピタリと茶々丸の足が止まる。

「そう、だったのですか……………てつきり先天的な物だと私は……………」

尻窄まりに茶々丸の声が小さくなっていき、その表情には驚愕の色

がありありと窺えた。

「身体は弱かったけど昔は木乃香と一緒に走り回れた……けど今は車椅子が手放せない……認めたくない、でも認めなくちゃいけないだから……こつやつて事あるごとに誰かに助けてもらつとさ、何とも言えない複雑な気持ちなるんだ……昔は歩けたんだよ……ってな」

「……木乃羽さん」

「贅沢だよな……俺って。自分一人じゃ何にも出来ない癖に、助けてなんて借りたくないなんて言うんだからさ……」

茶々丸に言っても仕方のない事だとは頭では理解している。

しかし、一度口を衝いて出てしまった言葉達は……心に蓄積されていた苦悶の言葉達は止まる事を知らなかった。

それきり茶々丸は無言のまま、その場に立ち尽くしてしまい、失態を演じてしまったなと俺は胸中で自戒しながら自分の馬鹿さ加減に呆れ返っていた。

「悪いな、湿っぽい事を言ってしまった……忘れてく」

「……頼って下さい」

俺は空気を変えようと無理に明るい声で沈黙している茶々丸に声を掛けたのだが、その言葉は遮られてしまった。

「今、何て……?」

思わず、茶々丸に聞き返してしまう。

小さな声で呟かれた言葉は、何だったのかと。

「機械の私には難しい事は分かりません。ですが……人を頼る事は悪い事ではないと思います。ですから私を頼って下さい……その身体の苦しみを、心の痛みを、機械の私とでも分かち合えるように」
俯き加減だった面を上げて、俺の目を正面に見据えた茶々丸は毅然とした調子の声で答えた。

「迷惑でも何でもありません。私は……木乃羽さんの事が……大好きですから」

そう言ってニッコリと微笑み、再び茶々丸は思い出したかのように優しく階段を下り始める。

茶々丸の告白を聞いて、じんわりと心が温かくなっていく。

次いでに思いがけない言葉を聞いて、頬も真っ赤に染まっていった。

視線を逸らして頬を紅に染めていた俺を不思議に思っただろう。

もしかして体調が悪いのですか、と見当違いな事を茶々丸が聞いてきた為……俺が頬を染めた理由を教えてやると。

「あ……い、いえ私が言った大好きというのは深い意味はなく人として好きだという意味ででででで」

再び熱暴走を起こした茶々丸が、ジェットコースター顔負けの速さ

で階段を下りていく事になった。

いいから落ち着けと茶々丸に連呼しながら、俺は何故か笑いが止まらなかった。

先程まで小さな事で悩んでいた自分が馬鹿みたいだな、と。

茶々丸は速度を緩める事なく、長い階段を猛スピードで下りていく。

ふと気づけば。

ささくれのように突き刺っていた小さな心の刺達は、嘘のように消え失せていた。

第三十八話（後書き）

メンテナンス？何それ美味しry

次話ぐらいで説明しようと思うのですが、片言口調のアイツらの話し方は、違いが出るように若干ですが手を加えております。

……会話させてると、どっちがどっちだか分からなくなりそうですから（苦笑）

第三十九話（前書き）

すみません、更新が遅れてしまいました。

まさか携帯が『キラークイーン』されるとはry

では、どうぞ。

第三十九話

あれから何とか無事に車椅子ごと抱えられたまま、長々と続いていた螺旋階段を下り切る事に成功したのだが、下の階に到着した頃には二人とも疲労困憊になっていた。

訳の分からない眩きを漏らしながら猛スピードで俺を運んだ為、茶々丸は体力的に。

階段から転げ落ちないかと冷や冷やしていた為、俺は精神的に。

息を弾ませながら冷汗を拭っていた時、宙に浮いていた車椅子が降下し始めた。

そして、ようやく地に足……いや、車輪が着いた事に安堵した俺は、肩を落として溜め息をつきながら背後を振り向いた。

苦言の一つでも呈してやろうと思いつつ振り向けば、俺の後ろに立っていた茶々丸は頭から白い煙を出し、顔を真っ赤に紅潮させて荒い呼吸を繰り返している。

明らかに誰の目から見ても、熱暴走を起こしているように見えるだろう。

茶々丸は何やら小さな声で独り言を呟いており、どうやら“違う世界”へ旅立っているようだった。

……色々な意味での排熱作業が終わるまで、そっとしておいてやる事にする。

そんな茶々丸を尻目に前を向いた俺は、猛る心臓を落ち着ける為に深呼吸を繰り返しながら、改めて部屋の中を見回した。

白を基調とした広過ぎるとも思えるぐらいの大きな部屋。

部屋の真ん中には、一切の汚れが見当たらない純白の大きなソファーが置いてあり、そこには仰向けになって腹を抱え、笑い転げているエヴァの姿があった。

何故、あれ程までに大笑いしているのか、大体の察しはついている。

先程から視界の隅にチラチラと映ってはいたのだが、ちょこまかと部屋の中を走り回る鼠のように、床上を縦横無尽に高速で走行するシアアの姿が、エヴァのツボに入ったのだろう。

目では追い切れないほどの速さで走り回るシアアの上には、小さな人形が離れまいとして力強くシアアにしがみつき、気味の悪い笑声を上げている。

これもエヴァの笑いを助長させる理由の一つになっている筈である。

何とツッコミを入れたら良いのか分からずに、暫くの間そんな馬鹿げた光景を傍観していたのだが、どうやらシアアが俺の存在に気づいたようで、まるで虐められて家に逃げ帰り、親に助けを求める子供のように膝の上まで一直線に戻ってきた。

勿論、虐めっ子は寄生虫のようにシアアの天辺に付着したままではあるが。

「主ヨ、コイツヲ何トカシテクレエ」

定位置に帰ってきたシアーは矢庭にそう言って、懇願するように俺に上目遣いを送ってくる。

返答する前に、俺はシアーの天辺に付いている物体に視線を送った。翡翠色の髪と瞳、そして背中に蝙蝠のような黒翼を生やした人形。

その手には身の丈より大きな大剣が握られており、シアーに跨がったその姿は少し奇抜なスラームナイトに見えなくもな……いや何でもない。

焦点の定まらない瞳でシアーと同じように俺を見上げている人形の名前は最初から分かつてはいるのだが、取り敢えず目前の二体は無視し、未だにソファアの上で豪快な笑い声を上げているエヴァに視線を送る。

「エヴァ……この人形は？」

エヴァは俺の声にピクリと反応を示し、瞳の端に溜まった涙を拭いながら、のっそりと起き上がった。

「来ていたのか……ああ、そいつの名前はチャチャゼロ。私と長年を共にしてきた相棒みたいな奴だ」

口元に若干の笑みを浮かべたまま、エヴァは俺の質問に返答してくれた。

踏ん反り返ってソファアに座っているエヴァから、自らの膝上へと

視線を戻す。

「ケケケケ……御主人が言ッテタ“才気二入り”ッテノハ、才前ノ事力」

表情を少しも変える事なく言い切ったチャチャゼロに対して、エヴァが頬を赤らめて何やら反駁の声を上げているが無視しておく。

「シアーから降りてやってくれないか？」

俺はチャチャゼロにそう言っつて、その小さな頭をワシヤワシヤと撫でてやる。

勿論、『クレイジー・D』を込めるのを忘れずに。

「ククク、そいつは中々の頑固者だから手懐けるのは　な、に……」

素直に言っつ事なんて聞かない、そうエヴァは思っていたのだろう。

だが現実にチャチャゼロは「シ、仕方ネエナ」と呟いて、どうやら身体を毛糸のような物で括り付けられていたらしく、ソレを自らの手で解いてシアーから降りたのである。

最初はニヤニヤと底意地の悪い笑みを浮かべていたエヴァだったが、長年付き合ってきた相棒の豹変っぷりに驚いたのか、目を丸くして口をポカンと開いていた。

しかし、暫くすると剣呑な面持ちになり、エヴァは鋭い視線を俺に送ってくる。

「お前……能力を使ったな？」

問い詰めるような調子のエヴァの言葉を聞いて、俺はドキリと心臓が跳ね上がった。

「な……何で分かったんだ？」

「チャチャゼロは魔力供給が無ければ動けない……魔法球の中だから魔力供給を行えるが私は悪ふざけで魔力供給をしていなかった。答えは言わずもがなだ……もしかすると、お前の能力は魔力まで元に戻しているのか……いや、しかし」

最初は詰問の色を帯びていたのだが、エヴァの声は尻窄まりに小さくなっていき、最終的には俺の存在を忘れて思考に耽ってしまったのか、胸の前で腕を組んで独り言を呟いている。

「……シアーと仲良くしてやってくれ」

また鷲掴みされるのではないかと不安になっていた俺は、ホッと安堵の溜め息をつきながら再びチャチャゼロの頭を優しく撫でてやる。

……今、シアーには自由に動けと命令してあるので行動を制限する枷は一切無い。

その気になれば、爆発してチャチャゼロを木っ端微塵に吹っ飛ばす事も出来た筈である。

しかしソレをしなかったという事はシアーには、ある程度の良識は有ると判断していいのだろうか……？

「ケツ……何ダ力調子が狂ウゼ」

一瞬だけ表情が緩んだような気がしたのだが、チャチャゼロは大剣を持っていない空手の方で俺の手を払い除け、トテトテと覚束ない足取りで主の元へと帰っていく。

エヴァは自分の足元に戻ってきたチャチャゼロの胴体をガツシリと掴み、無造作に持ち上げた。

そして、眉間に皺を寄せながらチャチャゼロの身体を凝視している。チャチャゼロは「離せ御主人」と暴れているが、エヴァに離そうとする気配は一切無かった。

寧ろ、暴れば暴れるほど力が込められていくようで、暫くはジタバタと抵抗していたチャチャゼロだったが、その内に手足を力無くぶら下げて何も喋らなくなってしまった。

「魔力が切れたか……チャチャゼロ、後で魔力供給してやるから大人しくしている。さて、お前の能力は後々に研究していくとしてだ、さっきは済まなかった……まさか気絶してしまうとはな」

抱き上げていたチャチャゼロを自らが座っているソファアの上に置くと、罰が悪そうに頭を掻きながら謝罪の言葉を述べたエヴァは、徐に“とある物”を取り出した。

「話は変わるが、これを渡しておこう……練習用の杖だ」

ソファアから立ち上がり、歩み寄ってきたエヴァから細い棒の先に

星が付いてる玩具のような杖を渡された。

「何事も基本から……この魔法は基礎中の基礎だ、まずは見本を見せてやる」

もう一本、棒の先に三日月が付いた練習用の杖を取り出すと、エヴァは目を離すなよとでも言いたげに三日月を指差し、ニヤリと笑ってみせた。

「……プラクテ・ビギ・ナル、火よ灯れ」

エヴァが呪文を唱えると、ただの玩具に見えていた棒の先からポツと火が灯り、小さな焰を揺らめかして淡い光を放っている。

「この魔法球の中は魔力が充溢している、言わば気化したガソリンが部屋の中に拡散している状態だ。そして……魔法は火種」

後は言わなくても分かるなどでも言いたげな視線を送り、フツと息を吹き掛けて火を消したエヴァは、微笑を浮かべてソファアに座り直す。

「本当なら初心者魔法とは言えど、習得するのに時間が掛かるんだが……お前の保有魔力が莫大な量だという事に加えて、得意属性が炎だからな。案外、簡単に出来るかもしれないぞ？」

エヴァの言葉を耳に入れながら、俺は改めて手渡された初心者用の杖を凝視した。

本当に玩具にしか見えないが……。

コホンと咳払いをしてから杖を持つ右腕を前に突き出し、意識を指先に集中させる。

一度だけ深呼吸してから……そして。

「プラクテ・ビギ・ナル、火よ灯れ！」

一言一句間違える事なく完璧に詠唱してみせたのだが、結果として火は灯らず、空振りに終わってしまった。

……嫌な空気が辺りを包んでいく。

俺は気恥ずかしくなり、再び唱えてみるが失敗。

もう一度唱えてみるが、失敗。

駄目元で再び唱えるが、失敗。

エヴァは無然としてしまったのか深々と溜め息を吐き、ソファーから立ち上がった。

「まあ、最初から上手くいくとは思っていないさ……鍛練に励め」

肩を少し竦めてみせたエヴァは、魔力供給が途絶えているチャチャゼロを掴み上げると、頭の上に乗せて此方に歩み寄ってくる。

そして、今までの一連の光景を不思議そうに見上げていたシアアを指差して。

「コイツを借りてくぞ、一度コイツの実力を知っておきたいからな」

畏怖まで感じさせる肉食動物のような笑みを浮かべる。

……そういえば血祭りにあげるとか言っていたな。

エヴァは不死だから恐らく大丈夫だとは思うが、ある程度の枷は付けておくか。

「……頼むから無茶はしないでくれよ。シアー、命令変更……エヴァと遊んでこい」

シアーの頭を優しく撫でながら、新しい命令を伝える。

“自由に動け”から“遊んでこい”に命令を変更した為、ある程度の加減はしてくれるとは思うが……少し心配である。

が、シアーの実力を知るためには誰かと戦闘させる以外に方法は無いだろう……枷が付いているから本気のデータは取れないと思うが、それに加えて、どの程度“俺の左手”に敵の攻撃が反映されるのか、熟知しておく必要がある。

…不死であるエヴァだからこそ渋々承諾したが、本当はこんな事したくは無いけど。

「了解シタ」

二つ返事で命令を快諾したシアーは膝上から地面へと降り立ち、早く動けとでも言いたげに、エヴァの踵に何度も軽い体当たりを打ち噛ましている。

「……そんな心配そんな表情をするな、私は不死の吸血鬼だぞ。茶々丸は置いておくから分からない事が有れば質問しろ……じゃあな」
俺の表情から心情を読み取ったのか、半ば呆れたように微笑を浮かべたエヴァは、ひらひらと手を振ってから俺に背を向けて、階段に向かつて歩き始める。

ソレは死亡フラグだぞとツツコミを入れたかったが、俺は何も言えずにエヴァの背中を見送った。

部屋の空気の大半を掌握していた三人？が居なくなつた事により、静かになつた部屋に取り残された俺は再び呪文を唱えてみるが、失敗。

何がいけないのだろうか、もしかして魔法が唱えられない体質とかでは無いだろうかと、一人で頭を悩ませていると。

「上手くいきませんね」

突然、背後から茶々丸に声を掛けられ、俺は上擦つた驚きの声を上げてしまう。

「ビックリしたぞ……茶々丸」

その場でクルリと転回し、俺は普段通りの表情に戻つた茶々丸を見上げた。

「驚いた木乃羽さんも……い、いえ……すみません。あの……木乃羽さん、一度目を瞑ってみて下さい」

「目を？」

ぺこりと頭を下げた後に、茶々丸にそう言われた俺は思わず首を傾げて訊ね返した。

「はい、そして頭の中で火をイメージを思い浮かべて下さい」

成る程な、と心の中で納得する。

茶々丸の的確な助言を聞いた俺は迷いなく目を瞑り、頭の中で燃え盛る炎を想像する。

深呼吸を行い、意識を集中させる。

そして。

「プラクテ・ビギ・ナル、火よ灯れ」

落ち着いた小さな声で、呪文を唱える。

すると、何かが破裂したような爆発音が辺りに響き渡った。

そして、やにわに熱風が顔に襲い掛かってきたので、俺は慌てて瞼を開いて杖の先を凝視したのだが、何故か火は灯っていないかった。

何があつたのだろうかと首を傾げながら傍に立っていた茶々丸の顔を見上げると、口をポカンと開けたまま表情を引き攣らせている。

「……こ、今度は目を開けたまま唱えてみて下さい」

驚いた表情のままの茶々丸にそう告げられ、俺は怪訝に思いながらも頭の中で炎をイメージし、再び呪文を唱えたのだが。

驚愕する事になった。

目の前の光景を目の当たりにした俺は、思わず顔を後ろにのけ反らせて目を瞑ってしまう。

何故なら目の前で拳大の炎が杖の先から、爆音と共に放出されたからである。

何かが焼けるような焦げ臭い匂いが鼻につき始める。

恐る恐る瞼を開けると、何事も無かったかのように杖の先には火が灯っていないかった。

……どうやら俺がエヴァから教わった基礎魔法は、攻撃魔法だったようだ。

無意識の内に助けを求めるような視線を茶々丸に送ったが、俺と同じように茶々丸も言葉を失っているようだった。

「……もしかして木乃羽さん、過剰なイメージを思い浮かべていませんか？」

凶星だった。

大きい方が良さだろうと思い、轟々と燃え盛る炎を想像していたのだが……まさかソレが仇になるとは。

頭の中を見透かしたような茶々丸の言葉にギクリとした俺は思わず目を伏せて、わざとらしい咳払いを行った。

「小さな火を想像するだけでいいんです」

茶々丸の諷めるような調子の発言に対して、ただただ頭を下げる事しか俺には出来なかった。

少し落ち着いた所で今度は蠟燭に灯る小さな炎を想像し、魔法を唱えてみる。

すると今度はバツチリ成功したようで、杖の先には火が灯り続けていたのだが、少し問題があった。

火の勢いが尋常ではなかったのである。

エヴァが見本として燈した炎は、息を吹き掛けてしまえば消えてしまっぐらいに脆弱だったが……。

今、目前で杖の先に灯った炎はガスバーナーのように勢いよく燃え続けている。

ジェット噴射のように燃え盛る炎の音を聞きながら、再び茶々丸を見上げたのだが疑惑の視線を返されてしまった。

「いや……本当に小さな炎を想像してるからな？」

「魔力保有量と得意属性が関係しているのでしょうか……これは凄いですね」

慌てて弁明した俺を見下ろしながら、感心したように茶々丸は何度も頷いている。

感心しないでいいから燃え盛る炎の止め方を教えてくれ、と叫ぼうとした……その時だった。

雷鳴のように轟いた爆発音と共に、地震が発生したのかと錯覚するほど床がグラグラと揺れたのだ。

パラパラと天井から白い破片が落ちてくる。

始まったか、と胸中で呟きながら俺は髪の毛に付いた破片を払い除けた。

無事を確認する為、仮契約カードを額に当てて念話してみたのだが、エヴァからの返答は無かった。

まさか……本気でシアーと殺し合いしていないよな？

その時、傍に控えるように立っていた茶々丸と目が合った。

すると茶々丸は何も言わずに頷くと俺を車椅子から抱き上げて、階段に向かって走り出した。

まさか“お嬢様だっこ”されるとは思いもしていなかったが、今回ばかりは仕方ないと諦める事にする。

茶々丸は俺を抱き抱えたまま、疾風の如く階段を駆け上がっていく。エヴァが駄目ならシアーだと思い、目を瞑って同調を開始したのだが……。

上手く意識を集中できない為なのか、シアーが俺との同調を拒否しているのか、はたまた同調できる状態ではないのか分からないが、シアーと同調する事が出来なかった。

今現在も爆音と地響きが続いており、恐らくエヴァが魔法で反撃しているのだろう、ガラスが割れるような音も耳に届く。

……若干だが左手が冷たくなってきているような気がした為、自らの左手を凝視してみれば、霜のような物が付着し始めていた。

慌ててソレを払い除ける……が、直ぐに新しい霜が付着していき、左手だけが冷凍庫に突っ込まれているような感覚に襲われた。

骨が軋み始め、左手の感覚が無くなっていく。

幸い、神経が麻痺しているのか痛みは感じなかったが、そんな悠長な事を考えていられる場合ではないと本能が告げている。

無駄だとは思いながらも左手を温める為に摩擦を続けていると、ようやく頂上が見えてきた。

しかし、頂上まであと数段という所で何故か茶々丸が立ち止まってしまった。

その場で立ち止まった茶々丸は呆然とした表情で、何かを視線に捉

え続けている。

何事かと思いながら茶々丸の視線の先を追ってみると、そこに転がっていた物は。

「姉……さん」

手足が千切れ、バラバラになってしまったチャチャゼロの姿があった。

第三十九話（後書き）

どうしてこうなった……（汗）

焦りながら執筆しましたので、誤字脱字が多いかもしれません。

第四十話（前書き）

『クレイジー・D』の能力を持つこの両手に……直せぬものなど、
あんまりない！

はい……すみません。

では短いですが……とじつぞ。

第四十話

「チャチャゼロッ!？」

見るも無惨な姿になったチャチャゼロが瞼に飛び込んできた瞬間に、俺は知らず知らずの内に甲高い声で叫んでいた。

その声が満身創痍であるチャチャゼロの耳に届いたようで、雲一つ無い青空を見上げているかのように仰向けになっていた身体を緩々と起こす。

そして、チャチャゼロは立ち尽くしている俺達を視界に捉えると、四肢の内でも唯一無事だった大剣を握り締めている右手を真上に掲げ、弱々しい声で口を開いた。

「ヨウ、アア……ドジッタゼ」

自らを嘲るように呟いたチャチャゼロは最後の力を失ってしまったのか、再びドサリと地面に倒れ込んだ。

その拍子に握られていた大剣が手から離れ、カラカラと乾いた金属音を立てながら床を滑っていった。

「チツ、油断シタ……ゼ」

チャチャゼロの悔恨の言葉を聞きながら改めて周囲に目を向けると、バラバラになってはいるが吹き飛んだ手足だと思われる欠片が散らばっている。

まだ、間に合うかもしれない。

そう思った次の瞬間、呆然と立ち尽くしたまま我を失っている茶々丸の両肩を俺は力強く揺さ振っていた。

茶々丸の頭がガクガクと前後に揺れるが、気にせず力を込め続ける

「茶々丸、早くッ！」

茶々丸の耳元で怒鳴り声を出してやると漸く我を取り戻したのか、身震いするかのようにプルプルとかぶりを振った。

そして、一度頷いてから茶々丸は頂上まで残り少なかった階段を一気に飛び込して、重傷を負っている姉の元へと駆け寄った。

戦争地帯に来てしまったのかと錯覚する程の爆音と地響きを完全に無視し、激しい戦闘の傷跡なのか、石造りの床に出来た大きな窪みを飛び越え、壊れたようにケラケラと笑声を上げているチャチャゼ口の元に辿り着く。

その場で直ぐ床に降ろしてもらい、俺をボロボロになったチャチャゼ口の身体を拾い上げた。

「待ってる、直ぐに治してやる」

か弱い声で乾いた笑い声を漏らすチャチャゼ口に語りかけ、俺は直ぐに『クレイジー・D』の能力を込めた。

「オ……オオ、スゲエナ」

チャチャゼロから感嘆の声が漏れる。

すると床に散らばっていた細かな欠片たちが修復されていき、元の身体へと集まっっていく。

淡い光に包まれて、ジグソーパズルのように小さなパーツが嵌め込まれていくチャチャゼロを膝の上に置いた俺は、視線を外して広場の真ん中で戦闘を続けているエヴァ達の方を向く。

恐らくシアーに対して接近戦では分が悪いと判断したのだろう。

今現在エヴァは黒い翼を広げて宙を飛び、空中まで突進及び爆発を仕掛けてくるシアーの攻撃を間一髪の所で避け続け、言葉を紡いでいる。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック、氷の精霊17頭。集い来りて切り裂け。魔法の射手・連弾・氷の17矢！」

エヴァの流暢な詠唱によって生み出された鋭利な氷柱は、攻撃を回避されて床に降り立ったシアーへと容赦なく降り注いだ。

が、全弾命中した筈のシアー自体に傷付いた様子は一切なく、まずはパワフルになってエヴァを目掛けて突っ込んでいく。

その攻撃を身を翻して回避し、エヴァは再び詠唱を始める。

……シアーには、傷付いた様子は無い。

しかし、残念ながら本体である俺の左手は、凍り付いたように動かなくなってきた。

寒さのせいか、身体の震えが止まらない。

このままではマズイ事になると本能が告げている。

「アリガトヨ……ジャ、行ッテクルゼ」

その時、不意に声を掛けられた。

膝上に視線を戻せば元通りの姿に戻ったチャチャゼロが立っており、ピヨンと勢いよく膝の上から飛び降り、近くに落ちていた大剣を拾い上げて地獄絵図と化している戦場へ赴こうとする。

「チャチャゼロ、待っ」

慌てて捕まえようと手を伸ばしたのだが、すんでのところで避けられてしまい、チャチャゼロは嬉々とした笑い声を上げながら走り出してしまった。

一刻も早く戦闘を中止させなくては。

……俺がヤバい事になる。

そう思った俺は後ろに立っていた茶々丸の方を振り向いて、また運んでもらおうと口を開きかけた。その時だった。

「常夜の氷雪、闇の吹雪ッ！」

背後でエヴァの力強い声が聞こえたかと思えば、轟音と共に地面が削れるような破壊音が耳に届く。

ヤバいと肌で感じ取った時には、もう遅かった。

「あ
」

糸が切れたように全身に力が入らなくなり、ぐらりと身体が横に傾く。

茶々丸の驚いた表情が目映る。

耳鳴りが頭の中でガンガンと鳴り響き、視野が白く狭まっていく。

床に倒れ込む前に、茶々丸が身体を抱き留めてくれた。

「……木乃羽さん、顔色が
」

茶々丸の心配そうな声が遠くに聞こえる。

矢庭に襲い掛かってきた凍て付くような寒気が、全身の自由を奪っていく。

「原因不明の体温及び脈拍の低下……木乃羽さん、聞こえていますか!？」

奥歯が震えてカチカチと音を鳴らしている。

何とかシアーをカードに戻そうと口を開いたが、まるで喉奥に何かが詰まっているかのように声が出なかった。

「マスター!木乃羽さんの様子がおかしいです!」

「何だと？久しぶりに血沸き肉踊る好敵手だったんだが……分かった、直ぐに終わらせる」

茶々丸の焦燥感に満ちた言葉に対し、エヴァは冷えきった冷静な声で返答する。

今も背後で爆発音と破壊音が鳴り響いているが、俺は茶々丸の胸に抱かれながら意識を保っているのがやっとだった。

「今まで溜め込んでいた分……そして木乃羽を吸血した時の魔力まで使ってやる……チャチャゼロ、少しの間でいいから壁になっていろ！」

「チツ、御主人モ人形使イガ悪イゼ。オレニ“人形柱”ニナレツテノ力？」

さも愉しそうに二人は口の端を吊り上げて笑い、エヴァは錬成された魔法を放ち続け、チャチャゼロは襲い掛かってくるシアーに対して大剣を振るう。

「そうだ茶々丸、この場から離脱しろ……万が一でも巻き込みたくないからな」

いつになく固い声色で答えたエヴァに、茶々丸は何かを言いたそうな表情を浮かべていたが、自らの主が本気なのを感じ取ったらしい。

「非常に危険です、離脱しますので動かないで下さい」

ジェット音と同時に重力に逆らう感覚。

どうやら茶々丸に抱き抱えられたまま、俺は空中に浮いているようだった。

「どうやらお前の主の調子が悪いらしい、悪いが終わりにさせてもらうぞ……リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

エヴァは心底残念だとも言いたげに嘆息し、氷よりも冷たい声で詠唱を開始する。

宙に浮かんで必殺の呪文を唱えるエヴァとは対照的に、広場の床ではシアーとチャチャゼロが激しい戦闘を繰り広げていた。

チャチャゼロはシアーの突進を大剣で受け止め、そのまま薙ぎ払おうとするが、それよりも先にシアーが爆発を起こした。

まるで人間がダンプカーに跳ね飛ばされたように、チャチャゼロは勢いよく後ろに吹っ飛ぶ。

しかし、大剣を盾にしてシアーの爆発を防ぎきっていたようで、チャチャゼロは空中で身体を捻って地面に着地し、大剣を肩に担いで挑発するような言葉を吐く。

「アノ時八油断シタガ、種ガ分カツテリヤオ前ナンテ怖カネエヨ……マ、ソレヲ受け続けレルカドウカ八話ガ別ダケドナ」

再び猪突猛進してくるシアーに対して、チャチャゼロは大剣を構え直して笑い声を上げる。

「御主人……マダカ？」

再びシアアの突進を受け止めながら、チャチャゼロはエヴァに訊ねた。

巻き戻したテープを見ているかのように、先程と同じ光景が何度も繰り返り広げられている。

「待て、もう少しだ……契約に従い我に従え氷の女王。来れ、とこしえのやみ」

エヴァは不敵な笑みを浮かべてから、片手を真上に掲げる。

その瞬間、チャチャゼロはシアアから脱兎の如く距離を取り、小さな翼で空へと脱出する。

そして。

「フン、これで終わりだ……えいえんのひょうが！」

……言わずもがな、辛うじて保っていた俺の意識は完全に断絶された。

第四十話（後書き）

エヴァさん、ソレ逆効果です……。

さて、次回でようやく第三十話から続いていた“とある一日”が終了すると思います。

……長えよ（汗）

ですが安心して下さい、もうそろそろキンクリを敢行すry

こんなマイペースな小説ですが、読んで下さる皆様方に感謝を……。

第四十一話（前書き）

え、皆様に謝罪しなくてはいけないのですが……前話で“とある一日”がようやく終わると言いましたが……終わりませんでした（汗）

あと一話だけ……あと一話だけ作者に猶予をr y

では、今回は少々長めですが……どうぞ。

第四十一話

霧散していた意識を確固たる物へと変化させて再び瞼を開いた時、俺は少々趣味の悪いベッドに寝かされていた。

ベッドの上には所狭しと奇抜な人形が置かれており、枕や布団にはレースやフリル、リボン等の装飾が施されていて、世間ではゴスロリと称される物なのだろう。

胸に抱いていた兎の人形を横に退け、部屋の天井にぶら下がったシヤンデリアが放つ目映い光に瞳を瞬せながら、俺は徐に左手を目の前で持つてきて状態を確認した。

手首から指の先まで丁寧に包帯が巻かれており、どうやら薬品が散布されているのか消毒液のような独特な匂いがする。

恐る恐る五本の指を動かしてみる。

頼むから動いてくれ、と念じながら。

幸い、包帯を巻かれている為か若干の違和感は感じたが、指は問題なく動いてくれた。

ふう、と安堵の溜め息をつきながら柔らかな掛け布団の上に左腕を落とす。

再び意識が覚醒した時には手首から先が無くなっている可能性も視野に入れていたのだが、どうやら杞憂に終わったらしい。

瞼を閉じて、先程までの記憶を掘り返す。

あの後……どうなったのだろうか？

思い返せば、シアーに命令を与えたままなので、もしかすると今現在も戦闘を続けているかもしれない。

善は急げと額に手を添えて同調を開始しようとした、その時。

「……ひゃうツ!？」

何の前触れもなく下腹部の辺りで何かが蠢いた為、甲高い声を上げて同調を中止する事になった。

もぞもぞと布団を掻き分けるようにして胸の辺りまで昇ってきた異物に恐怖を感じながらも、勢いよく掛け布団を捲り上げてみると。

「起キタカ、主ヨ」

シアーが平然とした顔を浮かべて布団の下に居た。

余りにも腹が立ったのでデコピンを一発食らわしてやったのだが、シアーは何の反応も示さず、反対に俺の方が痛いという無様な結果に終わった。

息を吹き掛けたり手をパタパタと振り、段々と指の痛みが引いてきた所で俺はシアーにエヴァ達と遊んでいたのではと訊ねた。

するとシアーはケロリとした表情で今は主を護る遊びをしている、

と素っ気なく返答されてしまった。

どうにも腑に落ちなかったが無理矢理自分を納得させ、あ後の経緯を訊く為に口を開きかけた時だった。

ガチャリとドアの開く音が聞こえ、丸盆を手にした茶々丸が部屋に入ってきた。

「木乃羽さん、目が覚めたのですか……」

茶々丸は良かった、と安堵の表情を浮かべて吐息を漏らしながら俺に歩み寄り、枕元にあった背もたれの無い丸椅子に腰掛ける。

脈拍を計っているのだろう、当然スツと手を伸ばして俺の首に手を添えた茶々丸は、暫くして小さく頷いたかと思えば、ニツコリと笑って首から手を離す。

「脈拍、体温、共に異常無し…… オールグリーンです」

「悪いな、心配かけて……ん、それは？」

茶々丸が手にしていた丸盆の上には、キチンと折り畳んであるタオルが一つ乗っていた。

「あ……こ、これは……」

茶々丸は俺から目を逸らして言い淀み、顔を赤らめて俯いてしまった。

そんな様子のおかしい茶々丸を怪訝に思いながら、改めて横になっ

ている自分の身体を見下ろせば俺は制服を着ておらず、黒色のネグリジェのような物を着ているではないか。

ピキリ、と何かが壊れる音と共に思考が停止する。

「か、身体を拭こうと思いましたが……」

茶々丸は俯いてタオルを握り締めながら、モジモジと膝を動かしている。

「いつの間に俺を着替えさせたんだ？」

俺は自失状態になりながらも何とか口を開いて茶々丸に訊ねると、非常に汗をかいていましたので、と至極真つ当な理由を述べて茶々丸は頬を紅潮させている。

「で……俺の身体を拭こうとタオルを持ってきたって訳か」

額に手を当てて溜め息をつきながら、俺はかぶりを振った。

恥ずかしい、の一言に尽きる。

ただでさえ着替えさせられたというだけで恥ずかしいのに、身体を拭かれるなんて恥ずかしさで悶死してしまう、そんな事を考えていた時。

「二度アル事八三度無カッタ訳力」

と聞き捨てならない言葉をシアーが漏らしたのである。

そのシアアの眩きと同時に茶々丸が咳込みながら、俺から顔を逸らす。

「……………どういう意味か説明しろ、命令だ……………シアア」

胸の谷間に挟まっていたシアアを鷲掴みにして拘束し、俺は口調を強めて問い質す。

言葉通りの意味で茶々丸は今までに二回、俺の身体を拭いているという旨を聞いた俺は、そんな凶行を止めなかった罰としてシアアをその辺に放り投げ、今度は主犯であろう茶々丸を睨みつけた。

「命令だ、茶々丸……………今の話は本当かどうか答える」

俺が低い声で非難の意も込めて詰問すると、茶々丸は子供のように無言のまま頷いた。

それを見た瞬間に身体が火照ったように熱を持ち始め、居たたまれなくなった俺は布団を頭の上まで被って現実から逃避した。

身体を拭かれた……………？

茶々丸に……………？

「主ヨ、ドウシタ？」

また布団に潜り込んで胸の辺りまで昇ってきたシアアを、俺は掴んで無造作に放り投げた。

「せ、清潔に保とうと思ひまして……………ま、丸二日も眠ったままでしたから」

布団の外から茶々丸の申し訳なさそうな声が聞こえる。

聞く耳は持たないといった様子で俺は布団を被ったまま、茶々丸に背を向けたのだが、何かが頭の中で引つ掛かった。

茶々丸は今何と言っただろうか。

清潔に、いや違う……その後だ。

丸二日……丸二日、丸二日……？

「丸二日ア！？」

俺は布団を蹴飛ばし跳ね上がるように飛び起きて、声を荒げて茶々丸の方を見た。

突拍子もない俺の行動に対し、ビクリと肩を震わせて茶々丸は驚いていたが暫くして怖ず怖ずと首を縦に振った。

「丸二日と言っても魔法球の中での丸二日ですから、現実世界では二時間しか経っていませんが……」

俺の様子を上目遣いで窺いながら、そう口を開いた茶々丸は部屋に飾られていた壁掛け時計の方を見たので、俺も視線を追う。

時計が示している時間は、七時過ぎ。

……学校が終わったのが三時過ぎで、エヴァの家までの移動で四時魔法などの説明があり、最終的に魔法球の中に入ったのが五時過ぎ

だったので、辻褄は合っている。

「もう暗くなってきましたので木乃香さんに一度御連絡をしておこうと思ひまして……魔法球の外に出て、今お電話させていただいた所です」

「……………木乃香、怒ってた？」

俯き加減で呟いた茶々丸に、俺は恐る恐る訊ねる。

今の俺は、それだけが気掛かりだった。

もし怒っていたのなら、俺が迎える事になる運命は 。

すると茶々丸は怪訝そうな面持ちで小首を傾げ、いいえと返答してくれた。

ホツと安堵の溜め息を俺がついていると、そういえば、と茶々丸が手を打ち鳴らして口を開く。

「電話を切る前に『うーちゃんが帰ってくるの何時になるか楽しみにしとくわ、アハハハハハハハ』とケラケラ笑いながら仰っていましたか……どうしました、木乃羽さん？」

茶々丸は俺の顔を見つめながら不安そうにしているが、俺に返答する力は残されていなかった。

これ以上ない脱力感に襲われる。

……………鬱だ。

俺は身体から力を抜いてドサリと枕に倒れ込む。

その様子を見た茶々丸が慌てふためいているみたいだが、俺は再び布団を被って現実逃避を開始。

「ま、マスター！木乃羽さんが」

焦燥の声を上げ、バタバタと足音を鳴らして茶々丸が部屋から出ていった事で、部屋の中は静けさを取り戻す。

また話がややこしくなると溜め息をつきながら、俺は懲りずに潜り込んできたシアアを布団の外に放り投げた。

それからというものの、慌てふためきながら部屋に入ってきた茶々丸とエヴァを落ち着かせるのに、かなりの時間を要する事になった。

落ち着いた所でエヴァが魔法球の中での事に対して謝罪の言葉を述べながら、何があったのか説明を求めてきたので、俺は二人にシアアの性質を説明する事になり。

「……という訳だ」

シアアの説明を終えると、驚きの色を浮かべたエヴァと茶々丸が顔を見合わせた。

「……では、コイツの受けたダメージを木乃羽が肩代わりしているという事か？」

ベッドの端に座った俺の膝上に居るシアアを指差し、エヴァが訊ねてくる。

今現在シアアには話をややこしくさせない為、可哀相だが『黙っている』と命令している。

「惜しいな、そうじゃなくてシアアは俺の身体の一部みたいな物なんだ……だからシアアが攻撃を喰らえば、俺に反映される」

だからこそ『ザ・ワールド』中でも動けるんだがなと胸中で呟いて、膝上のシアアを撫でながら俺が返答すると、突然エヴァが金切り声上げて肩を揺すってきた。

「どうして教えてくれなかったッ！？お前は丸二日も昏睡状態だったんだぞ！」

殴られるのではないかと思うぐらいの勢いで声を荒げるエヴァに、俺は苦笑いを浮かべて答える。

「悪い、俺自身が左手にどれぐらい反映されるか知る必要があったんだ……それに教えてしまったらエヴァはシアアに魔法を使ってく

れなかつただろ？」

飄げた調子で肩を竦めた俺に対して、エヴァは黙して何も答えない。ただ逃がさないように両肩を掴んだまま、俺の瞳を真っ直ぐに見据えてくる。

「今回の事は俺が悪かった……丸二日も寝込む事にはなつたが、まあ大事には至らなかつたし、エヴァが気に病む必要は」

言葉が中断される。

その瞬間、何が起きたのか理解出来ず、パンと乾いた音が耳朶に響き渡つた。

エヴァの背後に佇んでいた茶々丸が無言で歩み寄ってきて、俺の顔を叩いたのだ。

呆然と叩かれた頬を押さえながら、俺は柳眉を逆立てている茶々丸を見上げる。

「どれだけ……どれだけマスターが心配したと思っっているんですかッ！それを貴女はッ」

「止せッ、茶々丸！」

珍しく感情を顕わにして非難の声を上げる茶々丸を、エヴァが大声で制する。

「……ッ、すみません……紅茶を……紅茶を汲んできます」

ビクリと肩を竦めた茶々丸は虚ろな瞳で呟いて、重い足取りで部屋を出ていった。

「……一番心配していたのは茶々丸の方だ、私に謝る必要は無い。だがな、茶々丸には謝っておけ……いいな」

茶々丸が部屋を出ていった後、諭すように呟いたエヴァに俺は黙って首を縦に振った。

「それと、お前は自分の身体を大切にしろ……ある程度は緩和されていただろうが、『えいえんのひょうが』を左手だけとはいえ、その身で受けたんだ。神経が擦り切れて使い物にならなくなってもおかしくは無かった」

エヴァは昏い瞳で淡々と語っていくのを、俺は黙って聞いていた。

「それに、お前を睡眠も食事も取らずに看病し続けたのは茶々丸だ。私は機械だから必要ありません、何て言っただけ……馬鹿だよアイツは」

フツと微笑を浮かべ、エヴァは茶々丸が出ていった部屋の入口を一瞥する。

「お前にとって二日間は一瞬だったかもしれないが、私達にとっては永遠のように感じられた……目を覚まさない可能性も有ったのだからな」

エヴァは俺に視線を戻し、眉根に皺を寄せてそう言った。

……エヴァの一つ一つの言葉が心に突き刺さる。

先程までヘラヘラしていた過去の自分を、思い切り殴り飛ばしてやりたい。

「お前と私は最近出会ったばかりだ。当然、茶々丸とお前も……だがな、私は家族のように近衛木乃羽の事を思っているし、茶々丸も同じだろう」

エヴァは神妙な顔つきに戻り、優しい声で俺に語りかけてくる。

「知っているだろうが、私は長い間……麻帆良学園中等部に通い続けている。卒業して再び入学の繰り返し。封印の影響で記憶が操作されている為か、誰も私を不思議に思わないし同じクラスだった人間でさえ私の事を忘れてしまう」

過去を思い返すように虚空を見上げたエヴァは、俺の頭にポンと手を乗せた。

「最近になって茶々丸という従者が出来たが、それまではずっと一人だった……そして続いて現れたのがお前だ、近衛木乃羽」

くしゃり、と俺の髪を優しく掴んでから、そのままエヴァは頭を撫で始める。

「私の正体を知っているにも拘わらず、色眼鏡を掛ける事もなく私と接触してきた……初めは馬鹿だと思っただけ、正体を知っていて……その上、魔法まで教えてくれ等と抜かすのだからな」

口許を綻ばせ、鼻で笑ったエヴァは尚も俺の頭を撫で続ける。

「だが、反対に私は期待感も感じていた。十五年間も通い続けて一人も現れなかった“馬鹿”が話し掛けてきたのだから……だから、もう少し自分大切にしろ。フン……一人語りが過ぎたな、忘れてくれ」

いつものように底意地の悪い笑みを浮かべたエヴァは、俺の頭から手を離して握り拳を作り、親指だけを立てて背後のドアを指差した。

「下に行くぞ、茶々丸が待ってる」

「……え？」

疑問符を浮かべて首を傾げた俺を見て、エヴァは愉快そうにケラケラと笑い、ニヤリと口許を歪めた。

「さつきは紅茶を汲んでくる、なんて言っていたが……ほんの少し前まで食事の準備をしていたから……勿論、三人分だ」

三人分……その言葉を心の中で反芻する。

「丸二日間も二人分の量を食べる事になった私を労えよ……いい加減に今日こそは食べてもらうからな」

そう言ってエヴァは俺の真横に立ち、膝を曲げて腰を落としたかと思えば、背中に手を添えて膝裏に腕を通し、軽々と俺を持ち上げた。

その拍子にシアーがバランスを崩す事になり、お腹の上をコロコロと転がっている。

「うわっ……な、何を」

「封印されていたとしても、お前の身体ぐらい持ち上げれる。何なら片手で持ってやるうか？」

少し暴れた俺を意に介さず抱き留めて、更には冗談まで言ってみせるエヴァに降参し、下のリビングルームまで運んでもらう事にする。俺を抱えたままエヴァは廊下を歩いていく。

「さっさと下に行くぞ。怒った茶々丸は怖からな……たらふく食べさせられる事になるぞ」

嫌な笑みを浮かべて恐ろしい事を言ってくれるエヴァに俺は深々と溜め息をついて、少し間を開けてから。

「……ありがとな、エヴァ」

ボソリと小さな声で感謝の意を示した。

「……何か言ったか？」

きよとんした面持ちで問い返してきたエヴァをごまかしながら、もう一度だけ俺は心の中で『ありがとう』と呟いた。

「そういえば、似合ってるぞ……その服」

「……お前の仕業か」

第四十一話（後書き）

次で“とある一日”終わらせる……と思います（汗）

そしてキンクリを敢行し、オリキャラを一人登場させたいと思いま
す……。

登場させるオリキャラは……あのキャラの双r y

第四十二話（前書き）

え〜……更新が遅れてしまい、すみませんでした。

では今回は長めです……どしどし。

第四十二話

エヴァにリビングまで運送してもらい、キッチンで黙々と調理をしていた茶々丸と何とか無事に仲直りを成功させた俺は、手作り料理を頂いてから帰る事になった。

椅子の上に降ろされて席に着いた俺が暫く待っていると、割烹着を身につけた茶々丸が朗らかな表情を浮かべ、丸盆を手にして現れた。恭しく一礼した茶々丸は俺の目の前に料理が盛られた皿を静かに置き、踵を返して嬉しそうにキッチンへと戻っていく。

まず、一皿目。

目の前に配膳された料理を見下ろせば、温かな湯気と食欲をそそる芳香。

二日間も寝込んでいた為か、胃の中に巣くう空腹という名の虫が待ち侘びたと言わんばかりに暴れ始める。

それにしても前菜にしては少し量が多いなと若干の疑問も抱きつつ、俺が箸を動かすと上座に仏頂面で鎮座していたエヴァも徐に箸を持ち、パクパクと料理を口に含み始める。

日本人には絶対に見えない金髪幼女が箸を上手に操る光景に、若干の違和感を感じたが俺は特に何も発言する事なく黙って食事を続けた。

それ程に腹が満たされていなかった為なのか、はたまた自らを待ち

受ける惨劇を無意識の内に予期していたのか。

それから無心で箸を動かし続け、一皿目を無事に食べ終わろうかとしている時だった。

次の料理を持った茶々丸が現れ、二皿目を置いて早足で再びキッチンに戻っていく。

茶々丸の後ろ姿を眺めながら用意された茶を口に含んでいた俺は、この時から既に虫の知らせのような物を肌で感じ取っていたのだが、そんな不吉な予感を頭の中から放り出して一皿目を完食するべく再び箸を握り直す。

だが……残念ながら俺の嫌な予感は的中していたらしい。

その後も間髪なく次々に料理が盛られた皿が並べられていく為、俺は思わず箸を動かす手を止めて、目を丸くしながら呆然と茶々丸の顔を見上げていると。

「沢山召し上がって下さい、木乃羽さんの為に誠心誠意お作りしました」

茶々丸は女神のような微笑を浮かべ、俺の退路を無くす呪いのような言葉を呟き、これでもかと言わんばかりに料理を並べていく。

身体が石像のように硬直したまま動かなくなった俺の脳内に、二階でのエヴァとの会話が蘇る。

怒った茶々丸は怖い、とエヴァは陰惨な笑みを浮かべて言うてはいたが、まさかここまで量が多いとは想像を超えていた。

自らの双眸を疑ってしまふほどテーブルの上に所狭しと並べられた料理達を呆然と眺めていた時、黙々と箸を動かしていたエヴァが突如として口を開いた。

「私が良く食べるからな。主である私の一人前が、この家での一人前だ」

これぐらい量は完食できて当然であるとしても言いたげにエヴァは白い牙を見せて笑い、そう言っている間にも並べられた皿達を悠悠と空にしていく。

その華奢な体躯に似合わぬ恐るべき早さでエヴァの胃袋に消えていく料理達を虚ろな瞳で眺めながら、再度確認する意味も込めて自分の為に用意された料理に視線を戻す。

……多勢に無勢である。

冷めない内に早く食べると料理達が皿の上で温かな湯気を出し、脇に控えた茶々丸が俺をジッと見つめてどうやら味の感想を待っているようだった。

「お、美味しいよ……茶々丸」

最後の一口だった前菜を飲み込み、量はともかく味は好評であると茶々丸に伝える。

すると、どう受け取ったのかは考えたくないが、パツと満面の笑みを咲かせて空になった皿を回収してからキッチンに戻り、また新しい料理を持ってきてくれた。

どうぞ沢山召し上がれ、とでも言わんばかりに茶々丸は瞳を輝かせて俺を見下ろしている。

そんな茶々丸の期待を寄せる視線を受けた俺は、ダラダラと背中を流れていく冷や汗が止まらなかった。

配膳の早さから考えて料理は既に全て調理が済んでいるのだろう、恐らくキッチンには出番を待つ後続達が控えている可能性が高い。

正直に言って食べ切れる気がなかったが、作ってくれた料理を残す訳にもいかなかった。

転生前の胃袋なら何とかなかったかもなと胸中で苦々しく呟いて、愉快そうなエヴァの忍び笑いを耳にしながら、俺は茶々丸の料理と死闘を繰り広げる事になった。

今、テーブルの下ではチャチャゼロを頭に乘せたシアーが爆音を響かせて、元気よく縦横無尽に床を走り回っている。

食事中、余りにも暇そうにしていた二人が可哀相だった為、俺が気まぐれでシアーに命令を与えてやったのだ。

チャチャゼロと遊んでこい、と。

チャチャゼロは魔力供給が無ければ動けないとは言えど、シアアの頭にしがみつくぐらいの力は残っているようだった。

いや、もしかすると見兼ねたエヴァが雀の涙程度の供給を行っているのかもしれないが。

二人とも罵詈雑言を喚き散らして喧嘩しながらも、仲良く走り回って姿を見ていると思わず表情が緩む。

ふう、と軽く息を吐き、お茶を口に含んで喉を潤す。

お茶の仄かに香る茶葉の匂いと喉を通り越していく適度な渋味が、心身ともに疲れきっていた俺を癒してくれる。

ふと部屋に飾られた大きな壁掛け時計に目をやれば、針は九時を指し示していた。

どうやら俺が目覚めてから二時間経過したらしい。

その時、ゴンと何かが衝突する音と共にテーブルの上の皿達が音を立てて微かに震える。

時々、シアア達は部屋の壁やテーブルの足に正面衝突を起こしているので少し心配である。

しかし……どうやら俺に他人の心配をしている暇は無いらしい。

「どうぞ、木乃羽さん」

まだ、戦争は終結していないのである。

ようやく盛り盛りに盛られた料理達を掃討したかと思いきや、空いた皿が素早く片付けられていき、再び違う料理が並べられていく。

次々と皿が並べられていく際、足元で繰り広げられている微笑ましい光景を見て、現実から逃避していたのだが俺を待っているのは地獄しかないらしい。

……心が折れそうだ。

これ以上は無理だと俺の胃袋が悲鳴を上げはじめた為、エヴァに助けを求める視線を送るが、どうやら俺に援軍は来ないらしい。

エヴァは酷薄な笑みを浮かべて俺を一瞥してから、瞳を閉じて静かに“食後”の紅茶を愉しんでいる。

その時、何かを忘れていたような気がしたが、覚悟を決めた俺は気合を入れて箸を握り直し、目の前の料理に玉砕覚悟で向かった。……

その後。

「本当によろしいのですか？」

ちゃんと私が御説明した方が、と茶々丸は続けて呟き、申し訳なさそうな顔付きで此方の様子を窺っている。

あの後。

何とか料理を完食した俺は弱った身体に鞭を打ち、休む間もなく帰宅する事をエヴァと茶々丸の二人に伝えた。

すると夜も遅くなって暗くなった為、森を抜ける際に迷子になってしまう事を危惧した茶々丸に寮まで送り届けてもらったのだが……。

「あ、いや……本当にいいんだ。ここまで送ってくれてありがとう」

俺は苦笑を浮かべて頬を掻き、街灯の傍に立っている茶々丸を見上げた。

地獄を見るのは俺一人で十分だ、と心の中で独りごちる。

まだ茶々丸は何か言いたそうな面持ちで何かを伝えたそうにしていたが、暫くしてから無言で頷いてくれた。

また明日、と別れの言葉を述べてから俺はスロープを上り始め、ふと立ち止まって後ろを振り向くと、街灯の傍にポツンと佇んだままの茶々丸が目映る。

俺がヒラヒラと手を振ってみると、茶々丸も胸の前で小さく手を振ってくれた。

相も変わらず、不安げな面持ちのままではあったが。

前を向いて寮の中に入った俺はポケットの中から携帯を取り出して、画面を確認する。

木乃香からの新着メール及び着信は　。

一件も無かった。

音沙汰が一切無いのが逆に恐ろしい。

画面の右上に表示されている時間は、とっくに夜の十時を過ぎていく。

深々と溜め息をついてから携帯をポケットの中に押し込み、エレベーターに乗り込む。

そして膝元にいるシアーを見下ろし、もう一度確認の意味も込めて「黙っているよ」と命令しておく。

魔力消費が無く、色々とシアーは便利なので、用心棒として常に召喚した状態にしておきたい。

エヴァも言っていたが一切魔力を感じず、玩具にしか見えないそうなので、魔法関係者に見られても恐らく疑われないだろう。

なので木乃香と顔合わせさせておきたいのだが、ただの玩具に見え

るシアーが急にペラペラと話し始めるのは、あまり良い印象を与えないような気がするので一応口は封じておく事にした。

……案外、すんなりシアーの事を受け入れてくれるかもしれないが、もしかしたら既に寝ているかもしれない、という宝くじで一等が当たるよりも低確率の儂い希望を抱きながら、俺は部屋の前まで辿り着く。

ゴクリと息を飲み込んでから鍵を静かに開け、異様に重たく感じるドアを開く。

身を強張らせながらソツと中の様子を窺うと、廊下は明かりが点いておらず、誰も居なかった。

足元を見下ろせば靴が二人分ある、アスナと木乃香の物だろう。

玄関口に上がって革靴を脱ぎ、いつものように濡れタオルで車輪の汚れをを拭き取りながら、木乃香は寝てしまったのだらうと強張っていた身体を弛緩させ、ほっと安堵の吐息を吐き出そうとして。

飲み込んだ。

突如としてポンと肩を叩かれた為、安堵の吐息の代わりに心臓が口から飛び出しそうになる。

「お、か、え、り……うーちゃん」

木乃香に耳元で囁かれ、俺は恐ろしさのあまり全身が硬直して金縛り状態になった。

う、後ろだと……靴はあった筈だ……。

錆び付いた機械のように、ゆっくりと首を巡らして背後を振り向けば、そこには木乃香の満面の笑みがあった。

まごつきながらも「ただいま」と返答した俺は、恐る恐る視線を下に落とせば木乃香は靴を履いておらず、素足のままだった。

そんな俺の様子に気づいたのか、やや冗談めかした風に微笑を浮かべた木乃香は「驚かそうと思ってな」と言ってポンポンと肩を叩いてくる。

驚きのあまり死ぬかと思ったぞ、と胸中で独りごちていると。

「さあ寝るえ、うーちゃん。手えと顔洗ってきーな」

「え……今なんて？」

木乃香の言葉に俺は耳を疑い、思わず眉を潜めて聞き直すと、反対に木乃香が怪訝な表情を浮かべて溜め息をついた。

「うーちゃんは、ウチの抱き枕やる？」

はよしてな、と言いたげに俺の頭を軽く叩いてから、木乃香が車椅子の横を通り過ぎようとした時。

「……どないしたんツ、その手!？」

その場でしゃがみ込んだ木乃香は、俺の左手を見据えながら声を荒

げている。

そういえば完全に左手の事を失念していた……痛みは感じないのだが、どう説明したものか。

「あ、ああ……転んで捻挫してさ、でも大丈夫だから」

「……ホンマに？」

大丈夫と言う俺の言葉を疑問に思ったのか、それとも理由の部分に疑問に思ったのかは定かではないが、木乃香は訝しげに瞳を細めている。

ホントに大丈夫だと安心させる為、俺は慌てて左手を振ってみせた。痛みは感じない。

直ぐに処置したので痕は残らないと茶々丸が言っていたので、心配する事は無いのだが、木乃香には通用しないだろう。

それでも怪訝な面持ちで視線を送ってくる木乃香に、俺は苦笑いで応じるしかなかった。

恐らく、いや絶対に木乃香は俺が嘘を付いていると見抜いていると思う。

しかし、分かっているながら聞いてこないのは、俺が本当の事を答えてくれないと理解しているからなのだろう。

……嬉しいような悲しいような複雑な気分だな。

「……無理だけはせんといてな」

やや呆れた風に溜め息をついた木乃香は、俺の左手から膝上へと視線を移す。

「……何なん、コレ？」

一瞬、眉を顰めてシアーを見つめていた木乃香だったが、どうやら興味を示してくれたようで、小首を傾げながらシアーをツンツンと突いている。

イデ、イデデ、と何処からか声が漏れているような気がするんだが……気のせいか。

「シアーって言うんだ……まあ、玩具みたいな物だ」

……よくよく考えてみれば、他人から俺を見れば小さな玩具に名前を付けて、肌身離さず持ち歩いてる人間に見えるのでは……？

「ふ〜ん……何かちっこくて可愛ええな」

か、可愛い……？

そう言いながら木乃香はシアーを持ち上げようとしたのだが、持ち上げられる事を拒否するかのようにキヤタピラが唸りを上げて回った為、驚いて手を離してしまった。

ポトリと膝上に着地したシアーは、無言のまま木乃香に非難の視線を送っている。

そういえば動くな、とは命令していなかった……ははは、シアーめ。

「う、うーちゃんツ……動いたえ!？」

……驚くのも当然だろう。

大きな瞳を更に大きくして、木乃香は俺の肩を激しく揺さぶって返答を求めてくるので、更に喋るぞと答えてやると。

「……冗談やろ？」

俺の言葉に、木乃香は怪訝な面持ちのまま固まっている。

いずれバレル事になるのだから、もう喋らせてしまおうと思った俺は『自由に動け』と命令を変更してやった。

すると。

「主ヨ……主八二人イタノカ？」

訳の分からない事を膝上で呟きながら、シアーは俺と木乃香の顔を見比べている。

「ホンマや……喋った……」

呆けたように口を小さく開いたまま、シアーを驚掴みにした木乃香は、顔の前まで持ち上げて興味津々といった様子で観察し始めた。

言わずもがなシアーは「離セエ!」と大暴れしているが、今度は木

乃香も驚かなかったようで、無視して観察を続けている。

撫でたり、嗅いでみたり、叩いてみたり……色々の方法でシアアを観察していた木乃香だったが、何かを閃いたように頷いてから口を開いた。

「シアア……やったっけ？ウチの事は『このちゃん』って呼んでない」

「ハ、離セエ〜！」

抵抗する力を強めたのだろう、木乃香の手から逃れたシアアは俺の膝に見事に着地し、二度と捕まるものかと言わんばかりにブレザーの中に潜り込んできた。

「ああ〜逃げられてもおた……で、どないしたん？」

いつの間にか表情を真顔に戻し、木乃香はシアアが潜り込んで出来た制服の膨らみを指差してくる。

「……エヴァから貰ったんだ」

木乃香の瞳を見つめ、少しだけ間を置いてから俺は答えた。

嘘は言っていない……等。

制服の中に籠城しているシアアを定位置まで引っ張り出していると、木乃香は押し黙ったまま俺の瞳を見つめてくる。

……真偽を確かめているかのように。

何かマズったかと冷や汗を流していると、木乃香は何かに納得したように頷いてから、「もう遅いから寝るえ」と諦観したように呟いて、俺に背を向けてリビングへと歩いていく。

どうした、と木乃香の背中に声を掛けても、はよ寝るえと振り返る事もなく応えてリビングの奥へと行ってしまった。

また何かやってしまっただろうかと焦りながら、俺は慌てて木乃香の後を追い掛ける事にした。

……何やら小さな声で不平を漏らしていたシアーをカードに戻してから。

手と顔を洗い、綺麗に歯を磨き、もう袖を通す事に慣れてしまった木乃香とお揃いの桃色の寝巻きに着替えた俺は、木乃香が此方に背を向けて寝転んでいるベッドへと潜り込んだ。

いつもなら俺を抱き枕にして寝る筈なのだが、木乃香は何故か振り返る事なく背を向けている。

……やはり怒っているのだろうか。

俺が何と声を掛ければ良いのか考えあぐねている時だった。

「……うーちゃん」

「な、なに？」

突然、名前を呼ばれた為か情けない程に上擦った声で返答した俺は、名前を呼んだまま黙り込んでいる木乃香の背中を見つめながら続きを待った。

「ウチな、何でか分からんけど寂しいねん……うーちゃんが、どこ分からんところに行ってしまうみたいで」

ポツリポツリと呟いた木乃香の小さな背中に、俺は返す言葉を持ち合わせていなかった。

ぼやんとしているように見えても、本当は感の鋭い娘だ……何か感づいた事があるのだろう。

本当の事を話してしまえば妙な孤独感に苛まれることもなくなるのかもしれない。

それに……いずれ、木乃香は裏の世界に必ず巻き込まれる事になる。だから……それまでは平穏に平和に暮らしてほしいと思っっている。

……その間に俺が木乃香を護れる力を身につける。

俺の願いは間違っているのだろうか？

「ゴメン、うーちゃん……酷い事言っけど許してな」

消え入りそうなくらいに小さな声で前置きを呟いた木乃香は、一度だけ吐息を吐いてから話を続けた。

「……うーちゃんはウチがおらな何も出来へんと思っとな。子供の時も自分の意見よお言わんかったし、身体も弱かったし……それに今度は久しぶりに会うたら車椅子に座っとな……小さかったうーちゃんが更に小さく見えて……」

泣いているのだろうか、細かに木乃香の肩が震えている事に気付いた俺は、首に腕を回して優しく抱き寄せてやった。

「だから、ウチがもっとしっかりしなアカンと思っとなや……うーちゃん引っ込み思案やから皆に仲良うしたって言うて回らなアカンと思っとなや。でも、気づいたら友達も出来とな……うーちゃんが弱いとばかり思い込んでた自分の事、最低やとなと思

「それは違っ」

弱音を吐きそうになっていた木乃香の言葉を遮った俺は、優しく頭を撫でやりながらキッパリと断言してやった。

「木乃香は最低なんかじゃない……いつも俺の事を心配してくれてる事が、最低な訳ないだろ？」

「でも……」

「もういいから、今日はグッスリと寝ろ……俺は何処にも行かないから」

反駁しようとした木乃香を黙らせた俺は、更に力を込めて強張った身体を抱き寄せてやった。

すると、ようやく納得してくれたのか木乃香は首を縦に振ってから、クスリと小さな笑い声を漏らした。

「うーちゃんがいつもは抱き枕やけど……今日はウチが抱き枕やな……おやすみ、うーちゃん」

そう言っただけで安心したように吐息を吐いた木乃香は、静かな寝息を立て始めた。

「……おやすみ、このちゃん」

色々あって疲労が溜まっていた為か、優しく木乃香の頭を撫でながら気づけば俺も眠りに就いていた。

第四十二話（後書き）

「……………終わった？」

「おわッ、起きてたのか神楽坂!？」

「寝れる訳ないでしょ……………突然、親友が姉を驚かせてやるって言って裸足で外に出て行ってんだから」

「ぐ……………それは悪かった」

「後を追い掛けても見当たらないし……………まあ二人とも無事に帰ってきてよかったけどね。じゃ、明日もバイトが早いから寝るわよ」

「ああ、今日は迷惑掛けて済まなかった」

「ホント、アンタの事になると人が変わるんだからね木乃香は。これからは木乃香と同室である私の気苦労も考えて行動しなさいよね……………オヤスミ」

「……………善処する、おやすみ」

第四十三話（前書き）

推敲が甘く、焦って執筆しましたので色々クオリティが低いです
（汗）

その上、独自解釈も含まれております。

そんな小説ですが……よろしければ読んでやって下さい。

では、ごんげ。

第四十三話

『キングクリムゾンッ！』

俺がエヴァに魔法の事を師事され始めてから、一ヶ月が経過した。

成長した自分を喜ぶべきなのか、改造されてしまったと捉えるべきなのかは分からないが、凄惨を極めたエヴァの修業にも次第に身体が適応し始め、こうして日記を書く事も出来たので、ここ最近の変化を久しぶりに書き綴っておきたいと思う。

さて、第一に書くべき事は言わずもがな魔法関連の事柄だろう。

一ヶ月が経過した、と冒頭で書き記したが少し語弊があった。

一ヶ月と言っても“魔法球”の中での一ヶ月なので、現実世界ではそれ程の時間は流れてはいない。

魔法球の中で過ごしてきた一ヶ月間、無心で魔法を鍛練し続けた結果、なんと古代上位魔法まで唱える事が出来るようになった。

勿論、一朝一夕で習得できた訳ではなく、嫌と言つほど辛酸も嘗め
たし、悔しさの余り涙も零した事もあった。

それに、エヴァ直々の容赦ない修業にも堪えてきた末の結果である。

……それでもエヴァから見れば、有り得ない早さらしいが。

エヴァ曰く「才能も関係しているとは思うが保持している魔力が多
いから、それだけ魔法を唱えられる回数が増えているからだろう」
らしい。

俺の血の滲むような努力は関係ない、と言われていたようで良い気
はしなかった。

魔法を粗方だが覚え始めたので始動キーも必要になり、熟考を重ね
た結果。

『エンド・ワールド・ダイヤモンド』

というのが俺の始動キーになった。

エンドは適当で後はスタンド名から取っており、韻を踏めておりエ
ヴァや薬味坊主の始動キーと文字数も同じなので、我ながら上出来
だと思う。

本当は『キラークイーン』の名前も始動キーに使いたかったが、韻
を踏めなかったので断念。

……こうやって日記に書くのは“ある種の病気”を拗らせた患者の
ようで、凄く恥ずかしい物があるな。

前から思っけど、誰かに見られたら色々な意味で本当に終わるな……この日記。

さて、話は変わるが補助魔法として認識阻害を覚えた事により、他人から見えなくなったり、自らの魔力を封じ込めたように見えなくする事が可能になったのだが、日の目が当たるのは少し先になりそうである。

何故なら魔力を封じ込めてしまうと、魔法習得者に魔法を知っているとバレる可能性が高い。

俺みたいに莫大な魔力量を持っている人間が認識阻害を使えば、一発で分かる筈だ。

それに一般人には認識阻害で自分の事が見えなくなったとしても、魔法先生等にはバレてしまっだらうし……。

よって俺は恐らく木乃香が魔法を知る事になる修学旅行まで認識阻害を使う事はなく、誘蛾灯のように生き続ける事になるだろう。

だが、認識阻害が使えない事を落胆していたりはしない。

今まで俺も木乃香も襲われた事は無いし、いざという時は対抗手段もスタンド能力もある。

……よくよく考えると魔法を覚えたのは良いのだが、使う機会が限られているような気がするのは気のせいだろうか？

『ザ・ワールド』中に魔法を使い、発動した後は知らぬ存ぜぬで通

すという方法もあるが……魔力消費でバれてしまっただろう。

修学旅行が終わるまでは俺の“左手”頼みで頑張るしかなさそうである。

自分以外の物体、車椅子も動かす事になるので習得には時間が必要になったのだが、影を利用した転移魔法も使えるようになった。

本当は闇より炎の方が適性が高いので、移動速度も魔力消費も格段に炎が上なのだが……文字通り身が焼けるように熱いので闇の転移魔法しか使っていない。

闇の転移魔法は自らの影を利用する代わりに、沈み込むように移動するため移動速度が遅く、転移魔法として影を維持する時間が長いので魔力消費が多い。

反対に炎の転移魔法は移動速度も早く、魔力消費も少ないのだが、自らの手で目の前に炎を生み出してやらないと移動が出来ない為、少し手間が掛かる。

そして問題なのは、その生み出した炎に自分自身が“突っ込まないといけない”という点である。

確かに……炎に突っ込んでソレを抜け出せば転移先なので、格段に闇よりかは移動時間は短い。

が、冗談抜きで熱いのである。

……絵的には炎の転移魔法の方が格好よいのだろう。

某漫画のように足先からズブズブと移動し始め、転移先の地面に頭から現れる闇の転移魔法より、転移先の人から見れば何も無い所から突然燃え上がった炎から、颯爽と飛び出してくる炎の転移魔法の方が。

だが……熱いのだ。

敵との戦闘の際、至る所に炎を生み出して転移魔法を使用し、敵の目を攪乱するという戦法も取れる。

転移魔法として炎を生み出しているので術者が火傷したり焼け死ぬ事は無い　が、移動の仕方が焼身自殺さながらの方法なので、俺は影を好んで使っている。

……影は影で底無し沼に沈み込むような感覚がするので、余り好きではないのだが。

基本的に転移魔法は自分自身のみを移動させる事を念頭に置いた魔法らしい。

なので自分自身以外の物体等は転移させづらく、他人なんて以つての外らしいのだが……車椅子も一緒に転移させなくてはならなかった俺は、必然的に自分以外の物体を転移させる事が得意になった。

……自分の影の中に物体が入っている事が条件ではあるが。

とある事を思い付いた俺が転移魔法ばかり練習しているのを見兼ねたのか、エヴァに　。

「物体はともかく他人を移動させる事は不可能に近い。魔法障壁もあれば抵抗レジストもされる。それに動いている物体を捕らえ続けるのは困

難だ。あまつさえ敵対している人物を自らの影の範囲内に近寄らせてくれる訳がない。よって転移魔法は自分だけ動かせれば良いのだから意味の無い事はするな馬鹿者」

と、辛辣な言葉で忠告されてしまったのだが……俺は完全に忠告を無視して練習を続けた結果、何とか十秒以内に自分自身や物体を移動させる事に成功した。

何故ここまで執着して鍛練したかと言えば 俺には『ザ・ワールド』がある。

止まった時の世界では誰も動けない。

当然、抵抗もしなければ魔法障壁も関係ない。

これで自らの影に引きずり込んで、遠くに飛ばす事が可能になった訳だ。

『ザ・ワールド』を使って即座に近寄り、敵だけを転移させてもいいし、自分も一緒に移動して一対一の状態に持ち込む事も出来る。

影を利用しているため、自分や他人が宙に浮いていると停止時間が足りなくなるので限られた場面でしか使えないとは思いが……それでも有能な能力である。

移動している最中に抵抗されるとどうなってしまうのかはまだ分からないが……“じめんのなかにいる”状態になるのが可能性としては高いだろう。

……やはり『ザ・ワールド』は有用性が高すぎて逆に怖くなるな。

あと覚えた補助魔法は肉体強化だろうか。
結論だけ言うと、肉体強化は成功しなかった。

……俺の目論み通りには、だが。

腕を強化すれば大の大人が両手でも持てないような重たい物も片手で軽々と持ち上げられたし、拳を強化して岩を殴れば粉々に砕く事も出来た。

だが、足だけは……強化できなかった。

前よりかは若干スムーズに歩けるようになった、ただそれだけ。

地面を蹴って走る事も、跳びはねたりする事もできなかった。

修業中は毒舌ばかり言ってくるエヴァでさえも慰めの言葉を掛けてきたあの時、俺は独り物思いに耽っていた。

そして結論として肉体強化は掛け算のような物なのだ、自らの無念さを強引に納得させた。

幾ら莫大な数字を零という数字に掛けようと解は変わらぬように、動かない足に肉体強化を施そうとも動かない物は動かないのだと。

……自らの足が憎い。

こんな思いをするぐらいなら最初から動かなければ良かった。

……我が儘な事を言っているのは理解している。

だが、あれだけピクリとも動かなかった足を毎日毎日毎日毎日必死の思いでリハビリして、ようやく自分の力だけで数分だけなら歩行が出来るようになったのだ。

歩けるようにはなったのだから後は魔法さえ覚えてしまえば、と希望を抱いて生きてきた。

それなのに……こんな……。

これではいつまで経っても、足手纏いのままになってしまふ。

今でも喘息や貧血で動けなくなる事はごく稀にあるが、それでも昔に比べれば改善された方だ。

だが、この足だけは改善されなかった。

ふらつきながらも立てるようになった。

杖や何かを使えば歩けるようになった。

自らの力だけで歩けるようになった。

だが……それが何だというのだ。

戦闘中に車椅子で悠長に移動できる程、裏の世界は甘くは無いだろ
う。

走れなければ、自らの足で俊敏に動けなければ……俺がりハビリしてきた意味なんて、無い。

だが、まだ希望はある。

陸が駄目なら空がある。

足は無くても翼がある。

最後に、補助魔法として飛行魔法は成功したのだが……魔力が強すぎるのか、いつも全力全壊で魔法を唱えてきた癖が仇となったのか、ジェット噴射のようにしか移動できなかった。

それに加えて翼が有るのに飛行魔法を習得するのも馬鹿らしいので、俺は飛行魔法を完璧には習得していない。

なので、俺が取る基本的な戦術は肉弾戦はシアーに任して、自分は翼を使って空から魔法や弓で援護……という事になるだろう。

だが今は刹那以外には翼の事を伝えていない……というより、今は誰にも伝えたくないのので上記の戦術はまだ使えないが。

これぐらいだろう……魔法の事は。

後は……シアーか。

茶々丸には断固反対されたのだが、無理を言っただけでシアーの耐久……いや、俺の左手の耐久度を調べたので、大体のデッドラインは自分でも理解しているつもりである。

エヴァにも最初は反対されたが、敵を知っていても己を理解していなければ一勝一敗すると言って何とか説き伏せ、最終的には渋々だ

が俺に付き合ってくれた。

初級魔法……魔法の射手等であれば、術者の熟練度や色々な要素にも左右されるが、二十発ぐらいなら耐えた。

耐えた、というのは俺が意識を失わなかったという意味である。

当然、痛みも伴う。

何とか痛みには耐え続ける俺を見て、茶々丸が泣きそうな声で中止を叫ぶので心が痛んだが、それでも続行した。

中級魔法は五、六発、上級魔法及び古代魔法は一発耐えられる事が出来たら上出来だろう。

今回は水魔法で試したので、エヴァの得意魔法でもある闇属性の魔法も試そうとしたのだが、流石にエヴァも首を縦には振ってくれなかった。

色々なデータを取っておきたかったのだが……仕方なく諦める事にした。

やはりシアーが魔法を喰らうと痛みだけではなく、その魔法の属性も付加されるようなので……石化魔法等、敵対者の状態を変化させる魔法を喰らうのは出来るだけ避けたほうが良いだろう。

基本的に危なくなればシアーをカードに戻し、左手が回復するのを待つ。

しかし、どうやらカードに戻すと命令がリセットされるようで、再

び命令を行わなければならないことが判明した。

まだよく分からない事がシアーには多くある。

カードに戻すと命令は忘れてしまうのに人物の名前等は覚えている
等など……もしかすると俺と記憶を共有していて、命令の部分だけ
が消えてしまうのかもしれない。

あと、シアーに対して『クレイジー・D』を使用すると、カードに
戻ってしまうようだった。

上記の事柄から推測ではあるが、他人のアーティファクトもカード
に戻せると思われる。

なので、『ザ・ワールド』中に他人のアーティファクトに触り、カ
ードに戻して奪取するという戦法が可能だろう。

『クレイジー・D』で思い出したが、やはり魔法も元に戻す事が可
能だった。

シアーの耐久度を調べる際に魔法の射手をエヴァに滞空させてもら
い、恐る恐る触れてみると……若干冷たくは感じたのだが、光りの
粒子 元の魔力の状態にして消す事が出来た。

まあ…… 一歩間違えれば危険なので余り使う機会はないと思うが。

あと修業中に嬉しかった事と言えば射を披露して、エヴァ達に褒め
られた事だろうか。

……弓道が得意であると言った時の二人の半信半疑な瞳は少し傷つ

いたけどな。

そういえばエヴァに仮契約カードに服装の登録してもらった事を忘れていた。

勿論、弓道着を着て鞆と胸当てを装着した状態で。

どうやったのかは分からないが、弓と矢が入った矢筒まで登録できたのは驚きだった。

エヴァ曰く、強引に衣装として登録してやった、とドヤ顔で説明されたが……真相は分からない。

だが、これで弓や矢を持ち歩かなくて良いようになったので、正直かなり嬉しかったのは秘密である。

気軽に弓を射れるようになり、弓と『キラークイーン』の合わせた技の練習も、エヴァに隠れてやってみたのだが……やはり現実是非情だった。

どれだけ射られた矢が魔法の射手や銃から放たれた弾丸より遅いと言っても、着弾したと同時に爆発させるのは難しかった。

それに実際にやってみて分かったのだが、右手は鞆を付けており親指が曲がらない。

なので必然的に左手で爆発させる事になるのだが、言わずもがな左手は弓を握っている。

どうにか鍛練して左手でスイッチを押して爆発させる事は出来るよ

うにはなっただが……邪弓になってきてしまったような気がする。

接触起爆型にすれば解決するのだが、敵に中らなければ意味がない……色々改善の余地ありといった所だろう。

次は弓と『クレイジー・D』の鍛練だが……これは最近思い付いた事である。

矢羽の部分を本当に少しだけ千切り、その破片を左手に握ったまま矢を射って『クレイジー・D』を使う事で、短い距離ではあるが、素早いスピードで移動する事が可能だったのだ。

応用性は高いのだが、車椅子が置いてきぼりになるのが問題だろう。

それに、飛んでいる矢の高さが低いと容赦なく地面を引きずられる事になる。

ああ……本当に痛かった。

変わった事はこれくらい、だろうか。

後はエヴァと模擬戦もやってはいるのだが、やはりが歯が立たない。

素早く動けると動けないとでは大きな差があり、これも足が動けばどうにかなったのだろうか……悔しい。

少し日記を書いていて気分が暗くなってきたし、背後のベッドから俺を呼ぶ声も煩いのもうこれくらいにしておく。

また何かあれば、日記を書こうと思う。

第四十三話（後書き）

さて、もうそろそろ原作を始めれそうです。

今回執筆してよく分かりましたが、登場人物が居ないとシヨボい小説しか書けなry

第四十四話（前書き）

やはりこの書き方が作者に合っているのだと、改めて実感した今日この頃。

冒頭文はとある作品をリスペクトry

では、エンjoy。

第四十四話

その話は余りにも唐突で重大で、

俺を驚かせるのに充分すぎた。

その話は正に、晴天の霹靂だった。

とある日の午後、俺は部屋で久しぶりの休日を満喫していた。

本来なら学校が無い休日は丸一日かけて修業を行うのだが、エヴァから今日は修業をせずに身体を休めろ、という御達示が出たのである。

確かに言われてみれば最近エヴァの家に通い詰めだったので、今日一日はマッタリと休養する事にした俺は、部屋のフローリングに寝そべって取り寄せたばかりの本を読み耽っていた。

同居人である神楽坂は机に向かい、休日中の宿題である英語のワークを終わらせようと苦難しており、耳にイヤホンを嵌めて必死にペンを動かしている。

もう一人の同居人、妹の木乃香はというと。

「……んふふ」

何やら気味の悪い含み笑いを漏らしながら、俺の背中の上に寝そべっているのである。

ふくよかな感触が肩甲骨の辺りを圧迫してくるが、取り乱す事なく本を読み続ける。

以前の俺なら、何かと理由を付けて背中の上から振り落としていただろうが……。

正直に言って、慣れてしまったのである。

木乃香の過度なスキンシップに辟易した俺は、以前のように突き放したりする訳でもなく、ただ受け入れる事にしたのだ。

今も木乃香は吐息が首筋に掛かるぐらい密着した状態で、俺の髪を撫でたり三つ編みにしてみたりと自分専用の玩具のように弄っているが、もう集中力を乱す事は無い。

逆説的に捉えれば木乃香にだけ気を許した状態、と取ることも出来るのかもしれないが。

麻帆力学園中等部に編入してから一ヶ月が経った今、未だに俺は周りと上手く馴染めずにいる。

弓道部に入部したり、学校の活動に参加してみたりはしているのだ

が、男が女子校に紛れ込んでしまっていると考えると、どうも気が引けてしまう。

クラスに偏見を持っていて人間は居ないし、蔑んだり憐れむような瞳を向けてくる者も居ない。

それどころか気軽に話し掛けてきてくれるし、俺が困っていると見れば直ぐに手助けをしてくれる。

今のクラスに不満は何一つ無いし、不平を言うつもりも無い。

だが……本当に俺の居場所はココでいいのだろうかと自問を繰り返してしまふ。

疎外感を感じている訳ではなく、ただ根本的な何かが違うという違和感を。

些細な事で性別の差を感じてしまふ。

例えば、周りとの共通の話題が俺には無いのだ。

周りは思春期真っ只中の中学生、話す話題なんてのは色恋沙汰やら新しいファッションの事やら、俺には縁もゆかりも無い事ばかり。

俺が着る服装なんて着物しか京都から持ってきていない為、最近茶々丸に無理を言って男物の店に着いてきてもらったばかりである。

本当は一人で行きたかったのが、如何せん地理が把握できていなかったのと、男物の店は高い所に置かれている服も多い為、茶々丸に頼み込んだのだ。

最初から懸念はしていたのだが、肩幅が足りなかったり胸の辺りが苦しかったりするなど、四苦八苦する事にはなつたが何とか購入する事が出来た。

来店から購入まで店員から怪訝な瞳で見られ続けたのは言わずもがな。

愛想笑いを浮かべた店員に彼氏にプレゼントですかと聞かれた際に、俺が着るんだよ、と返答してやった時の凍り付いた店員の顔は笑い種ぐらいにはなりそうだが。

色恋沙汰なんて以つての外、化粧の事やらファッション雑誌の事やらも俺に分かる筈がなく。

俺が読書好きな事と木乃香のツテも相まって、図書館探検部の人達とは比較的友好的な関係を保ててはいるが、後は接点が無いためサツパリである。

結局、クラスで特にする事が無い俺は、最終的に落ち着くのが隣の席のエヴァと殴り合いの応酬のような会話である。

喧嘩している訳でも、互い嫌い合っている訳でもない。

ただ何となく言い合っているだけなのだが、俺が気軽に話せる相手が少ない為かどうかは分からないが、中々愉しいのである。

熱くなりすぎてくると前の席に座っている茶々丸の仲裁が入り、仲良く三人とも額にチョークを喰らうというのが最近の恒例となっている。

後は……最近少し困っている事と言えば、体育の授業だろうか。

基本的に俺は体育の授業には参加していない為、体操着や水着に着替える事もない。

一応渡されてはいるのだが、封も開けずにロッカーに放り込んだままになっている。

制服は妥協したが、体操着と水着だけは絶対ツツツツツ対に着ることは決してないと思っただろう。

……話が逸れてしまったが、授業が終わって次が体育の授業の場合、クラスの人間達は何の躊躇いもなく着替え始めるのだ。

躊躇なく着替えるのは当然と言われれば当然なのだが、俺は男なので目のやり場に困ってしまう。

普通の中学生達の集まりならともかく、中学生とは思えない体型の生徒も多いので、尚更教室の中にいる訳にはいかない。

その為、逃げるように教室から出て授業先に一人で向かうのだが……。

これが、恐らく悪印象なのだろう。

ただ単に恥ずかしいから俺は教室から無言で早々と出て行くだけなのだが、他人から見れば本当は体育の授業を受けたいのに足のせいで受けられないから拗ねている生徒。

に、見えていてもおかしくないと思う。

とつか、そう見えているぞとエヴァが忠告してくれたのだが、俺にはどうする事も出来ない。

体育の授業中、木乃香は見学している俺に何の遠慮もなく突然ボールを投げてきたりするが、やはり他のクラスメイトとは見えない線が引かれているような気がする。

……俺がこんな事を考えている時点で、距離は縮まらないのだろう。

俺は……女になるべきなのだろうか？

女になってしまえば、現状は改善されるのだろうか？

いつかは悶々とするこの悩みを忘れて、自分の身体に正直に生きる日が来るのかと思うと、怖くもあり楽しみでもある……… ような気がした。

直ぐに悩んでしまうのは悪い癖だと、頭から雑念を振り払うようにかぶりを振ると、頭上で木乃香の何かを残念がる声が聞こえた。

恐らく結っていた髪の毛が頭を振った事によって解けてしまったのだろうが、そんな声は無視して気を取り直し、目の前の本に集中する。

手触りの良い紙質を愉しみながら頁を捲り、新しく製造された書籍特有のインクの匂いも愉しみながら、本を読んでいた時の事だった。

盛大な溜め息を吐きながら降参といった様子でペンを机の上に放り

投げ、がむしゃらにイヤホンを外した神楽坂は徐に振り向いて、微笑ましい物でも見ているかのような視線を送ってくるが、俺は気にせず本を読み続ける。

暫くして真上に両腕を伸ばして欠伸をした神楽坂は、かぶりを振って髪飾りの鈴を鳴らし、机に向き直って再度イヤホンを耳に嵌めてペンを握り直した。

背中に寝そべって俺の髪を依然として弄っている木乃香も完全に無視し、俺は時が過ぎていくのも忘れて読書に熱中していた。

またペラリと頁を捲り、洗練された文章の羅列に甘美しながら本を読み進めていた時だった。

「なあ、うーちゃん。

って知つとつた？」

頭上から猫撫で声のような甘い木乃香の声が聞こえたが、読者に集中していた為か聞き取る事が出来なかった。

その為「ふうん」という生返事を適当に返し、俺は本を読む事に没頭していたのだが、少し文章を読み進めた所で脳と目線がピタリと停止した。

頭の中で聞き取れなかった木乃香の言葉を反芻しようとする。

「今……何て言った？」

本のとある一点に視線を留めたまま、俺は木乃香に先刻の発言は何だったのか聞き返す。

すると。

「んー？せつちゃんに双子の妹がおるって話やねんけど」

あっけらかんとした木乃香の言葉が耳に届くが、理解不能。

暫く噛み砕くのに時間が掛かり、その言葉の真意を理解した瞬間。

「……嘘オ!？」

当惑の声を上げた俺は思わず読んでいた新刊に栞を挟むのも忘れて床に取り落とし、首を捻って背後を振り向いた。

「ホンマやえ？」

「冗談だろ？」

のほほんと答えて首を傾げる木乃香に、俺は食ってかかるように問い返す。

「冗談ちゃうて、うーちゃん」

「双子つて……本当に？」

泡を喰わされて質問を繰り返す俺に対して、それがどうかしたのかと言わんばかりに木乃香は事も無げに首を傾げている。

「ホンマやつて〜」

木乃香は眉一つ動かす事なく、平然とそう応じた。

断言した木乃香の言葉を打ち消すように、俺は激しくかぶりを振って口を開く。

「有り得ないッ、そんな人物は あ」

原作には登場しなかった、と。

床に向かって断言しようとした言葉尻が、ふわふわと宙に浮いていく。

危うく口を滑らせそうになるが、何とか口を噤む事に成功した。

俺は咳払いをしながら体勢を変えて仰向けになると、言葉が詰まった事を怪訝に思ったのか木乃香が不思議そうな表情を浮かべていた。

「……………証拠は？」

未だに半信半疑のまま俺の下腹部に跨がっている妹に証拠の提示を求めると、最初は小首を傾げていたが、はたと何かを思い出したようにスカートのポケットをまさぐり始め、木乃香は徐に携帯を取り出した。

そして必死な目付きで携帯と向かい合っていたかと思えば、此れ見よがしに俺の面前に携帯を見せ付けてくる。

木乃香の細い指に握られた携帯の画面には、確かに可愛らしい私服を来ている木乃香の隣に、刹那によく似ているが何処か違う少女が立っていた。

その写真の少女はピースサインをしている木乃香の肩に抱き着くように腕を回して、優雅に咲き誇る背後の桜と負けないぐらいの笑みを満開にさせている。

画面に表情された二人は唯一無二の親友同士に見える、そんな印象を受けた。

木乃香曰く、この写真は小学校の卒業式の後に撮影した物らしい。

この少女は木乃香が京都から麻帆良に引っ越した際、ほぼ同時に小学校に編入してきたらしく、ずっと今まで同じクラスだったそうだ。

しかし小学校の卒業式を終えると、用事が有ると言い残して突然、京都に戻ってしまったらしい。

その少女から最近連絡があり、もう直ぐ麻帆良に戻ってくるとの事。

物的証拠を見せ付けられた以上、俺に反論する事は出来なかった。

確かに、目前の画面に映る少女は刹那ではない。

まだこの時期の刹那は木乃香……いや、俺達にスキンシップなんて以つての外だろうし、小学生の年齢の時は麻帆良に居なかった筈である。

この少女は本当に刹那の双子なのだろう。

そう納得する反面、ささやかな疑問が脳裏を過ぎる。

今まで俺は刹那に双子の妹が存在する何て誰にも教えられた事は無

かった。

父さん達はともかく、ずっと手紙をやり取りしていた筈の木乃香からも教えられていない。

その疑問を口にするのと木乃香は携帯をポケットに直して人差し指を唇に添え、恐らく頭の中の記憶の欠片を紡ぎ合わせているのだろう、虚空を見上げて視線を泳がせ始める。

程なくして、ポンと手を打ち鳴らした木乃香は口を開きかけたのだが、ほんの僅かに表情を曇らせ、さも言いにくそうに口ごもって俺から視線を外した。

余りにも不自然だった為、どうしたのかと俺が訊ねると、木乃香は観念したように吐息を吐いてから、一呼吸置いてから口を開いた。

「あ、いや……うーちゃんに会う日まで秘密にしていってって言われとったんや……ごめん、しーちゃん言うてもうたわ」

きまり悪そうに苦笑いを浮かべ、木乃香はそう告白した。

「……秘密に？」

「よー分からんへんけど、秘密にしていってって京都に戻る前に言うとったえ？」

申し訳なさそうに頬を掻きながら呟いた木乃香は、全身の力を抜いたのか、倒れ込むようにして俺に抱き着いてきた。

胸に頬擦りしてくる木乃香の頭を無意識で撫でながら、俺は思考を巡らしていた。

木乃香は嘘は付いていないだろう。

だが、疑問点が多すぎる。

まず第一に秘密にしておいてくれと言われた木乃香はともかく、何故父さん達は教えてくれなかったのか。

次に秘密にする理由は何なのか。

更に何故刹那と同時に現れず、木乃香が引越した先の麻帆良に現れたのか。

他にも疑問は尽きないが、まず簡単に潰せる疑問を解消する事にした俺は、同居人である神楽坂の名前を呼ぶが、返事がなかった。

疑問に思いながら首を巡らせて神楽坂の方を見れば、焦燥がありありと窺える横顔で、耳にイヤホンを嵌めて必死にペンを動かしている姿があった。

そういえば発音を覚えなくてはいけない、と言っていたのを思い出した俺は、声の大きさを上げて再び神楽坂の名前を呼んだ。

すると、一拍置いてから片方の耳のイヤホンを外した神楽坂は、心底疲れきった顔で此方を振り向いてくれた。

「なあ神楽坂、刹那……桜咲に双子の妹が居るって知ってたか？」

「……知ってるも何も、同じ小学校だったわよ。弒那の事を言うてるんでしょ？」

ゴキゴキと首の骨を鳴らしながら肩を回し、神楽坂は面倒くさそうに呟いた。

「……弒那って名前なのか？」

「あれ、木乃羽知らなかったの？……まあ分からない事が有るなら目の前のじゃれてる“猫”に聞きなさい。私は忙しいのよ」

神楽坂は俺の上に寝そべっている木乃香を指差して、肩を竦めて見せた。

自分の胸を見下ろせば、もふもふや〜とか何とか言っただけの御満悦な状態になっている妹が目映る。

「ありがとう、神楽坂……礼として俺のノート見ても構わないぞ」

その言葉を聞いた途端、神楽坂は瞳を輝かせて立ち上がり、並んで横一列に配置されてある机の一つに掛けてあった鞆に手を伸ばし、ゴソゴソと中を漁り始めた。

答えは見るなよ、と一応釘は刺しておきつつ視線を木乃香に戻す。

木乃香が俺に嘘を付くとは思えないが、どうもきな臭い。

再び桜咲弒那という少女の情報を訊き出そうとしたのだが、木乃香に会ってからのお楽しみだと言われてしまい、結局その日は何の情報も教えてくれなかった。

そして、とある日。

「どうも、桜咲弒那です」

その少女は、俺の目の前に現れた。

第四十四話（後書き）

……原作まであと僅かという所までできました。

……ああ、長かった。

長くしたのはお前だろという的確なツツコミはご遠慮下さい。

下手したら初めて投稿した日から一年経っても原作が始まってない可能性がありましたからねえ……（苦笑）

もう……いいよね……ゴールしてもrY

第四十五話（前書き）

もし、桜咲刹那という人物が修業に明け暮れる日々を選ばず、木乃香を護衛する事を選んでいたら。

そして、その人物が修業に明け暮れる日々を選んだもう一人の自分を、見ていたとしたのなら。

その二人の人生が真つ二つに分かれる事になる要因とは。

第四十五話、短いですが……どうぞ。

第四十五話

「どうも、桜咲弑那です」

その少女が恭しく頭を下げた時、刹那とは逆の位置で纏めた髪の毛がフワリと上下に揺れ動いた。

その時、俺は今まで見てきたどの人物よりも、強烈な新鮮味を感じていた。

原作では有り得ない人物なのだから。

ゆっくりと顔を上げた少女の顔立ちを改めて眺めてみるが、寸分違わぬと評して良い程に刹那の顔と酷似している。

双子なのだから至極当然と言われてしまえば、その通りなのだが。

しかし、現在の刹那よりも柔らかな表情をしており、微笑んで教室の中を見渡す姿は何処か優しげな印象を受けた。

筈だった。

あの日、俺が桜咲弑那という少女の存在を知ってから数日が経過した今、その少女は編入生という形で姿を現した。

教壇の横に“立ち上がった”その凜々しい姿を見て、誰もが大和撫子という言葉を頭の中で連想した事だろう。

下着が透けて見える程に制服をずぶ濡れにせず、頭に真っ白なチヨークの粉を被っていないければ、という条件があったが。

何故こんな悲惨な姿になっているのかは、言わずもがなだろう。

HRが始まる前からクラス内の過激派によって、当たり判定・喰らいモーション・硬直などを念入りに配慮して設置されていく歓迎用という名前の罨を、刹那の双子の妹なのだから何の苦もなく避けるだろうと思いついていた俺は、特に行動を起こす事なく傍観を決め込んでいたのだが……予想外にも見事に引掛かってくれたのである。

初めは余りの掛かりっぷりに若干引いてしまったクラス一同だったが、これが罨師としての本懐であると言わんばかりに席から立ち上がって涙を流し、現状を飲み込めずに瞳を丸くしている憐れな被害

者に、惜しめない拍手を送る者がチラホラと現れ始めた時だった。

無論、悪に裁きの鉄槌が下されるのが世の理で。

遅れてやって来たタカミチ先生に烈火の如く怒られた過激派及び罷師たちは一ヶ月間宿題増加という重刑に処されたのだが……黙って聞き入れる筈もなく、犯人たちは控訴の声を上げた。

しかし教室という名前の法廷の中に犯人たちの弁護人が居る筈もなく、奮闘虚しく控訴は取り消され、学生にとっては死刑宣告に近い一ヶ月間宿題増加の刑が確定した。

犯人たちから阿鼻叫喚の断末魔が上がる最中、終始置いてきぼりにされていた編入生が我を取り戻したようにヨロヨロと立ち上がり……そして冒頭文へと戻る訳である。

「最近まで麻帆良の初等部に通っていましたので私を知っている方も居るとは思いますが、よろしくお願　あぶぶツ!？」

にこやかに自己紹介をする絨那の声は最後まで発せられる事はなく、クラスメイトたちによる喧騒によって掻き消される。

皆が絨那の周りに集まり、再会を喜ぶ者、手合わせを願う者、親交を深めようとする者、早くも情報を集めようとする者等多種多様ではあったが、絨那という新しい仲間の登場を皆は喜んでいようだった。

その中でも一際はしやいでいるのは　他でもない木乃香であった。

クラスメイトの誰よりも早く、疾風の如く飛び出していったのも木

乃香だった。

絨那が自己紹介をしていたにも拘わらず、飛び出して行って首元に抱き着き、喜色満面の笑みを浮かべて旧友との再会を至極喜んでい

る。それに呼応するかのようには絨那も頬を緩めて木乃香の背中に腕を回し、同じように満面の笑みを咲かせて再会を喜んでい

る。“動く者”が居るのなら少なくとも“動かない者”も居るのは当然で、和気藹々とする教室内の前半分とは裏腹に、席から動かない者が固まっている後ろ半分は静寂に包まれていた。

エヴァは机の上に足を乗せてさも退屈そうな顔を浮かべて傍観し、その従者である茶々丸は無表情のまま眼前で繰り広げられている騒ぎを眺めている。

俺の左前の席に座っている長谷川は、このクラスの双子率狂ってるだろ、と嘆きの言葉を漏らして机に突っ伏し、ザジは……窓の外を眺めていて何を考えているか分からない為、省略する。

龍宮は我関せずといった様子で静観を決め込んでおり、俺も桜咲絨那という人物像が分からない為、様子見をしている。

そして最後に　　桜咲刹那も席から一步も動いていない。

双子の妹が戻ってきたのだから真っ先に動く物だと思っていたのだが、予想に反して刹那は席から動かず、ただその様子を眺めているようだった。

今も目の前で弑那と木乃香が過激と表現していい程にじゃれあっているが、刹那に席から動こうとする素振りは一切見当たらなかった。自らの席が真後ろに配置されている為に刹那の顔色を窺い知る事は出来なかったが、その背中からは哀愁に良く似た何かが漂っているような気がした。

今現在も騒ぎは収まっておらず、担任である筈のタカミチ先生は教室の隅に避難しており、苦笑いを浮かべて騒ぎをボンヤリと眺めている。

「なあエヴァ、少し頼みが有るんだが……裏の匂いはするか？」

つまらなさそうな面持ちで不遜な態度を取り続けているエヴァに小さな声で囁き掛けると、一瞬怪訝そうな顔を浮かべたが、本当に暇だったのだろう、理由を聞く事なく快諾してくれた。

机から足を下ろしたエヴァは露骨に眉を顰めて弑那を睨みつけた後、まるで獣が遠くの匂いを嗅ぎ当てようとするように顎を少し上げて、小さな鼻をひくつかせた。

一瞬、目を険しくしたエヴァだったが、通常通りである目付きの悪い表情に戻ると、せせら笑うかのように鼻を鳴らして使い物にならないと忌憚のない意見を零す。

エヴァ曰く弑那を一言で言い表すとすれば“一兵卒”らしい。

一兵卒というエヴァの表現は無意識の内に納得してしまう程、至極妥当だった。

噛み砕いて解釈すれば、訓練は受けているが戦場には赴いた事が無い兵士、という事なのだろう。

血の匂いは若干するが殆ど自らが傷を負った時に付着した血の匂いらしく、他人の血は被っていないらしい。

刹那と弑那の二人ならどちらが強いのかとエヴァに質問すると、比べ物にならないと溜め息混じりに返されてしまった。

弑那が弱すぎるのか、それとも。

そんな些細な疑問を解消しようと、再び口を開き掛けた時だった。

「主三」

今まで黙したまま机の上から騒ぎの様子を傍観していた筈のシアーが、突然口を開いたのは。

今現在、堂々と机の上にシアーが存在しているが……クラスメイト達には受け入れられている。

科学が進歩し過ぎている為か、麻帆良に認識障害が掛かっている為かは分からないが、誰も不思議に思わないらしく、案外クラスのマスコットキャラクターとして可愛がられている。

当然、裏を知る人間には怪訝な瞳で見られたが……エヴァが言っていたように魔力も何も感じず、玩具にしか見えない為か今では普通に受け入れられている。

……そのシアーから。

「主二仕エル俺ダカラ分カル事ナンダガ、アレハ良クナイ匂イガスル」

「……………あ、アレって弑那の事か？」

思い掛けない発言を聞かされて虚を衝かれた俺は幾許かの間だけ思考が停止し、暫くして戸惑いがちな声色でシアーに聞き返す。

「……………始末スルベキダ」

一拍だけ間を置いてから、シアーはボソリと小さな声で物騒な事を漏らす。

幸いエヴァには聞こえなかったようで、再び机に足を乗せて胸の前で腕を組み、眉間に皺を寄せたまま目を閉じていた。

シアーの思わぬ暴言に、額から嫌な汗が流れ始める。

何故なら俺は今、シアーに『敵を近寄せるな』と命令してある。

その命令を与えられているシアーが弑那を敵と判断したのなら。

最悪の予想が脳内に過ぎった俺は即座にシアーを鷲掴みにし、ポケツトに押し込んでカードに戻す。

ふう、と安堵の溜め息をついて額の汗を拭ったその時、目の前の机に黒い影が差した。

ほぼ無意識の内に顔を見上げれば、そこには桜咲弑那が立っており、無言で俺を見下ろしていた。

どうやらいつの間にか騒ぎは鎮圧されたらしく、まだざわついた空気でではあったが、皆が自らの席にキチンと着席している。

「……どうも」

その場に佇んでいた弒那は低い声で呟いて、俺に対して軽く会釈してくる。

今になって思えば会釈したと言うより、ただ何の意味もなく首を縦に振っただけのように思えた。

一応、簡略化された物とはいえ挨拶されたのだから、俺も言葉を返そうと口を開いた……筈だった。

言葉が喉を通らずに、口をポカンと開けたままの間抜けな表情のまま硬直してしまう。

まるで、蛇に睨まれた蛙のように身動きさえ取れなくなった。

まだ教室の中は、ざわめいている。

異常に聴覚が発達してしまったかのように、教室内の喧騒がやけに耳に届く。

話に夢中になっている為か、ソレに誰も気づいていない。

眼前の人物が皆に背を向けている為か、ソレに誰も気づけない。

横に座っているエヴァでさえも見抜けなかったようで、退屈そうに

欠伸を噛み殺している。

眼前の人物が会釈を終えて、俺を見下ろす瞳には。

初めて見た時に受けた優しげな印象など、まやかしだったと感じてしまう程の。

深い軽蔑と怨嗟の色が、確かにあった。

第四十五話（後書き）

どうなることやら……（苦笑）

恐らくですが、次で原作前の話は最後になると思います。

ではでは。

第四十六話（前書き）

更新が少し遅れてしまい、すみません。

前回、次で原作前の話は最後になると言いましたが……無理でした
（汗）

何故だ、何故長引くんだ……（苦笑）

では、短いですが……とじぞ。

第四十六話

路傍を徘徊する醜い蟲を見下ろしているかのような冷たい瞳。

その冷え切った瞳の色を一切隠す事なく、刹那の妹は俺を見下ろしてくる。

言葉を返す事も身動きを取る事も、その瞳から視線を逸らす事さえ出来ず、ただ俺は為す術もなく固っていた。

そうして、どれ程の時間が経ったのだろう。

一瞬だったかもしれないし、長い間その瞳に見詰められていたのかもしれない。

最初に動きを見せたのは桜咲弑那の方だった。

俺の動揺を見て取ったのか、ただ蟲を見下ろす事さえ億劫になったのか。

微かに冷笑を浮かべ、嘲笑うかのように小さく鼻を鳴らした桜咲弑那はクルリと身体の向きを変え、自らに宛がわれた席へと歩き出す。

冷酷な視線が向けられなくなった事で、身体の緊張が徐々に弛緩していく。

情けない話だが、ほっと安堵の溜め息をついてしまう。

あの瞳には、耐えれない。

親しい友人の顔に酷似した人物からの、あの瞳には。

まるで自分の存在を全否定してくるような冷たい瞳には、あれ以上耐えれなかった。

「悪いね、急拵えの席になってしまって」

ザジ・レイニーデーの真後ろ、教室の窓側の最後列に設置された席に腰を下ろした桜咲弑那に、教壇に立ったタカミチ先生が申し訳なさそうに声を掛ける。

その声に、桜咲弑那はかぶりを振った。

「いえいえ、急に戻ってきた私が悪いんです。今日は授業を立ったまま受ける事になると思ってましたから」

先程までの表情とは打って変わり、穏やかな面持ちでタカミチ先生に応えた桜咲弑那の言葉に、教室内にドツと笑いが起こる。

それは無いだと誰もが笑い、顔を緩ませて桜咲弑那に目を向ける。

当の本人は割と本気だったのか、皆から自分へ向けられる視線の意味が分からないようで、キョトンとした表情を浮かべて教室内を見渡している。

その動作が更なる笑いを誘ったのだろう。

抱腹絶倒という様子で皆が笑い声を上げ、再び教室内が騒がしくなっていく。

遅れて桜咲弑那も皆が笑う意味を理解したのか、頬を赤らめて頭を搔いてみせる。

誰もが笑い声を上げる最中、俺は桜咲弑那という人物から瞳を逸らせずにいた。

「ふ……ふわあ、あ……む、どうした？」

大きな欠伸を噛み殺し、小さな背中を伸ばし終えたエヴァが俺に声を掛けてくる。

声を上げる事も笑う事もなく黙したまま目を離せなくなっていた人物から、ようやく視線を外す事ができた俺は小首を傾げているエヴァに目をやる。

「あ、いや……」

振り向いたのは良かったのだが上手く説明する事が出来ず、言葉に詰まってしどろもどろになる俺を怪訝に思ったのだろう。

「何か、あったのか？」

問ってくるエヴァは、見るからに俺を訝しむ表情を浮かべている。

訝しむと言っても、俺の事を心配してくれているのは確かだが。

「……何でもない」

まさか会ったばかりの人物に軽蔑と怨嗟の籠った瞳を向けられた、

と言える筈もなく。

何事もなかったかのように首を左右に振ってはみたのが、やはり声音ばかりはどうしようもなく固くなってしまった。

そうか、と一言だけ呟いたエヴァは机に突っ伏して、まるで教室内の喧騒など耳に届いていないように目を瞑り、一時間目の授業すら始まっていないのにも拘わらず睡眠体勢を取り始めた。

呆れた俺は白の弾丸が飛んでくるぞと注意を促すが、朝は眠たいのだと鬱陶しげに返答されてしまった。

どうせ昼も眠たいんだろと皮肉を言ってみたのだが返事はなく、返ってきたのは静かな寢息のみ。

隣席の友人の怠惰っぷりに嘆息しつつ、横目で渦中の人物の様子を窺う。

再び自らの周辺に集まってきたクラスメイトと親しげに話しを交わすその様子は先程までの様子とは一変しており、更に俺の頭を悩ませる要因となった。

何故、俺が“あんな目”で見られなくてはならない。

だが、俺に怨まれるような事をした記憶は一切無い。

また刹那の時と同じように、知らない内に何か仕出かしてしまったのだろうか。

はあ、と深い溜め息をついて悪い考えを振り払うかのように激しく

かぶりを振る。

考えても仕方ないと諦観し、机に突っ伏して俺も瞳を閉じた。

まだ、教室内は騒がしい。

タカミチ先生が騒ぎを鎮圧させようと声を上げているが、まだ教室内はざわついている。

考える事を放棄した脳は微睡み始め、そんな騒がしい声さえも気にならなくなるぐらいに意識を希薄にさせていく。

エヴァの静かな寝息だけが耳に届き始めた頃、俺の意識は完全に真っ白となった。

暫くして、二人仲良く額を赤く腫らす事になったのは言うまでもないだろう。

餓えに取り憑かれた猛獣達を檻から解き放つ鐘が鳴る。

それまで檻の中に閉じ込められていた鬱憤を発散するように、猛獣達は我先にと教室から飛び出していく。

彼女らにとっての戦争は既に始まっており、一分一秒も無駄には出れないのである。

今こうしている間にも食券を買い占める者、はたまた購買を買い漁る不届き者がいるかもしれない。

三大欲求の一つに突き動かされ、食糧を確保するという同じ目的を持つ筈の仲間と競い争いながら廊下を駆け抜けていくその姿は、正に圧巻の一言に尽きる。

目を血走らせて空腹を満たそうと檻からバネのように飛び出している者達とは裏腹に、教室の中は嵐が過ぎ去ったように至って平和である。

何故なら教室に残った人物の殆どが自ら食糧を既に確保している者達であり、弁当を持参している者、既に物資を調達している者、おこぼれだけで食事を済ませる者、など理由は様々ではあるが、机を寄せ合って親しい人物と食事を取るのが教室に残った者の常である。

中には例外もいるが。

食糧を求めようとせよ、既に食糧を確保している訳でもなく、昼

休みになるとフラリと教室を後にする人物も中には存在する。

エヴァと茶々丸の二人もそうである。

まだ生まれて間もない茶々丸の定期検査があるらしく、昼休みになると二人は教室から出ていってしまうのだ。

いつものように律儀に御辞儀をしてくる茶々丸と、早く行くぞと廊下から従者を急かすエヴァの凸凹コンビを見送った俺は、鞆から弁当を取り出して木乃香達の元へと向かう。

神楽坂と木乃香の二人と食事を取りつつ、すぐ後ろの席で同じように集まって食事を取る図書館探検部の三人とも会話を交えながら、昼休みの時間を過ごすのが俺の常日頃である。

木乃香達の元に辿り着いた俺は早速、小さな弁当箱の蓋を開けて中身を堪能する。

……堪能すると言っても自分で拵えた物なのだが。

ホントよくそれだけで足りるわね、とパンを嚙りながら呟いた神楽坂の言葉を受けて、俺はダシ巻き卵を頬張りながら改めて弁当を見下ろした。

弁当の大きさは筆箱程度しかなく確かに小さいのだが、この量で満腹になってしまうのだからどうする事も出来ない。

神楽坂が何も言わずに見詰めてくるので、何となくウインナーを箸で差し出してみると、ガリガリ何だからアンタが食べなさいと一蹴されてしまった。

痩せているつもりはないぞ、と眉を顰めて返答すれば、神楽坂は呆れたように溜め息をついて額に手を添えて肩を落とした。

「鏡を見なさい、鏡を」

かぶりを振って呟いた神楽坂を尻目に、ふと俺は木乃香が居ない事に気付いたので辺りを見渡せば、妹は教室の入口に立っていた。

木乃香の傍には桜咲弑那も立っており、何か会話を交わしている様子だった。

その時、目の前の木乃香と会話していた筈の桜咲弑那の視線が俺に向けられた。

口に食べ物を運んでいた箸を持つ手がピタリと硬直し、力が抜けてしまった箸の先から食べ物为零れ落ちて机の上を転がった。

すぐ傍で神楽坂が何やら喚いているが、そんな言葉は耳に届かない。

再び冷え切った双眸を向けてくる人物を、今度はしっかりと見詰め返した。

やはり、何かの間違いではないようだ。

桜咲弑那は確実に、俺を敵視している。

……理由を突き止めなければならない。

再び冷え切った双眸で俺を見てから、瞬時に穏やかな双眸へと切り

替えた桜咲弒那は木乃香と会話を終えたらしく、小さく手を振ってから教室を出ていった。

暫くして、木乃香が少し残念そうな面持ちで此方に戻ってくる。

弒那はどうしたの、と神楽坂が木乃香に訊ねると、どうやら用事があるらしいと我が妹は返答し、弁当を広げて食事を始める。

それは残念といった様子で神楽坂は肩を竦めながらもパンを口に運ぶ。

若干沈んでいた空気も、そこまでで。

直ぐに仲良く談笑し始めた二人を余所に、俺は休み時間の間に呼び出しておいたシアーに小声で命令を与え、膝上からコッソリと移動を開始させる。

膝上から飛び降りたシアーはスルリと足の間を縫うように進んでいき、机の下を通り抜けて教室から出ていった。

後は。

「ごめん、ちょっとトイレ」

木乃香達にそう伝えて箸を置き、俺は二人の返答を聞く事なく席から離れる。

突き刺さるような二人の視線を背中に感じながらも教室から出た俺は、シアーとは逆の方向に黙々と歩を進める。

長い廊下を進み続け、ようやくトイレに辿り着いた俺は一番奥の広めに設計されている個室に入り、しっかりと施錠した。

勿論、用を足しに来た訳ではなく安全な場所に移動しただけで。

こんな事をするのは気が重かったが些細な情報でも得る必要があり、手段を選んではいけない。

自分でも呆れ返ってしまう程の理論武装を終え、額に手を添えて目を瞑る。

感覚を研ぎ澄まして意識を集中させ、シアーと同調を開始した。

第四十六話（後書き）

テンションで執筆するタイプなので上手く書けた所と、そうでない所の差が……（汗）

次で原作前は終わり……にしたいです（苦笑）

第四十七話（前書き）

更新が遅れてしまってすみません。

原作前の最後の話ということで、かなりの難産になりました。

推敲した割にはクオリティは低いというr y

無駄な前置きはコレぐらいにして……原作前最後の、第四十七話……
……どうぞ。

第四十七話

感覚を研ぎ澄まし、精神を集中させ、神経を鋭敏にしていく。

自らを形成する身体の境界が希薄になつていく感覚と同時に、重力から解き放たれたかのような浮遊感を感じる。

まるで幽体離脱をしているような感覚を味わいながらも、更に意識を集中させて自らを零へと近付けていく。

そんな最中、ふと一つの考えが頭の中を過ぎった。

些細な情報でも知る必要があり、よって手段を選んではいられない。

そうやって一刻前に理論武装を終えたばかりの考えを頭の中で反芻し、そんな考えは詭弁であると自らに対して毒づいた。

集中が少し乱れた為、深く息を吐いて精神を落ち着かせる。

……本当はただ純粹に、怖かったのだ。

俺の存在を全否定するかのような蔑んだ瞳を、躊躇いもなく向けてくる少女が。

そんな瞳を向けてくる理由が分からない。

理由を知りたければ、話し掛ければいい。

面と向かって理由を聞き糺せば済む話。

それが出来ないから、こんな卑怯な手段を取っているのである。

俺は情けない、惨めな人間だ。

自己嫌悪を繰り返していた時、幽体化した身体が憑依する居場所を見つけたかのような奇妙な感触を得た。

どうやら同調が完了したようなので徐に閉じていた双眸を開いたのだが。

目の前の光景に衝撃を受けてしまい、再び瞳を閉じてしまった。

深呼吸をして気持ちを落ち着かせてから恐る恐る瞳を開いたのだが、目に映る光景は何一つ変わっていなかった。

幸いながら頭に血が上るような感覚はしない物の、それでも違和感を感じずにはられない。

何故なら目映い光を放つ蛍光灯が一定の間隔で地面に設置されており、目当ての人物である桜咲弑那は天井を逆さまになって平気で歩いているのである。

現実では有り得ない……まさに天地が逆転しているのである。

《おい……シアー、どこを進んでいる》

《ドコツテ……天井ダガ？》

慣れない光景に驚きながらも俺が低い声で質問すると、まるで何が

悪いのか分からないとでも言いたげな素っ気ない返事が返ってきた。確かにコレなら尾行している人間には気づかれにくいが……。

幸いな事に今現在、廊下を歩いている人物は桜咲弑那のみで他の人は前方には見当たらなかった。

推測だが話し声などが聞こえない為、後方にも誰も居ないだろう。

昼休みの時間に一人も廊下に出ていないなど有り得ない為、恐らく教室が密集している区画から遠く離れた場所まで来ていると思われる。

《シアー、お前どうやって天井を》

不可解な今の状況を聞き出そうとした時、天井を逆さまになって歩いていた桜咲弑那が、すぐ横の教室の中へと入っていった。

《主ヨ、ドウスル？》

その場でピタリと動きを止めて、シアーが次の命令を促すように問い掛けてきたのだが、俺の答えは決まっていた。

《とりあえず地面に下りてくれ》

だった。

廊下の床に着地したシアーを即座に教室の入口の近くに移動させると、中から話し声が聞こえてきた。

中の様子を窺う事は出来ないが、どうやら桜咲弒那だけではなく刹那も教室の中に居るようだったが、この位置では距離が離れている為か二人の会話を聞き取る事が出来ない。

ここまでは良い、問題は次の行動をどうするかである。

このままシアーを教室の中へと突っ込ませれば、直ぐに見つかってしまうだろう。

だからといって、今の場所では二人の会話を聞き取る事が不可能である。

では、どうすればよいのか？

答えは一つ。

時を止めればいい、ただそれだけである。

時を止めている間にシアーを教室の中へと突っ込ませ、隠れる事が出来る場所に移動させる。

残念ながら制限時間は短い、この方法しかないだろう。

決断した俺はシアーに適切な命令を与え、そして。

《『ザ・ワールド』ッ、時よ止まれッ!》

莫大な魔力を消費して、この世界の理を捻曲げた。

シアーが教室に入ってまず目に飛び込んできた光景は、黒板の前に対峙しているかのように立っている桜咲姉妹の姿だった。

桜咲弑那は此方に背を向けているので表情は分からなかったが、その正面に立っている刹那の顔にはありありと怒りの色が見えた。

一秒経過。

世界は止まっただけでも、自らが止まっている猶予は一切無い。

シアーの視界に映る周囲を見渡して、身を隠す事が出来る場所を血眼になって探す。

二秒経過。

机の上……ダメだな、直ぐに見つかる。

机の中なら何とかかなりそうだが、声だけではなく表情や仕種からも感情などを読み取りたいので却下。

三秒経過。

時を止めてしまった以上、敷居の上で立ち止まっている訳にもいか

ない。

取り敢えず教室全体を見渡せるように、机の上へ移動するとシアアに命令を与える。

四秒経過。

素早い動きでシアアは教卓の前にあった机の上に移動し、教室の前方を見渡した。

五秒経過。

しかし、隠れる場所が見当たらない。

仕方がないので後方を見渡させる。

六秒経過。

教室の隅に掃除箱が設置されている。

掃除箱の上なら見つかる可能性は低いかもしれない思ったのだが、二人の視界の端に映っている可能性があり、シアアは外見がかなり目立つので止めにした。

掃除箱の扉は閉まっている為、中に隠れる事も出来ない。

七秒経過。

マズイ、隠れる場所が見当たらない。

焦りが募り始めていた時、ふと視界にある物が映った。

八秒経過。

目に映ったのは、ぶら下がるように天井に設置されている電灯だった。

あそこなら見つかる可能性は低いだろう。

躊躇う事なくシアーに指示を与える。

九秒経過。

自らの爆発を利用したのか、尋常ではない突進力で飛び上がったのかは分からないが、難無くシアーは電灯の上に乗る事に成功した。

ほぼ二人の真上に位置するここなら見つかる事なく、会話を聞いて表情を見る事が可能だろう。

ジャスト十秒、何とか間に合ったようだ。

十秒経過。

《……そして、時は動き出す》

その瞬間、再び世界は時を刻み始めた。

停止していたビデオテープが再生ボタンを押されたかのように、眼下の二人が動き出す。

「何ですか姉さん……こんな所に呼び出して」

教卓に片手を付いてもたれ掛かり、さも鬱陶しそうに吐息を吐きながら桜咲絨那は呟いた。

どうやら二人にシアーの存在はバレていなようで、ほっと安堵の溜め息をつこうとしたのだが、そのまま飲み込む事になった。

何故なら壊れてしまうのではないかと思える程の力を込めて、刹那が教卓を叩いたのである。

「あの態度は何だ……アレが仕えるべき者の態度か!?!」

「……何の話ですか?」

怒りに震えて声を荒げた刹那に対し、桜咲絨那は眉一つ動かさず平然と惚けたように肩を竦めて見せた。

その態度を見て刹那は怒りの臨界点を突破してしまったのか、これまでに一度も見たことがなかった激しい憤怒の表情を浮かべて双子の妹を睨みつけている。

しかし、暫くすると真顔に戻り、自分を落ち着かせるように数拍置いてから口を開いた。

「朝のHRの時間……お前がこのはお嬢様の横を通り過ぎようとした時だ、忘れたとは言わせんぞ」

静かな怒気を孕ませた声で刹那は妹を問い詰めのだが、何故か桜咲絨那は呆れたように溜め息をついて返答した。

「……可哀相な姉さん、やっぱり私はあの人の存在を許容する事なんてできません」

半ば諦観したように刹那を見据え、毅然とした口調で桜咲弑那は返答したのだが。

その瞬間。

ふざけるな、と。

教室内の壁を震わせる程の音量で桜咲弑那を一喝した刹那は、その後も有無を言わさぬ口調で畳み掛けた。

「許容できない？……ふざけるな！もう一度言ってみろ、例えば双子の妹だとしてもお前を斬り殺すぞッ！」

刹那は妹の胸倉に掴み、激しく前後に揺さ振りながら激昂している。

ここまで刹那が感情を顕にした所は見た事が無い。

それに殺す、何て物騒な言葉を吐く事も。

「あの人に人生を狂わされた姉さんが可哀相だと言ったんですッ！だから私は」

隠れていた感情が発露したのか、桜咲弑那は揺さ振れながらも必死に何かを伝えようと言葉を紡いでいたが、その言葉は途中で寸断されてしまった。

温厚な性格の筈の刹那が実の双子の妹である弑那を、何の容赦もな

く殴り飛ばした事によって。

突如として頬を殴られた桜咲絨那は傍にあつた教卓にぶつかりながら、教壇の上で尻餅をつく事になった。

「私は狂わされてなどいないッ！」

もはや抑えがきかないとばかりに怒鳴り声を上げた刹那の表情が、見る見る内に怒気一色に染まっていく。

「“ソレ”が狂つてると言ってるんですよ、姉さん」

絨那は紅くなつた左頬を手で押さえ、諦観したように深い溜め息を地に向かって吐き出し、沈鬱な眼差しで荒い息を繰り返している刹那を見上げる。

「私は……私は狂わされてなどいないッ！寧ろ……寧ろッ、私が……とにかく、態度を改めろ……私達は影からお嬢様達を支え続けるべき」

刹那は掠れた声で譎言のように何かを呟いていたが途中で言葉を嚙んでしまい、尻餅をついたままの桜咲絨那を見下ろして忠言のような事を口にしていた、その時。

「……ましいんだろ」

ボソボソと小さな声で、桜咲絨那が何かを呟いた。

「……何？」

その言葉の全容が気になったのか、刹那は怪訝な表情を浮かべている。

「私とこのちゃんの関係が、羨ましいんだろって言ったんですよ」

吐き捨てるように慥然と呟いた弑那の言葉を耳にして、刹那の身動きが硬直した。

「う、羨ましくなど……」

「いえ、姉さんは私が羨ましいんです」

弑那は断固たる口調で、弱々しく震える刹那の言葉を遮った。

誰の目から見ても分かるように、明らかに今の刹那は動揺していた。顔は蒼に染まり、止め処なく視線は泳ぎ、反駁しようとしても言葉が浮かんでこないといった様子だった。

「このちゃんと私が教室で……じゃれあっていた時、姉さんがどんな顔をして私の事を見ていたか……自分でも気づいていませんでしたか？」

声音に諦念と嘲笑を滲ませながら馬鹿にしたように鼻で笑い、桜咲弑那はスカートのエを払いながら立ち上がる。

「羨望、そして嫉妬……おまけに怒りに満ちた瞳でアレだけ私を見ておいて、否定なんてしないで下さいよ……姉さん」

刹那に対する桜咲弑那の眼差しは血縁者に向けて良い物ではなく、

まるで赤の他人を見ているかのように冷え切っていた。

「違う……違う……私は……」

見る見る内に刹那の顔は絶望色に染まっていき、その顔を錆び付いた機械のように緩慢な動きで左右に振り続けている。

まるで先程までの光景が嘘のようだった。

立場が逆転したかのように刹那は力無く膝を折ってその場に座り込み、顔を両手で押さえて首を左右に振り続け、反対に弑那はそんな実の姉を一切の慈悲が見当たらない双眸で、ただただ見下ろしていた。

「姉さん……お腹、空きましたね。パンでも買ってきましょうか？
ああ……聞こえてないみたいですね」

先刻から座り込んだまま同じ動作を繰り返している刹那に、弑那は芝居がかった口調で話し掛ける。

が、返答が出来る精神状態ではない事を見て取ると、さも呆れ返ったように吐息を吐いて転回し、教室の出入口に向かって歩き始めた。

尾行対象が教室を出ていこうとしている。

……尾行を続けるべきなのだろうか？

しかし、今の俺は全身を強烈な虚脱感に支配されており、思つように口が動かす事が出来なかった。

《シアー……命令……継続、待機しろ》

何とか身体を奮起させて口を開いてはみたが、自分で笑える程に言葉に力が籠っていないかった。

心情を察してくれたのか、シアーは何も言わず黙っている。

弒那は無慈悲な足音を響かせながら、一回も振り返る事なく教室から出ていった。

桜咲弒那から刹那へと視線を移させると、そこには。

「私は……私は……私は……私は」

誰も居なくなつた教室で唯一人。

まるで生の輝きを失つた骸のように、空虚で深淵を連想させる程に昏くなつた瞳を、悲痛に満ちた顔を覆い隠すように押さえた両手の指の間から覗かせて。

掠れた声で讒言を呟き、左右に首を振り続ける刹那の姿があつた。

その光景をシアーの目を通して見た俺の心は、締め付けられるように痛んだ。

自分でも壊れてしまうのではと思える程、心が軋む音が胸中に響く。出来るのなら今すぐ刹那に駆け寄って、小刻みに震えている肩を抱きしめてやりたい。

だが、実体を持たない今の俺にはどうする事も出来なかった。

これ以上、刹那を見ていられなくなった俺はシアーを再び『ザ・ワールド』を使って教室の外に出し、帰還を命じて同調を中断した。

同調を中断してカードに戻せば直ぐにシアーは戻って来るのだが、今は口を動かす事さえ煩わしかった。

気持ちの整理がつかないまま意識を自らの身体に戻し、鉛のように重くなった瞼を開けようとした時だった。

「うーちゃんッ！」

耳を劈くような誰かの焦燥し切った声が、突如として耳朵を叩いた。

瞬時に愛する我が妹の声だと理解した俺は、慌てて瞼を見開く。

突然聞こえた声を妹のソレだと理解は出来ても、目の前の光景を理解する事は出来なかった。

一人用に設計されている筈の狭い個室の中に、神楽坂と木乃香が押し込められるように入っており、妹は歓喜の声を上げて車椅子に座ったままの俺に抱き着き、神楽坂は木乃香の背後で安堵の溜め息をついている。

個室の鍵は確かに施錠した筈である。

「な、何………どういう事？」

開口一番、当惑を口にした俺は全くと言っていい程に状況を理解出

来なかった為、呆けた面持ちのまま二人に説明を求めると、お前は何を言っているんだと言わんばかりに盛大に嘆息した神楽坂は、額に手を当てて瞳を閉じたまま口を開いた。

「アンタの様子を心配して後を追い掛けていった妹が、数分も経たない内に青褪めた顔で戻ってきたのよ……呼び掛けても返事が無いってね」

抑揚のない声で淡々と、神楽坂は語り続ける。

後をついてきていたのか……全然気が付かなかった。

「で……名前を呼んでもノックしても返事が無いから、私がドアを打ち壊したって訳……理解出来た？」

自らの蟀谷の辺りを人差し指で数回叩いてみせた神楽坂は、再び大きな溜め息を吐く。

呆れた様子で神楽坂が経緯を説明している間、木乃香は俺の胸に顔を埋め、背中に両腕を回してしゃくり声を上げている。

「それで、大丈夫なの？」

神楽坂はゴホンと小さな咳払いをしてから俺の容態を訊ねてきた為、何でもないと答えておく。

「木乃香、悪い……心配かけて」

謝罪の言葉を述べながら頭を優しく撫でてやると、ようやく木乃香は泣き止んでくれたようで、徐に顔を上げて濡れた瞳で俺の目を見

つめてくる。

「……大丈夫なん？」

「大丈夫、ピンピンしてるから」

そう言いながら神楽坂の方に視線をやれば、ガツクリと肩を落とすて明らかに落ち込んでいる。

コレって私が弁償する事になるの、と。

留め金のご臨終になっており、力無くぶら下がった状態になっている鍵を指差して。

直ぐに戻ると伝え、先に二人を教室に戻らせた俺は、壊れてしまった鍵を『クレイジー・D』で直しておいた。

神楽坂には上手く伝えておけば、何とでもなるだろう。

修復作業が終わった俺が廊下に出ると、此方に向かってくる相棒の姿が見えたのだが。

「シアー……どうした？」

いつもなら真っ先に俺の膝上に登って来るシアーが、足元の近くまで来た瞬間にピタリと動きを止めてしまった。

「主ヨ……盗聴ヲ命令サレタ訳ジャネエ〜カラ余リ無粋ナ事ハ言イ

タクネエ〜ガ、二人ガ心配シテタゼ……ヤツパリ目ヲ離セネエ〜ツ
テナ」

「……」

シアーの言葉を聞いた俺は何も返答できず、ただ黙り込んでいる事
しか出来なかった。

その後、教室に戻った俺は昼食を再開し、何事も無かったかのように
に装い続けたが、内心では先程の出来事を引きずっていた。

……分からない事が多過ぎる。

桜咲弑那という人物、そして刹那の事も。

結局、その日は桜咲姉妹に話し掛ける事は出来ず。

次の日も、その次の日も疑問を解決する事が出来ず。

時が経てば経つほど話し掛けづらくなっていき。

そのままズルズルと問題を未解決のまま引きずって、月日は流れ
そして。

約一年の月日が、過ぎてしまった。

第四十七話（後書き）

誤字等が多いかもしれません、どうかお目こぼしを……。

真相は未だ分からず……胸中に蟠る物を残したまま原作スタートしてしまふ事に。

狂っていない人間なんて、誰一人として存在しないのかもしれない。

ようやく原作スタートかぁ……もうゴールするry

第四十八話（前書き）

ようやく原作開始。

今回の話を一言で表すなら『舌戦』です。

では、ごんぎ。

第四十八話

時と潮流は人を待たぬように、移りゆく季節は留まる事を知らない。

春を過ごし、夏に堪え、秋を愉しみ、冬を越える。

そうして初めは永劫にも感じられた時間は瞬く間に過ぎていき、自らにとっては必然的である邂逅を迎える事となる。

例え多くの禍根と蟠りを残していたとしても、苛酷なる運命の齒車は独りでに廻り始めている。

漸く、役者は揃った。

しかし、自らが演じる寸劇に如何なる結末が待ち受けているのか、誰一人として分かる者は居ないだろう。

麻帆良の通学風景は、まるで戦争地帯のようだと誰かが言った。

発言者の分からない戦争地帯という表現は、正に言い得て妙である。

自らの鍛えられた脚力のみで学校へ向かう者、数多の道具を駆使して学校へ向かう者などなど手段は様々だが、目まぐるしい勢いで人が行き交う事に違いはない。

更に始業の鐘が鳴る寸前の時間になれば、その激しさは一層に増す事となる。

何故なら遅刻者には罰則が課せられる為、それを免れようとする生徒達は躍起になって学校へと向かう訳である。

だが、生徒の中には余裕を持って行動する者もいる訳で。

「でもさ、学園長の孫娘のアンタ達が何で新任教師のお迎えまでやんなきゃなんないのよ」

「まあまあ」

大きな欠伸を噛み殺しながら忌憚のない意見を漏らす神楽坂を、にこやかに笑った木乃香が宥めている。

今現在、俺達三人は人も疎らな通学路を急ぐ事なく、のんびりと登校している。

時刻は七時を少し廻ったところで、周りには部活の朝練がある者や学校に特別な用がある者しかいない。

本来なら朝練も特別な用も無い俺達が登校するには早過ぎる時間なのだが、通学ラッシュの時間になってしまうと俺の足では人波に飲み込まれてしまうだろうと、二人が配慮してくれて一年が経とうとしている。

無論、初めは断った。

二人が無理をする必要は無い、自分だけが早く登校すれば済む話だと。

だが俺の反対意見は簡単に撥ね除けられてしまい、二人の好意に甘える事となった。

そして今朝は前日に新任教師が来るので案内してやって欲しい、と学園長に突然言われ、新任教師との待ち合わせ場所へと向かっている最中である。

何やら木乃香と神楽坂の二人は新任教師と占いの話で盛り上がっているようだったが、周りの目を気にせず騒いでいる二人と相反するように俺は黙したまま思考に耽っていた。

来てしまったか、と。

基本的に彼方から干渉してこなければ、今の所は手を出すつもりはない。

しかし、これは断じて言える事実でもあり、気分が滅入る要因でもあるのだが。

まず彼方が干渉してこないなど有り得ない、と絶対に言い切れる。

黄昏の姫巫女と極東随一の魔力を保持する双子。

あの少年と切るに切れない関係になるよう、生まれた日から運命と

いう名の鎖に雁字搦めされている三人なのだ。

俺達三人に関わらない筈がない。

頭を抱えたくなる事実には苛まれながらも俺は未だに騒いでいる二人の横に並び、新任教師が居る筈の待ち合わせ場所へと向かった。

「……………遅いッ！」

神楽坂は鬼の形相を浮かべて声を張り上げ、未だ待ち合わせ場所に姿を見せない新任教師に対して激怒している。

携帯に表示されている時刻はもう少しで始業時間である八時半を迎えようとしており、神楽坂が怒るのも無理はなかった。

「……………どうどう！」

歯を剥き出しにして憤怒の炎を口から吐き出す友人の肩を叩き、木乃香が必死に宥めてはいるものの、もはや時限式爆弾が爆発するのは時間の問題である。

癩癩を起こしてしまったら、神楽坂は誰にも止められなくなる。

唯一である燃え盛ってしまった炎の鎮火方法が『爆風消火』しかなく、炎を蹴散らす爆風を起こせる程の気性の荒い人物は今現在、ここには居ない。

何とか神楽坂の気分を紛らわそうと、木乃香は自らが得意とする占いの知識を駆使し、熱り立つ暴れ馬の目前にタカミチ先生という名の人参をぶら下げようとしていた時だった。

ゆらりと小さな小さな人影が、仁王立ちしていた神楽坂の直ぐ傍に蟠る。

そして。

「あの……あなた失恋の相が出てますよ」

木乃香の口車に乗せられて妄想世界に入り込もうとしていた神楽坂に、現実世界に引き戻すかのように突然現れた少年はそう告げた。

自らが大型地雷を踏み抜いたとは知らず、好意で教えてあげたんだと言わんばかりの健気な表情を浮かべて。

その瞬間、爆発に巻き込まれるのは御免だと言わんばかりに、大型地雷から咄嗟に距離を離れた者が二人いた。

一人は俺で、もう一人は木乃香である。

何故か危険察知能力に長けている妹と目が合うと、木乃香は何も言わずにかぶりを振った。

もう助からない、とでも言うかのように木乃香が憐れみの瞳を向ける先には、爆弾発言を言った少年が立っている。

必死の鎮火活動も虚しく、一度火が消えたかと思われた導火線が再び燃え始め、そして。

「何だところんガキヤあああッ！」

「ひいっ!？」

少年の頭を鷲掴みにして軽々と片手で持ち上げた神楽坂は、ソレが潰れたトマトのようになるのではないかと心配になるぐらい、片腕に力を込めている。

木乃香も神楽坂が制止の言葉を聞き入れてくれない事など把握しているのだろう。

未だ拘束されている犠牲者を助ける素振りを一切見せず、親切丁寧に初等部は前の駅だと少年に教えてあげている。

「いやー、いいんだよアスナ君」

そして二人が少年を迷子と勘違いしたまま別れようとした時、何処からか聞き慣れた声がした。

職員室の窓から声を掛けてきたのは、我々三人の担任でもあるタカミチ先生だった。

各々が挨拶を交わしていると、その少年も元気よく手を振ってタカミチ先生と挨拶し、久しぶりの再開を喜んでいるようである。

ネギ先生、と少年の事を呼んだタカミチ先生の言葉に呆然としている二人には目をくれず、ぶんぶんと手を振り続けている。

暫くして空気が変わっている事に気づいたのか、コホンと咳払いをしてから少年は礼儀正しく一礼し、ハキハキと口を開いた。

「この度、この学校で英語の教師をやる事になりました。ネギ・スプリングフィールドです」

「え……ええーッ!?」

……前途多難である。

「学園長先生ッ！一体どーゆー事何ですか!」

突如として服が弾け飛ぶという不運な事故に見舞われ、泣く泣くジヤージに着替える事となった神楽坂が、黒檀の机に座して顎髭をいじくっている学園長に説明を求めて声を張り上げた。

現在の居場所は学園長室に移り変わり、俺・木乃香・薬味・神楽坂といった順番で横に並び、学園長の前に立って詳しい説明を聞いて

いる。

茶番である学園長の説明を聞き流しながら、俺はサイズが合っていない為にダブダブになっているジャージの裾を折っていた。

何故、ジャージを着ているのかは説明を省略させていただく。

薬味の彼女に仕立てあげようとする学園長の変形した頭に、木乃香と息の合った連携プレーで金槌とシアーを減り込ませている間にも、突拍子もない話は進んでいく。

ネギ・スプリングフィールドが教師になる、これは確定的な運命である。

神楽坂が不平を言おうが、例え俺が足掻いたとしても変わらない決定事項だろう。

これまでの成り行きを静観してきた俺だったが、次の提案だけは首を縦に振る訳にはいかなかった。

ネギ・スプリングフィールドを部屋に泊める事。

神楽坂が提案に対して反対の意志を伝えたものの、仲良くしなさいと学園長に一蹴されてしまい、渋々諦めようとしていたので助け舟を出す事にする。

「……学園長」

「フオ……?」

終始会話に参加していなかった筈の俺に突然名前を呼ばれ、学園長は怪訝な面持ちで此方を見た。

「そんな暴論が通るとお思いで？」

俺は静かな怒りを声音に滲ませながら、反撃の狼煙を上げた。

その瞬間、学園長の目の色が僅かに変わったのを俺は見逃さなかった。

「……暴論とは？」

まるで聞き分けの悪い子供の話を聞いてあげているかのように、学園長は穏やかな声で問い掛けてくる。

「嫌がる生徒の部屋に無理矢理住まわせる、そう言いましたよね？」

「誰とでも仲良くなっていた方が人間として大きく成長できるんじゃないよ」

小さく首を横に振りながら俺を諭すように、学園長は自らの人生論を語り始めた。

「頭ごなしに結論を出すんじゃないやなくてな、何事もやってみるのが肝心なんじゃよ」

若い者は経験が足らなくて困る、と嘲笑うかのように学園長は特徴的な笑い声を上げて俺を見据えた。

普通の生徒なら大人に上手く言い負かされたと思い、ここで引き下

がる筈だ。

恐らく、俺が言い負かされたと思ったのだろう。

傍に立っていた神楽坂は溜め息を吐き、諦観した瞳で虚空を見上げて運命を受け入れるつもりでいるらしい。

だが俺は負けたつもりなど更々なかった。

「個人の意見は尊重されない、と。では……もう一度聞きます、どこに子供を泊めると？」

皮肉った言葉で口火を切り、わざとらしい質問を学園長に訊ねてやる。

すると、学園長は問題を蒸し返してくる俺に若干の苛立ちを覚えたのか、少しだけ眉を顰めて口を開く。

「君らの寮の部屋にじゃよ」

俺が耳にしたかった単語を漸く口にしてくれた事を胸中でほくそ笑みながら、追撃の手をかける事にする。

「寮ではなく“女子”寮です。その女子寮に男性を泊めると？」

穏やかな表情は何処へいったのか、学園長は真面目な顔に戻って未だに食い下がってくる俺を見据えてくる。

「ネギ君はまだ子供じゃ、何も心配することなからう」

そんな物は小事であると言っかのように、学園長は俺に反駁の言葉を投げ掛けてくる。

既に、二度と抜け出せない泥沼に嵌まっているとも知らずに。

「子供ですか、教師ではないのですね」

「ちゃんとした教師じゃよ……それも君らの担任になる教師じゃ」

「では、これから担任になる教師を生徒である俺達の部屋に住まわせろ、そうおっしゃるのですね？」

俺の言葉を聞いて、見る見る内に学園長の顔色が変わっていく。

言葉に詰まり、即座に反論を述べられないようだった。

正論を言えなくなった人間は、周りの状況を述べる事で責任から逃れようとする場合がある。

教室で勉強したかったけど周りが煩くて集中できなかった、とか。

テストで赤点を取ってしまったのは教師の教え方が悪かったから、とか。

そんな物、ただの言い訳に過ぎないのに。

「む……しかしのう、泊まる部屋が無いんじゃから仕方ないじゃろっ？」

学園長はポリポリと頬を掻きながら、小首を傾げて見せた。

無い物は無いのだから諦めろ、とでも言わんばかりに。

だが、論点はそこではない。

「住居先を見つけていない……それは誰の落ち度ですか？」

「む……」

唸り声を上げたきり、学園長は黙り込んでしまった。

年端もいかぬ小娘に舌論で負ける筈がないと思っていたのかどうかは知らないが、それは慢心である。

そして。

「……何日間かだけで良いから泊めてあげてもらえないかろう？」

ついに学園長が折れて妥協案を提示してくるが、そんな言葉を聞く耳は持ち合わせてはいない

「何故、良い大人達の尻拭いを此方がしなければいけないのですか？」

「ぐ……むう、しかしのう……」

未だに負けを認めず無駄な抵抗を続けてくる敗戦者に若干の苛立ちを感じた俺は、決定的な言葉をぶつけてやる事にした。

「この際ですからハッキリ言います。もし、これ以上泊めるだ

の何だの言つのであれば……喜んで俺が部屋から出て行きますよ。学園長に『ネギ・スプリングフィールド』という少年と住むように無理強いされた、と父さんに報告だけはしますがね」

学園長は俺の事を『無知』だと思っているだろう。

そして、父さんは俺達に裏の世界を知って欲しくないと思っている。だからこそ、使える切り札である。

俺達の部屋に薬味を泊まり込ませるだなんて、父さんには報告してない筈だから……連絡したら最悪の場合は東西戦争になるかもしれない。

東が西の長の娘を手中に収めようとしている。と。

此方の最大の切り札であるカードを叩き付けてやると、予想通り学園長は顔面蒼白になり慌て始めた。

「フオ!?……そ、それは……のう木乃香や、木乃羽に何とか言ってやってくれんか?……木乃羽が寮を出ていくと困るじゃろう?」

最後の悪あがきを続ける学園長が、まさか木乃香に話を振るとは想定していなかった俺は、焦りながら木乃香の方に視線をやったのだが。

「姉様が出ていく言っんやったら、ウチも出ていくえ」

もしも木乃香が学園長の言葉に誘導されてしまったのなら、話が根底から覆ってしまう。

しかし、ぴしゃりと真顔で返答した我が妹の言葉を聞いて、俺は小さく安堵の溜め息をついた。

「むむむ……じゃがのう、学園長として出ていくなど認め」

その時だった。

学園長の言葉を遮って、木乃香が柳眉を逆立てて口を開いたのは。

「じいちゃん、これだけは言うておく……姉様がハッキリ『嫌』って言うときは、絶対に俺も姉様の意見に賛成するって決めてるから。我慢強い姉様が『嫌』と言うのだから今回の事は諦める……わかつたえ？」

今まで聞いた事がなかった男口調で捲し立て、最後にニツコリと最上の笑みを浮かべて学園長を見据えた木乃香に、その場に居た誰もが息を飲んだ。

長年寄り添うように過ごしてきた俺でさえ聞いた事が無いほど、木乃香の声には威圧の意が込められていた。

暫くの間、誰もが腑抜けたように木乃香を見つめていたが、ふと我に返った俺は直ぐに掃討戦を開始する。

「今連絡してもいいんですよ、父さんに」

ぶっきらぼうにそう言って携帯を取り出し、耳に当てて電話を掛けるフリをする。

すると漸く白旗を掲げる気になったのか、学園長は謝りながら自分が何とかすると言いだしたので、論破に成功した事を確信した俺は何も言わずに学園長室から外に出た。

「ち、ちょっと待ちなさいよアンタ達」

示し合わせたように学園長室を同時に出ていき、廊下を黙々と歩く俺と木乃香を呼び止めようと神楽坂が後ろから追い掛けてくる。

「色々とツツコミたい所はあるけど……今日のアンタ達、何か怖いわよ」

「そうか？俺は居たって普段通りだが？」

「ウチも漸く覚えた話し方を披露してみただけやえ？」

「……………改めてアンタ達が双子だったって事を思い知らされたわ
「よ」

「……………？」

その後は原作通りに物事は進んだ。

畏に掛かり、自己紹介をし、歓迎会を開催し……。

どうやら宮崎が薬味に助けられ、神楽坂に魔法がバレたようだが…
…俺には関係ない。

と、言えばどれだけが気が楽になる事やら。

宮崎とは会話は余りないがお気に入りの本を交換する仲だし、神楽坂とは親友のつもりである。

未来が分かっているからこそ、その見えている未来を壊したくないが為に動く事が出来ない自分もどかしい。

宮崎も神楽坂も物語の鍵となる人物である。

その二人に何かあれば、未来にどんな影響を与えるか分からない。

ただでさえ良く分からない事が多いのに、これ以上不安の芽は育てたくない。

よって、静観を続ける事にする。

以上。

「…………ふう」

日記帳を直してパチリと机の電気を消し、木乃香が眠るベッドの中へと潜り込む。

当然、部屋の中に薬味の姿はない。

どうやら、学校の宿直室が一時凌ぎとして宛がわれたようである。

これで安心して眠る事が出来る。

木乃香の静かな寝息を聞きながら、俺は眠りの世界に落ちていった。

第四十八話（後書き）

文才欲しい……途中の手抜き感が否めない（苦笑）

一話を執筆するのに五〜六時間掛かるし……はぁ（汗）

第四十九話（前書き）

まさかりレンザのお世話になるとは……。

すみません、更新が遅れてしまいました。

ry
今回も文体が不調ですが、読んでいただけると作者のパワーが溜ま

では、ごっげ。

第四十九話

一日の始まりを知らせる目映い朝日さえも、まだ姿を現していない時間。

普通なら誰もが寝静まっている筈の時間に何の前触れもなく、その場に居る者を強引に覚醒へと導かせる騒がしい電子音が鳴り響く。

枕元で規則正しいリズムで泣き声を上げ続ける目覚まし時計の息の根を止める為、目を閉じたまま手探りでソイツを探す。

しかし、我が妹に抱き着かれている為に身動きが取りづらく、中々目当ての物体が見当たらない。

その時、目前の木乃香が僅かに眉を顰めて煩わしそうな吐息を漏らし、僅かに身を動かした。

急がなくては木乃香を起こしてしまう。

暫く闇雲に探していると、ひやりと冷たい何かが手に触れた。

揺蕩う意識のまま時計の上部にあるスイッチを押し込むと、ぴたりと泣き声は収まった。

漸く泣き止んだ時計をベッドの端に追いやりながら大きな欠伸を噛み殺し、俺を抱き枕にして静かな寝息を立てている木乃香の頭を優しく撫でた。

「……はっ」

すると寝ているにも係わらず、俺の胸元に顔を埋めた木乃香は満足げな溜め息を漏らす。

そんな妹の無防備な姿を見て、思わず笑みが零れてしまう。

このままずっと眺めていたのだが、そんな訳にもいかない。

仕方なく俺を抱きしめて離さない木乃香の腕を優しく解いてやり、ベッドからのそのそと這い出した。

「は……んっ……はう」

まるで猫のように両手を前に伸ばして腰を真上に突き出し、目一杯に背筋を伸ばして強張った筋肉を解してから傍に置いてある愛車に座る。

乱れた髪をゴムで結び上げながら壁掛け時計を見上げれば、時間は四時過ぎとなっていた。

窓の外に目をやれば、まだ辺りは真っ暗である。

恐らく部活動の朝練に参加している者でさえ、まだ夢の世界に浸っている時間だろう。

一応、俺も弓道部には所属している。

が、朝練をしても意味がない程に人数が少ないのである。

部活動として存続できる最低限の人数である五人は自分を合わせれ

ば何とか居るものの、その半数が幽霊部員という手詰まりな状況なのだ。

その癖、試合に出場すれば好成績を残す人物が多いので学園側も対処に困っているようだ。

……その中の一人が自分な訳だが。

俺は基本的に射の鍛練はスタンド能力や魔法と組み合わせる行為、必然的に色々な意味で安全安心な魔法球の中でしか鍛練は行えないという事になる。

なので偶に道場を借りて気分転換として射を行うだけの幽霊部員だったのだが、最近は顧問の先生に実力があるのだから試合に出たらどうだ、と半ば強引に出場させられてしまっている。

兎に角、そんな廃部になりかけている部活が朝練を行う筈もなく。

では何故、こんな時間に起きているのかというと。

「神楽坂、起きろ」

総ての準備が完了したので、二段ベッドの上段で眠りこけている友人に声を掛ける。

が、呼び掛けられた筈の神楽坂が目を覚ます気配は全くないようだ。

「ああ……タカミチ、先生え」

目を覚ますどころか神楽坂は艶めかしい声で譚言を呟き、ベッドの上でモゾモゾと身悶えするように蠢いている。

そんな光景を目の当たりにして若干の苛立ちを禁じ得なかったが、諦めずに再び声を掛けてはみたものの返ってきたのは最愛の人の名前を惚気た声で連呼する寝言のみ。

本当なら今すぐにも神楽坂の頬をビシバシと叩いて起こしてやりたいのは山々なのだが、二段ベッドの上段で対象が寝ているので梯子を登る必要があり、俺の脚では少し危険が生じる為に作戦を決行できない。

しかし、作戦を決行できない俺に代わり、任務を確実に遂行してくれる相棒は膝上で命令を待っている。

お馴染みになった命令を相棒に与え、その後は手榴弾を穴蔵に投げ込むようにベッドの上段へと放り込んでやる。

すると。

「¥\$ %#&*ゝツ!？」

人間の物とは思えない程の奇声上がり、命令を完遂した筈の相棒がベッドから廊下側の壁へと吹き飛んでいつてしまった。

「……だからッ、何でアイツを口に突っ込まして私を起こすのよッ
」!

吹っ飛んでいった相棒の無事を祈りつつ、ベッドから身を乗り出して鬼のような形相を浮かべ、朝っぱらから元気に大声を張り上げている神楽坂に目をやった。

「朝の挨拶は『おはよう』だ、神楽坂。あと木乃香が起きるから静かにしろ」

剥き出しにしている歯の隙間から炎を吐き出しそうな勢いで此方を睨んでくる神楽坂の視線を一蹴し、対象が覚醒した事を確認した俺は吹っ飛んでいった相棒の回収へと向かう。

「起こしてくれるのは有り難いけどさー、起こし方をどうにかしてよね」

不満を漏らす神楽坂の嘆息混じりの言葉と梯子の軋む音を背後で耳にしつつ、俺は労いの言葉を掛けながら相棒を拾い上げ、綺麗にハンカチで拭いてやる。

振り向けば神楽坂が胸の前で腕を組んで仁王立ちし、俺をジッと睨みつけている。

眠りは深い癖に一度目が覚めれば即座に行動できるのは神楽坂の長所だろう。

そんな事を考えながら執拗に視線を送ってくる神楽坂に対し、俺は肩を竦めながら口を開いた。

「いいから早く顔を洗ってこい……遅刻するぞ」

「もう……わかったわよ」

まだ何か言い足りなさそうに眉を顰めていたが、神楽坂は一度ガツクリと肩を落としてから早足で洗面所へと向かっていった。

自分で調理した物を美味しくそうに食してもらえるのは嬉しいもので、例え毎日のように見ていたとしても自然に笑みがこぼれてしまう。

現在、ガラステーブルの上に並べられた朝食を平らげていく神楽坂の前に座り、その様子を何気なく眺めていたのだが。

「……どうした？」

身支度を終えて制服に着替え終わっている神楽坂が不意に箸を止め、食い入るように俺の顔を見詰めてきたので怪訝な表情で問い掛けてみた。

すると、神楽坂は行儀悪く右手で持っていた箸を俺の方に向けて、底意地の悪い笑みを浮かべる。

疑問符を頭の上に浮遊させている俺を見て、愉悦しているかのよう

「いやいや……いつも何だかんだ言ってるけど、このはもやっぱり女の子なんだなあって思っただけよ」

悪びれた様子もなく言い放たれた神楽坂の言葉を耳にして、俺は全身の血が煮え立つような火照りを味わう事になった。

俺は酸素が欠乏している魚のように幾度か口を開閉させてから、ようやく喉から言葉を捻り出す事が出来た。

「な……何でさ」

「私のご飯を食べてる様子を眺めてるのはってさ、本当にお母さんみたいなの表情なんだもん」

「べ、別に神楽坂の為に朝ご飯を作ってあげてる訳じゃないから……俺と木乃香の朝食と昼ご飯の弁当用に作った物の余り物を分けてやってるだけだ」

「へえ、わざわざ私がバイトで起きる前の早い時間から作るんだ、朝食とお弁当」

芝居がかった調子で話す神楽坂の言い分に反駁する言葉が見つからなかった俺は、精一杯の怨念を込めて睨みつける事しか対抗策がなかった。

俺の視線に根負けしたのか神楽坂は苦笑いしながら謝罪の言葉を述べて、そのまま話を続ける。

「ま、アンタは自分で思っている以上に女の子らしいって事よ。わ

わざわざ早起きしてご飯を作ってくれて、こんなに美味しい料理を毎日食べさせてくれるんだから……私が男だったら結婚したいぐらいに良い女の子よ、アンタは」

聞いていて鳥肌が立ってしまったような台詞を神楽坂は口にして、ニンマリと微笑んでみせる。

「なッ、何言つて」

「ご馳走様、じゃあ私バイト行ってくるわね！……あのさ、このには本当に感謝してるから、何か困ってる事があつたら言つてよね」

そう言つて神楽坂は静かに箸を置いて立ち上がり、バタバタと慌ただしく部屋から出ていってしまった。

言葉を返す暇も与えず部屋から去つていった神楽坂に対して恨み言を呟きながら、俺は台拭きでガラステーブルの汚れを綺麗にし、残されていった空の茶碗や皿の片付けを始める。

「……………結婚、か」

丸盆の上に食器を並べながら頭の中に残った単語を、誰にも聞こえぬような忍び声で呟く。

自分には関係の無い話、とは言い切れぬ事柄。

黒なら黒、白なら白と線引きが出来ずに狭間の灰色の中を漂い続けている人間にとって、幾ら頭を悩ませようとも勇断も妥協も出来ない問題で。

ぼつりと呟いた独り言は誰の耳にも届かずに虚空へと消え去る、筈だった。

「結婚？……うーちゃん、顔が真っ赤つかやけどどないしたん？」

「ひゃッ！？……こ、木乃香起きてたんか……」

不意に背後から寝呆け眼を片手で擦りながら問うてきた木乃香に、驚きの声を上げてしまった俺は恥ずかしさを紛らわす為、前を向いて何事も無かったかのようにテーブルの上を片付ける事に専念する。

「んー今起きた……で、どないしたん？」

頭の上から木乃香の甘い声が耳朶に届く。

俺の両肩に手を乗せて更には頭頂部に顎を置き、木乃香が背中に凭れ掛かってくる。

我が妹の表情を視界に捉える事は出来ないが、確実に笑みを浮かべているだろう。

そう、悪魔の笑みを。

「……どないもせえへん」

なあなあ、と執拗に声を掛けてくる木乃香を徹底的に無視し、俺は食器を重ね乗せした丸盆を持って立ち上がろうとしたのだが、寸前にその丸盆を奪い取られてしまった。

「ええよウチが運ぶから……で、どないしたんや……なあ、うーち

やん？」

「……つつさいッ」

その後、諄いと言いたくなる程に追求してくる木乃香を相手するのは、かなりの体力を要する事になった。

微量に火薬を加えられた日常が、変わる事なく今日も始まる。

「きろ」

騒音塗れの教室の中。

耳を劈くような甲高い話声。

睡眠には適していない筈の環境が、何故か今は心地好かった。

時間を消費するには惰眠を貪るのが一番で、睡眠を欲する身体的需求にも応えられるのだから尚更である。

「　、起きろ」

全神経が睡魔に敗北を喫し、意識を失っていく。

右頬に突き刺さるようにして減り込んでいる相棒の身体が若干痛かったが、もう気になる事はないだろう。

後少して夢の世界へ飛び立てる、そんな時だった。

「おい、起きろ」

人が良い気分で寝ていたというのに、誰かに肩を激しく揺すられたのは。

我が眠りを妨げるのは誰だ、と荘厳な口調で呟きながら机から身体を起こし、真横を見てみれば顰めっ面のエヴァが此方を見ている。

しかも何故か呆れ果てた瞳で上から見下ろされているのだ。

スリープモード状態の脳髓が導き出した結論として、どうやらエヴァは直立していると考えるのが妥当だった。

粗方機能を停止している頭が何故という発想に至る事はなく、寝呆け眼のまま無言で親友を見上げていると、エヴァは金色の長髪を微かに揺らしながら肩を竦め、諦観したように吐息を吐く。

エヴァは時と場合を考えろ、と意味深な言葉を述べて前を向いてしまい、額に手を添えて首を左右に振っている。

訳も分からぬまま自分も前を向いてみると、エヴァの言っていた言葉の意味が一瞬で理解する事が出来た。

数多の双眸が、此方に視線を向けている。

教室内で朝の挨拶を行おうとしていないのは、どうやら自分だけらしい。

慌てふためきながら謝罪の言葉を述べ、机に手を付いて立ち上がる。

「あ、では……気を付けー礼い」

今日の日直は宮崎らしく俺が立ち上がった事を確認すると、弱々しい声ではあったがキチンと号令の言葉を言つと、皆も号令に従って黒板の前に立っている担任と朝の挨拶を交わす。

「着席ー」

その宮崎の一言で席から立っていた人達が徐に椅子へと座っていく。

例にも漏れず自らも車椅子には座ったものの、恥ずかしさのあまり机に突つ伏したまま顔を上げられなくなってしまった。

「お前の眠りを妨げたのは、私だぞ」

真横からエヴァの忍び笑いと芝居がかつた調子の声が聞こえてくるが、敢えて反応しなかった。

こつという時は不貞寝するのに限るのだ。

「じゃあ1時間目をはじめます。テキストの」

年端もいかに教師となった少年の幼い声を耳朶に届かせながら、

担任が変わった事により白い悪魔が額に着弾する可能性が無くなった安心感から、俺は気付けばぐっすりと眠り込んでいた。

「このはが寝ている間、大変だったんだから……いきなり服を脱がされてさあ」

神楽坂は言葉の締め括りにあのガキンチョめ、と怨念たつぷりのドス黒い声で呟きながら弁当に残った最後のおかずを口に運んでいる。

今現在の状況は、四時間ある朝の授業が終了し、安らぎの時間である昼休憩を満喫している最中で。

俺と木乃香は食後の間食を愉しみながら、神楽坂の愚痴を聞いてあげている。

どうやら自分が寝ている間に原作通りに運命が進み、神楽坂の服が消し飛ばされたようで……その事に対して本人はお冠のようである。

やっぱり部屋に泊めなくて良かったわ、と安堵と諦観の入り混じった溜め息を吐きながら、神楽坂は弁当を風呂敷に包んで鞆に押し込んだ。

いつもなら食後は木乃香と談笑する筈の神楽坂も流石に今日は虫の居所が悪いようで、机に片肘をつけて不機嫌丸出しの表情で虚空を見上げている。

横の席に座る妹から機嫌を直すようにと密勅を受けた俺は、仕方なく神楽坂の機嫌を手元にあつた甘味で元に戻そうとしていた刹那。

「アスナさんアスナさん」

神楽坂の煩いの種である葱が爆発物を手にしてノコノコとやってきたのである。

また来たわね、と鱈谷に青筋を浮かべて吐き捨てた神楽坂は、何も知らずに近寄ってきた葱に対して鬼神のような表情で突っ掛かっていった。

「何の用よ」

精一杯の怒気を込めて私は貴方のお陰で不機嫌ですよと神楽坂は対応したのだが、誠に残念ながら当の本人には伝わらなかったようで、瞳をキラキラと輝かせながら葱は小さな試験管のような物を取り出した。

「実は出来たんですよ、アレが」

「アレ?」

無邪気に声を弾ませている厄介者に棘を抜かれてしまったのか、神楽坂は強張っていた表情を少しだけ緩めて目前の葱に問い掛けた。

ホレ薬ですよ、と葱は誰にも聞こえぬように小さな声で呟いたつもりなのかは分からないが、近くにいた俺には丸聞こえである。

幸いながら隣にいる木乃香には聞こえなかったようで、唇に人差し指を添えて首を傾げている。

ホレ薬という単語を耳にして心が揺れ動いたのかピクリと僅かに反応を見せた神楽坂だったが、良心が悪心に勝ったのか荒々しく席を立てて教室を出ていこうとする。

しかし、しつこい勧誘商売のように葱は神楽坂の背中を追い掛けていく。

ついに堪忍袋の緒が切れたのか、その場で神楽坂はピタリと立ち止まって転回し、ホレ薬を堂々と掲げて追ってきていた葱の腕を流れるような動作で掴んだ。

そして有無を言わさぬ早さで葱の手からホレ薬を奪い取り、呆けている少年の鼻を摘んで強引に試験管の中身を飲ませようとしたのを、俺が寸前で神楽坂の手首を掴んで止める事に成功した。

「……………何これ？」

そのまま神楽坂の手から試験管を強奪し、一人芝居を開始する。

わざとらしく試験管の中の匂いを嗅いでみだが、どうやら無臭らしく何の匂いもしなかった。

「あ、あぁッ……………それはアスナさんの為に作ったまほッ　むぐぐ」

魔法、と自ら暴露しようとしていた所を傍に立っていた神楽坂に口を防がれて、その単語が最後まで呟かれる事はなかった。

「ちょ、ちょっと自分からバラしてどーすんのよ。それにそんな言い方だと私まで関係者みたいじゃない」

「……す、すみません」

二人の間で秘密の会話をしているつもりなのだろうが、此方の耳には全て届いてしまっている。

良くも悪くも隠し事が出来ない性分、というのはこういう人達の事を言い表しているのだろう。

少しは落ち着いてきたようで、二人は小さな声で俺からどうやって試験管を取り返そうかと作戦を練っているらしいが、その声も此方に丸聞こえである。

嘆息しながら此方も此方でホレ薬に対しての最善策を練っていた。

処理方法をどうするか、である。

木乃香やクラスの間人間が巻き込まれるのは嫌だったから咄嗟に奪い取ったのは良かったものの、その後の事を考えていなかった。

自ら服用し、薬の効果を抵抗する自信は無くもないが、そんな危険は冒したくなければ口に含みたくもないので却下。

地面に落とすか何かをして中の液体を処理してしまうのはどうだろうか。

恐らく人体に入ってから効果が発動するのだろうが、確証がない。

床に散らばった液体に反応して人が群がる可能性も否定できない為、却下。

となれば、『クレイジー・D』で丸薬に戻すか『キラークイーン』で爆破してしまうかの二択になってくると思うのだが……。

多数の人間が居る教室内で『クレイジー・D』を使用するのは非常に危険である。

それに例え隠れて丸薬に戻せたとしても、二人にどうやって説明するのか。

更に知らぬ存ぜぬで押し通して切り抜けたとしても、再び丸薬を葱に悪用されてしまう可能性が高い。

然すれば、やはり破壊するしかない。

そう胸の中で決心し、目前の試験管をしっかりと見据える。

幸い、此処は漫画の世界なのだから、爆発オチが現実で起きても誰も不思議に思わない筈だ。

チラリと前方に立っている二人の様子を窺ってはみたものの、どうやら話に夢中になっているようで此方に視線は向いていない。

これを好機と感じた俺は威力を最小に設定し、手元にある試験管の中に指を突っ込んで液体を爆弾に変えた。

ぬるりとした液体の感触は気持ち悪かったが、これで一安心である。後はスイッチを押せば中にある液体だけが爆発し、試験管には割れる事も傷一つ付く事もないだろう。

右手で試験管を持ち、誰にも見える事がないように左手を後ろに回し、そして、一呼吸置いてからスイッチを押した。

すると。

ポンと軽い破裂音が教室内に鳴り響いて中の液体は跡形もなく消滅し、爆発した際に生じた小さな爆風が俺の前髪を靡かせた。

幸運な事に手に持っていた試験管が割れる事は無かったが、もやもやと白い煙を口から排出している。

突如として鳴り響いた小さな破裂音に教室内はヒツソリと静まり返ってしまったが、その中でも一番驚いていたのは誰でもない自分自身だった。

威力は最小限に抑えていた筈で、爆音も爆風も起きなかった筈なのだ。

ざわめき始めた教室を尻目に、頭の中で様々な憶測が飛び交っている。

威力の設定を間違えた？

魔力の籠った道具を爆発させたから？

それとも何かしらの外的要因で？

どれだけ脳内で論争を繰り広げようとも、求めている答えは見つからない。

ただ、中身の無くなった試験管を見詰める事しか出来なかった。

そんな時だった、誰よりも早く俺に駆け寄ってきた人物がいたのは。

「うーちゃん、怪我してない!？」

焦燥感が滲み出ている声で叫びながら、木乃香が駆け寄ってくる。

「あ、ああ……大丈夫」

何処か怪我をしていないかと心配してくる木乃香に対して、俺は何処か上の空の返事を返す事しか出来なかった。

「ちょっと、爆発したわよアレ……危ないじゃないの!」

「あわわわ……失敗してない筈なのに」

激昂した神楽坂に胸倉を掴まれて宙に持ち上げられた葱は、足をバタバタとさせながら必死に弁解の言葉を吐いている。

「……何でだ」

消え入りそうな声で呟いた独り言は傍にいた木乃香にも聞こえる事はなく、誰の耳にも届かずに霧散していった。

結局、その後も爆音及び爆風の要因が分かる事はなく。

その日は葱の泣きじゃくりながらの謝罪を受けて、何事もなく一日が終了した。

検証が必要かもしれない。

液体を爆発させたから？

ほぼ密閉された状態で爆発させたから？

何かしら葱が要因に関わっている可能性も否定できない。

また何か発覚すれば日記に書く事にする。

以上。

第四十九話（後書き）

年末年始にかけて仕事が忙しくなるので、更新が遅延気味になるかもしれません……。どうかよろしくお願いします。

皆様のコメントが生きる喜びです（笑）

第五十話（前書き）

魔の五連勤が終わり、漸くの更新です。

今回はシリアスとネタ成分が入り混じっていますので、ご注意ください。

では、どうぞ。

第五十話

あれから後日、『キラークイーン』の事はエヴァに教えていない為、若干ニュアンスが違う質問にはなってしまったのだが、教室で起こった不可解な事件をエヴァに問うてみた。

放った魔法の威力が自らの意思に関係なく増すことはあるのか、とするとエヴァは考え込むように胸の前で腕を組んで長考した後、一概には言えないが可能性としては有ると答えた。

そして大仰に咳払いをしてみせたエヴァは、そのまま言葉を続けた。今現在私達が何気なしに吸っている空気には僅かに魔力が含まれており、それが濃い場所……巷では『パワースポット』と呼ばれる場所で魔法を唱えると若干威力が増す事が有る、と。

だがこれは稀なケースだがな、と最後に付け加えて言葉を締め括ったエヴァは、一度だけ虚空を見上げてから再び此方に視線を戻して徐に語り始めた。

空気中に含まれる魔力はアルゴンや二酸化炭素よりも少ないのだから、よっぽどの事が無い限り魔法には影響を与えないらしい。

後は、家庭用の包丁と刀匠が丹精を込めて造った刀の斬れ味が、どちらが良いかは火を見るより明らかかなように。

魔法発動体には魔力が込められていて、術者が使用する魔法発動体の質によっても放たれる魔法の威力は変わってくるとも言っていた。

簡単に纏めると、魔法には魔力が加われば加わる程に精度が上がるらしい。

あの試験管の中に入っていたホレ薬は魔力の塊であると言っても差し支えない筈である。

という事は魔力の塊であるホレ薬を爆発させた事によって威力が増大した、と考えるのが妥当なのだろう。

しかし、ここで一つの疑問が浮かび上がってくるのだ。

スタンド能力が魔法なのかどうかである。

詠唱が存在しない魔法として、スタンド能力はカテゴリーされるのだろうか。

『ネギま』の世界で放たれる無詠唱魔法は鍛練の積み重ねや術者の熟練度によつて可能になるだけで、元から詠唱が存在しない訳ではない。

然すれば、根本から詠唱が存在しないスタンド能力は魔法ではないという事になる。

しかしスタンド能力を使用する時は魔力を必要とし、何かしらの要素で威力が増す場合も有る。

魔力を使うという事は魔法として能力が発動しているとも考えられるし、不確定要素で威力が増すという事は魔法なのかもしれない。

もし仮にスタンド能力が魔法なのだとするならば、解析や研究を重ねれば自分以外の人間がスタンド能力を使う事が可能になるのではないだろうか。

それは、非常に拙い事になるだろう。

魔法は正しい心を持つ者だけが使用できる、という訳ではない。

自らの利益の為に悪用する者もいれば、正義を妄信して本来の魔法の使い方を忘れている者も、残念ながらこの世界には多い。

そういう人間達が魔法だけではなく、スタンド能力まで使えるようになったとしたら……。

今回の事件が起きた事によって、改めて自分の“この世界”における立ち位置の危うさに気づかされたかもしれない。

ほぼ魔力を必要とせず、凡ゆる物体を治療及び破壊する魔法。

莫大な魔力を必要とはするが、この世の時を止めてしまえる魔法。

そんな魔法を多くの人が使えるようになってしまふ可能性を、俺という存在は孕んでいるのだから。

もしスタンド能力の存在を魔法既得者に知れ渡ってしまったら、それこそ躍起になって研究しようとするだろう。

人権も、本人の意思も関係なしに。

降り懸かってくる火の粉は容赦なく払うつもりだが、それも限界が

ある。

兎に角、これからはスタンド能力が上記の事態を起こしてしまう可能性が有る事を留意しておいた方が良好だろう。

この件に関する発展が有れば、また記述したいと思う。

以上。

「うーちゃん、はよはよはよはよ」

転落防止用の柵を手の平で何度も叩いて早くベッドに來い、と木乃香が急かしてくる。

その姿は子供が欲しい玩具を買ってもらえなくて強請^{ねだ}っているようにも見える。

「……わかったから静かにしなさい」

嘆息しながら日記帳を引き出しに仕舞い込み、机の小さな電灯を消す。

椅子から立ち上がり、覚束ない足取りで未だに柵を叩き続けている妹の元へと向かう。

かなり騒音問題に発展していると思われるのだが、二階で寝ている住民に無意味なよう。

何も無い虚空へと片手を伸ばし、最愛の人の名前を呼び続けている。

「……あんよが上手、あんよが上手」

気づけば急かす為ではなく、木乃香が俺の足取りに合わせて柵を叩いている。

寝言と騒音を無視して漸く目的地に辿り着いたかと思えば、いつの間にか木乃香が壁際に寄って俺が入れるスペースを確保して待っていた。

空いたスペースの敷布団を、ポンポンと手の平で叩きながら。

世話の掛かる妹だと歎きながらモソモソとベッドへ潜り込めば、木乃香から抱き締めるといふ形で歓迎を受けた。

「おかえり」

そう呟いた木乃香の甘い息が顔に掛かる。

「……ただいま」

ニツコリと天使のように微笑んだ木乃香と、場違いな挨拶を交わす。

目と鼻の先には自らの顔に酷似した人物が横たわっていて、背中に腕まで回してくるのだから精神が擦り切れてしまうのではないかと自分が心配になる。

青白い月明かりを浴びて、木乃香の肌が幻想的に照らし出されている。

柔らかな白い肌の感触を二人で楽しみ、妖艶に聴こえる静かな息遣

いを二人で耳にし、温かな心地好い体温を二人で感じる。

お互いの総てが、お互いの所有物。

俺は木乃香の物で、木乃香は俺の物で。

手放したくないし、手放されたくない。

「おやすみ、うーちゃん」

「おやすみ、このちゃん」

これからも何気ない毎日が、続いていくと信じている。

欠ける事なく、二人ですっと。

運命には逆らうだけではなく、その身を委ねる事も大事だと誰が言っていたような気がした。

以前、自らが学園長を論破した事によって葱が部屋に雪崩れ込んでくるのを阻止した為、原作にあった風呂イベントは無くなった

うと高を括っていたのだが。

運命の悪戯か、はたまた必然だったのか。

偶然かもしれないし、人柱が必要だったのかもしれない。

俺は部屋に備え付けられた風呂ばかりを好んで使用していたのだが、何故か木乃香と神楽坂の二人に無理矢理引っ張られて大浴場に連行されてしまったのだ。

その後は葱が一人で宿直質に寝泊まりしている事が大浴場で広まり、
2 A生徒による壮絶な葱争奪戦が繰り広げられる事となった。

神楽坂の胸が爆発するというオチが存在しなくなっている為かは分からないが、無意味な争奪戦の收拾がつかなくなってしまう、最終的には誰が葱の飼い主に一番相応しいかを決める文字通りの揉み合いになり、筆舌に尽くし難い状態になっていた。

言わずもがな俺は隅っこの方に避難していたのだが。

「何処へ行ったああああああッ！」

「抵抗は無駄だから今すぐ投降しろッ！」

「捜せえええ絶対に逃がすなああッ！」

「隠れ巨乳、出てこおおおおいッ！」

「胸にサラシなんて巻くなあああッ！」

最後の逃亡者を血眼になって探している肉食動物達の咆哮が、大浴場の中に響き渡る。

何故こんな事になったのだろう、と俺は大浴場の中に設置されている匱物の椰子の木陰に隠れて嘆声を零していた。

葱が一人暮らしであるという些細な情報によって、こんな事態が起きたのだから。

歯止めが効かなくなった争奪戦はクラスメイト達による個人個人の触診という最悪の局面を迎えていた。

馬鹿騒ぎが大好きな人物が多い2 Aだが、少数ながら常識人も存在している。

馬鹿げた事は止める、と道理の楯を構えて常識を訴えたのだが。

馬鹿に道理の楯が通じる筈もなく。

反対派は押し切られてしまい、文字通りの揉み合いが始まってしま

ったのである。

常識人達はそんな馬鹿げた光景を遠巻きに眺めていたのだが、時間が経つにつれて事態は収束に向かうだろうと誰もが思っていた。

が、馬鹿達の脳内には常識の二文字は無かったようである。

肉食動物内での触診が総じて終わったかと思えば、今度は避難していた草食動物を狙い始めたのである。

事前に危険を察知して大浴場から待避していた手練れも中にはいたが、そんな人物はごく僅かである。

残された草食動物は大浴場の中で逃げ惑う事になり。

「きゃあああああッ!?!」

肉食動物より草食動物が多いのが世の理である。

何故なら、そうでなければ生態系が崩れてしまうから。

「馬鹿ッ、お前らふざけ……触るなあ!」

だが、もしも草食動物より肉食動物の方が多いという事態が起きてしまったとしたら。

「助け……誰か助け……きゃあああ」

待っている終末は草食動物の絶滅のみである。

今現在、大浴場は阿鼻叫喚の騒ぎとなっている。

至る所から草食動物達の悲鳴が上がり、代わりに肉食動物が勝利の雄叫びを上げるといふ地獄絵図状態である。

あれから必死に逃げ惑っていた草食動物達だったが、肉食動物達の数の多さと卓越した連携プレーに為す術もなく、次々と犠牲になっていた。

唯一の生き残りになってしまった俺は、どうにか大浴場から逃亡しようとしていたのだが、素早く動ける筈もなく。

どうする事も出来ず、身を隠す事しか出来なかった。

隠れている間、仲間の悲鳴を耳にしながら俺は何も出来なかった。

此処に隠れるまでに、尊い犠牲もあった。

刹那が身を呈して俺を護ってくれたのだ。

嫌われてしまっていると思っていただけに、刹那が手を差し出してくれた時の嬉しさは一塩だった。

だが、現実是非情である。

捕まった刹那がどうなったのかは分からないが、恐らく喰われてし

まったのだろう。

刹那の悲鳴が聞こえたかと思えば、その後は肉食動物達の歓喜の声しか聞こえなくなったのだから。

兎に角、俺は逃げなくてはならない。

そうでなければ、犠牲になった仲間達が報われない。

そう決心し、大浴場の入口へ向けて強行突破を計ろうとした時だった。

「いたぞおおおこつちだああああ！」

肉食動物の叫び声が上がったのは。

振り向けば赤く滾った肉食動物の眼が、ずらりと並んでいた。

しまった、と思った時には時すでに遅く。

牛歩の俺が逃げ切れる筈もなく、その場に座り込んで肉食動物達を見上げる事しか出来なかった。

「は、はは……………」

ぎらついた肉食動物の双眸を前にした俺は、顔を引き攣らせて渴いた笑い声を上げていた。

前も、後ろも、右も、左も、敵である。

護衛になってくれていた刹那は喰われた。

茶々丸はまだ防水機能を施されていない為、此処には居ない。

言わずもがな、木乃香とエヴァは肉食動物側である。

どうやら俺はチェスや将棋でいう『詰み』に嵌ったらしい。

肉食動物達は涎を垂らしながらジリジリと間合いを詰めてくる。

怯える俺を愉んでいるかのように、ゆっくりと、じわじわと。

そして

。

何をされたのかは思い出したくない為、日記には記述しない。

今日は厄日だった、以上。

第五十話（後書き）

今回は比較的に必要な話かもしれませんが。

何が重要なかは言わずもがなですね。

サラシ最高に決まってるよ

第五十一話（前書き）

すみません、今回の更新は間違いです。

番外編を纏めようとしていたら間違っ
て消してしまい……このよう
な事に（泣）

……合って良かったバックアップ。

第五十一話

段々と春寒も緩み始めてきた今日も騒がしくて下らなくも大切な日常を過ごす。

今月から騒然たる動物園の檻の中に小動物が加わった事で、一層の喧騒を手に入れた。Aは本日も耳鳴りと頭痛を生じさせてくれる程に元気である。

今では仲むつまじく生徒と挨拶を交わすようになっていたが、麻帆良にやって来た当初は異様な空間に突然放り込まれた為か、小動物は戸惑いを隠し切れていなかった。

しかし時間の経過と共に馴れたのか馴らされてしまったと捉えるべきなのは定かではないが、小動物も周りの空気に馴染み始めた結果として、他の動物達と有効な関係を築き上げる事に成功したようである。

騒がしいだけ取り柄だった筈の英語の授業も小動物は小動物なりに熟考したのか、まだ粗は目立つが十歳という齢を感じさせぬ手腕で学問の何たるかを自らの生徒達に教えている。

それは現実では有り得ないと言い切れる程、異様な光景である。

中学校の生徒達が自分達より年齢の低い少年に、勉学を教えられているのだから。

そんな異様を異様と捉える事が出来ている人間は残念ながら少ない。

異様だと認識出来ていない方が、ある意味で悩まずに済むから幸せなのかもしれないが。

気が付けば異常は日常に組み込まれてしまっていて、誰も疑問にさえ思わずに受け入れてしまっている。

受け入れ難い異常を仕方ない物として気を許しかけてしまっている。

そんな愚かしい自分が憎い。

肩肘を張り過ぎているのかもしれないし、気に病み過ぎているのかもしれない。

しかし、それでも。

「えーと、皆さん聞いて下さい！」

傾注するように、と少年は声を張り上げながら軽く教卓を手の平で数回叩く。

その音で微睡んでいた意識が一気に覚醒してしまった俺は、強張った身体を起こして、生欠伸を行いながら教壇に立つ少年に目をやった。

大きな音量を維持したまま少年は小さな指示棒をブンブンと振り回し、何かしらの熱弁を振るっているが興味ないの一言に尽きる。

少年の身振り手振りを加えながらの説明が終了すると、教室の中が活気を取り戻したかのようにざわめき始めた。

生徒達が各々の席を立って話し始め、段々と騒がしくなっていく教室の中で唯一隔離されていて、安全が保障されているかのように最後列は至って平和である。

右を見てみれば、机に顔を埋めるようにして眠りこけているエヴァが。

小さな口から零れた涎が机の上に拡散しているような気がするが、見なかった事にする。

左を見てみれば、窓の外を無表情で眺め続けている桜咲弑那が。

未だに正体を掴めない人物で、木乃香との仲は親密だが俺には一切話し掛けてはこない。

俺が近くに居ると、疎ましいという負の感情を隠す事なく発露させてくるので、一定の距離感を保っている。

出来れば刹那から理由を聞き出したいが、負の感情は出さないものの避けられてしまっているので行動に移す事が出来ない。

生まれ変わってまでして何故こつも辛酸を嘗めなくてはならないのかと思ってしまうが、修学旅行が催されるまでの辛抱だろう。

視線を前に戻してみれば、英単語野球拳などと下らない事を画策している者達が。

少年も少年で生徒達の意見を積極的に取り入れようとしているのか、ゴーサインを出してしまう始末。

心地好い眠りを妨げられてしまった俺は、この後に待ち受けている展開に鬱屈した気持ちになりながら、現実から逃げ出すように再び机に突っ伏して睡魔に全面降伏する旨を伝える。

今は昼間なのだが春眠暁を覚えずとは良く言った物で、それはもう異常な程に身体が睡眠を欲しているのだ。

時期的な物か、鍛練で溜まった疲労を睡眠で身体が回復させようとしているのだろう。

俺が自らの身体を疑問に思っって質問した際に、エヴァはそう答えてくれた。

睡眠を取る事は悪い事ではないと言ってくれたのだから、本来なら安心すべき解答なのだろうが何故か心の中に拡散した深い靄は晴れてはくれなかった。

何かがおかしい、と本能が警鐘を鳴らしているような気がするのだ。

まるで、これ以上　　を　　する　　。

「…………？」

閉じた双眸は未だ開けてはいないが、身体に些細な違和感を感じる。そう、まるで天地が逆になってしまったような小さな違和感を少女は感じていた。

少女は机で突っ伏して寝ていたのだから、俯せのような体勢になっている筈である。

だが、まるで何処かで眠らされているように足を伸ばし、仰向けに寝ているようだった。

少女が違和感を感じながらも双眸を開けてみれば、目の前には見慣れた天井があった。

木目のある二段ベッドの天井が、少女の目前にあったのだ。

「え…………？」

少女は素っ頓狂な声を漏らしながら、のろろと身体を起こして部屋の中を見渡した。

しかし、電灯に電気が供給されていないようで部屋の中は薄暗く、上手く見渡す事が出来なかった。

夢幻の類いではないかと少女は臉を擦ってみるが、どうやら紛うこと無き現実のようだった。

幸か不幸かは分からないが久しぶりに出てきてしまったのだろう、と少女は考えていた。

あの娘にとってこの現象は不幸なのだろうと頭の中で結論づけた少女は、現状を把握する為に行動を開始しようとした刹那。

とある場所に視線が集中し、瞼を擦っていた手が硬直する事になった。

何故なら、視界に入った袖口の色が桃色だったからである。

袖を通す事に幸福感を密かに感じていた妹とお揃いの寝巻きに、いつの間にか着替えさせられていたのだ。

実感を得る事もなく指をくわえて遠くから見ている事しか出来なかった少女にとって、これ以上ない幸運だった。

だが今は、そんな小さな幸福感に酔い痴れている場合ではない。

さっきまで少女は学校に居て、指定されている可愛らしい制服を着ていた筈なのだから。

偶に瞳を通して現状を見る事が出来るのは本体が意識を保っている場合のみで、今回のように本体が寝ている時は少女も同じように睡眠を取るしかなかった。

時間が、気付かない内に飛んでいる。

あの娘の身体に異変が起きている事を少女は重々理解していた。

自分という存在自体が異変なのかもしれないが。

兎に角、じっとしている場合ではない。

少女は言い知れぬ不安感に急き立てられながらも壁掛け時計に目をやれば、時計の針は夜の九時を回っていた。

また、何かあったのかもしれない。

もう一度あんな目に遭うのは嫌だ。

その一心で少女は転げ落ちるようにベッドから這い出し、二段ベッドの柱を支えにしながら立ち上がった。

暗闇に慣れてきた双眸で周囲を再び見渡すが、人の気配は一切無かった。

キッチンにも、二段ベッドの二階にも、強引に並べられた三つの学習机の椅子の上にも、誰も居なかった。

「……………この、ちゃん？」

肌に突き刺さるような無音に堪えられなくなった少女は情けない程に震えた声で、愛する妹の名前を呼んでみた。

しかし、返事はなかった。

再び、音量を上げて名前を呼んでみる。

しかし、応答はなかった。

生地が若干薄い寝巻きを着ている所為か、声だけではなく少女の身体も小刻みに震え始める。

そこに恐怖も加わったのだから、身体の震えを少女に止める事は既に不可能だった。

春先とは言えどフローリングの床はヒンヤリと冷たく、裸足になっている少女の足先から徐々に体温を奪っていく。

部屋の中に誰も居ないという状況が、少女の理性を段々と削り取っていく。

居ても立つても居られなくなり少女は悲鳴を上げそうになる口を必死に閉じて、傍にあった車椅子に腰を下ろす事も忘れて廊下までヨロヨロと歩いてみたが、やはり誰も居なかった。

やにわに襲い掛かってきた絶望感が、少女の硝子のような心を押し潰していく。

言い表せぬ焦燥感が浸蝕していくように、身体を黒へ黒へと染め上げていく。

少女は自失状態になりながら冷ややかな冷気が満ちている洗面所に入り、騒音を気にせず荒々しくバスルームの扉を押し開けたのだが、中には誰も居なかった。

最初から洗面所の電気が点いていなかったのだから、少女は中にも居ないことは薄々理解していた。

が、確かめずにはいられなかった。

ふらついた足取りで洗面所から出た少女は、そのままドアの前まで歩いて鍵を開け、躊躇う事なく裸足のまま外に出る。

まだ消灯時間は過ぎていない為か廊下の電灯は目映い光を放っていたが、一人も廊下を出歩いている者は居なかった。

ひたひたと、のろのろと靴も履かずに廊下を歩いて少女は妹の姿を捜すが、何処にも見当たらない。

廊下に響くのは空虚な自分の足音だけで、細々とした声で名前を呼んでみても返事はなかった。

もう失いたくない。

妹を捜さなくてはならない、そんな衝動に突き動かされて少女は歩き続けた。

一種の錯乱状態に陥っている、と客観的に自分を見ている理性が頭の中で喚いている。

しかし、今は本能が促すままに動く事しか少女には出来なかった。

当てもなく思考を巡らせる事さえも出来ぬまま、変性意識状態に陥った少女が長い長い廊下を彷徨い続けていた時。

「うーちゃん……？」

突然、少女は背後から声を掛けられた。

浮ついた意識のまま振り返ってみれば、遠くの方に妹が立っていた。
少女の心の中に安堵感が満ち溢れていく。

その姿を見て安心してしまったのか、少女の意識はプツリとそこで途絶えた。

「……………」
「？」

霧散していた意識が一つに纏め上げられ、重い瞼を開けば見慣れた二段ベッドの天井が目前にあった。

先程まで何をしていたのかも覚えていなければ、今が何時かも分からない。

残念ながら本調子ではない様子の脳をフル回転させ、記憶の穴を掘り返してはみたのだが目当ての物は見当たらなかった。

掘り返せば掘り返す程に、奥へ奥へと深みに嵌まってしまっているかのような錯覚を感じる。

散漫になっていく思考を打ち止め、別方向から攻めてみる事にする。

確か、今日は重要なイベントがあった気がする。

ゆっくりと考えている暇は無いと脳内で理性が叫んでいるような気がした為、首を左右に振ってから身体を起こし、ベッドから抜け出そうとした時だった。

「あ、うーちゃん起きた？」

前方から愛する妹の声がしたのは。

ベッドから這い出そうと下を向いていた為、縁に手を掛けたままの状態で顔を上げて前を見ると、丸盆を手にした木乃香がリビングの入口に立っていた。

「うーちゃんが目え覚ますまで起きとこお思て、コーヒー作ったんやけど必要なかったなあ」

そう言つて木乃香は苦笑いを浮かべ、手にしていた丸盆を近くのガラステーブルの上に静かに置いた。

「起きるんやったら、うーちゃんにもホットミルクか何か作るけど？」

朗らかに笑みを浮かべながら、木乃香が小首を傾げて訊ねてくる。

「あ、ああ……頼む」

記憶が曖昧で今の状況が良く分からない為、取り敢えず木乃香の好意に甘えておく事にした。

すぐ作るから、と俺に言い残して木乃香はキッチンに急ぎ足で向かつていく。

その間、俺はベッドから這い出してガラステーブルの傍に腰を下ろし、鼻歌混じりにホットミルクを作っている木乃香を待つことにした。

目の前に置かれたマグカップから漂うコーヒー豆の香ばしい匂いに鼻を擽られながら、首を捻って時計を見上げれば時刻は十一時を過ぎていく。

少し落ち着いてきた所で再び今日の出来事を思い出そうと、思考を巡らせ記憶の糸を結び上げていく。

英単語野球拳とやらの嫌気がさして教室で寝ていた筈で、その後は。

バラバラになっていた記憶を修復させようと考え込んでいた時、突然目の前にコトリとマグカップが置かれた。

「どうぞ、熱いから火傷せんようにな」

ニッコリと微笑みながら木乃香が俺と対面するように床に座り込み、マグカップを口に運び始めた。

俺は礼を言いながら甘い匂いを振り撒いているホットミルクを口に含みつつ、これまでの経緯を木乃香に訊ねてみた。

訊ねた瞬間、木乃香は怪訝そうな面持ちで俺を凝視していたが、暫くしてから何があったのかを話し始めた。

木乃香曰く、学校で眠り込んでしまった俺は何をされても起きなかつたらしく、仕方がないので部屋まで運んだらしい。

そんな記憶は一切無い。

木乃香の説明を耳にしながら俺が頭を悩ませていた時だった。

「さっきの事……覚えてないん？」

そう言って不安そうな表情を浮かべ、反対に木乃香が訊ねてきたのは。

何やら含みのある木乃香の発言に、俺は訝しげに目を細める事になった。

「……さっきの事？」

さっきの事、と言われても思い当たる記憶は一切見当たらない。

俺にとつての“さっき”とは、教室で現実逃避を決め込んでいた時の事なのだから。

首を傾げて必死に考え込む俺を見て、木乃香は一瞬だけ眉根を寄せたような気がした。

しかし直ぐに微笑を浮かべて朗らかに口を開く。

「寝言でウチの事ずっと呼んでたえ、うーちゃん」

自らの名前を寝言で呼ばれた事が嬉しかったのか、木乃香は口元を緩めて冗談めかした風に声を弾ませる。

そう言うってから、ぐいとマグカップを煽って珈琲を飲み干した木乃香は、もう一杯だけコーヒーを煎れてくると俺に伝え、マグカップを片手に持ってキッチンに向かっていった。

その後ろ姿を目で追いながら、俺は再び中断された思考を巡らせていく。

寝言を呟いていたと木乃香に言われたが、俺にはそんな覚えは一切無い。

寝ている時に呟く言葉なのだから、記憶に無いのは当然なのかもしれないが。

その時、とある事に気づいた俺はキッチンでコーヒーを煎れている

木乃香に問い掛けた。

神楽坂は何処に行ったのか、と。

先程からルームメイトである神楽坂の姿が見当たらなかったのだ。

こんな時間に出歩くような人物でもなければ、バイトの時間でもない筈である。

コーヒーを煎れ終えて此方に戻ってきた木乃香が寄越してくれた答えは、至極分かりやすい明確な答えだった。

図書館島に行ってしまった、と罰が悪そうな面持ちで呟いたのだ。

図書館島という単語を聞いた瞬間、心の中の霧が一気に晴れたような気がした。

図書館島へ赴くという重要なイベントが今日だったのであれば、何故ここに木乃香が居るのだろうか？

木乃香の話によれば本当は自分も行きたかったらしいのだが、体調が悪そうな俺を置いては行けないと図書館島行きを辞退したそうである。

どうやって木乃香の図書館島行きを止めようかと考え倦んでいた俺にとって、これはかなりの僥倖である。

幸か不幸か自分の体調不良で木乃香を留まらせる事が出来たのだから。

最悪の場合、自分も一緒に図書館島へ赴く事も計算に入れていた為、喜びは一塩だった。

どうやら木乃香は先程まで神楽坂を見送りに行っていたようで。

そして、いつまで経っても目を覚まさない俺を待っていていようとコーヒーを煎れていたなら、ちょうど俺が起きたらしい。

木乃香の話の辻褄は合っている。

説明を聞き終えた俺は内心の喜悦を悟られ

ぬように表情には出さず、心配かけて済まないと木乃香に謝罪した。

その後、もう今日は遅いから寝ようと提案すると、木乃香は素直に首を縦に振ってくれた。

寝る前に一度トイレに行つてくると木乃香に言い残し、俺は二足歩行で廊下に向かう。

「待つてるから、はよ戻ってきてな」

背後から木乃香の柔らかな調子の声が耳に届く。

振り向けば木乃香の姿はリビングにはなく、恐らくベッドに入り込んで俺を待っているのだろう。

口にした当初の目的の場所には行かずに玄関へと向かい、静かにドアを自らの左手が通れるように少しだけ押し開けた。

何も起こらないとは思いが原作と少し状況が違う為、用心しても損

は無い筈だ。

それに何処まで通用するのか確認しておきたい事もある。

俺は自らの左手に命令を与えて部屋から放ち、その日はグッスリと木乃香と共に眠りに就いた。

第五十一話（後書き）

今回はお騒がせしてしまい、本当にすみませんでした！

間違っで消した瞬間、「あ」って素っ頓狂な声を出してしまったのは秘密です。

いや、本当に焦っry

第五十二話（前書き）

えー、皆様明けましておめでとございます。

魔の九連勤が終わり、ようやく更新する事が出来ました。

このような亀更新ですが、本年もよろしくお願いいたします。

では、今回は久しぶりに“あの成分”を含んだ話となっておりますので、御注意を。

第五十二話

私は私を失う為に、産まれてきた。

同一の毎日を過ごしているかのように、鉛のように重くなった瞼を見開ければ目の前にあったのは見慣れた天井で。

今日も今日とて泣き喚く目覚まし時計を物理的に沈黙させ、欠伸を噛み殺しながら難無く覚醒に成功する。

穏やかな寢息を立てている木乃香の寝顔を一頻り堪能し、名残惜しみつつもベッドから這い出して愛車に攀じ登る。

くるりと器用に車椅子の上で身体を反転させ、俺は二段ベッドの上段で眠りこけているであろう人物を呼び覚まそうと、その名字を途中まで呼び掛けたのだが。

「……………」

とある事を思い出し、名字を呼び終える前に口を嚙む事になった。

眠気眼を瞬かせながら見上げた上段は蛻の殻になっており、そこにパジャマ姿の神楽坂の姿はなかった。

自分より先に起床してバイトへ行った訳ではなく、また別の理由で

神楽坂は部屋を留守にしている。

神楽坂をシアーで起こす事に日々の小さな愉しみを見出だしていた俺にとって、落胆の念を禁じ得なかった。

が、直ぐに気を取り直して“左手”に念話を送ると、抑揚の全く見当たらない声で返事が返ってきた。

既にシアーは目標を視界に捕捉しているようで、今現在は少し離れた場所にある本棚の隅に隠れて監視を続けているらしい。

どうやら図書館島に不法侵入した不届き者達はゴーレムの出題した英単語問題に失敗し、地底図書室と呼ばれる場所まで原作通りにポツシュートを喰らったようだ。

その後、不法侵入者達と同じように真上から落下してきたゴーレムに水面から近くの砂浜まで運ばれ、今は全員気を失って伸びているとシアーから連絡が入る。

この目で事の成り行きを見た訳ではないので何とも言えないが幾ら真下に水が有るとは言えど、何十メートルもある高い場所から落下させるだなんて一歩間違えれば大惨事になっていてもおかしくないと思うのだが、この世界では俺の常識が間違っているのだろうか？

恐らく学園長が身体強化や浮遊魔法等、何らかの安全策を取っている物と思いたいのだが、原作では盛大な水しぶきを上げて水面に叩き付けられていたような気がする。

何はともあれ全員の無事を一応は確認する事が出来たのでシアーとの念話を遮断し、俺は日課である朝食及び弁当作りに勤しむ事にし

た。

まだ空気が冷え込んでいるキッチンの中へと入り、伸びに伸びた自らの髪をゴムで纏め上げながら冷蔵庫の中身をチェックしていき、同時に頭の中で献立を組み上げていく。

冷蔵庫の上段、中段、下段、チルド室にある材料を全て見終わった時、何故か頭の中は献立の事ではなく別の思考に占拠されていた。

実際に図書館島へと侵入したのは神楽坂達の責任だが、頭脳明晰になる魔法の本が存在すると唆す^{そそのか}ような噂話を流したのは学園長で間違いないだろう。

そう考えると心の中に真つ黒な感情が蔓延し始め、冷蔵庫のドアを開けたままの状態で身体が硬直する事になった。

気に喰わない。

何もかもが、気に喰わない。

目的を達成する為には手段は厭^{いと}わない、という考えを真つ向から否定する事は出来ないが、それには節度も有れば限度も有る。

越えてはならない一線を越えてしまえば、それは只の暴挙でしかないのだから。

ふと、冷蔵庫のドアを全開にしたまま考え込んでいた事に気づいた俺は、取り敢えず今日はダシ巻きで良いだろうと即断し、精一杯に手を伸ばして冷蔵庫の中から鶏卵を数個取り出した。

一つだけ鶏卵を片手で持ち、流し台の縁に軽くぶつけてヒビを入れる。

一度でも、魔法を認識してしまえば言葉通りに未来がどうなってしまうか分からない。

原作通りに進むかもしれないし、そうではないかもしれない。

例え自分が未来の情報を有していたとしても、その情報通りに進むという確証は無いのだ。

とある一人は除いて大事な友人達が非行に走る事となった原因。

事の元凶である学園長には少しばかり痛い目に遭ってもらわないと気が済まない。

その時だった。

何故か割ろうとしていた生卵がグシャリと耳障りな音を立てて、掌の中で無惨にも潰れてしまったのは。

いつの間にか強く握り締めていた拳から、自分でも華奢と思える程に細い指の隙間から、ダラダラと生卵だった物が流れ落ちていく様を俺は虚ろな瞳でただただ眺めていた。

掌から零れ落ちていく黄色と白色が入り混じった液体は、流し台にポタポタと落ちていきジワリと薄気味悪い染みを拡げていく。

ゆっくりと掌を開けてみれば、ぬめりとした感触と共に生卵の残骸が手の平から剥がれ、重力に従ってポタポタと落下していった。

失敗失敗、起き抜けだから力加減を間違えてしまったようだ。

とある人物に対する怒りのあまり、生卵を握り潰してしまうなんてある筈がない。

掌と流し台にへばり付いた汚れを綺麗に洗い流し、その後は何事も無かったかのように手際よく弁当の製造に力を込めていった。

そして、時は少しだけ前へと進み　。

「何ですって!?!?……2　Aが最下位脱出しないとネギ先生がクビに~~~~!?!?」

雪広が学園内に響き渡っているのではないかと思える程の音量で、驚倒の声を上げる。

今現在、教室の中は大変な騒ぎになっていて、もう少してHRが始まるのにも係わらず生徒達は椅子から立ち上がり、焦燥の声を漏らしている。

もうすぐテストが実施されるという事で生徒達が死に物狂いで勉強

し、教室内の空気がピリピリとしていた所に驚愕の噂が流れ込んできたのだ。

『最下位脱出をしなければ、担任が解雇される』と。

勿論、これはデマなのだが。

驚愕の事実を口から漏らした椎名に詰め寄り、その両肩を激しく揺らして雪広が詰問しているが、当の本人は口止めされていたと弁解している。

しかし、流石は問題児だらけの2 Aを纏める委員長といった所だろう。

「とにかくみなさん！テストまでちゃんと勉強して最下位脱出ですよ。特に普段マジメにやってない方々もッ！」

誰よりも声を荒げていた雪広は直ぐに落ち着きを取り戻し、問題を解決しようと他のクラスメイト達に指示を送り始める。

その姿はクラスを一つに纏める委員長に相応しく、賞賛に値する程の完璧な行動なのだが、本心が2 Aの為なのか盲愛する担任の為なのかは定かでは無いので、この件に関してはノーコメントを貫こうと思う。

大体のクラスメイト達に緻密な指示を出し終わり、最後の難関であるバカレンジャーの処理に雪広は頭を悩ませていた。

最終的には零点さえ取らなければ良い、という本人達が耳にすれば涙目になる事が予想される結論を導き出し、どうにか問題は解決したかのように思われた。

しかし、更なる凶報が飛び込んできたのは　その時だった。

「みんな大変だよーッ！ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に……！」

駆け込むようにして教室に入り込んできた早乙女が齎した衝撃の情報により、その場に居合わせた殆どの人間が顔を真っ青にして石像のように硬直する事となった。

これは完全に終わったな、と。

葬式モードまで落ち込んでいた教室内で、真っ先に動いたのは誰もいない我が妹の木乃香だった。

「うーちゃん聞いたッ！？どないしよ……ウチが着いて行かへんかったから……」

焦りに満ちた表情のまま俺の傍に駆け寄ってきた木乃香は、そわそわと落ち着きなく視線を泳がせている。

「……まあ落ち着け、木乃香」

目の前で表情を曇らせている木乃香を落ち着かせようと優しく語りかけるが、どうやら効果は無かったようだ。

「落ち着いてなんかいらねへんッ！」

そう言つて木乃香は激しくかぶりを振りながら、ヒステリックを起こしたかのように声を荒げる。

当初は木乃香自身も図書館島へ行くつもりだったのだから、焦るのも無理はない。

それに浅層ならともかく、図書館島の深層部は様々なトラップが仕掛けられており、行つたまま帰らない者もいるという噂が飛び交う程に危険な場所なのだ。

「大丈夫だから……な？」

まさかシアーを送り込んで皆の生存を確認していると言つ訳にもいかず、とりあえず木乃香を宥めてみたのだが又もや失敗に終わり、断固として首を左右に振られてしまう。

「大丈夫つて、何でそんな事言えるん？」

それどころか落ち着き払つて対処している俺の態度が気に喰わなかったのか、非難の意を込めて珍しく木乃香が俺に突っ掛かつてくる。珍しい姉妹喧嘩の匂いを嗅ぎ付けたのか周囲に人が集まり始めてきたが、どうにか木乃香を折れさせようとしていた自分にとって、そんな事はどうでもよかつた。

もしも、ここで論破する事が出来なければ木乃香が勝手な行動を取る可能性が高い。

原作知識を有しているが故に、原作に無かつた行動をされると何が

起きるか分からない為、俺は全く身動きが取れなくなる。

原作通りの物語に腸が煮え繰り返り返りそうになっているくせに、原作通りに事が進まないという矛盾している自分に嫌気が差す。

しかし、今は目の前の事だけに集中しようと非難の色を帯びた木乃香の双眸に視線を固定した。

「図書館探検部の綾瀬も行ってるんだろ？それに先生も同伴してるんだから大丈夫だって」

「そ、それはそうやけど……」

反駁はんぱくの言葉が見つからないのか木乃香は少しだけ顔をしかめ、自らの足元に視線を落としてしまった。

これを勝機と見て取った俺は、更なる追い討ちを仕掛ける事にする。

「だから大丈夫だって……それにテストも近いんだし勉強しないと、な？」

視線を落として黙り込む木乃香に声を掛けた俺は、一段落ついただろうと安心し切っていた。

しかし王手を掛けたと思って打ち込んだ一手は、どうやら致命的な悪手だったらしい。

「……………ホンマはどうでもええんやろ」

俯いた木乃香の口からボソリと激しい口調の言葉が漏れたのを、俺は聞き逃さなかった。

「……………木乃、香？」

その言葉に俺は息を飲み込み、木乃香の顔をまじまじと見つめる事になる。

「皆が行方不明になつとるのに、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫つて……………何でそんなに落ち着いてられるんや」

顔を上げた木乃香の瞳は据わり始めていて、声色は今まで聞いた事が無いぐらいに低くなっていた。

俺は気圧されそうになっていたが負けじと反論を返そうと、口を開き掛けたのだが木乃香に先手を奪われてしまった。

「ホンマはどうでもええんやろツ！心配なんかしてないんやろツ！？」

掴み掛かろうとするぐらいの勢いで目前まで詰め寄ってきた木乃香は、きつく眉根を寄せて俺を見下ろしている。

初めて向けられた木乃香の怒気に驚いてしまったが、直ぐに頭の中で思考を開始する。

事情を知らないのだから、木乃香の反応は当然の物だろう。

親友が行方不明になっているというのに、事務作業をしているかのように冷静な態度を取っていれば誰だって怒る筈である。

だが、シアアの裏打ちが有るからこそその態度であって全く心配していない訳ではない。

見知らぬ内に裏の世界へと巻き込まれそうになっている親友達を、心配にならない筈がない。

だからと言って、俺はどうすればいい？

確実に相手を納得させる事が出来る手札は有っても、それを切る事が出来ない俺は。

「皆の事は心配してる。けど子供の俺達が何か出来るって訳でもないだろ……皆の事は他の先生達に任せて、これ以上騒ぎが大きくならないようにするべきだ」

「子供のウチらでも皆を探すぐらいは出来るやろッ!？」

「だから、それがミイラ取りがミイラになるって言うんだよ。探しに行った俺達まで行方不明になったらどうする!」

「だからって何もせえへんよりマシや!」

意見と意見の真っ向からの殴り合い。

積極的と消極的の対抗戦。

平行線を辿るばかりで交わろうとしない二人の口論に周りの人達も感化されたようで、観戦する者や囁し立てる者、更には食券を賭け始める者まで現れ出す始末。

收拾がつかない、誰もがそう思っていた。

だが意外にも、決着は直ぐに付いた。

「何も出来へんからって……何もせえへん理由にはならん筈やツ！」
今になって思えば木乃香の言葉は、その場に居合わせた人達に向けて放った言葉だったのかもしれない。

『自分達が子供で』何も出来ないとしても何もしない理由にはならない、と。

自分と一緒に皆を探しに行こうという、ある種の訴えだったのかもしれない。

だが、頭に血が上り掛けていた俺は木乃香の言葉を誤解して受け取った。

自分ただ一人に向けられた言葉だと。

お前は何も出来ない、そう言われたと解釈してしまった。

自分なりに頑張り続けているのに、全てを否定された気がした。

木乃香が撃ち放った言葉の弾丸は。

弱り切っていた俺の心をいとも簡単に撃ち抜いて
爆発させた。

「……木乃香に何が分かるんやッ！」

自分でも驚くぐらいの音量で、気づけば俺は木乃香に怒声をぶつけていた。

突然の大声に驚いたのか、木乃香は少し身を強張らせたように見えた。

溜まりに溜まった膿のように心から溢れ出した感情は、自分の力ではどうする事も出来なくなっていて。

「好きな時に好きな場所へ自分の足で歩いていける、木乃香に何がッ……何がッ！」

此方の威圧に屈服したかのように口を閉ざして硬直した木乃香に、自分の汚い感情を容赦なくぶつけていく。

いけない、とは心の中では分かっていた。

捌け口が無い筈の事柄だという事実も、重々理解しているつもりだった。

だが、針で突かれた風船のように俺の感情は爆発してしまい、中の空気を吐き切るまで止まる事は無いようで、堰を切ったように心と口から漏れだした。

「普通の人が跨ぐのに一秒も掛からんような段差に苦労した事はッ!? ……ちよつとした動作が出来へん自分に苦悩した事はッ!? ……昔は、昔は普通に歩けとったのに走ったり跳んだり運動する事さえ出来へんくなった現実に、絶望した事が木乃香には有るんかッ!

「？」

とめどなく溢れてくる黒々とした感情をぶちまけた後、俺はヒンヤリと冷たい机の上に熱く滾った拳を振り下ろした。

「…………ツ」

ドン、と鈍い音を机が奏でた瞬間に木乃香が首を竦め、無意識の内に一步後ろへと後ずさる。

「そら無理したらアカンと思いなながらも気丈に振る舞っとるよ……皆と同じように同じように、って！」

明らかに木乃香は怯えた表情を浮かべているにも係わらず、俺の口からは弾幕を張るようにして強い口調の言葉が吐き出されていく。

もうどうにでもなれと半ば俺は自暴自棄になっていた為か、普段溜め込んで我慢していた筈の感情さえも溢れ始めてしまう。

「でもな、ウチにも限界があるんや。どれだけ頑張っても出来へん事がある。……こんな情けなくて惨めなウチに、これ以上頑張れって言っんか……段差もあつて畏もあるような場所に皆を探しに行けつて……なあ！木乃香どうなんや！？」

机に両手をたたき付けてから立ち上がり、まだ手の届く範囲内に佇んだまま怯えている木乃香に掴み掛かろうとした刹那。

スッと横から現れた誰かに優しく腕を掴まれて、幸いにも木乃香の両肩を俺が揺らす事は無くなった。

ほぼ自失状態になったまま視線を横へと動かせば、そこに立っていたのは茶々丸で。

視線が合った瞬間に茶々丸は瞳を閉じて、黙って小さくかぶりを振った。

もうやめて下さい、と言外に伝えようとしているかのように。

気づけば教室内は先程までの騒ぎが嘘のように静まり返っていて、誰もが押し黙って視線を自分一人に集中させていた。

立っている事さえ儘ならなくなったのか、俺は力無く後ろに倒れ込むようにして車椅子に腰を下ろした。

すると何故かは分からないが、茶々丸が優しく俺の顔をハンカチで拭いてくれた。

今となつてはどうでもよい事だったが、何か汚れでも付いていたのだろう。

「マスター、木乃羽さんが体調が悪いそうなので無許可ですが家まで送ってきます。担当の先生に報告を、お願いします」

「……………行ってこい、後は……………任せておけ」

二人の静かな会話だけが耳に届く。

二人を視界には捉えてはいるが、もう俺の瞳には何も見えてはいなかった。

「はい、では失礼します」

茶々丸がそう言った瞬間に車椅子が向きを変え、廊下に向かって進み始める。

どうやら俺は何処かに運ばれようとされているらしいが、抵抗する気力など微塵も残ってはいなかった。

茶々丸に車椅子を押され、俺は成すがままに教室から出ていく事になり。

そして。

第五十二話（後書き）

この時、桜咲姉妹は何を思っていたのか……それも考えていただけると作者が喜びます。

話は変わりますが、今回の話で生まれて始めて気づいた事が有りました。

それは 『生卵は素の状態だと片手で握り潰せない』 です（苦笑）

リアルな文章を追求しようと実際に自分で執筆した文章通りに動いてみる事があるのですが、卵さんには悪いと思いつながら握り潰そうとして あれ？となりました（汗）

……無知は罪、ですね（苦笑）

第五十三話（前書き）

ちょっと張り切って早めの更新です。

今回は前話の若干視点が変わったバージョンとなっております。

そして少々、文体が変わっていますので御注意を。

では、ごんご。

第五十三話

一人は鬼謀で無謀。

一人は博識で無知。

一人は勇猛で怯懦^{きよつた}。

一人は孤高で孤独。

一人は賢者で幼稚。

一人は温情で冷血。

誰も彼もが、純粹な程に歪^よだった。

余りにも迂闊過ぎたと、自責の念が茶々丸の肩に重く押し掛かる。ソレを目にした瞬間、言い知れぬ虚脱感に襲われた茶々丸は彼女らしくない失敗を犯した。

呆然となり思わず力を失った両手から盆がスルリと零れ落ちてしまい、無惨にも宙へと放り出される事になったのだ。

重力に従って床に叩き付けられたマグカップは華奢な悲鳴を上げながら分散し、黄金色に輝くその中身を茶々丸の足元に無惨にもぶちまけて沈黙した。

彼女を、あのような状態に陥っていた彼女を一人にするべきではなかったと、茶々丸は機械の心で激しく絶望する。

少しでも彼女が落ち着くように。

あの時、本心からそう思い、丹精を込めて茶々丸が淹れた甘い薫りを漂わせていた紅茶は、床の絨毯が飲み干す事となった。

拘束でも何でもして彼女から目を離すべきではなかったと、茶々丸の胸の中は悔恨の情で一杯になる。

噛み締めた下唇から朱色に着色された液体が零れる程に、自らの愚かさを呪いながら茶々丸はベッドに横たわっている彼女を見下ろした。

眠るように瞳を閉じて浅い呼吸を繰り返し、魂が抜け落ちてしまったかのように土気色になった彼女の顔を。

その日、絡繰茶々丸は至極上機嫌だった。

心を持たない筈である機械の癖に、上機嫌というのは多少なりとも語弊ごへいが有るやも知れぬが、本人自身も気持ちこころが浮ついていると自覚していた。

上機嫌になっている理由を耳にすれば、誰もが一笑に付すぐらいの小さな僥倖うらやまの集まりでも、その日の茶々丸は確かに生を謳歌おんがしていた。

まず、第一に彼女がこの世に人造の生を受けて丸一年が経過した事で、日々の習慣となっていた筈の定期検査が月に数回と変更になった事。

次に、彼女の主と設定されているエヴァンジェリンから、昼休みは自由に行動して良いと言い渡された事。

最後に、昼休みに行われる定期検査が軽減されるかもしれないと、前日に伝えてあった近衛木乃羽から自分専用の弁当を手渡された事。

噛み砕いて言い表せば、昼食を共にしないかと近衛木乃羽から誘い

を受けたのだ。

勿論、主であるエヴァの分の弁当も彼女は抜きなく用意してくれていた。

本来なら茶々丸は食事を必要としない機械の身体なのだが、それを踏まえた上で彼女は昼食を共にしようとして誘ってくれたのだ。

気に入らなければ、無理せず捨ててくれても構わないから。

そう言つて苦笑いを浮かべる彼女に対し、茶々丸は手渡された可愛いらしい弁当箱を胸に抱きながら何度も、何度も礼を述べた。

彼女の目の下に出来た黒い隅が気掛かりではあったが、茶々丸は心の底から感謝していた。

貴女のお陰で機械の私でも生きる意味を知る事が出来た、と。

口頭で包み隠さず本心を伝えたと彼女は照れ臭そう頬を朱に染めて、早足で自分の席へと戻って行く。

人よりも一段と小さく見えてしまう彼女の後ろ姿を見送りながら、今日も近衛木乃羽に幸せが訪れますようにと、茶々丸は心から祈った。

その儂い祈りが天に届く事は無いと、残酷にも知らぬまま。

《マスターツ、許可を》

茶々丸は何度も背後の席に座している主に対して訴え掛けるが、エヴァの返事は彼女にとって芳しい物ではなかった。

良い機会だから手出しは無用だと、傍観を命じてくるエヴァに茶々丸は底知れぬ反発の感情を抱いていた。

何故、何故、何故、何故、何故？

何か機械の自分に思慮が足らぬ部分が有るやも知れぬと、頭の中で何度も自問自答を繰り返す茶々丸だったが、求める解は何処にも見つからない。

一心同体と言い表していい程の親密な関係にあった彼女達が言い争う姿など、茶々丸は目にしたくは無かった。

主であるエヴァとは考えが同じであるとばかり思っていた茶々丸は、待機を命じられる意味が理解出来なかった。

互いに互いを憎しみ怨んでいるかのように睨み合いながら、鋭利な言葉をぶつけ合う彼女達の姿を見て、茶々丸が正常を保っていられる筈が無い。

理解不能、理解不能、理解不能。

正しい意味通りに知恵熱を起こし始めた茶々丸の、機械としては大人だが人間としては子供と言える思考回路は、既に使い物にならなくなっていた。

次第に燃え広がっていく口論の火の手は、周囲にも飛び火したよう
で。

火照るように熱くなっていく教室内の空気に当てられたのか、他の生徒達まで喧しく騒ぎ始めたが、そんな喧騒は茶々丸の耳には届いてはいなかった。

茶々丸の人工の耳朵を叩くのは論争を繰り広げている二人の口論のみで、瞳に映る物は今にも殴り合いに発展しそうな程の、彼女達らしからぬ深い憤怒の形相。

《マスターッ、お願いです……許可を！》

これ以上、二人を争わせてはならない。

そう感じた茶々丸が念話で必死に懇願するが、エヴァからは待機の命令しか返ってこなかった。

その瞬間　。

もういい、と茶々丸は心の中で決断した。

基本的に茶々丸は無茶な要求ではない限り、主の命令を遵守するよ
うに設定されている。

それは卵から顔を出した雛が初めて見た物を自分の親だと思い込むのと同じぐらいに、愚直なまでに絶対的な条件付けが茶々丸には刷り込まれていた。

しかし、人工の本能とも言える設定された自意識に対し、遵守されるべきである主の命令に対し、この時の茶々丸は叛旗はんきを翻した。

二人に嫌われれても良い、怨まれても良い。

それでこの二人の関係が修繕されるなら、茶々丸は満足だった。

一度、主に向かって私怨を込めた視線を遠慮なく飛ばしてから、茶々丸は徐に立ち上がるうとした。

だが、もう遅かった。

行動を起こそうとした茶々丸より先に彼女が、近衛木乃羽が壊れてしまったから。

「……木乃香に何が分かるんヤツ！」

滅多に彼女が見せない激しい感情の発露。

誰もが一度も聞いた事は無かったと言って良い程の大声を上げて、自らが世界中で一番を愛していると口にしていた筈の妹を、彼女は瞳から涙を流して睨みつけていた。

その声を聞いて茶々丸は思わず身を竦めてしまい、席から立ち上がる事が出来なくなる。

目の前で憧れの対象でもあり大切な存在でもある彼女が、バラバラと音を立てて壊れていくような錯覚。

そんな身動きが出来なくなる程の喪失感に襲い掛かれながらも、茶々丸は必死に抗おうとした。

しかし、そうしている間にも彼女は感情を爆発させて、次第に壊れていく。

「好きな時に好きな場所へ自分の足で歩いていける、木乃香に何がッ……何がッ！」

彼女の形振り構わずに叫び散らした言葉は、茶々丸の心を徹底的に深く抉った。

自分は今まで彼女に対して決定的な勘違いをしていたのかもしれない、と。

「普通の人が跨ぐのに一秒も掛からんような段差に苦労した事はッ！？………ちよつとした動作が出来へん自分に苦悩した事はッ！？……昔は、昔は普通に歩けとったのに走ったり飛んだり運動する事さえ出来へんくなつた現実に、絶望した事が木乃香には有るんかッ！？」

彼女は寸断なく自らの感情をぶちまけた後に机の上へと拳を振り下ろし、矢面に立ち続けた所為か先程から一言も発しなくなった妹を威圧した。

止めなくては。

そう思えば思う程に茶々丸の身体は泥沼にはまり込むかのように、身動きが取れなくなっていく。

「そら無理したらアカンと思いなながらも気丈に振る舞つとるよ……皆と同じように同じように、って！」

止めどなく大粒の涙を零し、長く艶やかな黒髪を振り乱し、掠れた声で悲痛な叫びを上げ続ける彼女の姿。

その姿を目の当たりにしながら誰もが黙り込み、誰もが動けなかった。

勿論、茶々丸も例外ではない。

致命的な勘違いをしていたと、茶々丸は重く身に押し掛かる罪の意識に苛まれていた。

茶々丸は今まで彼女の事を、特別な人間だと思い込んでいた。

かの有名な赤き翼のメンバーの一人である近衛詠春の娘で。

学園最強の魔法使いで関東魔法協会の理事も務めている近衛近右衛門の孫娘で。

極東最強の魔力の持ち主でもあり、多大なる魔法の才能と稀有な特殊能力を生まれながら有していた彼女は、特別な存在だと。

降り懸かる火の粉は自らの手で振り払い、どんな障害でも自らの足で乗り越え、その身に刻まれた過酷な運命にも打ち勝つ事が出来る意志を持つ、特別な存在だと。

しかし茶々丸の目の前で泣きながら叫び声を上げ、歯止めが利かなくなつた感情を周囲に隠す事なく晒している彼女は、年相応の、ただの少女にしか見えなかつた。

今に思えば彼女の身に伸し掛かる様々な重圧は、計り知れる物では無かつた筈で。

関西呪術協会の長の娘でもありながら、関東魔法協会の理事長の孫娘でもあるという複雑な立場。

何も知らずに平和な毎日を謳歌している妹を陰ながら支え、降り懸かる脅威を自らの手で退けようとする修羅の道を選択し。

そして神に見放されたかのような残酷な運命を唐突に背負わされ、そんな重圧に彼女は今まで堪え続けてきていたのだ。

茶々丸は無意識の内に、ソレを当たり前だと思ひ込んでいた。

「でもな、ウチにも限界があるんや。どれだけ頑張つても出来へん事がある。……こんな情けなくて惨めなウチに、これ以上頑張れつて言っんか……段差もあつて畏もあるような場所に皆を探しに行けつて……なあ！木乃香どうなんや!？」

両手で机をたたき付けてヨロヨロと立ち上がり、呆然と立ち尽くしていた妹に掴み掛かろうとした刹那。

ようやく茶々丸の身体は動き出した。

溺れている人間が、藁にも縋ろうとしているかのように。

まるで言外に助けを求めているかのような彼女の前へ突き出した両腕を、茶々丸はその手で受け止める事が出来た。

しっかりと優しく、これ以上彼女が壊れてしまわないように。

しゃくりを上げて瞳を真っ赤に腫らし、涙を流し続ける彼女と目が合った瞬間、無意識の内に茶々丸は瞳を閉じて彼女に小さくかぶりを振っていた。

立っている事さえ儘ならなくなったのか、彼女は糸の切れた操り人形のように背後へ倒れ込み、車椅子にドスンと腰を下ろした。

泣き腫らした木乃羽の昏く光を失った瞳を見ていられなくなった茶々丸は膝を折り、徐にポケットから取り出したハンカチで彼女の顔を優しく拭いた。

彼女は、何の反応も示さない。

「マスター、木乃羽さんが体調が悪いそうなので無許可ですが家まで送ってきます。担当の先生に報告を、お願いします」

「……行ってこい、後は……任せておけ」

立ち上がった茶々丸は主に対して背を向けて視線を合わせる事なく発言し、エヴァは従者を咎める事なく了承した。

「はい、では失礼します」

こんな場所に居れば彼女の身体に障るとでも言いたげに素早く彼女の車椅子の向きを変え、茶々丸は廊下に向かって進み始める。

誰からも声を掛けられる事なく教室を後にした茶々丸は、無言で廊下を突き進む。

様々な感情が胸の中で蟠り、わたかま茶々丸の頭を苦しませた。

ただ今は彼女を落ち着いた場所まで移動させなくてはと、その一心で茶々丸は足を動かし続ける。

涙を流す事も泣き声を上げる事もなくなり、無表情のまま凍り付いてしまったかのように頂垂れた状態で、黙り込んでしまった彼女を心の底から心配しながら。

自らの足音と彼女が咽び泣いているかのような車椅子の軋む小さな音だけが、無音の廊下に響き渡る。

「茶々丸さん」

車椅子を押す力に拍車が掛かりそうになっていた時、茶々丸は誰かに背後から名前を呼ばれた。

その場で立ち止まった茶々丸が後ろを振り向くと、遠くから走り寄ってきたのは。

桜咲絨那だった。

桜咲絨那の姿を目にした瞬間、無意識の内に茶々丸は警戒心を高めていた。

理由は分からなかったが近衛木乃羽は桜咲姉妹の事で酷く悩んでいる、そう茶々丸は普段の彼女から感じ取っていた為である。

「……………何の用ですか？」

走り寄ってきた桜咲絨那に敵意を込めた視線を臆する事なく向けた茶々丸だったが、その視線は空振りに終わる。

まるで茶々丸など目に入っていないかのように横を通り過ぎ、桜咲絨那は木乃羽の真横で膝を折り、その場でしゃがみ込む。

そして、表情を失った虚ろな彼女の耳元に口を寄せ。

何かを　　確実に何かを呟いた。

余りにも素早い動作だった為、茶々丸は桜咲絨那の背後に少し近寄れただけで、止める事も何と耳打ちしたのかも分からなかった。

が、ソレが良くない言葉であったらうと茶々丸は推測する事が出来た。

何故なら言葉も表情も欠いていた筈の彼女が、声を上げて泣き始めたから。

生気を失った表情を浮かべ続けていた彼女は桜咲弑那に耳打ちされた瞬間に、一度大きく目を見開いたかと思えば、大きな涙の雫を絶望色に染まった瞳から止めどなく流し始めたのだ。

突然の理解不能な出来事に言葉を失っていた茶々丸を、若しくは泣き始めた彼女を見て嘲笑うかのように、桜咲弑那はニヤリと笑みを浮かべて立ち上がり、踵を返して元来た道に戻り始める。

数拍遅れて我を取り戻した茶々丸が慌てて泣き始めた彼女の前に回り込み、どうしたのかと何度も訊ねてはみたが、返ってくるのは咽び泣く嗚咽の声だけで。

その憐れな姿を見て激しい憎悪の感情に駆られ、桜咲弑那を問い詰めようと立ち上がった時には、少し離れた所で桜咲弑那と揉み合いになっている桜咲刹那の姿があった。

「お前は……何処まで腐ってるんだッ！」

「こんな時にだけ現れて、さもアイツの親友ですって面を浮かべてる姉さんの方が、いい感じに腐ってますよ？」

「……………殺す、殺してやるッ！」

前方の二人が憚る事なく大声を上げて揉み合いを始めた所為か、別教室の生徒達が廊下側の窓から顔を出すなど、周囲がざわつき始めていく。

数分もしない内に騒ぎを聞き付けた教師達が騒ぎを鎮圧しにくるだろう、そうなれば少々厄介な事になる。

そう即座に理解した茶々丸は、素早く行動を開始した。

未だ堰を切ったように泣き続けている彼女が非常に気掛かりだったが、車椅子を押してこの場から離脱し始める。

次第に集まり始めた野次馬に怪訝な視線を送られはしたが、どうやら意識は殴り合いにまで発展し始めた桜咲姉妹に集中しているようで、茶々丸は誰にも止められる事なく学園を後にする事が出来た。

最初は彼女の家である学生寮まで行こうと茶々丸は計画していたが、途中で考えを改めてエヴァの家に変更してしまった。

様々な考えを巡らしての変更だったのだが、その行為が吉でもあり、凶でもあった。

苦勞して彼女をログハウスまで運んだ茶々丸は、とりあえず彼女を寝かしつける事にした。

主であるエヴァの部屋まで再び物言わぬようになった彼女を運んで豪華なベッドの上に横にさせ、一応何度も語り掛けてはみたのだが返事は返ってこなかった。

そして、彼女が自分が淹れる紅茶を好んでくれていた事を思い出した茶々丸は、少しの間だけその場を離れたのだが。

それが失敗だったのかもしれない。

再び茶々丸が部屋に戻ってきた時には、気づかない内に彼女は魂の抜け落ちた、ただの抜け殻になっていたのだから。

最初は眠ってしまった物だと勘違いした茶々丸は、既に淹れてしまった紅茶は無駄になってしまったが時間を改める事にした。

部屋から出た茶々丸は念話でエヴァに自分も欠席するという旨の連絡を入れ、少々時間を潰してから再び淹れ直した紅茶を手にして、彼女が寝ている筈の部屋に戻る。

その時、彼女は瞳を閉じて眠っていたのだが茶々丸には少し気になる点があった。

よく見れば彼女が、額に右手を添えて横になっていたのだ。

それは彼女のアーティファクトのシアーと呼ばれている小さな戦車と、同調している事を意味するサイン。

そういえばいつも傍にいる筈のシアーを今日は見ていないと、茶々丸はそこで気がついた。

何か嫌な予感を感じ取った茶々丸だったが何か連絡を交わしているのだけだろうと、心の中から湧き出る不安を払いのけて再び部屋を後にした。

そして十分が経過してから部屋を訪れるが、まだ彼女は同調を続けているようだ。

三十分が経過してから再び部屋を訪れるが、まだ彼女は同調を続けているようだ。

一時間が経過しても、どうやら彼女は同調を続けているようだ。

そして、冒頭に戻る。

茶々丸は何かの冗談かと思い直し、染みが広がっていく絨毯の事など忘れて彼女に駆け寄った。

大きな声で名前を呼び、激しく身体を揺さ振り、軽く頬を叩いてみたが、返事はない。

あれから既に一時間が経過している。

何かの間違いかもしいないと、部屋の中で茶々丸は再び待つ事にした。

それから一時間が経過した。

彼女は、まだ起きなかった。

更に、二時間が経過した。

茶々丸は身体をくすぐつてみたが、彼女は笑ってくれなかった。

待ち続けて、三時間が経過した。

彼女は、目を覚まさない。

何をしても、何の反応も示さない。

彼女は同調を開始してから　。

いつまで経っても、戻ってこなかった。

第五十三話（後書き）

今回はほぼ裏側って感じですかね……。

……殆ど茶々丸にしか視点が当たっていませんが（苦笑）

ああ……やっぱり、こっちの書き方は苦手です。

……文章を綺麗に纏める文才が欲しい（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6843p/>

魔法先生ネギま！～時をとめる少女～

2012年1月11日01時43分発行